

BLEACH The 3rd  
Phantom？何それ知らない。  
い。

九頭竜 胆平

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

トラックにひかれて転生したらBLEACHの世界だった。

宮能（くどう） 藤丸（ふじまる）？だれそれ？ってなってるシスコンが頑張る話。

拙僧BLEACHで抜けてる知識とかあると思うので教えてくれるとありがたいです。

# 目次

IF 力を欲する	1	妹のころ兄知らず	44
俺の人生は妹のためにある（少年）篇		狂人は修練の末、頂を見る。	52
モブにしてはピンチくるの早すぎじゃ		学園ラブコメ（青年）篇	
ね？	6	なんだ、霊圧上げるのなんて血圧上げるぐらい簡単じゃん！	61
よ	10	まあ、優れたものが排斥されるのは世の常だから（震え声）。	68
死神になれって言ったのあんただよな		こいつっ！劇的に強くなってやがる！	75
？	19	（↑原因）	
すげえかつこいいけどそこはかとなく		今生の別れみたいな感じでいなくなつた奴が一章も待たずに会いに来たびよん	
同類の匂いがする	30	けど。	81
どつかで見たことあるな	36	私は、そんなこと望んでなかったのに	

87

俺はこの子に何をしてあげられるだろ

う

100

いつまでも君を愛している

107

絶望の新入死神篇

もう無理！（半泣き）もう無う

理いいいい！！（ギャン泣き）

入隊！護廷十三隊

まつ梨には会えないし目の敵にされる

し踏んだり蹴ったりだあああああ！！

130

ありがとう大虚。お前のおかげで俺は

言霊の神髄に触れた。

138

バブみ（ファザミ）を感じておぎやる

150

フラグメイカー！！

お前誰じゃあああああ！！

斬魄刀って意外と空気読めなかったり

（十設定まとめ）

兄妹とは、姉弟とは

幼児退行系主人公

名ばかりの貴族って言っても限度があ

るだろ！?

素手のほうが強いとはこれ如何に

223

明日はもーつといい日に・・・なると

212

201

195

183

176

164

思っていた。―― 230

この恨み、はらさでおくべきかあ！（憎

悪）―― 241

必殺（必ず自分を殺す）！瞬

関・―― 251

それは歌であり、呪詛であり、祝詞であ

る。―― 261

まつ梨を殺す権利は与えていないわ！

―― 269

アルトウ口戦、前編―― 277

アルトウ口戦、後編―― 290

過去に取り残された篇

これが・・・罪悪感か・・・―― 300

それに貴賤はない―― 307

オレ、オマエノイツテルコト、ワカラナ

イ！―― 314

働けっ！働けっ！―― 322

哀れ碎蜂―― 331

覗きと黒幕と白い仮面―― 338

まさか俺が仮面の軍勢!?!篇

俺 t u e e e ! ! ! . . . なんか違くない？

―― 350

雛鳥体験会―― 363

即落ち2コマ―― 369

藤丸対藤丸―― 378

原作をブレイクするのは転生者の流儀

お前それマジで言ってるのか  
——  
とうとう原作突入篇

一護君?! ルキアちゃん!? 君達強くねえ  
——  
!?

もう助けてあげたーい! (罪悪感)

不幸だくく!! (幻想殺し並感)

419 死神はクソということですよ

428 労働はクソということですよ

437 ばいばい

463 師匠の師匠は変な人

他人の家にお邪魔してます

473 久しぶりに家族に会いに行きます

ルキアちゃん奪還篇

485 身勝手な似た者同士

491 海燕先輩の弟君だからな、我慢だ我慢

499 (ブチ切れ寸前)!

石の上にも三年。墓の前にも数日。

506

514 (死神に) なろう系主人公

523 なんで、あんたが・・・

532 俺たちが斬月ですよ

傍聴者(オブザーバー) または覗き魔

(ヴァイアー)

537

一度下がった好感度を上げるのは面倒

カサカサゴキブリみてえな動きしや  
がって

599

くさい

猫の手も借りたいほどのデスマーチ

605

手加減のご利用は計画的に

劇場版で無能になる味方筆頭宮能藤丸

610

一日ぐらい放置しよう!

感動も何もかもぶっ壊してでも生きて  
いてほしい人だっているんだ。

617

俺露出プレイに興味ないから

627

相手の攻撃が当たらない場所から一方

ウルクオラってもしかしてヤミーのこ  
とを考えてここ引いたんだとしたらもしか  
してこいつ凄いエモエモのエモだったの

583

的に高火力遠距離攻撃ばらまいてれば敗

けるわけなくない?

573

ママ身を感じるハードSM

ママ身を感じるハードSM

591

やっぱ護廷十三隊ってブラック企業篇

591

今日からよろしくお願いします(満面

の笑み)

591

の笑み)

の笑み)

591

の笑み)

の笑み)

591

かもしれないと転生した俺はふとそんな

ことを（ry

633

俺、いつか卯ノ花隊長に赤ちゃんプレ

イしてもらうんだ！

637

武勇伝武勇伝、武勇伝ででんでん！

641

最悪な再会 その1

652

最悪の再開 その2

658



## I F 力を欲する

アルトウロとの戦いは激闘だった。藤丸は慣れぬ斬魄刀の能力をできるだけ考え、それを絶対の未来視だと思った。

「……………姉上」

一体の虚がこちらに飛び出したその時、藤丸のみていた未来は突如別のものに変わった。その結果、まつ梨はどこかに消え、伊花様は死んだ。過去に護廷十三隊を半壊に追い込んだ強敵との戦いで隊長格を一人も失わなかったのは奇跡というほかないが、それは藤丸の望みではなかった。

それからほどなくして征源の失踪、藤丸は何処に行ったのか、なぜ言ったのかを知っていたが誰にも言わなかったし聞かれなかった。寝て、起きて、飯を食べて、寝る。同じ行動を繰り返すだけの藤丸は誰がどう見ても心壊れた人形でそれが何か知っているとも思えなかったし、よしんば知っていたとしてもそれから何か聞くのは不可能だろう。

少女と少年が来た。霊術院に入ったという報告をして帰って行った。

青年と美女が来た。干し柿を置いて帰って行った。

少年と少女が来た。少年が少女に馬鹿と言っていた。

あれらも失うのだろうか。

俺のことはよく知っている。もともと斬術が得意ではなく、それを補うために鬼道、走術、白打に頼った。斬術が得意でない理由は明白だ。霊圧が足りない。斬鬼走拳を伸ばすことで霊圧は伸びていくが自身のそれはあまりにも伸びが悪かった。アルトウロは自分と対極にいた。技も何もないバカみたいな霊圧頼りのゴミみたいな戦闘方法。

しかしそれは俺の伸ばしてきたそれらを一蹴するかのようにやつは伊花様の命を奪いまつ梨を消し去った。誰にも奪われない強さは、自分よりも強い奴一人を殺すための強さじゃない。たとえ誰が来ようと、なんどでも、いつまでも勝ち続ける圧倒的な力だ。小さい頃はひたすら奪い続けたのに大きくなつてからは理由や建前をつけ過度に人を氣づつけることを恐れていた。愚かだ。俺は他者に分け与えられるほど強くない。俺は奪うしかない。罪ある奴からも、罪なき人からも。

「竜条丸。宝玉の作り方を教えろ。」

二番隊末席宮藤藤丸が流魂街の住人を推定一万人以上を虐殺後、虚圏へと失踪。またこれによつて殺された住民の死体は見つからず正確な人数は不明。以後、宮能藤丸は大罪人として扱ひ、見つけ次第捕縛、または殺害せよ。

崩玉は長い時間をかけ藤丸の願いを満たすようその体を変質させ、とうとう藤丸は繭を破り姿を現す。背から生えた二対の羽根は四肢を保護するかのように巻き付き、さらにそれとは別に肩、背中、腹からそれぞれ一対の手が生え、それぞれの甲に口がついている。斬魄刀の姿はなく、その左目には二つの瞳孔が虚夜宮を見ていた。

「「「「王虚の閃光」」」」

# 俺の人生は妹のためにある（少年）篇 モブにしてはピンチくるの早すぎじゃね？

拜啓、父様、母様、お元気にしておりますでしょうか？俺はトラックにひかれたけど転生したので元気です。

いやー短い人生だったね、ホント。人生何があるかわからないっていうけどまさか14で死ぬと思わなかった。

そんな俺ですが現在第二の人生を謳歌中です。皆さん戸魂界ソウルソサエティってご存じ？あの名作オサレマンガBLEACHの舞台に転生したのだ！

どうやらモブとして生まれたらしく流魂街で貧しいながらも新しい双子の妹と一緒に楽しく暮らしている。

今世の名前は宮藤くどう 藤丸ふじまる、聞いたことねえキャラだ。かわいいかわいい（大事なことで二回言った）妹の名前はまつり、モブとは思えないくらいかわいい。え、両親はどうしたのかって？知らん。誰が名付けたのかも知らん。フィーリングってやつさ。

今日も今日とて貧しく苦しくそれでもかわいいかわいい（大事なry）妹とともに生きてきたのだが、どうやら今日が俺の命日らしい。最初からクライマックスみたいだ

な。は？一回死んでるだろって？こまけえことはどうでもいいんだよっ！

なぜか流魂街に虚ホロウが侵入したらしく現在そいつと対面中。

警備の穴がぎるすぎるだろお！やばいやばいやばいやばい、最悪俺は死んでもいいがまつりだけは何とか生きてほしい。ほかの魂魄をおとりにすればワンチャンにげ「無茶はダメ……まだ時間を稼げる。」まつりたああああああん！（感涙）こんな時にも他人のこと心配してあげるとか……なんて優しい子に育って、おにいちゃんうれしいよおおおおおおおおお!!!（号泣）

「くつくつく、怖くて泣きだしてしまったのう。可哀想だから最後に喰らうてやろう。」  
うるせえんだよ糞虚。今脳内でまつりたんのVOICE録音してんだから雑音入れてくんな。

というか死神おつそ、重役出勤ご苦労様ですってか？さすがにもう時間稼げないだろうな。あとはまつりたんの肉壁になるぐらいしかないな。

「やらせるかよっ！」

振りかぶった爪がまつりをかばって前に出た俺の肩口からごっそり肉を削っていったのを俺自身は他人事のように眺めていた。

「兄さんつつ!!」

ズキツ

痛つてええええええええええええええええええええええええ!!!

痛すぎて叫び声すら出ねえ。ていうか呼吸がうまくできない。どうやら肺まで達したらしい。

「珍しい魂魄よな。双子、というやつか？

こつちが姉か？それとも死にかけが兄か？」

やつぱ死ぬ？死んだよね？死にましたわー。だが俺の死は無駄じゃない、やつと死神がきた。フハハハハ馬鹿め、悠長におしやべりしてるからこうなるのだ。

「チイイツ、とんでもない霊庄の死神がきおったわ。」

なんつった今？いてえ、聞き取れねえ、まつりは無事なのか、来たのが雑魚死神だったら承知しねえぞ。

「わしはマッドディーター。ヌシらはかならず喰らうてくれるわ」



ああ、もう見えねえ聞こえねえ痛みも感じねえ、まつりが無事かどうかだけが心配だ。  
ああ、どうか、どうか幸せに生きてくれ。

そう願いながら俺は深い深い闇の中に落ちていった。





照れてる照れてる。ん〜かわいいねえ！（IQ3）

「少しは自分の心配をしなさい。」

「やだよ。妹より自分の心配をするなんて。」

「双子なんだから兄とか妹とかあんまり関係なんですよ。」

「まつりが大切だったんだよ。誰よりも、命に代えても。」

「／／／はいはい」

照れてる照れてる。ん〜かわいいねえっ!!!（IQ1）でもいつもこれくらいの愛情表

現なら普通に流すのに何で恥ずかしがってるんだ？（IQ50）

「ていうか早くせいげんさまとこのかさまに挨拶とお礼っ！」

なるほど（爆速理解）、知らん人の前でやられるのは恥ずかしかったのか。ってことは

外でこれをやれば空前絶後にかわいいまつりの照れ顔がいつでも拝めるってこと？（I

Q180）

「せいげん様、このか様、この度は助けていただいて誠にありがとうございます。」

「例なら妹と姉上に言うがいい、私は隊長の職務として君をここへ運んだだけだ。」

「隊長？」

「申し遅れた。私は護廷十三隊五番隊隊長、すずなみ朱司波 せいげん征源。ここは私の自宅だな。君は

丸一日寝ていた。」

朱司波征源か、聞いたことないってことは本編や100年前ではなさそうだな。

「私は朱司波 伊花このかです。よろしくね宮藤藤丸君。体の具合はいかが？どこか苦しいところや痛いところはない？」

「全然平気です（怖い位にな）。」

「きれいに治ってるでしょ？傷が残らないように頑張ってみたの。」

「伊花様が治してくださったんですか？（まじで？死神ですらなさそうなの人が？）ありがとうございます。」

「おどろいた？でも、今は何も心配いらないわ。藤丸君が元気になることだけを考えてね。」

「はい。（思考を読まれた?!?!いや、さすがにたまたまだろ。顔には出ないほうだし俺の鍛え上げられた顔面強化外骨格はそうそうはずれねえ。落ち着け。）ここは何地区なんですか？」

「ここは流魂街じゃなく瀨霊廷ですよ。」

「瀨霊廷!?!（瀨霊廷って死神と貴族の住むところで流魂街の住人が入るのって確か重罪じゃなかったつけ（汗））伊花様は貴族なんですか？」

「はい。貴族とはいえつつましい生活をしていますけどね。」

朱司波征源様、伊花様のおかげで俺は助かったし、話を聞く限り虚を追っ払ってくれ

たのも征源様っぽいからまつりも助けてもらったことになるのか。もう頭上がんねえなこれ、まあ最初からお貴族様に頭とか上がんねえけど。しっかし二人とも聞いたことないから完全に知らん時代なんだなここ。

「うそでしよ？」

彼の名前は浦原喜助、十二番隊隊長であり前回の任務で征源とともに現場に駆け付けた。しかし、時すでに遅く少年は虚に致命傷を負わされ仮にここに上級救護班がいても助からないと思っていた。だが、その少女に対し、少年は助かると征源は断言。少女と少年を朱司波家に運び終えたがやはり助からないと断定し贖罪の意味も込め翌日朱司波家を訪れていた。

「伊花様ー、リンゴー、リンゴもう一個ほしいですー」

「あたしもー」

「じゃあ半分ずつね」

そういつて伊花はお皿に盛られた沢山のりんごを切っていく。

「おいしくー!!」

浦原が訪れた先で見たのは山盛りのりんごを恐ろしい速度で消費していく兄妹の姿であった。

「はあ…」

りんごうんめえく。こつちに来てからまつりに盛り食材取りに行ったりしてたけど比べ物にならねえな。まつりにおいしいもの食べさせるなら死神になるのが一番手っ取り早いかも。何よりたくさんりんごほおぼってるまつりかわいいなあ。ずつと見てたい。あ、こつちに気づいた。りんごみたいになくなってる。ン、ン、ッ  
(キョン死)。

「いかが？元気でしよう？」

「元氣すぎるでしょコレ！たった二日で完治してるじゃないですか！伊花さんこれはいったいどういうこと…！」

「浦原。」



「む、まあ聞かぬが花つてことにしときましよう。代わりに一つ提案があるんですけど、この子達（こども）（ここ）においてやつてもらえませんか？」

「（こ）に？」

「はい、もちろんそうするつもりですよ。」

「え、いいんですか？」

「いいでしょう、征源？」

「本来、流魂街のものを瀟靈廷に置くのは禁止されていますが、姉上が望むのなら喜んで迎え入れよう。」

「それはよかった。おーい君たち、征源さんと伊花さんは好きかい？」

「大好き（です）」

「本当？じゃあこれからもここでずっと一緒に暮らしましょう。」

「やったあ！」

「よかったな、まつり。（どういうことだ、浦原喜助は何のために俺とまつりを？転生の影響でモブからサブにクラスチェンジでもしたか？それとも俺が知らない小説とかその辺の話だったりすんのか？なんにせよ憶測の域は出ねえな。（IQ100）はあくそんなことより無邪気に喜んでるまつりギガカワユスなんだが（IQ3）。しかしまつりまだりんご欲しそうだな、いつも大した量も質もないものばっか食わせてごめんあ

く(泣) 恥ずかしくないよう俺がねだつてやるから) 伊花様ーもうりんごないのー?」

「え、もう食べちゃったの? 君たち二人で?」

「うん。だけどまだ食べたりにくくて。」

「もつと食べたいよね。」

「ごめんなあああああああああああああああああああ(泣) いつもこれぐらいあれば足りるかと思つてたんだなああああああああ(泣) いつもこれぐらいあればあああああああああああああああ兄ちゃんもつと頑張るからあああああああ(号泣) 泣)」

「どうして急に真顔で泣いてるんすか?!?!?! (腹が減るといふことは霊力があるといふ証拠、それなら)」

「リンゴがすごくおいしくてうれしいなつて! (顔面強化外骨格も涙腺はカバーできないあああああああああああああああ兄ちゃんでごめんなあああああああああ)」

「ねえ君たち、君たちはいつか、(泣かれてると話しづらいっすね。)」





「ということで浦原さん。研究の手伝いや部屋の掃除、料理とかするんで稽古つけてください。」

「話が見えないっすねえ。なんでそっから修行の話に？」

「いろいろな本で調べた結果死神の戦闘技術のうち斬鬼走拳のうち斬術以外の白打、歩法、鬼道はもうこの時点で鍛えられることがわかりました。もうまつりはすでに征源様から少々手ほどきを受けたりしていますが、僕は完治してるのにもかかわらず、病み上がりということとで訓練に入れません。また征源様は隊長でしょうから忙しくなっつて修行できなくなるかもわからない。なので同じ隊長の浦原さんに訓練をお願いしたいんです。（浦原さんがいるということは愛染もいる可能性大！なるべく五番隊には近づきたくねえ。）」

「なるほど、でもアタシも隊長なんで忙しいことには変わりないんですけど。」

「(カード切るならここかな) 聞いてますよ、浦原さんが忙しいのは主に技術開発局の方らしいじゃないですか。しかも、技術開発局の仕事に隊員を使っているとか。もう一人くらい従順な奴隷が欲しいと思いませんか？」

「ふむ(言い訳に対する回答持ってこれれちや仕方ないっすね)、いいでしょう。直々に稽古つけてあげましょう。最後に一つそこまで必死に強くなる理由ってなんですか？」

「妹(惚れた女)の前でかっこつけない兄(男)なんていないんですよ(どやあ)。」

「んで、なんですかこれ？」

「義骸です。現世に降りるときに使うんです。まあこれはちよつと特殊なんですけど。」

「どうやってこれで訓練するんですか？」

「ま、とりあえず入ってからのお楽しみってことで。」

地味で見苦しい訓練の様子はダイジエストでお送りします。

「買い物袋が!!買い物袋が重い!!」「買い物袋が重いんじゃないやなくて君の体が重いんですよ。」

「今日はチャーハンでお願いしますね。」「フライパン振るのがキツツいんですけど。」

「今日は楽ですよ。ただひたすら筋トレしながら鬼道の座学を受けてもらうだけですから。」「(よくわからないという顔)」

.....

.....

.....



:

「ここ最近の義骸をつけて行う修行で身についたのはシンプルな膂力と霊圧の回復速度の上昇だった。

なるほど、ここを押さえておくことで以降の修行の効率をよりよくするということが。筋トレ中に座学をやると効率がいいなんて初めて知ったわ。でもなー朱司波家に帰っているとはいえまったり成分不足してるわ。あの柔肌に触りたーい。クンカクンカしたーい。声聞きたーい。抱きしめたーい。

「唐突ですが今日が修行最後です。今日の修行は義骸をつけずにやります。悪いとは思ってるんですけど少々研究が込み入りそうなので一番きついのを前倒ししてやります。こちら四番隊の山田副隊長です。」

「ご相伴にあずかりました山田 せい清之介のすけです。よろしくお願いします。」

「よ、よろしくお願いします。え、四番隊って確か回復に長けた隊でしたよね?」

「はい、簡単に言うなら今日は死にかけて死にかけて死にかけてもらうんで藤丸さんを回復してもらったために呼びました。今日のお題は戦闘訓練です。」

「…まだ俺走拳習ってないです。」

「ええ。なので今日は回避主体で走り回りながら私の攻撃に合わせて霊圧を一気に上げてください。筋トレの時に力を入れるときにやっただでしょ？要はあれを全身でやればいいってわけです。もちろんちゃんと殴り掛かりに来てくださいね。」

戦闘訓練をする森まで来ると、喜助はそういうと斬魄刀を抜いて解号を唱える。「起きろ『紅姫』」

その言葉とともににはなたれた血の斬撃が藤丸に迫る。藤丸はそれをサイドステップで躲し走り出した。喜助の無茶ぶりは承知の上、だがしかし本人が殴りに来いというのだ。そうしたほうが強くなれるに決まってる。恐怖をねじ伏せて前へ、前へ、

「破道の一『衝（しよう）』」

もちろん当たるとは思っていないが牽制の意味も込めて、指から小さい衝撃を放つ。喜助はそれを難なく躲すともう一度血の斬撃を飛ばす。

「（あつぶねっ！）」

藤丸が地面を転がりながら回避すると喜助が距離を詰め切りかかる。

「破道の一『衝』破道の一『衝』」

二発撃つがどちらも刀で叩き落される。しかしその隙に藤丸は体勢を立て直した木の陰に身をひそめる。

ほしいのは時間、藤丸は非常に優秀だったが、一週間そこで修得した詠唱破棄の鬼道は二つとまだ喜助に見せたことのない奥の手だ、倒すならこれしかない。

木の陰から飛び出て指先を喜助に向ける。

「破道の四『白雷（びやくらい）』！」

藤丸の『衝』を剣戟で防ごうとした喜助だったが指先から放たれたのは白い雷。しかし使えることはしつていたため防ぐ方法を少し変えた。

「血霞ちがすみのたての盾。」

藤丸の必死の一手はやすやすその盾でと防がれてしまう。

「君臨者よ 血（肉）の（仮）面・万象・羽（搏き）・（ヒトの）名を冠す者よ（真理と節制 罪知らぬ夢の）壁に僅かに爪を立てよ」

しかし、盾はその裏もまた安全地帯、喜助に作らせた安全地帯で紡がれるは短くなつた言霊。

その技術の名は詠唱省略。詠唱破棄よりも長く、フル詠唱よりも弱いそれだが、今回ばかりは歌うことができる。

「破道の三十三『蒼火墜（そうかつい）』！」

歌い終わるタイミングで飛び出し喜助に向けられた掌から蒼い炎が勢いよく放たれる。完全に決まった奥の手により決まったかに思えたが。相手は十二番隊隊長、詠唱破棄の『蒼火墜』で完全に相殺されたあと斬魄刀が迫ってくる。

「(回避っ、ダメだ躲せない。受けるしかない!!)」

その場で霊圧を上げるように全身に力を籠め刀を肩口から受ける。状況は偶然にもマッドイーターの時と酷似したが、今回は刀は鎖骨部分で止まった。

痛みでその場に倒れこむ藤丸。今回は勝てなかったが次回は絶対に勝つと誓いながら治療を受けるのだった。

「治りましたね。じゃあと8戦ってところっすか。」  
誓いはあえなく砕け散った。

すげえかつこいいけどそこはかたなく同類の匂いがする

湯、それは古今東西すべてにおいて心を癒すものであり、日本においては裸の付き合  
いという言葉があるほど親睦を深めるのに適した場所である。現在、朱司波家の湯船に  
は二人の男が浸かっている。一人はすつと通った鼻立ちに鋭い瞳、深い茜色の髪を肩ま  
で伸ばした凛々しい顔立ちの男、朱司波征源。もう一人はまだ幼い顔立ちに外はねした  
バンブー色の髪の男、宮能藤丸。家族水入らずで風呂に入っている二人は今

「いやいやいや、まつりのほうが絶対綺麗だって!!!」

「お前の妹はどちらかというとかわいい系だろう！最も美しいのは姉上だつ!!!」

喧嘩をしていた。

時は数刻遡る。いつものように食事を済ませいつものように風呂に入ろうとした藤丸はいつものようにまつりに声をかける。

「まつり〜、そろそろ風呂入ろ〜。」

いまだ子どもであり風呂は一緒に入っていたため、当然のように一緒に入ろうと声をかけたのだ。しかし、

「今日から私、伊花様と入るから一人で入ってきていいよ。」

「(……………は?) え、お兄ちゃんのことキライになった?」

「ううん、伊花様には拾ってもらった恩もあるし背中流してあげようと思って。」

「そっか、たまにはまた一緒に入ろうな。」

「…ヤダ。」

「(死亡)」

藤丸にとつて風呂とは楽園と同義だった。しつかりしている妹に世話を焼くチャンスはそう多くなく、その数少ないチャンスが風呂だったのだ。ここ数年は朱司波家の風呂だったのでゆつくりできたため、妹の頭を洗い、妹の柔らかい肌を手で洗ってあげる(合法的に撫でまわせる)機会を失った衝撃は、まさに核爆弾を投下されたがごとく。そんなフリーズした藤丸の様子を見ていた伊花がこのままだと湯船に溺れるかもしれないと危惧し、征源とともに風呂に入ることを提案したのだった。



「征源様、お背中お流します。」

「(立ち直りが案外早かったな。) ああ、ありがとう。」

腐つてもたつた一週間で二つも詠唱破棄をできるようになった。天才児藤丸。すぐさま心を切り替えて、別のことをすることぐらい難なくこなす。人はこれを現実逃避と呼ぶ。

お互い体を流し終えた後はゆったりと湯船につかり、修行の進捗や勉強などの話をしていく。藤丸から話を聞いた征源はさすがに驚かざるを得なかった。

「難なく詠唱破棄を使いこなし、この年でもうすでに四十番台の鬼道を使いこなすか。呑み込みが早く、霊力も多い。浦原はこれを見越してこの子達を死神にしようと思ったのか。」

子供たちの成長をひしひしと噛み締め征源はとてもリラックスしながら藤丸の話聞いていた。

「最近はまだ私も俺に追いつこうと必死で、ますます綺麗さに拍車がかかりますよ。もう世界一綺麗なのにこの後何処まで行くんだって心配なんですよ。」

この時まででは!!!

この男、実はこんな顔してシスコンである!!!この男、世界一綺麗を子供の戯言と流せないほど姉上が大好きなのである!!!

ゆえに、冒頭に戻る。

「確かに伊花様の鮮やかな赤い髪と雪のように白い透き通る肌の対比はすさまじい色気ですが、まつりの肩から腰にかけてのラインの色気はその比ではなく!!!」

藤丸はもうすでに伊花のことが大好きである。しかし、常軌を逸したシスコンはここだけは譲れなかった。

「ええい!まつりの天真爛漫な態度から一変し物憂げな表情を浮かべるのは確かにその差が美しさを際立たせているが、姉上のふと見える鎖骨やうなじはそれはもう恐ろしいほどに!!!」

征源はすでに親バカであった。しかし、優に数十年を超えるシスコンがこれを譲れるわけもなく。

すでに戦いは佳境。魂の叫びがぶつかり合い、どちらが勝ってもおかしくない。その激戦の結果は!!

「二人とも、いつまで入っているのかしら？」

姉<sup>最</sup>兼母<sup>強</sup>親<sup>強</sup>によつて幕を閉じた。

## どっかで見たとあるな

義骸とは死神が現世に降りたときの偽りの肉体である。つまり入れ物というわけだが、当然虚が出たときはこれを脱ぎ戦わなければならない。しかし、そうすると義骸はどうするのかという問題が発生する。もちろん義骸自身に自動で動く機能などない。そこで作られたのが義魂丸である。ぱつと見はビー玉のような見た目をしているが、それには偽りの魂が宿っており、それを摂取すると、義骸に魂が入り、代わりに動いてくれる。

「てやつですよ。ちゃんと履修してますよ。ところで珍しく呼ばれたと思えばなぜ急に義魂丸の話？」

「最近作つてた戦闘用義骸と義魂丸ができました。こちらチャッピーつす。」

「チャッピーだぴよん。よろしくお願ひするぴよん！」（かわいい系黒髪女子の義骸）

「（犯罪臭がすごい）よろしくお願ひします。つてことはチャッピーちゃんが俺の戦闘訓練の相手してくれるつてことですか？かわいい子殴るの罪悪感がすごいです。」

「大丈夫ですよ。涅さんにも手伝ってもらったのでチャッピーは、まだ君よりも全然強いです。朱司波さんから聞いてますよ、君はまつりちゃんとの戦闘訓練で鬼道も使わず

白打も当てるだけで手を抜きまくってるみたいじゃないですか。そんなんじゃないや真央霊術院で困りますよ。」

俺が手を抜くのはまつりだけだから問題ないと思う。

「浦原喜助、このガキは本当に戦闘データをとれるのかね。このガキが駄々をこねてデータを取り損なったら承知しないヨ?」

「だーいじょうぶですよ涅さん。これでもやるときはやつてくれますからね。あ、あと藤丸サンはこれにサインしてください。」

「なんでいるんだよこいつ」なんですかこの制約書誓約書：もしこの戦闘訓練でどれほど大きなけがをしても治れば構わないって（意識）って感じの内容です。

って?」

「早く名前を書き給えヨ。時間は常に有限なのだからネ。」

「(ヒロインの指示以外のことをすると好感度下がるタイプの乙女ゲーかよ。) すいません。書き終わりました。」

「これを体に貼りたまえヨ。」

「(なんだこれバイタル確認パット：これをつけてる間は発汗量から心拍数、電気信号から思考まですべてお見通しだヨ。?) はい。」

なんだこれ? 湿布? まあろくなものじゃなさそうだがいいか、考えてもつけることに

変わりはないし。しっかし今回は森じゃなくて荒野か、背中打つとき痛いんだよなーこい。

「ハイじゃ始めてください。」

浦原はまるでトイレにでも行くような気軽さで火ぶたを切った。

「ぐばっはっ（速い!!）」

藤丸は決して気を抜いてはいなかった。油断もしていなかった。ただ単純に反応できなかつただけである。藤丸はチャッピーの動きを速いと称したが正確に言えばそれは間違えてではない。藤丸も征源という速度特化の師を持っているだけあって速度で言えばチャッピーとほぼ等速で動ける。チャッピー（が入っている義骸）の強さは速度ではなくその技の始めが非常に分かりにくいことである。チャッピーは二番隊隊長しほらいん四楓院よるいち夜一のデータのもと浦原喜助と涅マユリが作った超超劣化版四楓院夜一である。しかし、藤丸もただ食らったただけではなく、霊圧を爆発的に増加させることで威力を減らしていた。

「落ち着け、認識はできてる。速度に対して有効なのは面制圧と縛道。」破道の十二『伏火（ふしび）』

炎を糸のように伸ばして相手の動きを制限し、そのまま攻勢に移ろうとするが、相手の拳が蛇のようにしなりながら殴りかかってくる。

「縛道の八『斥(せき)』(びつくり人間ショーじゃねえんだぞ!) 破道の三十二『黄火閃(おうかせん)』」

斥で拳を受けるとそのまま黄火閃で広範囲に衝撃波を放ち距離を取ろうと模索する。

「自壊せよロンダニーニの黒犬 一読し・焼き払い・自らののを掻き切るがいい 縛道の九『撃(げき)』」

「回避イイイイイイ!!! (お前鬼道も使えるんかい)」

下手に距離を取れば縛道を食らうてから、白打もしくは破道で持つてかれると察した藤丸は作戦変更を余儀なくされる。白打のレベルは比べるべくもないがそれでもとれる選択肢は超接近戦、相手は九番台ですら詠唱を必要としているなら、詠唱破棄で打てる自分に手数軍配が上がる(と思いたい)。

I Q 200で超高速で攻略チャートを立てた藤丸は盤面を振り出しに戻すよう画策する。

「縛道の二十一『赤煙遁(せきえんとん)』」

用は赤い煙幕である。相手にこちらを見失わせる。しかしこちらも霊圧感知が得意ではないので、これでお互いの情報が一切遮断される。ここからは完全な読み。今までの情報からチャップイーがどのように動くかを推測するしかない。相手は先ほど『撃』を詠唱破棄で撃ってきた。あの場面なら破道で崩せる可能性は高かったが、あえて縛道を

選択した。相手が破道を使えないということは考えづらい。あの場面で破道使わなかったのはそれが交わされた場合すぐに攻勢に出られて負けるから。つまり相手の狙いは詰将棋のごとく選択肢をつぶしてくタイプだろうと藤丸は推測した。ならば相手の行動で最も考えられるのは最速で煙幕からの脱出だろう。となれば、

「縛道の二十六『曲光（きよつこう）』」

対象を見えにくくする『曲光』をつかい自身の存在を極限まで薄くし認識を少しでも遅らせる。そして相手が逃げたであろう方向に瞬歩を使い高速で詰め寄った。

今最も欲しいのは速度のある鬼道。皮肉にもその鬼道は藤丸がさんざん浦原に撃ってきた十八番である。

「（絶対に勝つ！）破道の四『白雷（びやくらい）』！」

相手が女性（の姿をした義骸）であることも忘れ躊躇なく煙から飛び出し相手を認識した瞬間『白雷』を放つ。当たった姿を見て勝利を確信し藤丸は白打で詰めるために前へ飛び出した。

数瞬後藤丸の背後から手刀が迫った。



「なんで（『白雷』あたってたよな）？」

「イヤー見事でしたよ藤丸サン。まさか隠密歩法四楓の参「空蟬」まで使わせることができるなんて思ってもみませんでした。」

「ちよつと危なかったびよん。さすがだびよん♪」

次は絶対一発食らわせてやると藤丸は決意した。

「ふむいいデータが取れたね。さ、次ダヨ次。」  
どっかで見えたことあるな。と藤丸は思った。

## 6戦目

「複合鬼道！破道の十二『伏火（ふしび）』破道の十一『綴雷電（つづりらいでん）』」

「触ったらしびれるけどそもそも当たらないから大したことないぴょん。」ドガツ

「ヴェ」

## 28戦目

「入った!!このまま白打主体で…」

「つかんじやったぴょん♪受け身とるぴょん♪竹蜻蛉!!!」

「（これ回転しながら脳天直撃で地面のシミじゃね?、うおおおおおおおとおおとおおとおお  
おお霊圧を爆発させろおおおおおおおおおおおとおおとおおとおおとおお  
!!!!」

1日目42戦0勝42敗0引き分け



んっぜん理由わかんねえ。考えても無駄か。あとチャツピーてめえまつりにべたべたした後俺のこと煽りに来るのやめろ。はあ？敗北者あ？取り消せよ今のことばあ。

「宮能藤丸、そこと、そのものを持ってきてくれたまえ。」

「はい、ただいま。」

え、今何してんのかって？チャツピーと一緒に涅さんのパシリだけど。

「いつまで鬼道に頼り切りだぴょん？ほかの選択肢もあるんだからさっさと使ってくる  
ぴょん。」

「ほーん。ぬかすじゃんぶつ倒してやるよ。」

## 22日目64戦4勝53敗7引き分け

悪くわないんだよな（ずたぼろ）。ただ互いが互いを知ってるからこそそのメタ合戦と  
いうか、新しい鬼道とか使うより愚直に走拳伸ばしたほうが勝てそうなんだよ。話を聞  
いたところチャツピーって二番隊の中堅ほどの強さがあるっぽいし、やっぱこの二つが  
盗みやすいんだよな。戦いにマンネリもくそもないけどちよつと刺激が欲しい。かと  
いって征源様？手加減がへたくそだから見えない。うーん。浦原さんに相談してみ  
るか。

「そうですね。そろそろ真央霊術院に入ることですし、座学の量を増やすのと斬術の訓  
練でもしましょうか。」

「斬魄刀持つてないのにですか？」

「刃をしつかり立てて斬る練習や、斬る瞬間にしつかりと霊圧を込める練習、武器に振り回されないようにする練習など、斬術は斬魄刀がなくてもすることはたくさんあります。だからこそ、鬼走拳と並んで死神の戦闘方法と知れ渡っているのですから。」

斬術は自分の斬魄刀でを強くするための技術ではなく斬魄刀による攻撃方法を強くすることって話か。

「まあそれは明日からでもいいでしょう。今日は帰ってまつりさんとしつかり話してきてください。なんか最近話せてないんでしょう？」

「（現実を直視して心が折れたことを隠そうと真顔を張り付けたが涙を滝のように流している）」

「…そんなに辛かったんすか？」

「…言わなきゃわかりませんか？」

そうだよ辛かったよはいはい満足ですか？ 一体何日まつり成分吸収してないと思っ  
てんだよまつり禁16日目だぞ見たい触りたい嗅ぎたい舐めたいまつりたあああああ  
あああああああああああああああああ  
!!!!!!!

.....

.....

.....

...

「まつり、ちよつと話があるんだけど。時間ある？」

「…ごめん。この後勉強しなきゃだから。」

「…そっか。(今の間何!?!嫌われてる?まぢ無理ツラタニ園病むタヒぬ。)」

「まつりちゃん。時間は取れるでしょ。少しくらい話してあげたらどう?。」

「伊花様…」



「ふっへっ!? 救世主!? ありがとう伊花様(泣)。俺今まで受けた恩どうやって返せばいいんだよ。)」

「藤丸。話つて何?」

「実は、気のせいだったら悪いんだけど最近まつりに避けられてる気がして、俺なんかやつちやつたかな(ふー死ぬ)。」

藤丸には無限にも思えるほどその時間は長く(実際は5秒ほど)感じられる時間の中、まつりは涙をこぼしながらゆつくりと、しかし確実に言葉紡ぐ。

「ふっ藤丸ツはっ! マッドイーターと会ったとき、なっ泣いちやうぐらい怖っ、わくて、でも私のこと死ぬかもっで、庇ってくれて、今度こそ守つてあげようって思ったのに! 今も藤丸が強いままで、毎日ズタボロになるくらい頑張つて、私は全然本気で相手にされなくて、まっまた藤丸が私を庇つて死んじやうんじやないかって!」

えっ、そんなことあつたけ。うーん全然そんなことないような。

・まつりたああああああん!(感涙) お兄ちゃんのこと心配してくれるの? 優しい子に育つて、おにいちゃんうれいよおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!(号泣)(前科一犯)

・「(回避っ、ダメだ躲せない。受けるしかない!!)」(思いつきり斬られてる。)(前科二犯)

「朱司波さんから聞いてますよ、君まつりちゃんとの戦闘訓練で鬼道も使わず白打も当てるだけで手を抜きまくってるみたいじゃないですか。」（前科三犯）  
有罪！人権没収！！死 刑！！  
ギルティ コンフィスケイション デスペナルティ

ごめんまつり。俺が悪かった。今回は弁明のしようもなく、最初から最後まで誤解（一部誤解ではない）されるような行動をとった俺が悪い。

「そっか、お兄ちゃんわかってなかった（わかってない）。まつりがこんなに俺の心配してるなんて思ってもみなかった（思ってる）。もう心配させないようにもっと強くなるから（全部わかってない）。お兄ちゃんもっと誰にも負けないようになるから（何もかも違う）。」

…なんでそんな泣きそうな顔（もう泣いてる）でこっち見るの？伝わらなかつた？（伝わった）なんか誤解させちゃった？（すべて正しく伝わった）え、ちよ、まってまつりいいいいいいいい！！なんで走って逃げられたんだろう？

「藤丸君…もつとまつりちゃんの目線で考えてあげてくれると多分まつりちゃん喜ぶと思うの。」

伊花様、なんでそんな残念なものを見るような目で俺を見てるの？そんなやらかした騎士ナイトに守られるのがすべての女子のあこがれじゃないの？

それからしばらくして家族で晩ご飯を食ったけど、今までで一番気まずかった。ごめ

んなさい伊花様。ごはんいつもおいしいです。たまには俺が作ってもいいんですよ？  
征源様、何があつたのか聞くのは後にして、全部答えるから。

## 狂人は修練の末、頂を見る。

「そんなんで私が捉えられると思っっているぴよん？ほら脇がぼがぼだぴよん!!」

「(はいひっつかかったく減速して必殺技に繋げさせてもらいまゝす。)縛道の三十七『吊星(つりぼし)』(ポスト)おっそい蹴りだなあ、捕まえちやったよ。さて初日に俺に何してくれたか覚えてるかな？(さんざんまつ梨といちやついてんの見せつけやがって、殺す。)」

「(いやらしい使い方するぴよん。)ちよつと待つぴよん。それはよくないぴよん。頭が潰れたトマトみたいになっちやうぴよん。よく考え「竹蜻蛉」ぴよおおおおおおおおおおおお!!!」

92日目49戦21勝26敗2引き分け

もはややつを女とは思わねえ（最初から女ではない）。あれはサンドバックだ（いまだ負け越している）。あれから仲直りの目途もたたず、ただひたすら斬鬼走拳の訓練に明け暮れているがあと一週間もすれば真央霊術院に入院だ。まあそこで話せば仲直りできさるだろ、できるよね？できるといいなあ（願望）。

「はい、今日はこの義骸に入って岩を切ってもらいます。」（大人ほどの大きさの岩）

「あのゴリゴリ霊圧吸われる義骸に入って、尚且つ刀に霊力死ぬほど込めろってことですか？（どこの鱗滝左近次だよ。）」

「わかっているじゃないですか。じゃ、頑張つて斬つてください。」

おいおいあいつまじかよ。俺が持つてんのただの刀だが？まあやれと言われたからにはやるけどさ。

音が響く。鉄と岩がぶつかる音。一心不乱に刀を振る少年の傍らには何本もの刀が入った樽があり、その近くには刀だったものが樽に入ってる本数より多く無残に転がっていた。

その少年は響く痛みに顔をゆがませるでもなく、斬れないことに憤り修羅のごとき形相になるでもなく、苦難に立ち向かう決意に満ちた表情でもなく、ただひたすらに虚無であった。目に光は灯っており、それは岩に向けられている。だが、そこには人間らしさなど欠片もなくまるで機械のように両手で刀を振り下ろしている。

一回一回に魂を込めるがごとく、込めれるありつたけの霊圧を込めて、骨にひびが入ろうとも、空腹に腹が鳴ろうとも、滝のような汗で全身が冷やされようとも……

三日後ついに少年は岩をたたき切った。

浦原は真央霊術院に入るまでの一か月間、こちらで藤丸を預かる旨を朱司波家に伝えるに行った。伊花はやや迷っていたが、藤丸が決めたのならと何も言わず。征源は修行ならばよかろうと前向きに許可を出した。ただ一人まつ梨だけは顔が曇ったままだった。

「さっ！最近一撃が重いびよん！こんな短期間に何があつたびよん！」

「刀振るときの応用で拳に靈圧込める感じがつかめてきたんだ。受けるときも全身の靈圧を一気に上げるんじゃないかと受ける部分に靈力を込めてその部分だけ靈圧を上げればいいんだって、最近気づいたよ。」

「(当たった瞬間どうしてもひるまざる負えないからくらくらしたらそのままつなげられて負けるびよん！) 破道の四『白雷(びやくらい)』！」

それは一瞬の出来事であつた。いつものように靈圧を高めて、『白雷』を受けてから『白雷』で反撃をしようと拳に靈圧を込め殴りかかる。しかし、裏拳に当たつた瞬間『白雷』はかき消えた。

『白雷』とは指先から雷を放つ技である。そのため靈圧を一時拳にためるのだが、靈圧を込めた拳全体で『白雷』打つ準備をした。要するにフライングである。そこからは偶然ではなく無意識による産物。ダメージを最小限にしようとした脳が最も有効な靈圧の質にするために導き出した答えは同じ質、量を持った鬼道の逆回転、そんな靈圧を拳に



まとい『白雷』を殴りつけたので、お互いの鬼道が対消滅したのである。

それを認識しチャッピーは焦った。妨害がないとなれば相手の攻撃は完璧な挙動でこちらを襲うだろう。そして同じことを思った藤丸は内心ほくそ笑みながら鬼道を相手の太腿に向けて

「破道の四『白雷（びやくらい）』」

……

…

すかした。

「びよん！」（上段蹴り）

「ぐえ」

「あはっははははははははははは!!!! 零番台の鬼道失敗したぴよんねえ! そんなんでほんとに真央霊術院合格できるぴよん? w w w w w w」

「うるさいよ(くっそ、ミスったのこっちだからなんも言えねえ。)」

独学で反鬼相殺という白打・鬼道の頂に手をかけた天才は完全に実力で下回った義骸に死ぬほど煽られていた。

95日目62戦58勝1敗3引き分け

「まつ梨サンは斬術の才能がありそうっすね」

朱司波から聞いた話によると一撃はなかなかの威力があり、三十番台の破道もすでに使えるものがあるようで、三十一番の『赤火砲(しゃつかほう)』は詠唱破棄で使用もできるといふ。

「もうすでに真央霊術院では特進クラスは確実にしよう。」

まつ梨の実力なら特進クラスでも上位を取り続けることは難しくないだろう。ただ、

兄のほうが異常だった。

宮能藤丸、鬼道は七十番台も唱えられるものがあり、五十番台まではすべて詠唱破棄。これだけでもうすでに鬼道衆に入れそうなものだが、白打、歩法も二番隊に入れるほどであり、霊圧は席官並で扱いもうまい。

「藤丸サンは、まさしく天才っすね。」

己と猫しかいない研究室の中、喜助はそう呟かずにはいられなかった。自分の研究成果である戦闘用義骸。決して死神ではないため実際に現世には派遣できないものの戦闘訓練に用いるにはとても有用である。それを差し引いてもたかだか三か月であそこまで白打、鬼道、霊圧の運用の練度を高めることは異常である。

さらに反鬼相殺という技を使ったということは白打の奥義瞬間しゅんじくうに足を踏み入れたといつでも過言ではなく、実際に使える夜一に直々に指導してもらえば数年はかかるだろうが使用できる可能性は大いにある。

最初に進めるときには霊圧が大きいだろうという点しか見てなかったが、その少年の真価はそこではなく、死神ですら音を上げるだろう鍛錬を限界以上にこなし、強くなるために涅マユリすら利用しようという意思の強さだろう。現にマユリはその魂胆をわかっているながらも従順に働く下僕をなくすのは惜しいのかたまにお願いを聞いている。並大抵の精神力ではない。マユリのことを少し話したときに見せたかどうかどうしたと

いう顔は喜助ですら驚愕した。あの少年はきつと自分にかかわること以外どうでもいいのだろう。悪人だろうと善人だろうと自分の利になるなら笑顔で歓迎する。どこか自分と似ているようでふと笑みがこぼれた。

「その小僧はおぬしにそこまで言わせるほどか。」

「ええ、きつと気に入りますよ。ヨルイチサン。」

一匹の黒猫はまるで古くからの付き合い用に男としゃべっていた。

## 学園ラブコメ（青年）篇

なんだ、霊圧上げるのなんて血圧上げるぐらい簡単じゃん！

複数の岩を前にまだあどけなさを残した青年は様々な太刀筋を繰り返す。片手による突き、横へ一閃、両手で切り上げなど。岩には明確な太刀筋が付き、青年の持つ刀は刃こぼれ一つ起こさない。たった一か月。されど一か月我武者羅に剣を振り続けた少年は基礎をつかみただ一つのこと打ち込むことで精神的に大きく成長を遂げる。具体的にはまつ梨禁を平然とこなせるようになったのである。精神が成長した少年は青年へと至り強さにはより拍車がかかっていた。

「明日から真央霊術院に入院するから、これで最後だ。よろしくチャッピー。」

いつも斬術の修行で使っている義骸に入り、藤丸は最後の戦闘訓練を始めようとする。まつ梨禁ができるようになってから藤丸のチャッピーに対する思いは感謝だけとなり、この戦闘訓練はとも楽しいものになっていた。それに対してチャッピーは、「もうよろしくしなくてもいいぐらい強いぴよん。かわいいかわいい義魂丸をいたぶるのはやめるぴよん。」

普通に嫌だった。

そもそも、戦闘訓練を楽しみ始めたころとは、斬術の訓練で戦闘能力が飛躍的に上昇したところである。つまりチャッピーからは自分をぼこぼこにするタイミングでひどくワクワクしているドS野郎にしか見えないのである（なお義骸のため「どんだけぼこぼこにしても直るしいいか。」と言いはなち、破道の五十四『廃炎（はいえん）』を使ったりもした。貫禄の弩畜生である。）。しばらくたつて彼が修練用義骸を着て戦闘訓練をしたときは最初はぼこぼこにできたのに次第に反撃が多くなり最終的に義骸を着てもぼこぼこにされるようになった。ついでに義骸を着てぼこぼこにされてるときも笑みを絶やさなかったので、チャッピー視点は加虐趣味の戦闘狂サデイズムというバトルジャンキーでもない誤解を与えていることに妹狂シズコンの異常者は気づくことはなかった。

なおそれでも縛りが足りないといい、涅マユリに作らせた、霊力を吸う襟巻をつけて

いることをチャッピーはまだ知らない。

最終日（125日目）69戦68勝0敗1引き分け

気持ちよく出発させないためにチャッピーは死ぬ気で引き分けに持ち込んだ。

……

……

……

……

いくら弱体化アイテム付けているとはいえ3戦も引き分けに持ち込むとかマジか。やっぱチャツピーすげえわ、作った浦原さんと涅さんも。チャツピーが相手じゃなかったらきつとここまで強くなれなかった(確信)。まじでありがとうチャツピー。ホントに感謝してる。

「藤丸サン、なんか霊圧が爆発的に増加してませんか?なにがどうなつたらそうなるんですか?」

霊圧を鍛える方法は一般的に死にかけるのが最も効率がいいといわれている。

「《鎖結》に負荷をかける修練を編み出しまして。」

魄睡と鎖結という霊力器系の臓器が存在する。この二つは霊力を作り出す器官と作った霊力を送り出す器官である。

この男、霊圧を低いように見せかけて隙をつけないかな、という考えで鎖結全体を霊圧で包み込むように全方位から圧をかけたのである。その結果しばらくした後に、絶叫を上げながら穴という穴から水分を垂れ流すほどの激痛に襲われて気づいたら霊圧が上がっていたのである。鎖結に圧力をかけると霊圧が増幅すると考えた。すごく痛いから人には教えないようにしようと思藤丸は心に誓った。

ちなみに鎖結に圧力をかけると霊圧が上がるわけではないので、端的に説明された浦原は何が起こったのか理解できなかつた。



そう。別に鎖結に圧力をかけても霊圧が上がるわけではない。当たり前である。鎖結とはポンプの役割を果たすものであって、作り出す器官ではないのだから。藤丸は誤解している。鎖結や魄睡はこの方法で鍛えるのは不可能である。

ならばなぜ霊力が増加したのか、理由は単純明快。死にかけたからである。

まず鎖結に全方位から圧力をかけるといふことは心臓に弁をすることと同じである。つまりやり続ければ鎖結は破裂しそのまま死神の道は断たれる（霊力を扱えず普通の霊になるため）。だが藤丸は浦原との修練で多量の霊力を一気に運用して霊圧を上げるといふことを斬術と戦闘訓練でただひたすらに行っていたため、鎖結が人より強靱だったことで事なきを得た。問題はその後、多量のせき止められた霊力が流れ出したことにある。

Q. 普通のホースに消防車のノズルをつけて全力で発射するとどうなるでしょう。

A. 削れる、破ける、破裂する。

自分の許容量以上の霊力が一瞬で藤丸の体をズタボロにした。これが激痛の正体であり、生命の危機である。

つまり下手すれば死んでいたのをたまたま運がよかったために生き残りそのまま生き残ったというだけのことだった。しかしこの男にとつて気が狂いそうな痛みなど、まつ梨が自分を心配しないようになる（仲直りする）ためならばへでもない（根本的にす

べて間違っている)。直後は霊力を操るだけで痛みが強くなったため、痛いということは危ないことという馬鹿でも知っている理論で奇跡的に死を回避。

時間をおいての二回目は痛みを少なくしようとしてあえなく失敗する。(そもそも本人は圧力をかけることで痛みが発生すると思ひ込んでいるが、耐えきれなくなった霊力が流れることで激痛が走るため、痛みとかける圧力に関係はない。)数十回やって痛みを少なくするのは無理だと(死の淵を反復横跳びしている。)悟ったころには完全に痛みに慣れてしまっていた。なお現在は耐えられる痛みは危なくないという馬鹿の理論の元、当然のごとく死にかけている。

ちなみに魂魄が弱いと自身の霊圧に耐え切れず死ぬものもいるため藤丸はひたすらに運がよかった。

「宮能藤丸、ただ今帰りました。」

そんなこんなで修行から帰ってきた藤丸は久しぶりの我が家に帰ってきた。久しぶりの我が家はとても落ち着く香りで、たった1か月だというのになぜか泣いてしまいうになる。そんなことを思っていると、元気のよい足音が聞こえる。

「お帰り藤丸！」

まつ梨は久しぶりに会った兄に対して勢いよく抱き着いた。最後にあつた時は冷たい態度をとってしまったが、兄に追いつけなくともその隣で支えてやればいいという結

論に至ったまつ梨はたゆまぬ努力で成長していた。

ふわふわの髪の毛、柔らかい膨らみかけの胸、信じられないくらい心地いい温かい陽だまりのような匂い。

帰ってきた直後で感極まっている兄に対し大量の情報を会心クリティカルヒットの一撃で叩きつけた。

藤丸は泣きながら心肺停止した。

まあ、優れたものが排斥されるのは世の常だから（震え声）。

入院試験を受けた。真央霊術院に入院した。終。

いやもうほんとにそれで終わり。浦原隊長の修練に比べたらまじで笑っちゃうほど簡単だった。全部終わった時に簡単すぎて衝撃受けてたらまつ梨に心配された。なんかフレーメン反応みたいな表情してたらしく俺を見て落ちたんだなっていう憐憫の目と嘲笑う視線が集まった。逆に俺のことを心配するほど余裕があったまつ梨は猛者扱いされてたけど。まあ当然のごとく首席で合格だった。俺の血と汗と涙を垂れ流した（事実）修練は無駄じゃなかったどころか、ライザップもびっくりするほど結果にコミットしていた。

「おい、なんでお前が首席なんだよ！おかしいだろ！どんな不正使ったんだよ、なあ、なんとかいえよ！」

前言撤回。全然コミットしてなかった。特進クラスにこんなべたべたなかませ犬いるんだな。そんな弱そうな顔してたりする？周りに耳を澄ませるとちらほらと俺のうわさが、ふむふむ。変顔猫野郎。妹の出がらし。間抜け面。なんでこんなに広がってん

の？あとコミットしなかった理由もしかして俺がフレーメン反応起こしたから？自業自得じゃん。

「藤丸は不正などしてません。取り消してください！」

いいよいよ取り合わなくて。まつ梨に迷惑かけてごめんな？「だけど！」いや俺があんな間抜け面晒したのが悪いから。そっちのやつもごめんな。どうやら実技が悪かった分筆記がよかったぽいんだ（どちらも当然のごとく満点）。

「けっ、そうかよ。そっちの女ももう突つかかかってくんなよこの醜女！」

殺す（反射反応）。瞬歩で相手の背後に回り足払いをしつつ倒れる相手の背中の中の。そのまま片腕を思いつき引き上げ痛みを感じない程度の位置で固定し動けないようにしてから指を相手の頭に向ける。

「おい！なにすんだよ！離せ！」

何もしないで離す訳ねえだろバカが。悪いことしたらごめんさいだろうが。「謝れ。」

「俺は当然のことを言ったまでだろ（藤丸をバカにしたこと）！」

「は？殺す。（まつ梨が醜女なのが当然だった？殺す。）」

「ひっ、な、なんだよ。」

そうかそうか、まだわかってなさそうだな。今どういう状況なのか。周りのやつはビ

ビツて近づいてこないし。わかりやすく痛めつけるか。

「破道の一『衝（しよう）』」

わめいていた奴が元気よく教室の床と接吻ちゆうしているのをほかのやつは見ていた。まあこの時代には刺激が強いしなもうちよつと見せてやるか。

「てめえ何を「破道の一『衝』」がっ！」

「ちよ「破道の一『衝』」なにを「破道の一『衝』」いだつ、止め「破道の一『衝』」止めて、「破道の一『衝』」わっ悪かつ「破道の一『衝』」ごめんなさ「破道の一『衝』」すいま「破道の一『衝』」許して下「破道の一『衝』」だっ誰か！「破道の一『衝』」助け「破道の一『衝』」くださ「破道の一『衝』」

「止めて藤丸！死んじやうよ！」

「そうか？これぐらいじゃまだ死なないけど。まあ呼び出し食らっても面倒か。『啓活（けいかつ）』」

実は俺修行中にケガが多かったから回道の初歩である『啓活』と『明癒（めいゆ）』をわざわざ覚えたんだよね。まさか初めて自分以外に使うのがこんな奴だと思わなかったけど。それからまつ梨のあだ名は「女神」になった。解釈一致だな。俺？「拷問官」。

しばらく真央霊術院に通い続けて分かったことがある。まず白打の授業は寂しい。呪いの呪文好きで奴と二人一組では確実に余る。当たり前である。初日からやらかし、ついでに実力が隔絶しているため必ず浮いてしまう。なので教員とやるのだがあんまり力にならないんだよ。教員は強いから別に成長してないわけじゃなさそうだけど明らかに命削つてないんだよね。

指導は元刑軍所属の堂田<sup>どうえん</sup>攻<sup>せめる</sup>先生。失礼ですがどこかで超次元サッカーやってませんでした？人違いですかそうですか。しかしこの人こんなふざけた名前の癖に（失礼）技の切れが凄いな。でもチャッピー見たいに防げない訳じゃないからやっぱチャッ

ピーすごいなってなるわ。

「考え事してる暇はねえぞ。（練習）相手は友達！組手しようぜ！」  
生徒を友達みたいに言うのは止めろ!! やっぱワードセンスがなあ。

1日目1戦0勝0敗1引き分け

ちよつと待つて？1授業丸々使つて1戦だけなのはさすがにおかしい。思い返してみれば休憩も挟まず時間一杯組手なんていくら俺でも無理だ。どういうことだ？



午後、書庫であれが何だったのかを調べていた藤丸は次第に相手のことを忘れ本に没頭していた。

へえ。浅打って始解が最初から決まってるんじゃないかと、こっちの魂を写しとるのか。何々、寝食を共にするといひ？面白いシステムだな。もうこっち来て何年もたつてるから、重要な出来事以外案外忘れがちだな。

死ぬ前は図書館で調べものとかしなかったけど、こんなに面白いなら全部ネットで完結せずにやればよかつたなあ。

こっちは白打の本か。実力が相手より圧倒的に高い場合に行う指導方。相手が受けやすい部分に速い攻撃を打ち込み、相手に打たせたい部分に隙を作ること、動きを先導し様々な型を覚えさせ、相手の実力を昇華させることを指導組手という、

：

これだあああああああ!!!

死ぬほど手加減されてたんだ俺。体力が長時間持ったのは正しい型で技を打てた

からか。すみません先生。天狗になっていました。

翌日

「先生！指導組手よろしくお願ひします！」

「お、予習してきたか。いいぞ！組手しようぜ！」

2日目1戦0勝0敗1引き分け

血反吐を吐くわけでもないのに戦闘技術は恐ろしいほどに伸びていた。

俺はきつと最高の師を手にいれたんだ。

まつ梨、俺が守るよ。なにがあっても。

こいつつ！劇的に強くなつてやがる！（↑原因）

叢雲 むらくも 志童 しどうは優秀だった。鬼道も歩法も人より優れていたし、斬術は同世代で最も秀でているという自負もあつた。真央霊術院は特進クラスに入ることもできたし、このまま主席も下してクラスの頂点に立つと、意気込んだ。

初日に首席に突つかかった。何故なら首席は試験でマヌケ面を晒して目立っていた弱そうな顔をした青年だったのだ。その男を見てより一層怒りが込みあがる。自分がこんなやつに負けるなどありえない。しかし本人はこちらが馬鹿にしたような態度をとつても女の影に隠れるばかりのなんとも情けない奴だった。

格の違いを思い知らせてやろうなどとも思ったがこの程度の相手に時間を取られることすら苦痛である。そう思った志童は次席であつた女の方に狙いを定め挑発した。

次の瞬間、自分は倒れ伏していた。

志童は知らない。この男がソウルソサエティの天才に育てられたことを。

志童は知らない。この男が妹 イモ、大好き ススキ、ド変態 コンであることを。

この日青年ははじめて敗北を経験する。

この敗北を糧に特訓をし、まつ梨と並んで今期の院生の優秀者の中でも抜きん出た強

者として名を連ねた。

もうそこに驕りはなく、あるのは純粹な高みへの渴望。

秀才は死に物狂いの努力で、天才へと至った。

そして今日院生同士の模擬戦闘で天才は初めて自分を下した天災と会いまみえることとなる。

叢雲志童、初日に俺に突っかかってきた相手であり、最近はまだ梨とともに今期のあたり枠として数えられている男。まさかランダムで選ばれた対戦相手がこいつとは、つくづく縁があるな。いや神が俺にチャンスをくれたのか、ハハツ…

知っているぞ貴様あ! (豹変) おまえいつつつつもまつりと組手してるよなあ! 図書館で調べものしてる時に視界の端にちらっとまつ梨と一緒に本借りていったの見たぞお!! お前まつ梨が荷物運んでた時に自然に荷物奪ってつたよなあ! 俺がさっそうと現れて助けてあげようと思つたのに蛮族みたいな真似しやがつて!

俺がまつ梨を攻略する学園ラブコメが始まるはずだったんだぞ!!! (妄想) なに俺のま

つ梨を攻略しようとしてんだゴミがあ!!!(お前のではない)俺が仲直りの方法考えている間にまつ梨の好感度上げに行くなんて許せねえ。(逆切れ)

「久しぶり。前は不意打ちみたいなの真似しちゃってごめんね?今日は正々堂々やろうか。」

「俺の方こそ悪かった。こちらが礼節をかけた態度だったのが原因だったし、前回の敗北はどう言い繕っても俺の完敗だ。今日こそは一泡吹かせてやる。」

「何キャラ変してんだよ!?前回あんなかませみたいだったのに冷静沈着キャラみたいになりやがって、先手でぼこぼこにして泣かす。」

「皆、位置についたな。それでは、試合、始め「破道の四十『雷光扇(らいこうせん)』『雷光扇』白い雷を扇状に放つ破道。素早く範囲も広いが射程が短い。」

詠唱：白き天馬 雨雲切り裂き 光を持って翼を広げよ」

俺式兵法その1!最初はグーで相手の横つ面を殴りつけるのだあ!範囲も広いし、速度も速い、勝ったながはh「縛道の三十九『円闌扇(えんこうせん)』!」ダニイ!?

「鬼道も得意と聞いていたが、どうやら本当のようだな。」

「いやいや、そつちも『円闌扇』詠唱破棄で使ってるじゃん。流石。(今ので仕留めるはずだったんだが、やけに反応が早かったな。)」

「お世辞はよせ、傷つけないように気を付けているだけでもっと高位の鬼道も使えるだ

ろう。それに俺は防御力が足りないと思ったから三十番台で『円閨扇』だけ練習してやつと使えるようになったんだ。縛道の八『斥(せき)』」

強いなこいつ。初日とは技量も何もかも段違いだろ。相手の刀を受け止めたが重い、まだ入院して一年目だぞ?もう霊術院卒業できるぐらい霊圧込めるのうまいだろ。しかも手の甲に出した『斥』を盾みたいなの運用してきて攻め込みづらい。斬撃に力込めすぎて相手の腕ごと斬り飛ばしましたとかやだぞ。

やつぱ俺の戦闘スタイルならヒット&アウェイか。ひとまず体勢を立て直し、「縛道の二十三『鉄縄(てつじょう)』』『鉄縄』銀色に鈍く光る子供の手首ほどの荒縄を巻きつかせる。

詠唱:その魂 鋼となりて 編み込み・紡ぎ 強固なる道筋となる」くっそ!お互いの手首に巻き付けてきやがった!これ断ち切るにはなかなか面に倒「その魂 鋼となりて 編み込み・紡ぎ 強固なる道筋となる」:おいおいどんだけ驚かされればいいんだ。後述詠唱なんて高等技術がなんでここで見れるんだよ。

「:っええじゃん。」

「ふふっ。どうやら、一泡吹かせることには成功したらしい。」

半強制的に東洋決闘スタイルに持ち込まれてからは防戦一方だった。相手の剣戟はこちらも剣で対応し、反撃に繋がれている方の手で白打を打ち込もうとするも、縄が重

くて行動が阻害されるし、相手が縄を引くだけで白打がずらされる為、掠ることぐらいしかない。まあこの勝負、俺の勝ちなんだけど。

「くっ、はっ！縛道の三十九『円閘扇』…すううう、はああああ」

「『円閘扇』唱えてまで深呼吸するなんて、スタミナ切れてますから次の応酬で最後になりますって宣言するようなもんだぜ。」

「…確かにな。だがこの戦い俺自身には値千金の価値があった。あなたの素も見れたことだしな。」

(ゾゾゾツ)うおっ、気色わりい。こっち攻略しようとするなてめえは蝶々とてもよろしくやつてろ。

しかし鍛え抜かれた顔面強化外骨格が剥がされるは、IQ180(自称)の俺をここまで見事に出し抜く手腕、こいつもしかして真つ当な強者だったんか。片手剣でもしっかりと相手を斬れる斬術にダンベハウサ人の間に伝わる打撃系格闘技を混ぜたみたいな戦闘方法は攻守ともに隙らしい隙も無く、『鉄縄』で強制的にあつちの土俵に持ち込むことができるこの戦法は凶悪極まりない。まあだとしてもこんだけしてやられたのは絶対に、情報を売ったやつがいる。誰かは予想つくけど、ちよつと悲しくなるな。

志童が踏み込み渾身の斬撃をふるう。俺はそれを両手で持った剣で対応する。ここまで距離を詰めれば、『鉄縄』を引かれてバランスを崩すこともない。剣は両手で持った

ほうが強い。そのとおりである。相手がいくら振り下ろしで重力という加護を持っているとはいえ、両の手でならば簡単にはじける。相手の剣を弾き飛ばした後に残るは体勢を崩した志童と剣を振り上げた俺。あとはそのまま渾身の振り下ろしを  
ピタッ

首元で寸止め。

「またしても、完敗だな。」

「今回はほんとに冷や冷やしたよ。」

「なあ、この戦いでお前を追い詰めた褒美に一つ頼みごとを聞いてほしいんだが。」

「…願いによる（実際俺の血肉になったのは確かだしな）。いってみろ。」

「俺を、弟子にしてほしい。」

……………マ?

14日目1戦1勝0敗0引き分け

報酬、攻守バランスの取れた弟子。



今生の別れみたいな感じでいなくなつた奴が一章も待たずに会いに来たぴよんけど。

「オラツ、てめえ無駄打ちしてくんじやねえ！隙作つてんだからそこに打ち込めよつ。ふつ！ダメだおせえ、俺は堂円先生みてえに甘くねえぞオラアツ!!」（ゴツ）

師匠になつてからまあ一か月、俺ができることは鬼道教えることと、指導組手だけだ。今側頭部に回し蹴り入れたところ。

こんな一か月指導組手をしていまだにミスをするような志童ではあるが、実はこいつを弟子にとつて俺に利点が二つあつた。

「ちよつ、人体からなつていい音じやないつて！すぐに回道使つて！」

一つ目は当然まつ梨と院内で話すことが多くなつたこと。こいつがまつ梨と一緒にいたのは、俺の情報をもつ梨から聞きためらしかつた。俺が鬼道が得意なんて情報はまつ梨しかしらんよなあ。院内では使つたとしても三十番台詠唱破棄程度だし、だからあの試合は四十番台そくぶつぱで決めようと思つた。『啓活』。

二つ目はこれ、回道を使う回数が増えた。使う回数が多くなるということは練度が高くなるということだ。最近では切られることも殴られることも少なかったためなかなか

回道の練習ができてなかったので願ったりかなかったりだ。つっても使うのはもつぱら『啓活』であり『明癒（めいゆ）』はほとんど使うことはないのだが。

「すみません、師匠。師匠は白打も鬼道もすさまじいですね。前回の模擬戦ではこちらが一方的に仕掛けることができましたが、『鉄縄（てつじょう）』に失敗したらあそこまでうまく試合運びはできなかつたです。入院したての頃は座学など暇なだけだと思っていたのですが、情報とは力なのだと師匠から学ばせていただきました。」

：なんだこいつ。勝手に個人情報抜き取った挙句、成長できたつて美談にすることやむやにしようとしてね？ どんだけ取り繕つても、お前がまつ梨にストーカーまがいのことしかけて俺の個人情報抜き取つていったの忘れてねえからな。まつ梨が止めなかつたら、完全詠唱の七十番台で消し飛ばしてる。

だけど、こいつを弟子にとつてからまつ梨の笑顔が増えた。なんでか聞いてみたところ、ずっと友達がいなくて心配だった俺に友達（？）が一人でもできたのがうれしいらしい。

なんでこうなつたんだろう。まつ梨に心配させまいと、強さを追い求めたはずなのに心配させている矛盾。情けなくて涙が出そうだと俺は思った。

最近の俺の自主練はもっぱら、まつ梨、志童の両者と同時に戦闘を行うこと。ざっくりいうと多対一の戦闘訓練である。ここでは俺も本気を出すため、すべてを持って二人を叩き潰す。まつ梨のこと殴るの辛いなあ。『蒼火墜（そうかつい）』で髪焦がしたときは死にたくなつたつけ。志童は『廃炎（はいえん）』で炭にしても何にも思わない。

「破道の三十一『赤火炮（しやつかほう）』」

なんで、一緒に戦うんじゃないなくて対戦相手になつてるんだらう。俺のラブコメ：（幻想）。とりあえず飛んできた『赤火炮』は反鬼相殺（浦原さんから聞いた）の回し蹴りで両方消し飛ばす。ここでちよつとだけ体勢を崩してみると…。志童君、いらっしやーい（笑）。猪のごとく斬りこんできた志童をサイドステップで躲し、後ろ側に大きく入り込んで入り身投げ、ところで入り身投げは相手に触らず掌をかざしたりして相手を倒すので現在志童は顔面に掌を向けられたまま倒れこもうとしているわけだが、

「破道の三十一『赤火炮』」

顔面火の玉ストレート（物理）。使つてて思ったけどマジで合気道と鬼道の相性が高い。掌を向けるという動作がすべて攻撃に転用できるんだから回避しにくさも相まつて、凶悪性2.5倍。

あとは、まつ梨を縛道の三十『嘴突三閃（しとつさんせん）』で捕まえて、ゲームセツト！

47日目76戦72勝0敗4引き分け（引き分けた原因：まつ梨に破道を放つのをためらったため。）

講評のお時間です。

「志童はすぐ突っ込んでき過ぎ、少し難しいかもしれないけど、隙っていうのは一人一人違うんだ。俺みたいに白打がうまいやつはバランスを崩したように見せるのはすごいまいし、そもそもバランスが崩れにくいし、何なら崩した後のリカバリもうまい。俺みたいなタイプなら、刀を振った後は明確な隙だから、どっちかが刀をはじいた後に、詰め寄るのが正解だ。逆にまつ梨はチャンスに対して消極的過ぎだな。なまじ俺が何でもできるのを知っているせいで踏み出しにくいのはわかるけど極論訓練だからここで勘をつかむために多少なりとも積極的に動いていいと思う。」

二人とも斬術が得意だったり、どっしり構えて攻撃を受けてから反撃をかますタイプだったり似たところはあるんだけど、戦闘中の性格がびっくりするほど違うんだよ。ホントなんでその立ち位置俺じゃないの？兄弟ものにありがちな設定を赤の他人で補うのやめて。

「ということ、二人の欠点を補うための秘密兵器を用意しました！どうぞお入りください!!」

突然の展開についていけず混乱している二人の前に、二人の人（？）が現れる。

一人はまつ梨よりも背丈が短く、髪を後ろにまとめた美人な少女、もといチャップピー。

一人は額すべてを覆うほど太いハチマキをつけ、そこからはみ出すように前髪を出している細マツチヨの教師、もとい堂円攻。

チャップピーはこう見えて俺より容赦がない。やればできるの精神のため死ぬかもしれない可能性をすべて考慮して竹蜻蛉やら山嵐相手のすねを足裏で蹴って投げる柔道の技を加減をつけずに繰り出してくる。志童の突撃癖を治すには先ほどまつ梨に言ったことと逆に、訓練で死ぬ可能性を出してやればいい。

堂円先生はもつとわかりやすい。俺に指導組手をつけた教師であり、実力は上と認識させながら手加減してたことを一切気づかせない。まさに隙のスペシャリストといつても過言ではない（ダサイ）。

「藤丸（師匠）はどうやって鍛錬するの（ですか）？」

今まで一緒に鍛えていたのだから当然聞かれるであろう質問に俺は完璧な回答で答える。

「心配しなくても俺は俺で一人でする鍛錬もあるから大丈夫だよ。」

俺式兵法その2。勝手に深読みして会話できないならう系主人公!! 鍛錬の方法を聞かれたのに、勝手に心配されてると曲解し答えを出さない必殺技である。

これからする鍛錬は鎖結を鍛えるあの鍛錬だ。いくらもう失禁しないとはいえ、「誰もいないところで激痛で痙攣しながら滝のように汗をふきだし、涙と鼻水とよだれで顔をぐちゃぐちゃにします」とは言えない。なにか二人の鍛錬に必要なものがあるなら、涅さんか、浦原さんに作ってもらおうよう頼むつもりだから場所は教えてあるけど。二人には鍛錬場所は教えていない。万が一こつちに来て俺のそんな姿見たらトラウマもんだしな。

「んじゃ、お二人ともよろしくお願いします。」

堂田先生は、任せろ! と強くうなずき、チャツピーは、任されたぴょん! と独特な語尾で二人をドン引きさせていた。

私は、そんなこと望んでなかったのに

私たち兄妹は、西流魂街76地区、風久利（かぎくり）に生まれた。

その治安ははつきり言つて最悪の一手手前だった。窃盗に強姦、数は少ないが殺人まで行われるような場所。

兄は決して外には出るなど忠告していつも外に食料やきれいな水、石鹼、手ぬぐいや毛布、果ては花札などの娯楽用品まで持つてくることもあった。兄はいつも料理をつくり、桶にきれいな水を入れては上等な手ぬぐいで私の体を丁寧に洗つてくれて、自分はそのあとに私の垢が浮いた水とぼろきれで自分を拭くのだ。自分でやるからいいと拒否したこともあったが、兄らしいことは何もしてやれないのだからこれだけはさせてくれと頭を下げられては、私はうなづくほかなかつた。兄らしいことは何か知らなかつたので了承した私であつたが、あれは私の面倒を見るための方便であり、兄らしいどころか親のやるようなことまですべてやってくれたのだと知つた時は申し訳なさで胸がいつぱいだつた。

私は兄が大好きだつた。いつも優しく面倒も見てくれて、勉強を教える教師にも、一緒に遊んでくれる友達にもなつてくれる兄が大好きで大好きでしようがなく、兄と一緒に

にいるときは引つ付き虫のようについて行った。そんな時、ふと私たちの家の周り是他よりも少し治安がいいことに気づいたので、そのことを兄に尋ねた。兄は優しく笑って、「お兄ちゃん頑張ったんだ。いつか俺がいなくても一人でこの辺を歩けるようにしてやるからな。」なんて言う物だから、私は寂しくなつて兄に飛びつき、大泣きしながらずつと一緒だからそんなことしなくてもいいと背中を喚いた。身長はほとんど変わらぬ重かつただろうに兄は悪かつたと言いながら、そのまま私をおぶり家に連れ帰つてくれた。

兄の授業はいつもわかりやすく、私はこの世の道理をすべて兄から教えてもらった。子供は弱い、女は弱い、孤独は弱い、外の世界は危なく、だから私は一人で外に出てはいけないのだと。

しかしやんちゃだった私は、兄のいない世界を見てみたくて、兄がものを持つてくる間に一人で家を出た。四半時しはんときで帰り道が分からなくなり、半時はんときで知らない場所に出て、一時いっときで攫われた。

私が暴れるとそいつは手を上げて、殴らないと私に言ってきた。怖かつたので相手に従つて黙つて震えていると、その男は私の着物をすべてはぎ取つたうえ、太い麻縄で複雑に私の体を固定し始めた。どうやら私を攫つたのは人身売買をしているような奴ではなく、ただの幼女趣味ロリコンだったようで、私を犯すのが目的だったらしく、この後どうさ



れるのかわからない私は恐怖で泣き出してしまった。そいつは私が泣き出すのを見ると顔を見にくくゆがめ笑っていた。恐怖に耐え切れなくなった子供を犯して泣き叫ぶこともできなくなるほど心を壊すのがいいと語ってきた男が私には同じ人間には見えなかった。いよいよ死ぬかもしれないと思ったその時、その男が急にか細い呼吸音を出しながら苦しみ始めた。見ると男の後ろには兄がいて、その手の中にある鋭いガラス片のようなものから赤い水滴が滴っていた。

この先はよく覚えていないが、拘束を解かれた私は兄に抱き着き死ぬほど泣いて疲れて眠った。

兄は私のために人を殺した。そんな後悔の念がじわじわと湧いてきて、罪悪感から逃れたいために兄に謝罪した。自分も奴への怒りはあれど後悔も申し訳なさもないし、奴はきつとあのままでも自分以外のやつに殺されていただろうから私のせいじゃない。

と慰めてくれた。そんな優しい兄を人殺しにしてしまったんだと再認識した。

兄はカッコいい人だ。善人を助け、悪人をくじく正義の味方。

兄は情に厚い人だ。私の家の周りの治安を守っているのは兄に助けられた人たちであり、その人たちは兄を慕い、兄もまたみんなを愛していた。

兄に風久利の話聞かされ、大人も子供も関係なく助け合っている自警団のことを聞いた。私とおんなじくらいの霞かすみという女の子がいてそのことは特に親しくなった。霞はいつも父親が食べ物を持ってきてきたらしいが、ある日藤丸が家に来て父親が死んだことを伝えてくれたらしく、落ち込んでる霞を設立したばかりの自警団へ誘ったのだそう。なので霞は藤丸にもよくなついており、妹である私ともすごく意気投合した。

自警団は藤丸がすべて方針を固めており、時には狩りに出かけ、時には兄の指示のもと、いくつかの店の窃盗を防いだりした。時々ミスがあつて店から商品を盗まれてしまうこともあつたが、それでもいるといたないとは大違いだそうで、たくさん報酬をもらっていた。家によく来るのも自警団の面々であつたが、自警団にももちろんランクがあり、兄が王で、直属の部下が霞、その下に部隊長が6人、そして一部隊は4〜7人で組まれており、それぞれ得意なことが分かれていた。

この役割分担や、部隊ごとにまとめるのもすべて兄が考案したそうで兄は天才なんだと思っていた。

しかし、兄は時々どこに行くのかわからなくなることもあり、それは霞も知らないといつていたので、気になって跡をつけた。

かくれんぼが得意だったからなのか、今までつけられたことがないからなのかはわからないが、驚くほどすんなりと兄の尾行はできた。そこまでの道には全く見覚えがなかったが、兄の目的地は今でもはつきりと覚えている、私が犯されかけた小屋だった。

ここは自警団の管轄外。どんな用事があるのかはわからないが、ここまで来たなら中の会話を聞きたい。そんな軽い気持ちで聞き耳を立てた私が聞いた話はひどくおぞましいものだった。

「藤丸さん。自警団はうまくいつてますか？」

「当たり前だ。これからももう少し規模を拡大して動きたいから適当に人員を補充しようと思ってる。い点、は点、へ点は兄弟しかいない。上を殺せ。ろ点は煙たがられている孤児のガキがいる。サクツと囲んでこちらに来るように洗脳しておけこいつは裏の仕事をさせるから、お前らもばれても問題ない。に点、ほ点はガキが集まっている。適当な奴を指定の刻に襲わせろ、下のやつだけ殺して自警団で助けて取り込む。」

「わかりました。たしか、そろそろ首が回らなくなってるやつらがいるんでそいつらにやらせます。尾崎、いけるな？」

「はい、8ツ（午前2時）に動かしませう。」

「おう、お前らも足付かないように動けよ、組織において最も重要なのは信用だからな。じゃあ解散。」

ばれるなといった本人がつけられて、ばれているのは今考えればひどく滑稽なことではあるが、当時の私にそんな余裕はなかった。

正義の味方の兄が、殺しに加担していた。ちがう。殺しを主導していたんだ。たくさんの大人がいるあの中で最も偉いのは兄だった。

気になる話があった。人員を補充するために殺すといっていた。なぜ？そんな時に兄の話を思い出す。孤独は弱いと言っていた。相手を孤独に追い込んでから助けて仲間にする。つまり自作自演マツチボンブだったのだ。

ある日藤丸が家に来て父親が死んだことを伝えてくれた。

霞は、そう、言っていた。

まさか、それは

兄が殺したのでは、

浮かんだのは疑問形であったがそれは半ば核心に等しく、それはまつ梨の思考を長時間拘束した。

「まつ梨、帰ろうか。」

まつ梨の意識を戻したのは何度も今まで何度も聞いた大好きな、しかし今は一番聞きたくない声だった。

「どうした？立てなくなつた？おぶろうか？また昔みたいに。」

この兄は、まだ騙せると思っているのだろうか。自分が密会をしていた場所の路地裏に、そこに妹がいるのにまだばれてないと思つているのだろうか。ならば、ならば教えてやろう。この能天気な極悪人に、私はすべて知つているぞと。

「につ、兄s

（声が震える。怖くて顔を上げることができない。こんなのが自分の大好きな兄なわけ

がない。これを兄とは呼べない。）

「ふ、じ、丸。

（ああ、神様は何て残酷なのだろう。自分はここでこれに殺されるのか。こんないやな場所にさらに嫌な出来事を重ねて。）

わつ、私、全部聞いたっ。

（言ってしまった。あんなに優秀な藤丸のことだ。きっと私のこともうまく消すのだろう。）

藤丸が、殺すって言った。

（殺されるとわかっていても、言わずにはいられなかった。）

も、戻ったら、い、言う。全部。

（優しいやさしい兄を消し去った人を責めずにいられなかった。）

なんで、霞のお父さんを殺したの？

（なんで、兄さんを殺したの？）

ねえ、なんで何も言わないの！

（なんで、全部嘘って言うてくれないの！）

答えてよ!!!」

「まつ梨、辛かったな、苦しかったな、俺のせいでそんなに辛い思いしたんだよな。よしよーしーだいたいじよーぶ。もう怖くないぞー。」

強く、しかし苦しくないように、兄は私を抱きしめた。

「な、んで。」

思わず口からこぼれた疑問。

「わたしのこと、殺すんでしょ。」

口封じに殺されるんでしょ？そう尋ねた。

「いや、殺さないよ。まつ梨が言いたいならみんなに言えばいいさ。大丈夫だよ。きつと何も変わらない。幸せなあの場所は崩れないよ。」

止めて！優しくしないで！あなたは兄じゃない！私のことを慰めないで！じゃないと！……じゃないと

「き、キライになれない。わ、たし、藤丸のこと、キライになれない。」

ここまで何不自由なく育ててくれた。自分のことを二の次にして必死に尽くしてくれた。たとえどれだけ自分のことを隠しても、それだけは絶対にわかる。いつも私より汚れてて、おなかを鳴らしてて、それでも私が幸せそうなのを見ると顔をほころばせ

て嬉しそうにしてた。

「藤丸、全部はなそ。みんなに、全部はなそう。」

「そうだな。そうするか。もう俺がいなくても霞ならまわせるだろ。」

ああ、兄は自分が死ぬときも常にみんなのことを考えているんだ。やっぱり優しい人だったんだ。そんなふうにした。

私は兄のことも、兄がしたこと全部分かってなかった。

……

……

……



て、分けて大体俺のせいなんだ。」

兄は帰って来るや否や、いきなりみんなを集めてすべて話した。みんなそれを呆然と聞いていた。きつとまだ事態を呑み込めてないんだろう。一人一人の目が潤んでいる。やはり裏切られたことが相当に答えているのだろう。自分たちはどう殺されるんだろうか。虫のいいことではあるが苦痛なく死にたい。

「自警団の全権を霞に譲渡する。霞、全員の意見を集めて俺をどうするか好きにしていぞ。」

「…わかりました。数分ください。まとめてきます。」

神様、どうか、どうかお願いします。みんなを不幸にしないでください。全部全部私が背負いますからどうかみんなは、

「決まりました。藤丸さん。あなたを許します。」

はえ？

「これからは自警団をまとめていたただかなくても大丈夫です。これまで通り、物資のいくらかは融通します。今まで本当にありがとうございました！」

なんで？

「うん。これからもがんばれよ。ちよいちよいまつ梨と顔出すから。」

いみがわからない。

「はい。自警団一同おまちしています！」

「なんで？」

「まつ梨ちゃん？」

「みんなおかしいよ！みんなの周りで殺された人たちは全部兄さんが殺し「まつ梨ちゃん。」た、ん、だ」

「確かに私は父さんを殺された。でもね？私幸せだよ？」

「おかしいよ。家族が殺されて幸せなんて変じゃない。」

「そうだけまつ梨ちゃん。俺なんて前はゴミ箱を明後日飯食ってたつてえのには肉や果物まで食えるんだ。」

「わたしなんて、前はすっごい垢もついてて匂いもひどかったのに、今は毎日体を拭けるし、三日に一回お風呂に入れるんだよ！」

「わたしは、前の家族なんてほんとの家族じゃないと思ってる。今この家にいる自警団みんなが私の家族。」

次々と声上がる。私がおかしいのかな、これがほんとにいいことなのかな。もう、わからないや。

家に着いた私は兄さんに体を洗ってもらって一緒に布団でそこそこの毛布をかぶった。

「藤丸」

「なに？」

「もう、誰かを傷つけちゃだめだよ。」

「わかった。」

一週間後。虚に襲われて傷を負った藤丸は助けてもらった浦原さんに言われた死神を指し始めた。

藤丸自身を傷つけながら。

俺はこの子に何をしてあげられるだろう

先生との組手は藤丸が言ったように隙を見極めるいい機会となった。堂田先生は、藤丸とよく組み手をしていて私の話や征源様、伊花様、浦原さんの話もしたらしい。

藤丸は私が求めたような兄さんじゃないけど、どこまでも私のことを愛してくれた。あの後調べた話だが、風久利の治安は藤丸が暗躍し始めたころからよくなっているらしい。食料と人数の差が多くて食料が分け与えられないのなら、人数を減らしてあとはゴミ掃除でもすれば完璧だと藤丸は言っていた。

私はきつと藤丸のことが理解できない。どうして私を愛してくれるのかもわからない。でもね、私はやっぱり藤丸のことが…

「まつ梨、だいぶ動きがよくなってきたな。もう問題もないんじゃないか。」  
「そうですね。たぶんここぞというときに踏み込めると思いますが。そろそろ藤丸にも見てもらいたいですけど、先生何処にいるか知らされてませんか?」

藤丸はきつと私を心配させるようなことをしているのだろう。ならば止めてあげなきゃいけない。

「うーん。誰もつれてこないように言われてるんだけど、まあ鍛錬の邪魔しないならい





What!?!まつ梨たん!?ナズエミテルンデイス!!ぜつてえべれたくなかったから一人でやってたのになんている…、

おめえか堂円つ!!!気まずそうに顔そらしやがって、俺の信頼を返せてめえこのやろつ!!  
「ふじ、まるっ?」

君には笑つててほしいのになんで俺はこの子を泣かせることしかできないんだ。

「あ、つり」

やつばい、掠れて死にかけみたいな声しか出ない。

「だいじよ」「どけえ!おい、藤丸お前何してるんだ!」

…原作再現するのはいいけどお前ほんつと絶対許さないからな。とりあえず喉治さなきゃ。

『啓活』あくあく、えつと、あれは霊圧を上げる修行で激痛を伴う代わりに霊圧がぐん

と上がるんです。だから全然心配しなくても大丈夫ですよ。もう何回も繰り返した鍛錬なので。この鍛錬行つた後にはしばらくうまく霊力を使うことができないってデメリットはありますが。」

「そ、そうか。」

堂円先生は渋々ながら納得してくれたっぽいな。

「そつか安心した。でもとりあえず浦原さんに見てもらおう?」

全然安心してない顔してるけど、まつ梨と二人でデート久しぶりでうれしいなあ。

「藤丸サン。その鍛錬止めてください。」

「理?」

理由は説明しますから、その宇宙の存在を知つた猫みたいなの顔止めてもらえますか?

君に言われて色々調べた結果、鎖結に何らかの対応をしても魄睡が強力になるなんて事

?????



例はありませんでした。しかし鎖結がうまく動かなくなり最終的に自分の霊力で鎖結が壊れて普通の霊になった事例はありません。」

「なるほど、藤丸の鍛錬は感覚間違えて失敗したら鎖結が破壊されて死神になれないと。」

ほっ。よかった。お叱りはなさそうだ。

「それだけならよかつたんですがね。どちらかといつてこの鍛錬は成功したときのほうが問題です。」

おっと〜？雲行きが怪しくなってきたぞお（汗）。

「先ほどの方なのですが、実は自ら動かさなくても鎖結を動かさない方法はごまんとあつたんですよ。しかしですね、その方法が取られることはありませんでした。それは、鎖結に溜まつた膨大な霊力が体を流れる衝撃で死ぬ可能性が出たからです。」

まつ梨の顔色がどんどん青白くなっていく。

「つまり藤丸さんは霊力系の器官を育てているのではなく、死にかけることを繰り返して霊圧が上がっているだけです。」

俺は生死の境で反復横跳びしてたのか（驚愕）。

衝撃の事実フレーメン反応（のような顔）を起こしていると、背中に柔らかな感触が…ふおおおおおおおおおおまつ梨たん!?急にどうしたの!?

「藤丸。死神目指すの止めよ？私、もう耐えられない。」

（死神になれば、征源様とも、伊花様とも一緒に居られて、おいしいものもいっぱい食べられて、お風呂も娯楽も沢山ある。だから、だからそれが、まつ梨の、）

今までならそれが間違ひなく幸せだといえた。でもこんなにつらそうなまつ梨をみて、俺はそれが分からなくなつた。答えも出ないままずっと月日は流れ、そしてついに、

現世への演習が始まる

## いつまでも君を愛している

あれから一年がたち、飛び級をしたことで俺たちは最高学年になっていた。

あの日からまつ梨とはうまくいかず、志童ともあまりしゃべっていない。学年が上がった時に、あまりの気まずさに涅さんのところに逃げ込んだ死ぬほど嫌そうな顔をしたが浦原に言われたため、助手兼モルモットが増えたと割り切ることにした。ため、こしばらくは征源様と伊花様ともしばらく顔を合わせていない。

「今日は現世に言つて実際に虚と戦つてもらう。貴様らがいくら成績上位者といっても、決して安全ではない。常々油断しないように。」

クラスが変わつてしまったため、もう堂円先生とも組手をしていない。今の担任の名前は、あーなんだっけな。覚えてねえわ。

「藤丸。お前のことだから大丈夫だとは思うが、少し身が入つてないように見える。気をつけろよ。」

「うーす。」

現世の虚程度にやられるほどやわな鍛錬してねえから。余計なお世話にもほどがあるっての。まあサクツと倒して帰ってくるか。

そんなことを思いながら、俺は断界に入っていった。

忘れてたんだ。死ぬ気で特訓して強くなったから大丈夫だって。そう思ってた。けど、先生が言っていたように絶対安全なんてことはなかったんだ。

現世に降りてから俺は真っ先に鬼道を唱える。

「南の心臓 北の瞳 西の指先 東の踵 風持ちて集い 雨払いて散れ 縛道の五十八

『摺趾追雀（かくしついいじやく）』

『摺趾追雀』は素敵用の鬼道だ。なので、全体の虚を探つてすぐに全滅させようと思つていたのだが、

「師匠、虚はどこに、やけに多いな。この数なら皆で手分けして、「俺は北と東を担当する。残りはお前らが手分けして当たれ。」師匠！」

俺は飛び級してから対して周りに合わせようとしなかったのでもいい顔はきれないが、あいつらはちゃんと回りと話をしていたからうまく事に当たれるだろ。おっと、そんなこと考えてる間に虚はっけーん！

「破道の十二『伏火（ふしび）』」

スクリーマーや小虚程度ならこれで一掃できるが、予想通りワイドボーンが残ったので、瞬歩で距離を詰めて刀で仮面を勝ち割ってやる。俺の戦闘スタイルは基本動き回りながら鬼道で広範囲を攻撃して残ったやつを刀や白打で殺すため、足を止めることはない。

「はっ」

斬って、

「破道の三十三『蒼火墜（そうかつい）』」

燃やして、

「竹蜻蛉」

叩きつけて、

北を殲滅し、東を半分潰し終わった時にそれは起こった。

びっ

突如空間が割れるような音が響く。

そこから、まるで黒いぼろ布をまとったような体にとがった鼻を持つ巨大な虚達が姿を現した。

「メツ、大虚だああああああああああ!!」

周りは恐慌状態に陥り、絶望に座り込んでしまう者もいた。

（くっそーなんであんな奴らがいるんだ！とりあえず足手まといを何とかしないと。さーんざん練習したんだから失敗してくれるなよ！）

「黒白の羅<sup>あみ</sup> 二十二の橋梁<sup>きょうりょう</sup> 六十六の冠帯<sup>かんたい</sup> 足跡<sup>そくせき</sup>・遠雷<sup>えんらい</sup>・尖峰<sup>せんぼう</sup>・回地<sup>かいち</sup>・夜伏<sup>やふく</sup>・雲海<sup>うんかん</sup>・蒼い隊列<sup>たいえん</sup> 太田<sup>たいえん</sup>に満ちて天をれ 縛道の七十七『天挺空羅（てんていくうら）』!!」

それは七十番台の鬼道。副隊長クラスが適性があつて初めてできるようなものを、藤丸は成功させた。それは連絡用の鬼道であり、霊圧を補足した複数人に伝達を可能とする。

「こちら藤丸。大虚でが出現したため直ちに帰還し、副隊長以上の死神に救援を要請する。

（覚悟を決めろ宮能藤丸！お前なら不可能じゃない！言え、言うんだ！）

殿は俺が務める！繰り返す、…」

言ってしまった。これでもう後戻りはできない。俺はあの化け物共相手に時間を稼がなくならざるを得なくなつた。なんで、俺はまつ梨でもない奴のために体を張らなくてはいけないんだ。決まっている。まつ梨のためだ。まつ梨が誰も傷ついてほしくな  
 いて言つたから俺がやるんだ。

「今日は、月がきれいだ。」

誰に聞かせるでもなく、俺は最愛の妹を思い眩いた。

残り12体

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」  
 「散在する獣の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の  
 車輪 動けば風 止まれば空 槍打つ音色が虚城に満ちる 破道の六十三『雷吼炮（ら  
 いこうほう）!!」

残り10体

息が切れる。死にそうだ。あの巨体から放たれる攻撃はすべてが致命傷になりえる。だから走り続ける。雑魚を倒していた時とは違う緊張による疲労。当たれば終わりだからというプレッシャーは明確にパフォーマンスを鈍らせ、慣れ親しんだ詠唱をもう何度噛んだかもわからない。

奴らの口元から放たれる虚閃（セロ）なんて街中に被害が出るため絶対に撃たせてはいけない。

「破道の五十八『風（てんらん）』!!」

『風』は大虚に大したダメージは無いが、もしもほかの方法で対応しようとして詠唱を噛んでしまった場合目も当てられないので、詠唱破棄ができて尚且つ大虚の顔をそらせこの鬼道で対処するしかない。

一体の足を白打と斬術で執拗に攻撃する。時々踏みつけようとしてくるため死ぬほど心臓に悪いが、これぐらいなら回避できる。ついにバランスを崩した大虚の背を駆け上がりとどめを刺す。

「凍てつく雛 雨・霧は全て刃となりて 切り裂き 削り 残るは白銀と紅 破道の六十『痕氷牙（こんひょうが）』『痕氷牙』鋭くかたい氷塊を出現させる。使い手のイメージによってある程度形を変えることができる。」



詠唱：凍てつく籬　雨・霧は全て刃となりて　切り裂き　削り  
地面から巨大な氷山が出現し、倒れ伏す大虚の頭に突き刺さる。  
残るは白銀と紅はくぎんくれない！  
残り9体

## 絶望の新入死神篇

もう無理！（半泣き）もう無う理いいいい!!!（ギャン泣き）

はっはっはっ、しっ死ぬ。呼吸が持たない。もう走れない。

「散在する獣の骨」

言葉を紡ぐだけなのに、

「尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪」

舌がやけに重く感じる。

「動けば風 止まれば空 槍打つ音色が虚城に満ちる」

：そんなこと知るかぁ！お前が死ねえ!!（錯乱）（ストレス値上限突破）

「破道の六十三『雷吼炮（らいこうほう）』!!」

残り6体

ヒヤッハー！頭を吹っ飛ばしてやったぜ！大当たりd「ごぼっつ！」

空に打ち上げられた俺の体、俺の体？今飛んでる？アツハハハハハ!!!今ならすらすら

詠唱できそうだ！（混乱）

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 蒼火の壁に双蓮を刻む

大火の淵を遠天にて待つ（超絶早口）

ハローブラザー。調子はどう？俺は絶好調だぜ？そんな大口明けて俺を食おうとしてる兄弟に特大のサプライズプレゼントだ。

「破道の七十三『双連蒼火墜（そうれんそうかつい）』!!」  
残り5体

アハー→なんだい、兄弟、どうしたんだい？顔から上がなくなる問題？無問題モイマンダイ、反対に、お前の仲間が選手交代、俺はそいつにハイサイ沖繩の挨拶！

あつはつはつは！お星さまみたいに飛んでるけどこのままだと地面に激突してお星さまになっちゃうねえ！

「縛道の三十七『吊星（つりぼし）』」

ふう危ない危ない、これで減速：おいちよつと待てお前らなに一齐に虚閃（セロ）撃とうとしてやがる。ああああ！やるしかねえ！

「鉄砂の壁 僧形の塔 灼鉄熒熒しゃくてつげいけい 湛然たんぜんとして終に音無し」

手を組み霊圧を上げ、言霊の一言一言に全身全霊を込める。奴らを止めるために、まつ梨が悲しまないように。

「縛道の七十五『五柱鉄貫（ごちゆうてつかん）』!!」

奴らの頭上に五本の柱が出現し、それが次々と打ち付けて自由を奪っていく。

決まったー！俺の勝ちだあああ!!あとは援軍が来るまで拘束するだけの楽な作業だなあ！

援軍が来た時にはもうぎりぎりです。本当ヤバかった。

拝啓、父様、母様、お元気にしておりますでしょうか？俺は大虚にけとばされたので元気じゃないです。

いやー短い学院生活だったね、ホント。人生何があるかわからないっていうけど大虚  
12体と死闘を繰り広げるとは思わなかった（驚愕）。

そんな俺ですが現在自宅療養（朱司波邸）中です。どうやら全身にダメージが入って  
いたらしく伊花様（ママ）とまつ梨たん（妹）にドロドロに甘やかされながら楽しく暮  
らしています。ちよくちよく征源様が生暖かい目で見えてきて恥ずかしくなります。

あと、伊花様と卯ノ花隊長はお友達だったらしく家に来たときは心底驚いた。でも実  
は今までもちよくちよく来てたらしくいつも昼頃に来るもんだから俺は鍛錬中ではな  
かったらしい。まつ梨は知ってた。

「スウーーーーー、ハアーーーーー」

「藤丸？もう離してほしいんだけど／＼／＼あと布団の中に引きずり込むの止めてくれな  
いっ」

「スウーーーーー!!!」

「ちよつと、伊花様が見てるから／＼／」

「……はむっ」

「ひゃんっ!?!」

おいしい。柔らかくてちよつとコリコリしていつまでも舐めなくなる耳だ。この  
まま全部ひん剥いて全身ぺろぺろ「藤丸君？」

ママからのお叱りを受けたので俺は添い寝で我慢することにした。  
あとまつ梨は伊花様が見てなかったらいいって言質捕ったからな。いつか揉む(断  
言)。

今日は栄えある卒業式です。俺たちは成績がとてつもなく優秀なので、2年で卒業することになった。これは天才志波海燕以来の快挙らしく、俺たちは盛大に祝われながら卒業することになった。そう、俺たち二人は。

志童く〜ん？君座学で落とすとかな〜にやつてるんですかねえ！馬鹿なのかな？あ、そっかあ。馬鹿だから座学で落とされたのかあ。

昔はゴミだと思っていたし、まつ梨にくつついてくる害虫か何かかとも思っていたが、実は俺お前のことなんやかんやで嫌いじゃ、嫌いじゃあ？

（「この醜女！」）

（ぼ〜ぼ〜にして俺がクラスになじめない理由を作った男（自業自得））

（「俺自身には値千金の価値があった。あなたの素も見れたことだしな。」）

うん。嫌いだお前。一生留年してろ。俺の顔面強化外骨格を初めてはぎ取ったのがこれかよ。

「藤丸。明日から死神だね。征源様のところだといいな。」

「そうだね。でも俺はやっぱりまつ梨と一緒にいいよ。（強化外骨格装着済み）」

君と一緒にいたらどこでもいいんだ。だって、君がいるだけで俺は…

「今日から新入りが入ることになった。名を名乗れ。」

なんで？

「今日から二番隊に入隊しました。宮能藤丸と申します。（強化外骨格装着済み）」

どうして？

「わしは四楓院夜一。この二番隊の隊長務めておる。皆も藤丸が早く隊になじめるように、よろしく頼むぞ。」

おかしいよ。だって、え？そんな、嘘だ。嘘嘘嘘嘘嘘嘘！どおしてだよお!!

もう



もう

もう無理！（半泣き）  
もう無う理いいいい！！  
（ギャン泣き）

## 入隊!護廷十三隊

私たちは浦原さんとの約束を守り、死神となった。

「きちやったよ、ついに……」

きつとここに藤丸がいれば、なつちやったね、死神…、なーんて返してくれたのだからうけど残念ながら藤丸はここにはいない。

「おうつよくきたな!新人!」

「ひゃあつ!」

急に後ろから声をかけられて変な声が出てしまった。

「なんだあ、オイ!死神が簡単に背後取られたらダメだろ。」

確かに少し気が抜けていたのかもしれない。もう藤丸に助けてもらえないのだから全部ひとりで何とかしなくちゃ。

「あなたは?」

黒髪の人のよさそうな死神に名前を尋ねてみる。もしかしたら先輩かもしれない。

「志波海燕だ。よろしくなっ!」

「志波先輩、よろしくお願います!」

どこかで聞いたことのある名前だが、いったいどこで聞いたのだろうか、こういう時藤丸がいれば……いけないいけない。もう藤丸に頼るのはやめると決めたんだつてば。

「今日はお前の初出勤だからな。五番隊の先輩として、歓迎するぜ。思いつきり鍛えてやるから気合い入れとけよ！」

「よおし、詰め所に入れ！挨拶はでけえ声で！背筋は伸ばせ！いいな！」

「は、はい！」

詰め所に入ると、あまりの雰囲気思わず息が詰まってしまふ。

「来たか。」

「みなさん、整列してください。」

征源様と三席であろう人の号令で皆一斉に並び始める。

「諸君も知つての通り、本日五番隊に新たな隊員が加わる。前へ。」

「はい!ほつ、本日からやつ!本日から五番隊に努めることになりまひつ、なりました。宮能まつ梨です。みなさんよろしくおねがいしましゅ!」

「いやー、笑わせてもらったぜ!」

「ううっ…」

「まさか挨拶で三回もかむとはなあ!」

「いきなり恥かいちゃいました。どうしよう…」

「いいんじゃないか?隊長以外はみんな笑ってたしよ。」

「そうですかね?そうですかねえ…?」

やっぱり駄目だったんじゃないだろうか。

「入隊おめでとう。歓迎するよ。」

「藍染三席！」

「そんなにかしこまらなくていいよ。席官は隊長と隊員の橋渡し役みたいなものだからね。」

「はい、よろしくお願いします！」

「私からも一つ言っておく。」

「征源様！」

「…正式入隊した以上、私のことは朱司波隊長と呼ぶように。」

「はっ！ 申し訳ありませんでした、朱司波隊長！」

あくどうしよう。今日は失敗してばかりだなあ。

「私からはそれだけだ。あとは志波から学べばいい。」

「はい！」

………

……

…

「さあ、召し上がれ。」

今日一日の勤めを終えた私は、今日もいつものように家族と一緒に伊花様の作ったご飯を食べていた。

「いただきますーす!」

藤丸は今日もそつなくこなしたんだろうな。それに比べて私は失敗ばかりなのに、こんなに豪華なご飯を食べていいのかなあ?というか、

「豪華すぎませんか、これ…?」

鯛やエビなどの豪華なじょくじを見て思わず言葉が口から洩れた。

「卒業より、入隊のほうがおめでたいのでしょうか?」

「そのとおりです。姉上。ところでお前たち、その頭の飾りはどうしたのだ?」

やっと聞いてくれた！実は今朝からずっとこのことを言いたくて言いたくて仕方なかったのだ。

「これはですね〜♪」

「私からの入隊祝いです。」

「ほう、姉上が？」

「似合っているでしょう？」

私のは頭にかぶせるようになっていいる赤の組紐に白い花の装飾品がついているもので、藤丸のは男物の銀の簪に赤い尻尾の装飾品がついたものだ。

「子供ばかりだと思っていたが、見違えるほど凛々しいな。」

「本当は詰め所で教えたかったんですよう！」

「あれ、まだ教えてなかったの？」

「隊長は全ての隊員に平等でなければならぬ。それはまつ梨、お前のためでもある。わかるな？」

「はい！朱司波隊長。」

「今はよしてくれ。私だつて自宅ではくつろぎたい。」

「ふふつ、征源つたら、自分で言っておきなながら、ねえ？」

「あははっ！」

「そういえば征源様、どうして藤丸は五番隊じゃないんですか。」

「ああ、それは二番隊隊長の四楓院夜一殿が藤丸に興味を示してな。二人一緒に五番隊に入れてやりたかったが、成績優秀者ということもありさすがに無理だった。しかし四楓院殿は浦原とも仲が良いため無下にはしないだろうと思ったのだ。藤丸の休みも増やしてまつ梨との時間を取らせたり、ちよくちよく五番隊合同の見回りの任務でも作ってそっちに回してもよいと言っていた。」

食器を運んでいる藤丸の顔がみるみるほころんでいく。多分私との時間がなくならなくてうれしいんだろうな。

「征源様……。」

目を輝かせて藤丸を見ながら征源様は言いにくそうに口を開いた。



「合同見回りの件は飲んだが、藤丸は優秀な男であり向上心の塊であるため、休みに回す分はみっちり鍛えてほしいと言っておいた。」

「征源様ああああああああああああああああああ!!!」

藤丸は膝から崩れ落ちた。合掌。

まつ梨には会えないし目の敵にされるし踏んだり蹴つたりだああああ!!

「碎蜂、今日の修練から藤丸も見るようになった。仲良くしてやってくれ。」

「は、はい！（夜一様からの命令とあらば、この碎蜂、命に代えても遂行して見せます。だがあの藤丸というやつ私と夜一様二人だけの修練の時間を邪魔しおって〜いびりにならない程度に辛い鍛錬をうんぬんかんぬん…）」

とか思ってる顔だなあれ、なんか自分を見てるみたいで面白い反面、顔面強化外骨格がなかったら俺あんな感じなんだと思うとちよつと複雑。夜一様しゆきしゆきオーラ全身からまき散らしてやりにくいな。…まさかだけど俺あんな感じでまつ梨たんしゆきしゆきオーラ出してないよね？（汗）

「おい！藤丸！私は夜一様ほど甘くないぞ！ピシバシしごいてやるから覚悟しろ！」

まだあんまり絡んだことねえから、甘いかどうかとかわかんねえよ。

「なるほど！碎蜂さんは夜一様は少々甘いんじゃないかと不満に思っているということですね！俺はまだ夜一隊長とあまり接触したことがないので、先輩方からの印象はすごく勉強になります！なるほど、夜一様は部下に不満を持たれるほど甘やかしていると、

メモメモ……」

「ちよつ、まっ！いや、今のは言葉の綾というか、あつ、そそその、ちつちがいます夜  
一樣！私は夜一樣に対し決して不満など！」

ふとした瞬間にDV彼氏に浮気がばれそうになつた彼女みたいな弁明するじゃん。  
碎蜂ちゃんむつちやかわいいな、よし！碎蜂、これからの玩具は君に決めた！（二  
チヤア）

「これこれ藤丸。碎蜂をからかうのをやめてやれ、これでは修練が進まんではないか。  
（喜助に無邪気さを足したような奴が来たな、あやつのごとく尻を撫でてきそうだ。ま  
あこの分だと撫でられるのは碎蜂だけ、……ただだよな？さすがに儂の尻は撫でてこんよ  
な？）」

俺は刑軍を見誤っていた。刑軍とは死神の処刑のために動く部隊である。つまり不意打ちとはいえ死神を殺せるだけの力を持たなければならぬ。それに必要なのは何か？一つ、相手に気づかせないように高速で接近する歩法。二つ、相手を一撃で仕留めるための火力、もしくはは技術。俺は決して完璧とは言えないがこの二つに關しては一応及第点だった。しかし現状俺に死神の暗殺は難しいと言わざるを得ない。それが三つ目。

「ふうふうう、つはあああああ、相手についていき、絶好の瞬間を、探るための体力、ですか。（しつ死ぬー）」

「そうじゃ、今のは準備運動にすぎん。むしろに求められる体力は一日中相手に張り付いていても万全に戦える体力じゃ。ゆえにこれを背負ってもらおう。」

「そうして渡されたのは4つの輪つかと服。うそだろ、ただでさえ今の重りで死にかけてなのにか？」

「もう察しているとは思いますがそれをつけて俺と碎蜂についてきてもらう。この森はとても深くてな、一度迷えば運が悪ければ死んでしまうこともあり得る。俺らは止まらんの

でな。死ぬ気で付いてこい。」

森で迷ったらここじゃなくても俺は死ぬる。(確信) まさかこんな早くから襟巻外すことになるなんて、

「それと朱司波と喜助からおぬしは霊力が異常に多いため、膂力や体力を鍛えるなら、その襟巻は外すなど言われている。つけたままで来るのじゃ。」

征源様も浦原さんも余計なことぬかしやがつてええええええええ!!!

私は幼いころから修練を欠かしたことはなかった。しかし、最初にこの鍛錬を行ったときは、情けなくも夜一様についていく事ができず、半分程度で休憩をいただいでし

まった。

「つぶ、つは、つは、つは」

信じられない。初日だぞ?! まだついてこれるのか?! もうとうに半分は切っており、残り四分の三程度の地点まで来ていた。

「ふう、つは、つは、つは」

死にかけて、息も絶え絶えだというのに、この男の目に映る光は今なおまばゆく輝いている。それは生に必死にしがみつこうとする輝き、自分がかたわらないような相手と戦って初めて見える光だ。貴様は今何を見ている!?

「(やばい!置いてかれる!一生森の中で過ごすのはいやだ!まつりたんと会えなくなるのはいやだ!!嫌だああああああ!!!)」

「おぬしはあれを本気にしたのか？」

はえ？

「そんなポンポン森で死なせていたら問題になるだろう。あれは夜一様なりの冗談だ。」  
ぐう、重力が重い。だがただでは死なんぞ！四楓院夜一い！

「ほるひいはあ、ひい、ほんなんえ、おえ、ひつふほ、はっは、はん、たので、ひい、ほはせえ……」

「悪かった。なんて言ってるのかはわからんが何か懇願しているのはわかった。かまわん。最後までついてきたしな。儂にかなえられることならかなえて、「むにゆ」ひっ!？」

俺は尻をもんだ。浦原さあん！俺はやりましたよお！

「お、おまえ！夜一様に何をしている!？」

なるほど、浦原さんの言った通り唐突に尻を狙われるのに対応できないと、もうこうなったら死ぬほど揉んで堪能し「ふんっ！」かつは

「ふん、やはり喜助の弟子か、油断も隙もない奴じゃ。」

「本当に揉んだんですか？あの夜一サンの尻を？」

「どさくさに紛れて揉めたら一人前って言ったの浦原さんじゃないですか。」

「いやあ、撫でれたらとは言いましたが揉めとは言ってないです。しかもそれは、夜一サンの隙を付けたら一人前って意味だったんですけど。というかよく躲されませんでしたね。」

「死に体の体に鞭打って、油断してる夜一様のところまで這って行ってから、あくまで起き上がる動作に見せかけて、全身の筋肉で流れる様にもみにいきました。伊達に普段からまつ梨のこと撫でまわしてないです。」



まあまつ梨は抵抗しないけど。

「しっかし四大貴族であり刑軍軍団長の尻を揉むなんて、殺されませんか?」

「まあたぶん大丈夫だと思えますよ。要求を呑むって言葉とつてからやりましたし。今度は碎蜂ちゃんでも撫でまわしてやりましょうかね。」

「エロおやじみたいになつてますよ藤丸サン。しっかし私が言ったなんてばれたら怖いなく。」

「アツハハハハハハ!!」

ありがとう大虚。お前のおかげで俺は言霊の神髄に触れた。

今日実は十三番隊の浮竹隊長にあつてきたんだよ。

今日は隊舎に來客が来るから、藍染三席に言われて、その準備をしたの。

「朱司波から兄弟仲が良いと聞いている。」

「隊長がそう言っていましたか？」

「ああ、あの姉思いの朱司波が仲が良いというのだから、これは相当なことだぞ？」

「確かに、そうですね……」

「二人そろつているときにも会つてみたいものだ。そつくりなんだろう？」

「性格は違うと思いますよ。」

「そうなのか？ いや、珍しがると思いが、双子の死神なんてなかなかいないからな。暇があつたら、十三番隊の詰め所に二人でよつてくれよ。」

「いいんですか？」

「俺は余り出歩けない身なんでね。いつでも歓迎するよ。」

「ありがとうございます。」

「では、そろそろいくよ。また会おう。」

「見送りは僕が行こう。君は仕事に戻りたまえ。」

なんてことがあつてね。気さくな方だったわ。あとはいつもと一緒。ねえ藤丸、今日は藤丸はどんな日だったの？なんで帰ってきてから、

私にくつついてずっとおびえてるの？（困惑）

今日は久々の休みでまつ梨も仕事だったから、朱司波家で本でも読もうと思つてたんだ。そしたら、

「そんなにすすめると、いただいてしまいますよ？」

「いくら卯ノ花さんでもあげられません」

って声が聞こえてきて、卯ノ花隊長が来ているのだったら一言挨拶しようと思って声をかけたんだ。

「あら、藤丸君。今日は非番？」

「はい。来客中失礼します。四番隊卯ノ花隊長が来ていると耳に入ったので一言挨拶を詩に来ました。」

「はじめまして、もう知っていると思いますが、卯ノ花烈と申します。」

「私のお友達なの。」

「この子が例の子ね。最近統学院を卒業したばかりでしたね？緊張しなくてもいいのですよ。今はお茶を楽しんでいるところですから。」

「そうだわ、せっかくだからあなたもお茶していきなさいな。」

でもさ、卯ノ花隊長はきつと貴重なお休みでここにきてるし、そんなに会えないかもしれないから迷惑だと思って断ったんだよ。

「しかし、貴重なお休みにお邪魔をするのは…」

「いいじゃない、時間はあるのでしょうか？」

「遠慮はいりませんよ。」

「ですが…」

そしたら二人とも微笑んでこう言ったんだ。

「お座りなさい。」

二人とも全然目が笑ってなくて、特に卯ノ花隊長からは殺気も当てられたんだ。俺仮にも刑軍に所属してるのに冷や汗も止まらないし、しゃべっているとときも怖くてお茶の味もわからなかったんだ。

「なるほど。で、怖かったから伊花様に甘えたいけど、その肝心の伊花様が今回の一端からこつちに來たと。」

「…うん。」

でも、卯ノ花隊長って四番隊だから医療の専門家だよ、殺気なんて出せるのかなあ。

「(あの子、あの量の殺気にあてられても全然ひるみませんでしたね。しかも回道まで使えるなんて、こつちに引き抜いてしまおうかしら。なんて。)」

……

……

…

「今日は少々特殊な任務でな、十三番隊隊長の浮竹殿が体調を崩し、見回りを代わってほしいと頼まれていてな。二番隊と合同の見回りで我が隊からも人員を回すことになっているのだが…」

「隊長！志波海燕、十三番隊の代理に立候補します！」

「いいだろう。他にいるか？」

「朱司波隊長！宮能まつ梨、同じく十三番隊の代理に立候補します！」

「いい心がけだ。では二人とも、よろしく頼む。」

「まつ梨！いつしよに行けるのか！」

久々のまつりたんとのお出かけ楽しみなあ☒

「うん。海燕先輩、兄の藤丸です。」

「初めまして、宮能藤丸です。妹がいつもお世話になっております。海燕先輩のお噂はかねがね。」

「おう、よろしくな！確かに死神では先輩だが、隊は別だからそんなにかしこまらなくてももいいんだぜ。」

「それはありがたいです。早速ですが、北流魂街64地区。この辺が俺たちの見回る地区です。」

「64地区、治安はそこそこつてところかな、そんなに問題は起こらなそうですけど。」  
「だからって油断するなよ。虚も出るし、あぶねえ住民が暴れることもあるからな。お

「前たちにはちよつと厳しいか？」

「いえ、私はともかく兄は

(ぞぞつ)

「おつと、言ってるそばからお出ましのようだぜ！」

「藤丸。どのくらい!？」

「ぜんぜんまだ先。走るよ。」

まあ雑魚ばっかだし、さくつとかたはずけよう。

「いたぞー！」



「知能が低い奴ばっかですな。」

「だな、藤丸の実力もみたいし二人で行って来い！危なくなったら助けてやるからな。」  
「りよーかい。まつりは前のほう任せた。」

「…まあ藤丸がいれば大丈夫か。」

はい、よーいどん。

「ちよつまじかあいつつ!?虚の中に突っ込んでいきやがった!」

斬魄刀で1, 2, はい3体。おっとマッドフロッグこつちくん。

「破道の四『白雷(びやくらい)』」

はいストップ。タイムは15秒34。…まあまあだな。まつりの方も大丈夫そうだな。あ、『赤火砲(しゃつかほう)』で吹き飛ばしてる。オーバークイルだろあれ。

「片付いたか。ってかお前らほんとに新人かあ?特に藤丸。瞬歩の出来がすさまじいな。」

そりやあまあねえ。こちとら夜一様に鍛えてもらってますから。

「こんなんでも一応刑軍ですの。」

「まあそうか。死神を処刑するような連中に混ざってるんだもん。…なんでそんな奴が見回りしてるの?」

まつ梨と一緒にいたいからです。とは、言うわけにもいかないな。ん?

「ちよいと失礼。」

「はあ!」「ちよつと藤丸!」

瞬歩を使つてその場から身を隠すように消える。

「そこまでだ、死神!」

「なに?」

やつはまだ残つてたか。ある程度知性があるつぽいし…あれ、あいつ見覚えある気がする。  
する。

「おつと、動くでないぞ?これが見えるのならな。」

奴がつかんでいたのは、ぼろ布を身にまとつたきれいな金色の短髪美少女だった。…

あの子もどつかで見たことある気がするんだよな。

「ちよつと!放しなさいよ!」

「ええい、うるさい!」

バシツ、

「いったあーい!人質の美少女を殴る?ありえない!」

いや、ありえない!のはお前だろ。いま君の命そいつが握ってるんだぞ?なんでそんな能天気に関すること美少女とか言つてられんの?

「黙れ。」

なんて緊張感のないピンチなんだ。

「なるほど、あいつが隠れたのはそういう……あの虚、今日の運勢最悪っぽいな。」

そつすね。じゃあさくつと人質パクって「ん？この魂魄は!?覚えがあるぞ?」お?

「あ、あいつは!!」

え、まつ梨たん知り合い?

「ウクク……こんなところで巡り合うとはのう?おい、この小娘とその娘の死神を交換せんか?」はい殺す。

「雷鳴の馬車 糸車の間隙 光もて此を六に別つ」

お前ぜえつたい簡単には殺さんわ。

「縛道の六十一『六杖光牢(りくじょうこうろう)』」

「ぬう!これは!」

「俺はお前が誰かも知らんけど、お前の目的がまつ梨の時点でぶっころ確定なんだわ。」

少女を瞬歩で攫つて二人に預けた後俺はこいつを絶望させるためにあえて語る。

「兄の方もいたか!これは運がいい!」

は?

「藤丸。あいつは昔、私たちを襲った虚だよ。覚えてないの?」

覚えてない。

「まつ梨、あいつ大丈夫か？覚えてないって顔してるが。」

「今すぐこれを解いて妹ともども喰らうてくれるわ！」

「いいや、面倒だ。殺すか。」

「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ

言葉は重く、唱は軽く、

「ちよつと藤丸!?!やりすぎだよ!?!」

蒼火の壁に双蓮を刻む

心を紡ぐように。

「お兄さん歌うまーい！あれ何の歌？」

大火の淵を遠天にて待つ

「まつ待て！……ここで儂を殺せばアルトウ口様が黙ってないぞ!!」

「藤丸！せめて流魂街に被害が出ないようにやれよ!!」

それはもち、虚の目の前でしやがみ、両の手首を合わせ掌を相手に見せる。かくめくはくめく

「アルトウロ様は破アランカレ面で

破く

「破道の七十三『双連蒼火墜（そうれんそうかつい）!!』」

ドンッ！

た。大気をふるわせるほどの轟音があたりに響き、蒼き閃光はそいつの上半身を消し去った。

## バブみ（ファザミ）を感じておぎやる

「志波海燕、宮能まつ梨、兩名無事に帰還しました。」

五番隊隊舎には朱司波隊長と藍染三席、浮竹隊長がまつっていた。

「うむ。ご苦労だった。」

「志波、まつ梨も変わってもらってすまなかったな。助かった。」

「私たちの名前、憶えていてくださったんですか？」

「もちろんさ。それに、今回の一件でさらに、忘れられなくなったな。」

「ありがとうございます。」

「もちろん、兄の方にも感謝を伝えねばな。」

……

……

……

「つてことがあります。」

「まあ、浮竹さんからほめていただいたの？」

「はい！」

「…俺褒められてない。」

…かわいそう。

「初仕事には思えないほどよくやったと、志波も評価していただぞ。」

「…碎蜂ちゃんから派手過ぎだつてぼろくそに怒られたのに。」

…藤丸が一番働いていたのに、

「藤丸君、辛かったら私の胸に飛び込んできてもいいのよ？」

「ご飯食べ終わつたら飛び込みます。」

「まったく。藤丸は優秀なのはいいことだが、精神的に幼稚な部分はどうにかならないのか？」

「どうでしょう。藤丸は流魂街ではいつも取り仕切る側で、人に甘えた経験がなかったですし、集まりも大きくて大人とかもいたので舐められないように常に肩ひじ張つていた分、伊花様に甘え方を教えてもらつたときに癖がついたのかもしれない。たまに私にも甘えてきます。」

「いいじゃない、まだ子供なのだから、甘えられるときにいっぱい甘えればいいの。藤丸は浦原さんのところで鍛えてたから、最初は全然甘えてこなかったし。」

「（藤丸の性癖がこれで歪んでしまったらどうすればいいんだろうか。）」

「二人が考えてることはなんとなくわかるけど、たぶん大丈夫よ。征源、腕を広げて？」  
「むっ、こ、こうですか。」

あ、なんかすごい征源様のことちらちら見てる。なるほど、大丈夫ってそういうことか。

「犬みたいだな。…藤丸、来ていいぞ。」

「わーい!!」

言われてみればもう犬にしか見え、いやあれ大丈夫？ 幼児退行起こしてない？

「藤丸君はたぶん、信頼できる人に甘えたいだけなのよ。」

今更だけど、私はあれにおびえてたの？ もしかして兄さんもずっと無理しながら私のために…。ダメダメ！ 思考がどんどん暗くなっていく。考えるの止めよう。



「ねえ…兄さんはどう思う?」

え、急に何の話?俺、食後は伊花様と征源様堪能して何にも聞いてなかったから。

「わからない?マッドイーターのこと。」

「誰だそいつ。」

「あつーご、ごめん。あいつが名乗った時、藤丸意識がもうろうとしてたから。あの虚のことだよ。」

ああ、あれか

「藤丸が倒してくれたけど、私じゃまだかなわなくなつて。」

うーん。あいつには感謝はあれど憎むなんてなかったからな（感謝も何も忘れていた男）。

「正直どうでもいいんじゃない?もう死んだし。いつまでもあいつに囚われてるのは勿体ないさ。」

「…そっか。」

そうそう。だからもう俺の布団に入って、何もかも忘れて一緒に寝るべきだよ。

「藤丸君、朝ですよ。」

「んー…ねむい。」

朝が辛い。

「もう少し寝る?」

「うん…あと少しだけ。」

この体、大きくなるにつれて朝に弱くなつていったな。低血圧なのかな?

「こら、藤丸もう起きて! 遅刻しちゃうよ?」

「ま、まだ眠い。」

も、もう少しだけ寝かせて。

「もう少し寝かせてあげても間に合うのでしょうか?」

「あんまり甘やかしてばっかりいると藤丸がダメになつちやいますから。伊花様も藤丸に時間を使うくらいならもつと有意義に朝の時間を、」

「大丈夫ですよ。わたくしなら、もう洗濯も掃除も朝食の準備も終わってますよ？（藤丸君を取られるのがそんなに心配なのかしら？）」

「う…それは、そうなんですけど。（あたしが起きた時点で家事は全部終わってるのよね…毎日、伊花様って、何時に起きてるのかしら。）」

「ちゃんと遅刻しない時間に起こしてあげますから、もう少しお眠りなさい。」

「ありがと…伊花様。おやすみ…zzzz」

「いい寝顔…見ているとなごんでしまうわ。ねえ。」

「まあ、そうですね。（いつも鍛錬じゃなくてこんなふうに寝てれば心配ないのに。）」

「はい、これお弁当。まつ梨ちゃん、征源の分もお願いね。」

「いつも思いますけど、豪華ですね。」

「ありがとう、伊花様」

「隊長のお弁当ですもの。もちろん二人の分も中身は同じですよ。」

「このお弁当おいしいし、食べてるとすごく愛情を感じるんだよな。」

「独身の先輩方に申し訳ないような。」

「まあ気にしても仕方ないよ。それじゃいつてきまーす。」

「そうね、それじゃ伊花様、わたしもいつてきます。」

「いつてらっしゃい。」

ああ、幸せだ。

「おはようございませう。」

「おい、返事を伸ばすな！日頃の行いがたるんでるから貴様はいつも腑抜けよ」

「おはよう碎蜂ちゃん。今日も元気だね。」

「~~~~~!!!いったい誰のせいだよ!」

しかし、今日はやけに騒がしいな。なんかあったのか？

「ふむ、皆そろったか。大前田、説明を。」

そういわれて出てきたのは二番隊副隊長大前田 希<sup>まれのしん</sup>ノ進。この人まじですごいんだ

よ!!縛道の八十一『断空(だんくう)』を詠唱破棄で平然と扱う上に、「疑似重唱」っていう六回分の詠唱と同じ効果を発動させる技術とかもあって今の俺じゃ指一本どころか、塵一つつける事すらできないんだ。

「最近、流魂街に虚が出現する回数が多くなっていて、さらにこの前流魂街で見られたように、虚の集団化が目立つようになってきた。そこで、各隊の報告をもとに早朝の会議で議論された結果、流魂街の見回り強化と虚の集団化について調査することとなった。そこでいくつかの班を組み、俺たちも見回りを強める。」

ほーん、俺は誰と組めばいいのか、

「宮能、お前は五番隊派遣だ。前回の一件である二人と組ませたほうがいいということ

になった。（夜一様がどうせ裏で何かされたのだろうがな。玩具にされて気の毒に。）

「はい！わかりました！二番隊の名を汚さないようにこの宮能、精いっぱい頑張ってください！（うっひょー！夜一様ありがとう！）」

「おう、お前だけ五番隊に混ざることになって大変だとは思いますが、頑張れよ。（なんて真面目でいいやつなんだ）」

「では、いつてきます！」（↑自分の上司の尻を揉み、先輩のことを玩具にしている男）

「ということの前回の面子ってわけです。」

「なるほどなあ！優秀な奴を集めて人員削減ってわけか。ま、今日はだいぶ楽しだな。」

「西流魂街1地区・潤林安じゅんりんあん 治安、良いですもんね。」

「おーい、シロちゃん。どこいったのー？シロちゃん。」

お、飼い犬でもいなくなつたか？

「ねえ、あなた。何かあつたの？困つてるみたいだけど。」

「あつ死神様！すみません、実は……」

おさげの女の子の話によると、朝から「シロちゃん」の姿が見えないらしい。白毛で、小さくて、目が大きくて、ちよつと怖いけど、いい子。

なんかさあ、この女の子もすごい見たことあるような気がするし、その「シロちゃん」も勘違いでなければ人間な気がするんだ。これ厄ねたか何か？シロちゃんなんて呼んで探した日にや絶対出てこないよそいつ。

「（首突つ込みたくねえけどまつ梨の前で見捨てるなんてできねえ）わかつた、俺たちも探してみるよ。」

「ありがとうございます。私、雛森桃つていいいます。」

ハイ確定ですおつかれさまでした。

「まつ梨、手分けして探そうか。」

シロちゃんコールはできないからな。

「そうね、何があるかわからないから、藤丸も気を付けてね。」

そうと決まればやることは一つ。馬鹿と煙とついでに俺は高いところが好き〜つと、さてさて、どーこっかな。白髪に大きいお目のチビ、いたいた。目立つなーあいつ。

「ちよつと、その男の子。話聞いてもいいかな。」

「ん…死神が何の用だ。」

すげえ口悪いじゃん。まあいいや。迷子のペット探しなんて早く終わらせてしまおう。

「雛森桃ちゃんが探してたよ？ いっしょにいこう？」

迷子のやつに話しかけるのってこんなんでもいいのか？ いつも迷子は作ってから台本通りに進めてたからわかんねえ（ナチュラルサイコパス）。

「あーわかった。すぐに戻る。どっちだ？」

「いや、俺の瞬歩で送ってくよ。」

「は？ おいまで止める！ なんでその抱え方なんだ！ おい聞いてんのかああああああああああ！！」



「いないねえ、シロちゃん。」

「やっぱいいない。私もう少し探してきます。」

うん。ナイスタイミングだったな。

「どこ行く気だ、おバカ桃。」

「シロちゃん！死神さんも！なんでお姫様抱っこ？」

「しらん。こいつに拉致られたんだ。ていうか早く下ろせ。」

「えーっ！これがシロちゃん!？」

そっか、まつ梨だけしらないのか。

「犬か猫かと思ってただろ、マジで…」

そりゃあんなふうを探されてるんだから、初見じゃわかんねえだろ。

「どこにいったの？探したんだよ？」

「外でシロちゃんシロちゃんなんて連呼されて、出ていくわけねえだろ。」

それはそうね。

「だつてえ」

「そんなに責めることないじゃない。桃ちゃんはシロ「日番谷冬獅郎だ！」う…その、冬獅郎君を心配して、朝から探してたのよ！

「ふーん。朝からねえ？」

おっと、雰囲気が怪しいぞ？なんでわかるかって？俺はこういうのに詳しいんだ。  
（結構な頻度でやらかすため）

「昼ちよつと前まで爆睡してたくせに。」

は？

「ち、ちよつと寝坊しただけだもん！」

「朝六時に卵を取りに行く約束だったよな？」

「「えー……？」」

「ち、ちよつと忘れてただけだもん。」

「で、まだ文句ある？」

「アリマセン。」

「はは……」

乾いたわらいしか出ねえや。冬獅郎君被害者じゃん。

「ふーん。で、また遊びに行く約束をしてきたのか。」

「シロちゃん呼ばわりしたお詫びに、おいしいものを食べさせろって。」

「おめー、料理得意なのか？」

そう、そこなのだ。朱司波家の家事はすべて伊花様が担当しており俺たちが手伝おうとしても譲ってくれたことはない。つまり、

「まあ、お察しくださいということだ……」

「なによー！そんなこと、ないわよう！」

今の発言でたぶん全部ばれたけどな。うちの天女の唯一の弱点。

「まあいい、今日のところは引き上げだ。」

「はい、異常なしですね。」

ああ、今日も平和で飯がうまい。

## フラグメイカー!!

「そうだな、今日の見回りはここで二手に分かれるか。俺は東半分を回る。お前らは西半分な。」

「りよーかい。」「はい。」

「じゃ、後でな!」

海燕先輩見回りの時いつもうきうきしてんな。

「流魂街でもこの辺りはやや治安の悪い地域ね。」

「東流魂街62地区・花枯かがらし まあでも俺たちの住んでたところも似たようなもんじゃない。子供が道で行き倒れになってたりとか。」

悪い大人を歩き倒れにさせたりとか。

「そうね、あんなふうに……って、ちよつと!」

銀髪の少年が行き倒れていた。いやいやまさかそんな、まだワンナウト。スリーアウトまではあと2回もアウトを取られなくちゃならないんだよ? (1敗)

「君！ねえ、大丈夫？」

「は…た…」

「なに？なんて言ったの？」

腹減った。だろうな。

「俺のでよければ、弁当食うか？」

「おおきに、せやけど、食べられへんわ。」

さて、ツアアウトにはまだ早い。ちよつと、そう、ほんのちよつと湯豆腐がおいしそ  
うなところの訛りをしているだけだ。

「どうして？」

「待つとるんですわ…もつと、腹すかして…」

ツアアウト！（2敗）ヤバいです。ヤバすぎたかもしれません。もううすうす感じて  
るけど俺はまだ現実を直視しない！（得意技）

「これ、いただいときます。おおきに…。」

ここで見捨ててるの後味悪いなあ。しようがない。

「まつ梨、ついて行ってもいいかな？」

「そうね、心配だし、行きましよう。」

「生きとるか、乱菊?」

トウーポインツナインティーンアウト! (2. 99) 俺はまだ認めない! 嫌だつて冬獅郎いたもん! 結構歳離れてるはずじゃん! 確かに魂魄の年齢なんてわかりにくいけどさあ! なんかこの前マツドイーターさんが破面<sup>アランカル</sup>って言った時点でおかしくね? ってなったけどさあ!!

「あんたが手ぶらだったら死ぬわ…多分。」

「今度もぎりぎりやったなあ。ほら、弁当や。」

「嘘っ! 弁当がこんなすごい箱に入ってるわけないじゃん!」

「ほんまや。なあ、外から覗いてはる死神はん?」

うっそ! ばれた!?! まじで!?!

「あ、ばれてた?」

「お兄はんがいるのはわかりまへんかったけど、お姉はんがいるのはわかりました。」

まつ梨だつて真央霊術院2年で卒業してるんだぞ?! 1年で卒業するだけあ…まだ! まだわかりませんよ!

「あれ? お姉さんたちどこかであつた?」

「あ!」

金髪の乱菊、銀髪の京都弁糸目。スリーアウト! サブから重要キャラにクラスチェンジ!

「うんまーい!!」

「よう味わつて食べな、もつたいないで?」

「いいの! うはー、うまーい!」

「それにしても、あの時の人質だつたことこんな形で再開するとは。」

ほんそれ。そしてこんな短期間に重要キャストと二組も合うとは。アウト！（激うまギヤグ）…何言ってるんだろ俺。疲れてんのかな。

「ねえ、またこれ食べたい！持ってきて！」

「乱菊、無理ゆうたらあかんわ。」

性格悪いギン君しか知らないから、常識発言にびつくりだよ。

「いいじゃん！この人たちは毎日食べてんだし。それにお兄さん、さつきうちの中覗いてたよね？」

あ？

「ああ、まあ…」

「立派な死神さんがのぞきをするなんていけないんじゃない？」

「ばんなそかな!?命を助けて、弁当を上げた相手に脅迫からの弁当強奪コンボくらおうとしてる?」

「ちよつと!」

「やーね、冗談よ!あたしが恩を仇で返す女に見える?」

お前は将来日番谷に仕事を押し付けて処理してもらい、その様子を見てさらに仕事を押し付けるような女だ。ついでに絡み酒でアルハラを強要する。何が言いたいかつて?つまり恩を仇で返す様な女に見える。



「みえないことにしとく、一応。」

「うわ、むっちゃ疑ってる。」

まつ梨は優しいな。俺は確信してるよ。

「腹減って死にそうなのは、シャレやないんやけどな。」

「そうなのよ。お願い！あと一回だけお弁と食べさせて！」

それ言われると、もと同じ境遇としてちよつと弱いなあ。

「困ってるぐらいだし、それくらいはいいけど…」

「ホント！それなら私たち、今日から友達ね！私は松本乱菊。こっちは市丸ギン。よろ

しくねー！」

「はあ、うん…はい…」

「よろしく、ギン君。乱菊ちゃん。（今からギン君に種でも巻いておくか？）」

「ほな、よろしゅう。」

「と、いうことがありますて…」

今更だけど今世の知り合いって部下と親代わりに教師と弟子、職場の上司と同僚だったから、何気に初友達だ。年甲斐もなくウキウキするなあ。

「ふーん、腹が減って死にそうな子供か。」

「ちよつと、昔住んでいたところを思い出しますね。」

「(ああいう所に行くとは暗躍したくなるんだよな。) そうだねえ。」

……

……

……

…

「この辺りはごちゃごちゃしてるな。」

「南流魂街78地区・戌吊いぬづり 治安悪そうですね。」

「過去に虚が出たという記録はないみたいだが、ん…!？」

「(素敵速度で負けた!?) なんかありました?」

「わかり、便所言ってくる。」

「はあ、いってらっしゃい。(よかったー自信なくすところだった。)」

「このへんにあるのかしら…?」

「ない、だろうなあ。」

海燕先輩大丈夫か？

うすうすそんな気はしてた。

「急げ恋次！」

俺は綺麗な黒髪の目の大きな女の子なんて見てないんだ。あれは幻だ。

「だめだ、これ以上速く走ったら水がこぼれちゃう！」

俺は赤毛のガキなんて見てないんだ。あれは赤いパイナップルだ。きつと地面をお結びのごとく転がってしまったんだ。

「まてー！水泥棒!!誰か捕まえてくれー！」

おっさんは見たわ。

「やべえ、追いつかれる！」

「恋次!その人に壺を渡せ！」

おいパイナップルこれ以上フラグは立てたくねえんだからこつちくんな!

「ちっ!しゃあねえ。ほらよ！」

「うおつと！」

しゃあねえじゃねえんだわ。誰かのものなら、落とすわけにもいかねえしよお。

「くつそく、逃げ足の速い泥棒小僧め！」

「どろぼうっ！」

そんなに貧困してるんか、ほんとにしゃあねえな。

「おお、死神様、取り返していただきありがとうございます。」  
「あの、これ、いくらですか？」

「危なかった。」

「ああ、ヤバかったぜ。」

「しくじっちゃったわね。」

「ああ、そうだな…って…げえっ!？」

「逃げろ！」

逃がさんぞー手間取らせやがって。後ろに立ちふさがって道をふさいでやる。

「まあ待ちなよ。」

「うっ…あの。ごめんなさい！」

「もう何日も水を飲んでないやつらがいるんだ！頼む、見逃してくれ！」  
そんなことじゃないかと思つたよ。

「事情は大体わかるの。私たちも似たようなところで育つたから。だからこの水の価値もよくわかつてる。」

まつりが壺を差し出す。天女に水瓶、なんていい絵になるんだ。

「それは、「さっきの…」

「はい、どうぞ。確かに届けたからね。これは君たちのものよ。」

「いいのか？」

「ありがとうございます。御恩は絶対に忘れません。」

素晴らしい話だ。感動で涙出そうだ。

「なまえ、きいてもいいかな？」

涙は一瞬で引つ込んだ。まつりたん？どぼちで？

「私は、この先の川岸に住んでいる、ルキアといいます。」

「俺は恋次。ありがとな、兄ちゃん、姉ちゃん！」

ハイマジ許さん。お前らこれでガキどもが死んだらどうなるかわかつてんだろうな。

「小さい子たちをしつかり世話してあげるんだよ？」

「はい！」「おう！」

「遅くなってわりい！便所がどこにもなくてな。」

だろうと思つたよ。

「先輩が遅かつたおかげで、ひと騒動あつたんですよ？」

「すまん！あとでおごる！だからひとまず、見回りを終わらせようぜ。」

はあ、まあいいか。まつ梨が幸せならそれが一番いいんだ。

お前誰じゃああああ!!!

「見回りにも慣れてきたので、今日は最も危険なところへ行きませんか？」

まつ梨たん!?

「心意気は悪くねえが、大丈夫かよ？」

「先輩が行きたくないなら辞めますけど。」

…俺は？

「いうじゃねえかオイ!じゃあ行くぞ!藤丸もいいんだな？」

「いや俺は「藤丸!」ん？」

「私、行ってみたいな?だめ?」(上目遣い)

アババババババババババ

「宮能藤丸。慎んでいかせていただきます!」

あんなに上手に甘えられて誰が断ることができようか。



「今日は一瞬も気を抜くな。絶対に俺から離れるなよ！」

知ってた。でもかわいかったんだ。俺がここに来るのは必然だったんだ。

「南流魂街80地区・更木さらぎ。流魂街最悪と言われるところですね…。」

もうわかってんだよ。どうせ来るんだろ？

「虚もよく出現するが、それ以上に…」

「……」

こつち見てくんな。怖えよ。どうせここならお前が来ると思った。なあ、更木剣八。

「！」

まつ梨も気づいたか、ほら、俺の後ろにいな。

「へえ、おまえ、対して強くねえくせになんで今そいつを背中に隠したんだ？」

なんで俺みたいな雑魚に声かけてくんだよお!!あと理由はお前の圧のせい!!

「たとえどれだけ弱くとも、お兄ちゃんだからな。」

「…そうか、抜けよ。」

あ？なんで？

「まって、お前強い奴と戦いたいんだよな？俺そんな強くないんだけど。」

「守るやつがいると強いと聞いた。斬りたくなつたんだよ。」

誰だよそんなきれいごとこいつの前でぬかした奴はよおおお!!!魂魄えぐるようなおぞましい殺気だしやがって、こいつとんだだけ重たくて鋭い霊圧してやがる。立つてるだけでもやつとだよ。とりあえず襟巻は外さんと勝てん（外しても勝てん）。

「まつ梨、これ持つてて。」

「藤丸!？」

「おい馬鹿止めろ！死ぬぞ！」

俺だってやめてえよお！でも立ったフラグは何とかしたほうがいいし、こいつ別に敵のここと殺さねえからさあ！

霊圧を込めろ！全身全霊だ！負けてもいい！ただ、今ここで、引かないことが俺がまつ梨を最強からも守り通せる自信になる！

「おおおおおおお」

俺は決意を込めて斬りかかり！



「また戦おうぜ。」

そういつて更木は去っていった。もう絶対戦わないです。

「はあ、注意しようと思つたタイミングで始めるんだもんな。『啓活』」

海燕先輩回道使えたん d 「あ、そういや聞きたいことがあるんだが、  
なんで帰ってくるのお？」

「その襟巻なんだ？外した瞬間お前強くなったよな？」

なるほど、史実より早く知つたりミッター装置に興味を示したのか。

「わかりやすく言うなら弱くなる道具です。俺用なんでそちらがどれくらい弱くなるかは微々たるものですけど。いりますか？」

「へえ、いいものだな。じゃあな。」

「そうだよ今度こそはよ行け。」

「な、なんだつたの？今の。」

「ああいうのは下手な虚よりもずっとつええ、今見たようにな。」

ズズツ

「あー次は虚か、なんて割に合わない見回りだ。」

俺の言葉を皮切りに、俺たちは走り出した。

なおこんなヤバいところを責めてくるくせに雑魚だった虚は瞬殺した。  
「終わりましたね。」

「だな。」

なんとど話していたのだが、姿をひそめていたスクリーマーがまつ梨をうしろから襲い掛かった。

「間に合わねえ！」

確かに海燕先輩は間に合わない、だがしかし俺に隙は無いぜ！

「破道の四『白ら』

俺が『白雷』を打つ前にスクリーマーは殺された。殺したのは一人の刑軍の少女。

「碎蜂ちゃん!？」

なんでいるの?しかもなんで虚を殺したの?俺が処理できることわかってたよね?  
そんな疑念の視線を向けると、

「…っふ、迂闊だな。」

鼻で笑ってきやがった。

瞬間突如藤丸の中にあふれ出した、存在する記憶。

「貴様、なぜそれほどまでに強くなりたいたいのだ。」

「妹の前でかっこつけたいからです。」

回想終了。あいつ俺の見せ場取る為だけに殺しやがったあああああ!!!

「いまのは、あなたが？」

「ふん、出来ない同僚のしりぬぐいをしてやっただけだ。」（ニヤア）

「お前確信犯だろお！」

「ちよつと藤丸、失礼でしょ。助けてくれてありがとう。」

「ふん。／＼／＼」

まつ梨のこと散々堪能した挙句消えやがった。碎蜂、貴様が卑しか女杯ナンバーワンだ。決めた。あいつを夜一様の前でぼろくそに恥かかせてやるけん。これは決定事項ばい。まっとうってね碎蜂（ブチ切れ）。

「藤丸。あの知り合い？」

「刑軍所属の碎蜂ちゃん「碎蜂さんだ！」はいはい碎蜂さん碎蜂さん。」

なんで今日は去ったふりして戻ってくるやつ多いんだよ。

## 斬魄刀つて意外と空気読めなかったり（十設定まとめ）

「皆さん、整列してください。本日、平子副隊長が長期の調査を終え帰ってきましたので、新人の皆さんに自己紹介をしてもらいます。」

「五番隊副隊長の平子真子や、よろしく。」

「海燕先輩に聞いていましたが、愛染三席や朱司波隊長とはだいぶ違う人なんです。ね。詰め所で見えてびっくりしました。」

「うむ、しかし、平子は副隊長でありながらすでに卍解を取得しており、飄々としながらも下のものに慕われる性格だ。話しかけに行くといい。」

「やっと来たよ平子真子。まだ副隊長なんだな、本格的に時代が分からなくなってきた。他の隊の隊長副隊長も探ってみたほうがいいかな？だめだ、碎蜂さんの目がうっとおしいしあらぬ疑いをかけられたくない。」

「そういえばお前たち、斬魄刀の開放はもうできているのか？」

「そうだった。征源様、斬魄刀から二人同時に同じ声が聞こえるってあるんですか？」

あのだれかわからず俺の心を乱しに乱した声。あれ実は斬魄刀の声だったのだ。いや、タイミングよ。まじで危ないだろ、もしあの声で動揺して刀を落としてたらどうするつもりだったんだろうな。

「私と藤丸はまだ解放できてないんですが、斬魄刀から☒心合わせ前を見ろ、答えはすぐそこにある。☒って話しかけられて、そのタイミングが藤丸とおんなじで内容も同じだったんです。」

「ふむ、斬魄刀とは己の靈力を具象化させる道具であり、心を映す鏡でもある。お前たちは性格も似ていないし、靈圧の質も量も全く違う。すまんが心当たりはないな。力になれず、すまない。」

「いえ、文献で調べてみても大して出てこなかったので仕方がないかと。」

やっぱおかしいよなあ。俺らは一体何と会話したのだろうか？怖すぎる。まあでもこれからしばらく非番だし、流魂街遊びに行ったり修行したりするか。まっけてね、碎蜂ちゃん？



護廷十三隊二番隊刑軍所屬、碎蜂の朝は早い。

まずは鍛錬。あこがれの夜一様を目指すため、千里の道も一歩から。毎日の鍛錬は大雨が降っている日も、強風が吹いている日も、欠かさず行っている。

そして朝食。微々たるものではあるが、食事は霊圧を高める大切な行為だ。朝食を抜くなんてもつてのほかである。

さらに勉強。鍛錬をし、食事を済ませ体も頭も目覚めたころ、しゃつきりとした頭で知識を詰めていく。

そうして、碎蜂は隊舎に入り仕事をこなしていくのである。しかし、今日の碎蜂の予定は早くも崩れ去った。

「おい、貴様がなぜここにいる!?!」

お気に入りの修練場、広く人里から離れた荒野はどんな轟音を立ててもどこにも迷惑をかけず、ところどころ緩い足場は歩法の練習をするのにもってこいだ。そんな自分と

夜一様しか知らない場所に、自分の最も嫌う男がいる。この惨状は碎蜂を大きく混乱させ、また朝の爽やかな心地をすべて奪っていく。

「はい！碎蜂先輩を見習い、朝の鍛錬をしようと思ひまして、よい修練場を夜一様に聞いてきたのですが、まさか碎蜂先輩の修練場だったとは驚きました。」

だがそれだけでは終わらない。普段他の隊士の前でしか被らない猫をなぜかかぶって話しかけてきたのだ。いつもは碎蜂ちゃんと呼び何度言いつけても守らない呼び名を、さん付けでは無く一足飛びに先輩呼びにしてきた。意味が分からない。あと夜一様、なぜこんな奴にここを教えてしまったのですか。

「きゅ、急にどうしたんだ？そんな気持ち悪い呼び方をして。」

「……この前まつ梨を碎蜂先輩が助けたとき俺は思いました。俺自身があまりにも弱すぎると、なので碎蜂先輩の言う通りしっかりと礼儀を持って接し、自身の成長を図ろうと思つたわけです。」

急な態度の変更は控えめに言つて死ぬほど気持ち悪いが、それは決して悪いことではないため碎蜂は責めることができない。

「そうか、ならば今日からここへきても構わん。しっかりと励めよ。」

翌日碎蜂はこの言葉を心の底から後悔した。





あともう一つ問題がある。襟巻を剣八に渡したために、前やつてた時みたいに靈圧の勢いをそぐアイテムがないから回道が間に合わなくて全身が裂けてる。

「藤丸。お、お前何をしている?」

びびりすぎでは? 拷問時の人つてこんな感じじゃん。刑軍がこれぐらいでびびっちゃダメでしょう。

『明癒』、鍛錬です『啓活』。ちょっと失敗して全身が裂けてますけど『啓活』。」

さっさと着替えなきゃな。痛い痛い動くたびに体が裂ける。普段回道で治してるから薬とかないけど跡とか残らん?

「これを使え、我が家に伝わる秘伝の薬だ(量により猛毒となる)。ほら、塗ってやる。」

ベストタイミング! ありがてえ、傷に直接塗るタイプか。

「人目に付くところに塗ってもらえませんか?」

ばれると面倒なので。

「わかった。…一つ聞きたい、貴様はなぜそこまでするのだ。」

この一つ聞きたい問答結構あるな、最近の流行りか?

「昨日も言った通り俺は弱い。それをあなたに教えてもらった。だからですよ。」

碎蜂はその答えを共感半分恐れ半分といった様子で聞いていた。碎蜂も弱いから強くなりたいたいというのはわかる。だからと言ってあれほど怪我を負い、痛みにもだえ苦し

む鍛錬を選ぶだろうか。そんなことを考えていたせいで今日一日は、鍛錬も勉強も全く身が入らなかった。

……

……

…

休日がたくさんあるってなんて幸せなことだろうか。俺は今まつ梨とともにルキアちゃんたちのところに遊びに来ていた。

「ルキアちゃんと恋次君、元気かな？」

「道、こっちのほうであつてるよね？」

「そうそう。確か川の近くに住んでるって言ってたから、このあたりだとおもっただけど。」

「あっ！」

急に近くにいた女の子が驚いたような声を、あれ？ルキアちゃんじゃない？

「ルキアちゃん！」

やっぱりルキアちゃんだったか。

「今日も仕事ですか？」

「いや、ルキアちゃんたちはどうしてるかと思つて様子を見に来たの。」

「そうですか。せつかくだし寄つて行つてください。」

恋次君元気にしてるかな？

「誰だオメエら？」

ルキアちゃんたちの家に着いて聞いた第一声はそんな衝撃発言だった。

「はは……」

「たわけ！この前水をくれた人たちだろう！」

「そうだったか？」

「この赤パイん何にも覚えてねえな。」

「まったく、なんとという恩知らずだ！猫以下だ！鳥だ！」

ぼろくそ言われてるけどこの環境できれいな水なんて貴重なものをくれたやつを忘れるとかおおむねその通りだと思う。

「鳥だと！鳥だと言われちゃ黙っちゃいられねえな！待ってる、今思い出してやる！」

もう今覚えてないんだつたら無理だと思うよ。

「どうせスコーンと忘れているのだろう。」

「なんだと!!」

「はいはい、ケンカしない。」

「だって恋次が！」

「ルキアが悪いだろ今のは！」

「まつ梨が言ったことを聞けないのか？」

「「ひっ……ごめんなさい。」」

やっぱり教育には恐怖が一番だよな！俺も鬼道が一番上達したのは大虚と戦った時だったし。

「よし！仲良くするいい子にはお土産に持ってきたお菓子を上げよう。」

「「お菓子？」」

「ふふっ、きつと食べたことない味に驚くと思うよ。」

「さ、めしあがれ！」



「これはっ!」「なんとというおいしき!!」「うめーっ!!」  
「でしよー?」

まつ梨のでしよー? かわいすぎか?

「これはなんという食べ物ですか?」

団子を口いっぱいにはおぼるルキアちゃんもかわいいな。

「それは白玉ぜんざいだよ。」

「これは? この魚みたいのは何だ?」

「鯛焼き、ね。面白い形してるでしよ?」

恋次君は頭の上に大量のはてなマークを浮かべていた。鯛を焼いてないのに鯛焼きとはこれ以下につてかんじか。

「形も面白れえけど、あんこがうめえ! 皮もうめえ!」

ドへたくそな食レポだな (無慈悲)。

「恋次、私にもその鯛焼きを一口くれ!」

「ぜんざいってのもうまそうだな!」

どうやらご満悦していただけた様である。

「ほかの子たちにもちゃんとお上げるんだよ？」

「もちろんです。」「おうー！」

簡単にこの子達は返事をするが何気に凄いいことだ。こんなにひもじいなか、またいつ食べれるかもわからないお菓子をはかの子たちに分け与えるというのは、それを我慢しなければならぬ、しかも二人はそいつらを養うために人一倍働いているのには平等。不平不満を言わないあたりだいたい人間ができています。

後日、前回のお礼にオニシヤクヤクの根をもらった。恋次君が取ってきてくれたらしく、流魂街にしか生えておらず煎じて飲めばなんでも治るといふ。ありがたい、いっばいよしよししてやろう。

「んふー！」「やめろよ兄ちゃん／＼／＼」

君たちが健やかに成長するといいなあ

## 兄妹とは、姉弟とは

「君たちは共鳴鳥の話を知っているかい？」

浮竹隊長は、十三番隊に遊びに来てしばらくたつたころ。俺たちにそんな言葉を投げかけた。

「ぐみようちよう？」

「共鳴鳥とは、体は一つで頭が二つ分かれている鳥のことだね。まさに、お互いの命を共有している存在なんだ。」

「命を共有している鳥ですか。」

なんと美しい鳥なんだ。まるで、俺とまつ梨たんのよう、

「ところが、この二羽は大変仲が悪くてね。」

じゃないですね。なんなんだお前。

「喧嘩がこうじて、片方がもう片方を殺してしまう。」

「それって……？」

「命を共有しているのだから当然、生き残ったほうも死んでしまう。そして死の寸前に鳥は気づいたんだ。今まで、元気に生きてこられたのは、あなたがいてくれたおかげ

だったのだと。」

「悲しい話ですね。」

まつ梨。悲しまないで、俺は絶対に君を殺さない。

「君たちを見てついこの話を思い出したんだ。説教臭い話だと思っただろうが、お互いを大切にな。」

「はい。この命に代えてもまつ梨を守り抜きます。」

「胸に刻んでおきます。」

「共鳴鳥か、そんなふうにはなりたくないね。」

夕焼け空の下の元、俺は歩いていた。

「そうだね、ありえないけど。」

「ありえないって言いたいけど言えなくなっちゃったな。」

何でええええ!!!

「…何か、あつたの?」

今すぐ改善するから嫌いにならないでえええええ!!!

「うん、藤丸もう」

「いい加減下ろしてくれない？」

「今俺はまつ梨を正面から抱きかかえる形で持っていた。」

「だって寂しくなっただももん。」

「ねえ！はずかしいんだけど！十三番隊の隊士の人たちに凄い見られた（泣）！！おろして  
！」

「もうちよつとこのままで。」

「そんなことを言いながら俺たちは朱司波家に帰って行った。ちなみに泣きながら兄を殴る妹と、鼻血を出しながらそれでも妹を話さない兄の話は都市伝説になった。」

「それは災難だったな。」

「ホント大変でした。」

私はいつものように休憩時間に征源様と雑談をしていた。

「まつ梨のおかげでいつも姉上の様子を聞けてありがたいな。」

「そんなに心配することですか？伊花様は健康そのものですし、貴族街は平穩。何を心配するのです？」

「最近はそのだが、ふと昔のことを思い出すのだ。ちょうど私がお前たちくらいの年の頃だ。私が死神統学院に在籍していたころ両親が病で亡くなった。若い私と姉上だけとなった朱司波家は、地位と収入を失い没落の危機を迎えた。」

「朱司波家が、没落……？」

「親戚も私と姉上を見放していた。なぜなら、当主の座を継いだ私が病弱で落ちこぼれだったからだ。」

私は信じられなかった。征源様といえ、ただ圧倒的に速く強い。そんな印象だったからだ。

「当主がこれではお先真つ暗と、一族は次々と絶縁していった。そんな時分、姉上に縁談の申し込みがあった。下級貴族の三男坊で朱司波家に婿入りしてもいいとな。」

「まさか!!？」

「そう、乗っ取りだ。貴族の世界ではよくある話だ。弱みに付け込んできて朱司波家の

すべてを奪おうとしてきた。だが姉上は即座に断った。あの時の言葉を、私は片時も忘れることはない。」

「伊花様はなんとおっしゃったんですか？」

征源様は一拍置いてから深く息を吐きだすように答えた。

朱司波家のすべては当主である征源のためにある。それは姉の身と心とて例外ではない。

「姉上は家財を少しづつ売り払い生活を支えてくれた。使用人も解雇し、不慣れな家事を一人でまかないながら。そしていつも私に笑って言うのだ。」

何の心配もない、わたくしはただあなたを待てばいいのだから

「ああ、すべてがわかったような気がします…」

私は伊花様に似ていると思っていた。でも違ったんだ。私が本当に似ているのは征源様だったんだ。

「私のすべては姉上の幸福のためにある。誰が否定できよう。」

征源様は伊花様からもらったものを返しているんだ。なら、私は…

「少々喋り過ぎたな、他言は無用だぞ。特に姉上にはな。」

「はい。」

「そうだ、これをお前に渡しておこうと思う。かつて姉上からいただいた安全祈願のお守りだ。」

「そんな大切なものをくださるんですか？」

「今は私ではなくお前にこそ必要なのだ。姉上の心配事は私ではなくお前たちなのだから。」

姉上がお前たちにを心配する必要がなくなった時、返してもらおうとしよう。」

「わかりました。」

何時かこれを返せるよう私はより精進しなければならぬ。



## 幼児退行系主人公

もうそろそろ休みも終わりだが、特にやることもないので（鍛錬は日課なので済ませている）まつ梨と流魂街に遊びに行くことにした。したのだが、

「あれ、海燕先輩？」

あ、ほんとだ。

「海燕先輩も流魂街へ？」

「おう、流魂街は地元みたいなもんだからな、今でも西地区には弟と妹が住んでるしよ。これがどっちも頭の足りない馬鹿だよ。考える前に手が出るような奴なんだわ。まったく、誰に似ちまったんだか。」

…ツツコミ待ちか???

「あのう…」「鏡見たことあります？」

「…ほう、新入りが言うようになったじゃねえか。」

嘘だろ!?今の地雷かよ!?

「あ…いえ、失礼しました。」「ごめんなさい。」

「まあ、ごちやごちや頭で考えるだけで、何もできないような奴よりはましただけだな。」

そうだな。考えるだけで動かないやつより俺も（俺の手足となって）動く奴のほうが好きだ。

「まあでも仮にも貴族だからな。頭回さなきやいけねえときはある。」

「海燕先輩、貴族だったんですか!？」

「そっか、まつ梨はまだ知らなかったか。」

「名前だけの貴族だがな。それに、大事なものは地位や名声じゃないだろう？」

「じゃあ、先輩の大切なものって。」

「生き様、だ。じゃあな。」

「真顔で言いきって去っていった…!？」

「決まった!と思うている顔だ、あれは…」

「あの顔、庶民にはできないよね。」

五大貴族なだけあるよな。

休みが終わり、今日からまた三人で見回りである。

「やっぱ流魂街は落ち着くなあ。」

「先輩は流魂街暮らしが長いですもんね。」

「瀨靈廷内は落ち着きがあり過ぎてたまに息苦しいからな、つてことで、ちよつくら露店  
見てみてくるわ。」

また別行動？

盛り場はいつも喧しく、盃と怒号が飛び交っている。

「おーい、そのきれいな死神ちゃん。」

「まつ梨、行っちゃだめだよ？」

とても心配だ。

「わかってるよ。」

「そののつても素敵な、死神のかわいい子ちゃん。」

「…行っちゃだめだからね？」

「酔っぱらいの冷やかでしょ。いかないよ。」

いや、まつ梨は超かわいい。絶対本気だ。そしてまつ梨はこういうのに案外ちよろ





まつ梨は強いなあ（遠い目）。しゃあない、助っ人呼んでくるか。

「ちよつと待ってて。」

「藤丸!?!ちよつとどこ行くの!?!」

「ねえお酌してよ。お酌してくれないなら後三十杯のむ!!」

京楽はあれから五分間駄々をこね続けた。

「あー、もう! わかりましたよ! お酌してあげればいいんでしょ!」

「うれしいねえ! じゃあ遠慮なく!」

いい加減面倒くさくなったまつ梨がお酌しようとしたとき、不意に後ろから声がかか  
る。

「何してるんや? 京楽隊長。」

そこには、八番隊の矢銅丸リサ副隊長が立っていた。

「…な、なんでリサちゃんがいるの? (汗)」

「その隊士に連れてきてもらったわ。はよう帰って仕事せな。」

「しかたない、また日を改めて? もう。じゃあね。」

そうして京楽隊長は逃げようとして、

ガシツ!

「にがしまへんよ?」

…連行された。

「へえー、よかったなまつ梨! モテモテじゃなねえか!」

「違いますよう。あれは京楽隊長が寄つてたからですよう。」

俺にはわかる。今まつ梨は照れている。んゝかわいいいねえ!と普段ならそう言っているところだが、今日の俺の心境は複雑だ。これで照れてるのは満更でもないのでは?京楽隊長なら俺が理性を失って襲い掛かっても殺されなさそうだし、実はあり寄りのありな選択肢ではある。

「で、おめーはああいう男は好みか?京楽隊長、独身だぞ。」

言つたー!ー!ー!!!俺が最も聞きにくいところに、あろうことか海燕先輩は斬りこんで  
いったー!ー!ー!!!

「あたしは…その、れ、恋愛とか？考えたことないし…」

ああ、無常。俺は恋愛対象に入らないのか。IQを下げよう。トウルルルルルルルル（IQが下がる音）…まつりたん超かわいいな。信じられるか？あのかわいいまつ梨たんがもじもじしながら言葉に詰まってるなんて俺死んじやう！（IQ3）

「お、否定しないのか？否定しないんだな！まんざらでもないってか!？」

（グシャツ、メリメリ、ズバツ！（心臓が潰れる音）止めるおおおおおおお!!!お前俺に何の恨みがあるんだああああ!!!もうヤダ！おうち帰るううううう!!!

「そうじゃなくて！あー、もう…藤丸？どうして泣いてるの？おなか痛くなつた？」

…フラグたっちゃった。（泣）

「全部、聞こえてるみたいだけど…」

「……」（じー）

「はっ!？」

フラグを立てたのか、俺以外のやつと。（泣）今日死ぬ。



「二番隊隊舎に帰ってきたがやけにぎわついている。でもそれすらもどうでもいい。もう俺に生きる理由はない。」

「藤丸、ちゃんと聞いて：…なんだ？泣いているのか？」

「ぐすつ、すみません碎蜂先輩。それで、どうしたんですしたっけ？」

「あ、ああ、この数日でまったく虚が目撃されなくなっただ。大丈夫かこいつ？」

「ひつく、それはいいことじゃないですか。」

「いや、どれだけこつちが警備を強化しようと、尸魂界ソウルソサエティに入ってくる虚は必ずいる。それがいないということは、相当不自然だ。」

破面、やつぱりこの時代にもいるのか。

「大昔には虚を統率できるものがいたという話だな。」

「そう、大変なのね。」

ぐすつ

「征源様はしばらく家に帰れないって。」

「征源はともかく、あなたたちが心配だわ。征源にお願いしてお留守番の係にしてみらえないかしら。」

ひっく

「そんなのダメですよ。征源様の迷惑になります！征源様の心配はしないんですか？」

「征源はいいの。わたくしはあなたたちが心配で心配で……」

えぐっ

「あたしたちつて、そんなに頼りないですか？」

うっううう

「わたくしが心配なのはあなたたちが無理をしてしまうことよ。優しい子は危険な時ほど頑張り過ぎてしまう。それが、怖いの。」

「伊花様……」

「ごめんなさい、さっきからちよつとだけ話に集中できないんです。」

「征源もそうだったから、死神になってすぐのころは、頑張り過ぎてよく大怪我をしていたわ。あなたたちを見てると、昔の征源を思い出すの。……辛いものですよ、無事を願うことしかできない立場というものも。」

ううええええん

「そう…です…ね…わかります。」

私もそうだったから、でも今はこんなものの心配をしていた自分が不思議でたまりません。

「だから帰ってきてからは思いっきり甘やかしてあげるのよ。」

「…すいません。ずっと気になってたんですけど、藤丸はなんで伊花様の胸に埋もれてるんですか？」

「ずっと！なんでこんな話してるときにずっと伊花様の胸に埋もれて泣いてるの！ぜんぜん集中できない！嗚咽を漏らすな！うるさい！」

「帰ってきて、お風呂呂に入ってからすぐに私のところに甘えに来たから心当たりがないの。ずっと泣き止まないし、理由を聞いてもさみしいしか言ってくれないし。」

まさかあの時から泣きっぱなし!?二番隊の人、ご迷惑をおかけします。

その日、藤丸は伊花様から片時も離れず、しかたないから枕もとで子守唄を歌って藤丸を寝かしていた。伊花様が藤丸の扱いにあまりに長けていて戦慄した。

名ばかりの貴族って言っても限度があるだろ!?

今朝の集会で虚の姿どころか、気配すら観測できないことが明かされた。場合によっては非常招集の可能性もあり、各隊員は斬魄刀の携帯を常に義務づけられた。俺は、きつとまだ破面に勝てない。どうすれば、どうすればまつ梨を、征源様を、伊花様を守るのだろうか。

そんなことを考えてても強くなれないし、とりあえず今日はもう開き直ってさらに原作キヤラに会いに行くことにした。多分もう俺ら物語の中に組み込まれてるでしょ。

「おう、オメーら、やっと来たか。さっさと行くぞ。」

うひょー！志波家楽しみだなあ！空鶴さんがエツチくて好きなんだよね。（欲望全開）

「俺の家はいるだけで強くなれるからな。」

「どんな家ですかそれ。」

「一言でいえば弱肉強食の館。」

「(おかしい、さつきまで楽しみだったのに急に不安になってきた。)」(そんな家聞いたことないわ。)」

「あれ、ここだったはずなんだがな…?」

ついたのはただの原っぱだった。何にもないけど。

「道を間違えたんじゃないですか。」

「いや、そんなはずはない。」

でも実際、家ないじゃん。

「おやおや、どなたかと思えば志波家の!」

「よお、久しぶりだな。いきなり妙なこと聞くが、俺んちここだったよな?」

なにをばかな、実際ないんだからそんなわけ「空鶴様と岩鷲様なら、ずいぶん前に引越されましたが?」あるええええええええええ!?

「なに!?あのバカ!また連絡しねえで引越したのか!」

おい!どういうことだつてばよ!いくらほぼ没落といつても五大貴族だぞ!当主に無許可で家を引越してゐるっておかしいだろ!しかも初犯じゃないのかよおおおお!!!

「しかたねえ、探しに行くぞ!」

はあ!?

「探しに行くつて当てもないのにですか!?!」

「いや無理でしょ!?!」地区だけでも家探しなんて不可能に近いのに、流魂街には320地区あるんですよ!?!」

「それが兄貴の意地だ!ついてこい!」

「は、はい!」

夕方、俺たちは黄昏れていた。

「……………」

俺と海燕先輩の顔は疲労が隠せていない。刑軍の訓練をしてる俺についてこれるなんて海燕先輩すげえわ。しかし

「み、見つかり、ませんでしたね、結局…」

まつ梨が死にかけた。可哀想に。今日は抱っこで帰るか。

「…な、修行になるって言ったろ。」

「確かに…」

まつ梨、騙されてるぞ。今回の原因は海燕先輩だ。

……………

……………

…

昨日散々走り回った俺たちだが、今日もまた懲りずに流魂街に来ていた。

「ふんふんふん。」

まつ梨は昨日死にかけだったのに、今朝は早起きしてわざわざギン君と乱菊ちゃんのためにお弁当を作っていた。それは決して悪いことではないのだが、

「うーん、いいのかなあ…」

「なあに？あたしがお弁当作ったことに不満でもあるの？」

伊花様が乗り移っている!?!いや、言うんだ藤丸！おまえならできる！

「確かに俺と伊花様監修でやったからあんまりミスはないと思うけど、塩と砂糖間違えて使ったのが何品かあったよね？」

「違うよ、料理はマネするだけじゃダメなの！伊花様の味は伊花様のもので、藤丸のものは藤丸のもの！あたしの味じゃないの！」

創作料理もおいしければいいけどなあ。おれはどうやら好きな奴の料理で舌が馬鹿にならないタイプらしく、普通に甘すぎた。

「さて、お味はいかが？」

さて、どうやってまつ梨が傷つかないようにしようか？

「んまーい！お弁と最高！」



んえあ？奇跡起きた！

「よっしゃー！」

「ギン君、正直なところどう？」

「せやなあ、こないな不思議なもん、食べたことあらへん。」

「だよね…」

「こつそり俺が作ったのと交換しておくか。」

「うまい！ちよーうまい！前のもおいしかったけど、今度のほうが甘いし！」

「でしょ？あたしもいい甘みが出てると思ったのよ！」

「まつ梨ちゃん天才！」「乱菊ちゃん美食家！」

「うわあ…」

最悪が噛み合ってしまった。

「せやけど、たくさん作ってきてくれてうれしいわ。ほんまおおきに。」

「お礼なんていいよ。よろこんでもらえたなら、それでいい。」

「ねえ、ギン。死神って…いいね。」

「せやな。」

「おなかいっぱい食べられるのよ?」

「せやなあ。」

「ギン、ちゃんと聞いている?」

「せやな…」

「バカ…もういい、あたし寝る。」

「…おやすみ。」

………

………

…

そう、よろこんでもらえたなら、それでいいんだけど。

「良かったのかなあ? まつ梨の料理で…」

「二人にも好評だったし、シロちゃんめ、びっくりさせてやるんだから。」

一人しか好評じゃなかっただろ。おかしいな、こんなふうで育てた覚えはないし、何よりしたが馬鹿にならないように、いろんな食材を様々な料理にできるだけ工夫して出してたし、伊花様の料理でこんなふうで味覚が育つとも思えないんだけど。

「びっくりするだろうね。(甘すぎて)」

「こんにちはー!」「こんにちは。」

「ようこそ、藤丸さん、まつ梨さん。」

「何しに来たんだ?」

「決まってるでしょ。約束のものを、持ってきたのよ。」

「わあく!お弁当だ!おいしそう!」

「お前、本当に持ってきたのか…」

「もちろん!あたしは約束はちゃんと守るのよ!」

「万が一(99パーセント)、口に合わなかったときのためにもう一つ作ってきたからダメだったら俺に渡してね?」

「藤丸!大丈夫だって!」

「わーいー！いただきますー！」

そういつて動き始めた箸は、二人同時に一口目で止まった。

「……」

でしようね、一発目が貧困街の乱菊ちゃんとギン君だったからああだったただでこれが正規の反応だ。

「二人とも、口に合わなかったよね、ごめん。こっち食べて。」

俺はそう言つて二人の弁当をもらい、俺の作った弁当を渡した。

「藤丸！まだ一口しか食べてないでしょ！」

「ごめんまつ梨。まつりが作った弁当食べたくなつたんだ。二人には俺の弁当上げるから勘弁してくれ。」

俺はそう言いながらまつ梨の弁当を勢いよく掻つ込む。まつ梨はうれしそうな顔をしているが二人は信じられないものを見るかのように目を見開いた。

「うん。まつ梨の弁当はやつぱりほかの人には甘すぎるんじゃないかな？少し砂糖を減らしてみたら？」

「うーん、でも……」

二人は恐る恐るといったように弁当を口に入れる。

「おいしいー！」「うめえ。」

二人はこちらは口にあつたようでおいしそうに食べ始めた。

「やつぱり藤丸にはまだかなわないのかなあ。」

「え！これ藤丸さんが作ったんですか!？」

「そうだよ。流魂街では毎日まつ梨に料理を作ってたからね。中華、洋食、和食、なんでもござれだ。」

「私、洋食作つてみたいです！何か教えてくれませんか？」

「そうだな、オムライスとか簡単でちょうどいいか。」

「藤丸つてすげえんだな。」

「藤丸は昔からすごかったよ。私たちの生まれは西流魂街76地区だけど、その人たちを束ねて、自警団つて組織を作つて、藤丸がその王様みたいになつたんだ。」

シロちゃんは驚いたようで、目を白黒させている。

「真央霊術院にいたときも大虚つていうすごい敵から私たちを助けるために、一人で十  
二体も相手をして生き残つた。だから、私も追いつかなきゃいけない。」

「大変だな。おまえも。」

私たちは料理をしている二人を見ながらそんな話をしていた。

## 素手のほうが強いとはこれ如何に

今日もまた、ギン君と乱菊ちゃんのところに来ていた。わかつている。何が起こるかわからない現在、きつと俺は逃げているんだ。だからちよつとでも死神のことを忘れるために。こうして何も関係ない流魂街の子たちのところに足しげく通っている。

「こんにちは。」

「あらいらつしやい。おみやげは？」

この子はいつもしたたかだな。そんな子に救いを求める俺は、きつとどこまでも救えない。

「あれ、ギン君は？」

「さあ、いつもふらつとどこかへ出かけるの。どこで何してんのかもわかんない。」

「心配じゃないの？」

「心配したっていなくなっちゃうし。そこでどこからか知らないけど食べ物を持ってくるのよ。」

乱菊ちゃんは強いな。…俺はまつ梨がいなくなるんじゃないかって気が気じゃない。

「乱菊、食い物や。」

「こんなふうになね？」

「へえ。」

それからしばらく二人はご飯を食っていた。

「ご馳走様。」

「あたし片付け手伝うね。」

「ありがと。」

「なあ兄さん。ちよつとええか？」

なぜか、いやな予感がする。いや、これはきつと予感ではなく史実を知っている俺だからこそ、

「ここ、ええ眺めやろ？」

「そうだね。瀬霊廷がよく見える。」

「…あそこの暮らして、どんなんやろうな？」

「興味ある？」

「乱菊は興味あるみたいや。わからんなあ…あの中に入ったら、どうなるんやろ？」



そのの、答えを俺は知っている。

「あそこには、君の運命を変える出会いが必ずあるよ。」

「ふーん、兄さん、見かけによらず夢見がちなんやなあ。」

ちがう、違うんだよ。

「決していい事だけじゃない。乱菊ちゃんの記憶を奪った人も、そこにいるからね。」

「知ってはったんですか？」

「見たわけではないし、聞いたわけでもないんだけど、うーん：俺は、：俺は、ちよつとおかしいんだ。でもね、俺はおかしくても、知ってることがあるよ。ギン君はそれを取り戻したいかもしれないけど。乱菊ちゃんも君がいるだけでいいと思ってる、って知ってる。だから、無茶をする必要はないけど、でも、あそこに行けば飢えることはない。もしも、本当に死神になる覚悟があるなら、稽古をつけてあげることができるから。」

「そう…ですか…」

「でさー、ギンってば全然人の言うこと聞かなくてさー!」

「そんなのウチも同じだよ。男ってどうしてああなのかねー?」

「ほんと、こっちは心配してるのにさ!はあ、」

「…だけど、心配する相手がいるって、いいことだよ。あたしそう思うな。」

「そうね。一人っていやだしね。」

………

………

………

虚が襲い掛かってくる、躲して一閃。そんな姿を見ても奴らは恐れもせず、ただこちらに突っ込んでくるばかり。

「破道の四『白雷(びやくらい)』」

瀟霊廷内であまり大きい破道を使うわけにもいかず、『白雷』で小虚ミユクスを貫く。同時に襲い掛かってきたスクリーマーを蹴り上げ、続いて突進をかましてきたワイドボーンと一

緒にて串刺しにする。

現在、瀟靈廷に多数の虚が攻めてきており、それに対し、護廷十三隊総出で迎え撃っている。

まつ梨は大丈夫だろうか。征源様もいる。海燕先輩もいる。だから、きつと…きつと大丈夫だと思いたい。

「逃げろ！藤丸！」

一斉に虚が襲い掛かってくる、でもそんなことしている暇はないんだよ碎蜂ちゃん。もうすでに時間かけ過ぎだ。まつ梨たちの応援に行かなければ、もつと速く、速く、速く。

未完成、だが現時点で使える最強の手札を切ろう。

『瞬間・閃光蒼幻』

瞬間とは、鬼道を全身に纏う高等技術であり、白打の奥義でもある。しかし、残念ながら俺はまだ瞬間用のオリジナル鬼道が組めていないため、『蒼火墜（そうかつい）』と『白雷』を少し弄り、組み合わせたものに『啓活』を併用して纏っている。未完成というのは『白雷』と『蒼火墜』をまとつているので、俺は常時、全身を焼かれることとなっているために痛みがひどいという所だが、やけど自体は『啓活』で治し続けることで活動できるようにしている。御託はここまで、殲滅だあ！

藤丸は私の後輩だ。生意気で可愛くはないし、夜一様にも無礼を働くような不埒ものである。しかし、それでも戦場では守ってやろう。そう思っていた。

藤丸は一人飛び出し、敵を斬鬼走拳すべてを使って蹴散らしていく。その技はどれも新入り死神とは思えないほど洗練されていたが、あまりに突出していたために複数の虚が迫ってきていた。

「逃げろ！藤丸！」

しかし、私の叫びは届かなかったのか、藤丸は二体の虚にとどめを刺すことに夢中で囲まれてしまった。助けられなかった。そう思い私は、消えていく仲間から目をそらそうとし、

「ズガアアアアン!!」

振り返った。轟音が聞こえたかと思うと、囲んでいた複数の虚が一斉に蒼白い閃光に消し飛ばされていく。その中から現れたのは、同じく蒼白く発光し、癖つけな髪を逆立

て、浅打を鞘にしまふ藤丸の姿だった。

大前田副隊長や夜一様がいらないとはいえ、今この戦場で一番戦果を挙げるのが、入ってきて一年もたつていない死神だというのは、あまりにも常軌を逸していた。それは目に追うのがやつとの速度で常に移動し続け、掌底が当たったものは消し飛び、蹴りが当たったものは貫かれる。先ほどとは違い、斬術を抜いたほか三つで戦っているはずなのに、その強さは副隊長に迫るほどである。私が虚を1体殺す間にそれは4体ほどを消し炭にしており、やけどを負いながらも戦うその姿は、まるで修羅のようだった。

明日はも一つといい日に・・・なると思っていた。

「回道を受けるときはそう緊張せず、もつと氣を楽にしなさい。」

「どうも、まつ梨のこと助けに行つたときは戦闘が終わつてた無能こと宮能藤丸です。」

「でも、卯ノ花隊長に治療していただくなんて、恐れ多くて……」

「現在、五番隊の後処理などを手伝つた後、四番隊で卯ノ花隊長直々に治療を受けてます。」

「伊花に頼まれていたの、あなたたちのことを。」

「伊花様が？」

「……ヤバいかもしれない。」

「あの子たちをお願い、と。伊花つたら、まるでお母さんのようね。はい、まつ梨さんは終わりました。次は藤丸君ですよ。」

「……どうやって乗り切ろう。」

「俺は自力で回道使えるので治してありますよ。だから大丈夫です。」

「伊花に藤丸君はよく無茶をするので一応見てあげてほしいと言われているので、診察

だけでもさせてもらいますね。」

「でもお忙しい卯ノ花隊長の手を煩わせるわけには「ぜひお願いします！」まつ梨?」

「はい、では見せてもらいますね。」

終わった。はい、家族会議です。

「これは、藤丸君。回道で炎症を抑えているようですが、全身火傷で今も恐ろしい痛みに苛まれているはずですが?」

「…藤丸?」「…なぜ隠していたのですか?」

伊花に任されているといいましたよね? って死ぬほど怒られた。これから家族会議とかすごいやだ。

征源様はまだ死傷者を運んだりしていたので、まつ梨と手伝って全部終わらせてから帰路についた。

「お前たちは先に帰ってもよかったのだがな。」

「隊長が働いてるのに俺たちだけ帰るわけにはいかないでしょう。」

まつ梨は一言もしやべらない。怖すぎる。

「そういうことは一人前になってから言うことだぞ？」

「：隊長のお手伝いがしたかったです。すこしでも。」

声ちつちや。しかも心なしか鼻をすする音も聞こえる。

「俺たちが見習うべきはやはり征源様ですから。」

「そうか…」

心なしか嬉しそうだが、複雑そうな顔をしているな。そうだよね、まつ梨が泣いてる横で素直に喜べないよね。

五番隊の詰め所に3人で向かうとそこには驚きの人物がまつっていた。

「おかえりなさい。」

「伊花様!？」

なんで!？」

「二人の帰りが遅いから、心配で…ここで待たせていただいたの。」

俺たちのせいかな、征源様はやっぱり心配ないのが信頼の差かな。



「すみません、姉上。私から連絡を入れるべきでした。」

「いいのですよ。それより二人とも、怪我はないのですか？」

やばい、来てしまったぞ。判決の時が。

「私はあんまりなかったんですけど、藤丸が全身火傷で、回道で炎症を抑えてるだけで、今も酷く痛むはずだって卯ノ花隊長が言っていました。」

それを聞いて、伊花様と征源様はこちらを見てすぐくつらそうな顔をした。まだセーフか？これ強くなるために自傷しましたって言ったら死ぬほど怒られそうだな。

「で、でも後遺症とかないですし、全然へっちゃらですよ。さ、帰りましょう！」

「…藤丸くん？」

本家!?!いや、まだぼろは出してない。慌てるときじゃないはずだ。

「なんでそんなに早く帰ろうとしているの？しかも、やけどは心配させるとはいえ卯ノ花隊長に直してもらえるなら見せるのを渋ることはなかったはずよ。」

体は美女、頭は頭脳明晰ママ、その名は名探偵コノカ！もうバレそうだし白状して、そのまま謝罪から仲直りの勢いでまつ梨の布団に潜り込むのが正解かもしれない。

「ごめんなさい。この火傷は全部自分で負ったんです。」

もう全部白状した。名前は伝えなかったけど、瞬間を習得したことも別に必要性はなかったけどそれを使ったことも全部伝えてからガチで反省しているような姿勢で謝罪

した。

ここまでされるともう起こるに怒れないのか伊花様も微妙な顔をし、なあなあで済まされることになった。

「なあ、まつ梨。仲直りの印として一緒の布団で「やだ！」

とりつくしまもねえな。やっぱり激おこか？

「藤丸はいつつもいつつも私にもう無茶しないって言って騙して布団に潜り込んできて抱きしめてそれっぽく騙してるの知ってるもん。最近お尻撫でてくるし。」

俺がやらかす。ばれる。まつ梨と喧嘩する。お約束のような流れだ。そして俺はすでにこれの攻略法を知っている。まつ梨はあすなる抱きに弱い！多分寒かった時に俺の膝に座って抱きしめてもらってた頃を思い出すんだろうな。（なおほぼ身長は同じであつたため足はものすごく痺れた。）そして一言

「二人は…お兄ちゃん寂しいな。」

辛そうな俺＋ふと漏らした本音（マジ）＋過去を想起させる一人称！ほら、大好きなお兄ちゃんが寂しがっているぞ！

「…今回だけだからね。」

勝った！計画通り（にちやあ）。

……

……

…

「遂に二人だけで見回りに行かされるようになった。どういふことかわかるか？デー  
トし放題つてことだよ！（妄言）」

「やっと実力が認められたってことかな。」

「この前の戦闘だけが人が出て、人手不足なだけだよ。」

一章怪我してろ雑魚ども。(弩畜生)

「安全な地区だと気楽だね。こんなのかな場所じや事件なんてそうそう…」

無いし、いっぱいデートできるね。なんてふざけたこと(自覚あり)を抜かそうとした罰か、一休フラグ建築士の名は伊達じやなかった。

「待て、その死神っ!」

切羽詰まった声が聞こえたので振り返ると、なんとそこには碎蜂ちゃんがいた。

「碎蜂先輩! そうしたんですか!?! すぐに医療班を、」

碎蜂ちゃんは傷だらけであり一目で虚にやられたとわかった。問題は刑軍に所属するほどの猛者である碎蜂ちゃんがやられるほどの虚が出たという点である。倒せたのなら問題はない、だがこの焦り用は…

「藤丸か、私のことはいい! それより、救援を頼む!」

碎蜂ちゃんの正式な肩書は刑軍統括軍団長直属護衛軍所属。ようは夜一様の護衛である。つまり救援対象は二番隊長兼刑軍統括軍団長、【瞬神】四楓院夜一であり、それに勝てないほどの相手が出現したということだ。ならば副隊長以上の実力は欲しい。

「小隊での哨戒任務中に、待ち伏せしていた虚の奇襲攻撃を受けた。正体は包囲され、現在もわが軍団長、四楓院夜一様が戦闘中だ。夜一様は未熟な私を庇い負傷されている。

急いで救援を……頼む！」

「わかりました。」

「俺は現場へ向かう。まつ梨は碎蜂先輩を連れて戻って救援要請を。」

「一人じゃ無理よ！」

まつ梨は間違つてない、だが

「まつ梨、君は足手まといだ。それに時間稼ぎくらいはやって見せる。」

嘘だ。まつ梨は足手まといではないし、夜一様が負傷しているならそれを運ぶ人員が必要だ。でもそんな危ないところへまつ梨を行かせたくない。

「二人で行くのは無謀だ。私はまだ動ける。二人で行ってくれ！夜一様のためにはこれが最良の選択だ。夜一様を頼む……！」

「……わかりました。」

碎蜂ちゃんはずっと悪気などないのだろう。ここまで言われてしまつてはまつ梨を連れてかないわけにはいかない。

「碎蜂さんは瀟靈廷に戻ったら五番隊へ連絡してください。朱司波隊長は誰よりも速い。行けばわかります。」

「わかった。」

「四楓院殿が奇襲を受けたと?」

「はい。夜一様は負傷したまま戦っております。現在、五番隊の宮能まつ梨、二番隊の宮藤藤丸が現地へ向かっています…」

「なに!?!(四楓院殿に奇襲をかけられるほどの虚、おそらく中級大虚<sup>アジュリーカス</sup>以上、くそっ!王族特務は何をしている!)」

「敵は数が多くそう長くはもたないでしょう。一刻も早く救援を!」

「藍染、隊をあずける。それと、このものに手当てを。」

「いかれるのですね?」

「一刻を争う。私についてこられるもの、少数で行く(頼む、間に合え…!)」

……

……

∴

大量の虚がいる中、橋を背にただ一人の死神が立っていた。

「残るは儂だけか。」

夜一は、すでにボロボロでありながら、決して逃げようとはせずつり橋の前に立ちふさがる。

「どうした？逃げないのか？」

「逃げたら貴様らを倒せんじやろ？」

その虚は蛇のような姿をしており、死神へ向けられた瞳には喜色が浮かんでいた。

「くはは、その強がりもいつまでもつか、見ものだな。」

「ぬかせ。（引けば町が襲われる。碎蜂、急いでくれ…）」

「まずはその笑みから消してやろう、ククク。」

夜一も奥の手を残してはいるが、相手の数は多く、使ったとしてもうまくほかの虚を肉盾にされ、ガス欠で終わるだろうと思われていた。その時、

「夜一様！二番隊宮能藤丸、五番隊宮能まつ梨、救援に参りました。」

応援に來た死神、女は鞆から浅打を抜き、男は死覇装をはだけさせ、上裸になる。

そして、

『瞬間・閃光蒼幻』  
せんこうそうげん

戦いの火蓋は、今、斬られた。



この恨み、はらさでおくべきかあ！（憎悪）

結論を言おう。これは勝てる。

「まつ梨、雑魚の処理を頼む。」

「藤丸一人じゃ倒すのは無理よ！わたしも、」

「時間稼ぎするだけだ。征源様さえ来れば勝てるし、たぶん雑魚が全滅しても勝てる。奇襲だけ警戒して、頼んだよ！」

そもそも勝利条件がイージーすぎるのだ。多分あいつは負傷している夜一様にも勝てないし、征源様にも勝てない。

「お前ひとりで向かってくるとは、死神とは馬鹿ばかりなのかあ？くはは！」

だから雑魚を配置している。いつでも肉盾として使えるように。ならば、征源様が来るまでこちらは粘らせてもらおうじゃないか。瞬間・閃光蒼幻の良いところは使っている鬼道が簡単なものばかりなので燃費がいい。つまり長期戦闘に優れている（なお体のことは考えないものとする）。

相手の尻尾が連続で襲い掛かってくるが、裏拳で受け流し、体さばきで躲す。

「おいおい全部掠ってるじゃねえか!?そんなんじゃすぐにボロボロになっちまうぜ！」

「馬鹿言え、掠らせてやってんだよ。俺に触ると火傷するぜってな。」

何ならこの勝負勝てるのでは？ 相手は趣向を変えて森の中に逃げ込む。

「シヤッ！」

相手から何か発射されるが難なく回避。そのまま追撃もしたいが、相手は霊覚をごまかすのが得意らしく、絶妙に位置をつかませない。飛んでくる何かを躲しつつどうにか接近する方法を考え、あえて体を後ろに崩すことで突っ込んでこないか様子を見る。

「馬鹿め！ 飲み込んでくれるわ！」

虚は後ろに倒れるであろう藤丸を食らおうと、頭の部分にとびかかる。だがそこにはしりもちをついた死神の姿はなく、倒立状態でしやがむという奇天烈な格好を見せた藤丸の姿があつた。藤丸は頭上（足上？）を通過する中級大虚アジュリカスに向かつて全身のばねを利用し、伸びをするように両足の蹴りを食らわせる。顎を勝ち割られた虚に蒼き閃光は無慈悲にも襲い掛かり吹き飛ばされる。決まった、と思つた次の瞬間吹き飛ばされた方向から複数の物体がこちらに襲い掛かつており、全身が伸び切っている藤丸にそれを回避する術はない。

「ぐんっ！」

腹部に突き刺さつたそれはおそらく牙だろう。大きくはなく致命傷にはならないが、それは軽度のもめまいを引き起こす。毒、即効性のあるものだと思うが確証は持てない。

すぐさま体勢を立て直し飛んで来る二撃目からにげる。

「(やつぱり今のままでは勝てないか。)」

それは藤丸にとっての事実であり、認識していた事象を再確認してただけだった。だが、

☒それはどうかな? ☒

聞こえるのは斬魄刀の声。

「(無理だ、ここで無茶をしても死ぬ可能性が増えるだけだ。希望を持たせることを言うなよ。)」

間違っていない。敵う相手ではないはずだ。

☒信じられないのか?、お前は一人で戦っているのではない。感じぬか? 我が存在を。

☒

やつぱこいつ斬魄刀じゃなくね!? 氷輪丸の存在とかあるはまだ確定じゃないけど。

まっ梨が雑魚を全部処理したのが見える。これで、

「勝てる、とでも思っているのか?」

その時周りからぞろぞろと虚が出てくる。こいつどれだけ連れてきやがった!

「俺は用心深い性質でな。そろそろ死んでもらおう。」

スクリーマーが一斉に襲い掛かってくる。

「まつ梨ー！」

俺の、俺のミスだ。俺がいつでも庇える位置に立っていたら、まつ梨をここに連れてこなければ、ああ…もう…

「藤丸、まつ梨、よく持たせた。」

一掃される虚。そこには海燕先輩と征源様が立っていた。…よ、よかった。これで、

☒助かる、か？☒

そうだよ、だからなんだっていうんだ。

☒何を恐れている？☒

まつ梨が死ぬことだ。

☒ならば、奴を許すのか？☒

その一言に、魂が揺さぶられる。

☒答えよ。恐怖は必要か？☒

…いらぬ。俺に怯えは似合わない。

☒不要なものは捨て、必要なものを見つけ出せ。☒

俺が常に捕食者で、こいつ等はただの糧でしかない。

☒我が声を聞くものよ、心合わせ前を見ろ！☒

ああ、俺は忘れていたんだ、俺の原点はどこか。俺は至極単純に、まつ梨に害をなす

ものは全て、

殺す

征源は中級大虚<sup>アージュールカス</sup>と藤丸の戦いを見ていた。褒められる行動ではないが、征源の目はそこにプライドを守る戦いがあると見抜き、手を出さなかった。

「グウ、貴様<sup>ご</sup>とときに手を患うなどお！」

中級大虚《アージュールカス》と戦う藤丸は瞬間すら解除しており、その手には浅打が握られている。しかし藤丸に攻撃は当たらず、また藤丸も何かを待っているのか、中級大虚を攻撃しようとはしない。千日手の状況が続く中、藤丸の待っていたものがそこに到着する。

「遅くなつてごめんね？ 行こうか。」

まつ梨は戦っている藤丸にやさしく微笑む。

「君のことなら千年でも待つよ。じゃあ行くか。」

藤丸は斬魄刀が話しかけてきたのなら、まつ梨もきつと心は一緒だと思い待っていた

のだ。時は来た。兄妹は揃い、心合わせ、前を見る。

「閃け、竜条丸！」りゆうじょうまる「断ち払え、虎洵丸」ことうまる

兄は獯猛な笑みを浮かべ、妹は恐ろしいまでに無表情。そんな対照的な二人だが、心はただ一つ、殺す。

藤丸の持つ竜条丸は先端に刀、上部に斧を持つ籠手のような姿、まつ梨の持つ虎洵丸ははばきの部分に斧がついた大刀に変化する。先に動いたのは藤丸、瞬間を使っていた時ほどではないが、恐ろしいほど洗練された動きで中級大虚アジュリーカスに接近する。中級大虚も距離を取る為に牙を飛ばすが、藤丸ははた目には当たったと思えるほどギリギリを最小限の動きで躲し、虚に細かい傷をつけていく。

「何故だ!?なぜ当たらない!?!」

一切の淀みない動きで、フェイントをかけても全く引つかからない。

「(しかも、この太刀筋は俺の筋を斬って!?)」

藤丸のつける傷は細かいが相手の動きを阻害するように刻まれ、

「はあああああ!!」

そこに降りかかる大刀、だが中級大虚アジュリーカスはその程度受け切れると判断。くらった後に反

撃を食らわせようとし、

バギイツ

アジューカス  
中級大虚を真つ二つにした虎洵丸はそのまま地面に突き刺さり大地を割り、  
アジューカス  
中級大虚は完全に絶命する。

真央霊術院を卒業して一年足らずの新米死神がたった二人でアジューカスを討伐する  
という偉業。

「二人ともよくやった。」

だがそんなことよりも征源にはこの二人が無事であったことが何よりも嬉しかった。大きく手を広げ二人を力の限り抱きしめる。藤丸は嬉しそうに笑った後意識を失い、まつ梨は二人を抱きしめながらわんわん泣いた。

「さすが五番隊よの。予想以上の速さで、よう来てくれた。」

流石征源様、海燕先輩、あとちよつとで死ぬところだった。

「良く走った其方の部下をほめてやるといい。」

「碎蜂をほめる前におぬしの部下に礼を言わねばな。宮能まつ梨、ようやってくれた。礼を言うぞ。」

わ、私?! 海燕先輩じゃなくて!?

「も、勿体ないお言葉です! あまりお役に立てずすみませんでした。」

「そういえば、まだちゃんと名乗っておらなかったな。儂は四楓院夜一。刑軍統括軍団長、隠密鬼道総司令官であり、おぬしの兄の上司に当たる。」

そっか、藤丸はこの人の下で働いてるんだ。

「夜一様あー!」

「…碎蜂? なぜ戻ってきた?」

「夜一様をお守りするのが私の役目です! さあ、夜一様も治療を!」

「よい。藤丸があらかた治してくれたわ。それより碎蜂、おぬしの働きで助かった。礼を…」

「礼などんでもない! 私のせいで夜一様を危険にさらしたのです。罰をお与えください!」



そっか、碎蜂さんからしたら、庇うべき相手に庇われたことになるのか。

「罰などやれるか馬鹿者。まったく、おぬしは：「本当ですよ、馬鹿は夜一様です。何護衛を庇って怪我してるんですか？」」

ちよつと藤丸?!それはさすがに失礼：

藤丸の後ろに鬼神が宿っている。これほど起こった藤丸を私は見たことがなかった。

「大前田副隊長にあれだけ言われて、まだ懲りないんですか?そもそも中級大虚アージュカスとはいえ夜一様が攻撃に当たるなんて気が緩んでたのでは?」「それは私を庇って、「碎蜂先輩?今夜一様に説教してるのでちよつと待ってください。あとで死ぬほどかわいがってあげますから、「ひっ!」ねえ、この激戦で疲れてるのに俺これから始末書なんですけど?ちなみにこれ大前田副隊長も全く関係ないのに始末書行きですよ。まったくいつになつたら：」

そこから藤丸の説教は続いた。夜一様は非常に耳が痛そうな顔をしており、碎蜂さんは藤丸に激詰めされながらセクハラを受けて涙目だった。征源様と私はそれを黙ってみてることしかできなかつた。

……

……

…

始解を習得したのち、まつ梨は五番隊十六席に、俺は二番隊三席に昇進した。蛆虫の巢？瞬閃覚えてるのに負けるわけないわな。明日から長期休暇ということだそうで、やつとまつ梨とデートできることになった。ふっふっふ、死ぬほど楽しんでやる。

## 必殺（必ず自分を殺す）！瞬間・――

「おや、藤丸サン、まつ梨サン、今君たちがちよつとした噂になつてゐるみたいですよ？五番隊に脅威の新人現る！朱司波征源の隠し玉は双子の天才児か？つて。」

現れて早々マシンガントークなんて、なんて嘘くさい人なんだ。

「それ、浦原隊長が言いふらしてませんか？」

「あれ？なんでばれたんだろ？」

「まつ梨が気付くとかよつぽどですよ？面白がつてるでしょ、どうみても。」

ちよつと！という声が聞こえるが無視、代わりに頭を撫でてやると静かになる。

「まあ。それは冗談として、夜一サンもお二人を絶賛しましたよ。」

「当たり前ですよ。俺もまつ梨も始解したし、この早さで席官ですよ？」

「…なんか、そう考えると私たちものすごいよな？」

「（実際物凄いいんすけどね。）なかなか見どころのある奴よの。なーんて、うれしそうな顔していつてましたよ。」

「夜一様があたしたちのことを、うれしいね、藤丸。」

「評価的にはもつと上でもいいと思うんだがなあ。」

瞬間つかえるんだから、

「私がほめたときと態度が違うのは気のせいですかね？」

日頃の行いだと思うけど、

「私適當ですもんね。でも、夜一さんだつて結構適當なんですよ。人のおかずは勝手に食べるし、ばれないようにサボるのは得意だし、おまけに服が嫌いでも部屋では裸らしいんですよ。」

……ん？ 四楓院家のことそんなに知ってるのおかしいよな？

「浦原隊長それもしかして見たこと」「言いたい放題じゃな、浦原喜助隊長殿？」

あ、終わった。

「……あ、あの、」

「今の僕の個人情報に関する発言について、尋問室でじっくり聞かせてもらおうかの？」

「……マジですか。」

「マジじゃ。」

「ひいっ!!」

逃げた。なぜ京楽隊長も浦原隊長もすぐにばれるようなことするんだろう。

「口は禍の元じゃ。おぬしたちも覚えておくがよい。」

「それは覚えておきますけど。夜一様仕事はどうされました？」

護衛も置いてなぜここにいるのかじっくり聞かせてもらおうか？

「さらばじゃっ！」

「逃がすかあ！瞬間・閃光蒼幻！」

浦原隊長に一つ貸しだな。うおおおおお、これ以上大前田副隊長に負担をかけさせてたまるかああああ!!!

「で、結局四楓院家のお姫様は捕まえられたの？」

「その話誰から聞きました？」

「浦原さん。」

あの人助けてやったのにここで伊花様とのんびり話してたんか。しかも変な脚色入れて。

「つかまりませんでした。お転婆なお姫様だったもので。」

「そう、お疲れさま。頂き物でりんごをもらったの、三人で食べましょ。」

りんごかあ。今ではすっかり好物になったなあ。

「…伊花様、私たちを拾ったこと、後悔してませんか？」

「どうしたの、急に？」

「今でこそ死神になってお給料をいただけるようになりましてけど、ずっと世話になりっぱなしで、迷惑ばかりかけて…」

やばい、こらえきれない。

「ふふつ、うふふつ！」「あつはははははは！」

「伊花様!?!藤丸!?!」

「ふふ、ごめんなさい。まつ梨ちゃんのいじけた顔があんまりかわいいものだから。」

SO・RE・NA!!

「かわいいって!?!あたし、本気で申し訳ないと思って…!」

「それが可愛いんだよ。まつ梨はまだまだ子供なんだな!」

「からかってるわけではないのよ?」

「じゃあなんでそんなに笑ってるんですか!」

「あのね、笑うってとても素敵なことなのよ?何年も笑えなかったら、いやでしょう?わたくしには会ったのですよ。決して笑うことのない日々が。」

伊花様にそんな時期があつたなんて、さっきのかわいいまつ梨とか全部吹っ飛んでしちゃった。

「征源は死神となつて、わたくしはこの家にずっと一人。さらに征源が出世してますます帰れなくなり、そんなわたくしたちのもとに現れたのがあなたたち二人。だから、もしあなたたちがわたくしに迷惑をかけるとすれば、それはわたくしの前からいなくなつてしまうこと。それだけはやめてね。」

「はい。」

絶対に帰ってきます。

「それにしても、なんで藤丸はあんなに笑つてたの？」

ああ、それ？だって、

「流魂街でも相当治安の悪いところを牛耳つてた俺なんて言う厄ネタをここまで育ててののに、まつ梨のことを迷惑に思うことはないでしょ？」

大犯罪者をよしよしできる懐の深い伊花様が今更拒絶するとかありえないでしょ。つて伝えたのだが、

「あ、あはは……」

まつ梨は無理に笑おうとし、伊花様は困つたような顔をしていた。なんで？

……

……

…

今日はせっつかくのまつ梨との休みを削り、夜一様に修行をつけてもらうことになった、なったのだが…

「何で碎蜂ちゃんまでいるの？」

「儂が連れてきたのじゃ、碎蜂は見所があるからの、どうせ今日は瞬間の話じゃろ？」  
この前中級大虚<sup>アジュukas</sup>と戦った場所で瞬間を掴んでしまおうと思ったのだ。

「夜一様…瞬間とは？」

「碎蜂はまだ知らなかったか、瞬間とは鬼道を全身に纏う白打の奥義じゃ。まあ見せるのが早かろう、藤丸。」

「瞬間・閃光蒼幻」

髪が逆立ち、淡く蒼く発光する。

「これが、瞬間…」

碎蜂ちゃんは一度見たことあったよな。

「藤丸のは未完成じゃがな。鬼道の方は組んでおるのか？」



「はい、一応自分で編み出したものがあります。」

すでに瞬間用の鬼道は編み出しているのだ。なのであとは使いこなすのみである。

「ふむ、ならば実戦形式でよいじやろう。かかってこい。」

「瞬間・雷神戦形」  
らいじんせんけい

「瞬間・轟天龍號」  
ごうてんりゅうごう

静寂が漂っている。戦闘は3秒で終わり、三人はそれぞれ絶句していた。

碎蜂は恐怖する。

藤丸が見せたそれは三席程度が使っているいいものではない莫大な力の本流、それをなんなくねじ伏せる夜一、徐々に恐怖は悔恨に変わっていく。なぜそんなにも貴様は強い？

なぜこんなにも私は弱い？ 碎蜂は感情の渦に飲まれてフリーズした。

夜一は困惑する。

藤丸の見た技は自分の瞬間・雷神戦形らいじんせんけいに勝るとも劣らぬ技であつたはずだ。事実、最初の一撃を受け止めたとき弾かれたのはこちらの腕だった。しかし、次に放たれた拳は躲さなくとも頬を掠る程度の狙いしかついておらず、バックステップで下がった自分を追いかけてきた藤丸の足を引っかけただけで転倒し（夜一の足には恐ろしいほどの衝撃が走つた。）そのままあつけなく地面に組み伏せるに成功した。あれならばまだ未完成的の瞬間のほうが強かつたのではないのかと不思議でならなかつた。

藤丸はシヨックを受ける。

己が使える最強の戦闘法、しかしそれは強大すぎて一步の踏み込みで意識が置いて行かれる。いかに強力といえどもこんなものを戦闘中に使えば10秒後には壁、あるいは地面のシミにしかならない。己の最強を体現した技にこんな欠陥があるなんて、もはや笑うしかなかつた。

100戦0勝100敗0引き分け

この鬼道はだめだ。瞬間には使えないし今は必殺技として放てる程度の認識で行こ

う。

……

……

…

「会議を始める。現在、虚圏に虚を統べる存在が確認された。」

一から十三番までのすべての隊長がそろった中、山本元柳斎重國はそう告げた。

「その名はアルトウロ、戸魂<sup>ソウルソサエテイ</sup>界に侵攻してきた破<sup>アランカル</sup>面よ。」

その言葉に多くの隊長が疑問を示し、征源が質問をする。

「侵攻、ということとは破面とは虚なのですか？」

「否、アルトウロは破面、破面とは虚でありながら死神の力を手に入れたものことじゃ。高い知性があり、その実力は隊長格を上回る。かつてアルトウロの襲撃を受けたとき、護廷十三隊は奴を瀕死にまで追い込んだが、逃げられてしまった。」

「とどめは刺せなかったと？」

「うむ…奴が逃げた時点で護廷十三隊は半壊しておったのじゃ。」

あまりに衝撃な事実で動揺が走る。

「しかも、それでも奴は完成体ではなかった。もし、奴が完成体となって復活し侵攻してくるのならば、今度は半壊ではすまぬかもしれぬな。」

「そんなのが攻めてくるなんてこりや大変だねえ、浮竹。」

「隊員たちにどう伝えるかが難しいな。」

「何が来ようと倒す、それだけだ。…浦原？」

「あ、まあお偉いさんたちもなんか考えてるんじゃないですかね？」

「お前が適当なことを言うときは何か考えている時だ、何を考えている？」

「…晩御飯のおかずです。」

それは歌であり、呪詛であり、祝詞である。

一番隊隊舎、今日、そこには前回の会議と打つて変わり浦原喜助、四楓院夜一、山本元柳齋重國の三人しかいない。

「四楓院夜一、参上いたしました。」

「おや、夜一サンも呼ばれてましたか。」

「喜助と儂だけ、か。」

「よう来た。おぬしたちを呼んだのはほかでもない。」

「臨時休暇をくれる、というわけではなさそうですねえ。」

「当然じゃ、実はな…」

元柳齋は一呼吸おいて告げた。

「決戦兵器―熾水鏡しすいきやう―のしようが検討されている。」

「しすいきやう…？そう申されましたか？」

「いかにも。」

「総隊長殿は護廷十三隊を信用しておらぬ、と？」

「われらに敗北は許されぬ。」

夜一は剣呑な雰囲気を漂わせるが、元柳斎はそれ以上の威圧感で質問を一蹴する。

「それに、中央四十六室の決定なら、われらは従うのみよ。」

「おや？ 妙ですね？ 熾水鏡を発動できるものは現在一人もいない。そう記憶しておりま  
すが？」

嘘だ、見当はずでに付けてある。

「すでに発見してある。」

喜助は知っていた。だが、それをそう隊長に伝えなかったのは、その人には戦線に出  
てほしくなかったからであり、

「またまた、ご冗談……」

奥から人が歩いてくる、その表情には愁いなどない。

「総隊長！ この者は！」

「はあ……、なぜ来てしまったんです？……ここに……」

それを悲しむ者の顔が浮かぶからであった。

……

……

:

「縛道の二十一『赤煙遁(せきえんとん)』、碎蜂ちゃん。全身で反鬼相殺をやるイメージだよ。ほら、ここ出来てない。」

虚構の平和の上に成り立つ、

「くっ！う、内股を擦るなあ！そもそも、反鬼相殺が難しいのだ！そんなさくつと出来てたまるかあ！」

平穏な日々は、

「そりゃ戦闘中ならむずいけど、何の鬼道がくるかわかってるんなら難易度は高くないよ。試験と一緒に。」

唐突に、

「貴様基準で考え

ズオオオオオツ

崩れ去る。

「……か！」

「くるぞ！ 巨大な霊圧の主が！」

護廷十三隊が目にしたのは、霊覚に直接影響するような赤い霊力の翼を持ち、真っ白な肌、淡い水色の髪、そして胸には孔が開いており顔には仮面の残りがついている人、否、破面であった。

「我が名はアルトウロ・プラテアド！ 死神を殺しに来た。強い奴から順に出てこい。」

「逃げも隠れもしないということか！」

「一人で護廷十三隊を相手しようというのか!？」

「上等じゃねえか！」

「落ち着きなよ、あれは挑発だ。」

「誘っている、とも考えられますね。」



あまりにも傲慢な宣言に朱司波、浮竹、六車は熱くなるがそれを京楽、卯ノ花が抑える。しかし、

「上等じゃねえか！」

「売られた喧嘩は護廷十三隊最強の十一番隊が買うぜ！」

蛮勇、とすら評すことのできない十一番隊の強行。隊長がいないことも相まって指令系統が正しく機能しておらず何人かの隊士がアルトウロに向かつていく。

「貴様ら、私の話を聞いていなかったのか？」

刹那の出来事、刃を振りかざした十一番隊士等を後の先を取って真つ二つにする。

「ふん…雑魚は束にしてもこの程度か。」

「なんだ…？今、奴の霊圧が上がったような。」

「我が不死王フエニイチエは殺した死神の霊力を糧とする。」

驚愕は剣速だけにとどまらず、斬魄刀の能力は全てのものに等しく絶望を与える。

「もう一度言おう。私は強い死神を殺しに来た。…逃げるとは、言うまいな？」

「誰が逃げると言ったか！」

「望み通り相手をしてやろう！」

「待ちなよ、それじゃ奴の思うつぼだ。」

「止めるな、京楽殿（春水）！」

「だめじゃ、言葉の真偽はともかく、あの斬魄刀の能力は脅威じやろう。」

「朽木隊長の言う通りだぜ。奴の言葉が真実なら、お前らのどちらかが殺されたら終わりだぞ。」

「やられはせぬ!」

朽木、愛川も止める。

「まあ、待ちなよ。かつて護廷十三隊は奴に半壊させられた。それはなぜだと思おう?」

「それは……!」

「単純に奴が強かったからじゃない。その答えが、あの斬魄刀なんだろう。」

京楽の仮説に皆黙るが、その沈黙を朱司波が破る。

「だが、われらが戦わずして、誰が戦うのか!」

「どうした死神? 護廷十三隊とは名ばかりの腰抜けぞろいか? つまらん。下僕ども、餌の時間だ!」

しびれを切らしたアルトウ口は大虚を大量にけしかけ自分は下がっていった。

「各隊、先陣を前へ! すまんがもう少し持ちこたえてくれ!」

確かにアルトウロはやばい。霊圧が隊長格の三倍とかヤバイバイバイヤバイバ  
 イってぐらいヤバイけど、引いたつてことはさすがに隊長格全員を一斉に相手取るのは  
 無理っぽいな。でも九割五分最下級大虚ギリアンとはいえこの物量に隊長なしで戦うのマジヤ  
 バいな、語彙力が死ぬ。

「藤丸、俺様たちが鬼道衆と一緒にしよつぱなぶち込む。疑似重唱八十八番だ、できるな  
 ?」

「…マジですか。せ、責任重大ですね。」

練習はしたが、…正直自信がない。

「藤丸、俺様を誰だと思ってる？お前の失敗なんて俺様がカバーしてやる。」

「お、大前田副隊長！（とうんく★）」

かっこよすぎる。俺、この人の下で働けて本当に良かった（感涙）。

「くげー」「はー！」

「集結する竜骨

繁栄は空 衰退は大地

巨塔・黒曜・朽ち果てた遺物

繁栄は空 衰退は大地

崩壊の象徴は界別つ

崩壊の象徴は界別つ

巨塔・黒曜・朽ち果てた遺物」

おええええええ！俺は一体何を言ってるんだ！喋ってるのか歌ってるのか叫んでんのか吐き出してんのかわけわからんねえ！これでまだ三重詠唱とか、本当大前田副隊長凄すぎてなんで隊長じゃねえのか不思議なくらいだ。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「破道の八十八『飛竜撃賊震天雷炮（ひりゅうげきぞくしんてんらいほう）』！」「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

一部の鬼道衆と藤丸（疑似重唱×3）、希ノ進（疑似重唱×6）が唱えた『飛竜撃賊震天雷炮』は光の束となり大虚達を呑み込んでいく。まるで竜の捕食のごとき光撃のあとには食べ残された大虚達の足だけが残されていた。

まつ梨を殺す権利は与えていないわ！

『飛竜撃震天雷炮（ひりゅうげきぞくしんてんらいほう）で大虚は三分の一ほどまでに減ったが相手には中級大虚アジューカスもいるため、油断はできない。

「伝令！八番隊、死傷者多数、消耗率三割を超えました！」

「後退しろ、といたいところだけどね。」

京楽隊長も辛そうだ。…やはり俺が前線にでて、

「藤丸くん、何を考えているのかはわかりませんがダメですよ。あなたは席官の中でも特に霊圧が大きく、副隊長格に匹敵します。もしもアルトウロがあなたに狙いを定めれば、あなたが斬られた時点で消耗率はさらに一割増える事でしょう。」

「でも！まつ梨や海燕先輩、碎蜂ちゃんは前線に出ています！俺だけ後方から鬼道を撃つてるわけには！」

「藤丸、気持ちはわかるが堪えてくれ。まつ梨も海燕も最下級大虚ギリアンにやられるほど弱くはないし、碎蜂殿も刑軍だろう。そう簡単にやられはせん。」

「この状況、体を預かる身としては辛すぎるな…」

クソッ！何のために強くなったんだよ。せっかく強くなったのに、…なんで、俺だけ。

☒ 走れ、お前が大切なものを救いたいのならな。☒

「興覚めだな、まったく、隊長格を糧にしようと思っただが、もう良い……」

アルトウロは歩き出す。死神を喰らうために。

「死ね。」

海燕、藍染、まつ梨の三人は遊撃部隊となり中級大虚<sup>アジュールカス</sup>を倒していた。

「うっ……この霊圧は!」

濃密な死の気配をまとう霊圧。それが動き出したことで三人はアルトウロが本格的な侵攻を開始することを察した。

「アルトウロが動き出したか、私が止めねば！」

「…俺が行きます！」

「志波君？」

「あなたの代わりはいないんです。副隊長の代理、しっかり務めてきますよ。」

今ここで副隊長格が殺されれば被害はもつと甚大になるだろう。そう考えた志波は自らが向かうことを決意する。

「海燕先輩！あたしも行きます！役立って見せますから！」

二人の背中が見えなくなったころ、藍染は

「フフツ」

笑った。

進撃するアルトウロの前に二人の死神が立ちふさがる。

「止まりやがれ!」「まちなさい!」

「屑に用はない。去れ。」

「こつちは用があんだよ、わりいけどな!」

「邪魔だ。」

アルトウロは霊圧を高める。ただそれだけのことで二人は魂魄が潰れそうになるほどの圧を感じていた。

「失せろ。」

「うるせえ!進みてえなら、俺の命を持っていきやがれ!水天逆巻け!振花!」

三太刀、アルトウロという怪物にそれだけ持たせるのは奇跡であり、その奇跡を海燕は起こした。

しかし、たった三太刀、それだけだ。胴を斬られ、足を折る。

「海燕先輩!」

「屑め、不死王を汚すとは。」

それでも海燕は折れない、最後の力を振り絞り水流を集めた全力の投擲を放つ。



「此れでも喰らえー！」

「む……？」

振花はアルトウロの足に掠りほんの少しの傷をつけた。

「しよせんこの程度か、だが、私に傷をつけた代償は払わせてやる。その命でな！」

「ううううおおおおお！海燕先輩はやらせない！」

己を鼓舞し、立ち上がるまつ梨。だが、その足は震え地をまともにとらえる事すらできな

「ほお、屑をもつと弱い屑が助けようというのか？上官に見捨てられ、必死に助け合う捨て駒……哀れなものだな。」

アルトウロの言葉は本心であり、憐れんでいたのも間違いではない。なればこそアルトウロはここで弱音や命乞いをすると思っていた。

「違う！これは自分の意思で選んだ戦いだ！」

馬鹿なものだ、最後まで現実を直視しない屑だったか。

「お前たちが選んだのは戦いではない。ただの死に場所だ！知るがいい！絶対的力の差というものを！」

お互いに剣を振るう。まつ梨の虎淘丸は大刀でありその振り下ろしが届く前に不死王の刃がまつ梨に届

「鉄砂の壁

灼鉄熒熒

僧形の塔

灼鉄熒熒

湛然として終に音無し

鉄砂の壁

湛然として終に音無し」

「縛道の七十五『五柱鉄貫（ごちゆうてつかん）』

かない。シスコンはその死を許容しない。その男にとってそれは世界の終わりである。何を犠牲にしても守り切らなければならない。

気持ち悪い位に早口で紡がれた詠唱による十五本の柱がアルトウ口に襲い掛かる、真正面からならほぼ効果が無いとしても隙をついて振つてきた柱はアルトウ口の行動を阻害するには十分であり、初代護廷十三隊しか知らず虚<sup>ウエコムンド</sup>圏で暮らしてきたアルトウ口は霊圧と気配を消し奇襲されるといふ経験はない。

体勢を崩されたところに虎洵丸の一撃が入るも体にダメージは無いが、  
「小娘ええええ！貴様は絶対に殺す！」

精神は別。絶対的強者の矜持を持つ自分が殺すと決めた相手に空振り、あまつさえ一撃をもらうなどあつてはならぬこと。

「は？ お前が死ぬ『煉獄』瞬間用の鬼道を開発している最中にできた鬼道であり直線状に大地から吹き上げた炎が敵を襲う。瞬間時の特徴は歩いたたびに地面から炎が噴き出し推進力が爆上がりするが、足が火傷まみれになること。」

高熱の炎がアルトウロを襲い、一瞬怯んだアルトウロであつたがすぐさまその炎を無視し突っ込んでいく。

「縛道の二十一『赤煙遁（せきえんとん）』縛道の二十六『曲光（きよつこう）』縛道の七十九『九曜縛（くようしばり）』」

それでアルトウロが止まっていたのはせいぜい0.1秒程度、すぐさま煙を吹き飛ばすがすでに藤丸、まつ梨、海燕の姿は見えなかった。

「この地虫がああああ!!!」

「各隊、退却はほぼ済んだようです。」

「朱司波の坊、よくやった。」

まつ梨を助けに行っただけだ。

「いえ、勿体ないお言葉です。しかし、なぜ山本総隊長が出てこられたのですか?」

「実は、数刻前に中央四十六室よりアルトウロに対する熾水鏡使用命令が下されての、喜助の準備が整うまで時間を稼がなければならなかったのじゃ。」

「熾水鏡?」

聞いたことないものだ、もう完全に原作とは乖離してるんだな。

「それが切り札なのですね?」

「そうじゃ。熾水鏡を使用するため、われらは一時撤退する必要があった。最も危険な撤退の最後尾を山本総隊長と儂が受け持ったのじゃ。」

「夜一、ここは任せるぞ。儂は各隊へ説明に向かう。怒りで理性を失つとる者もおるからのう。」

「儂たちは志波を四番隊の救護室へ運ぶぞ。」

「はい。」

これでやっとアルトウロを倒せる目途が立ってきたのか。長くつらい戦いだったな。

## アルトウ口戦、前編

浦原、卯ノ花、夜一を除いた隊長がそろった中、浮竹と朱司波は山本に詰め寄る。

「山本総隊長！」「元柳斎先生！」

「皆まで言うな、おぬしらの心中など、隅まで見え透いておる。多くの部下を犠牲とし、流魂街の防衛を放棄して撤退をしたのはなぜだ、と。」

「いかにも。答えていただきたい！」

「アルトウ口を必殺の策を持って仕留める、そのためじゃ。」

「必勝の策つての何です？」

「決戦兵装具、熾水鏡の準備を進めておる。」

「熾水鏡？それはどのようなもののですか？」

「説明している暇はない。おぬしらには隊を再編成し、瀨靈廷の前に配置せい。三番隊は二番隊、六番隊は五番隊、九番隊は八番隊、一番隊は十三番隊に指揮の一部をあずかり大虚討伐を行ってもらい、四楓院、朱司波、京楽、浮竹、卯ノ花、そして儂と朱司波の坊、嬢を主力とし残った隊を連れてアルトウ口討伐へ向かう。」

その言葉にすべての隊長が驚く。

「藤丸とまつ梨は明らかに実力不足です！なぜ二人を連れていくのか納得のいく説明を  
いただきたい！」

「熾水鏡使用者は死神ではない、ゆえに囿が必要じゃ。あの二人はアルトウ口に深く覚  
えられている、ちようどよい。」

「な!?!死神ではないものを戦線に出すと!?!しかも囿などと「異論は認めん。」くっ!」

「熾水鏡の準備が整うまでは守りを固め、アルトウ口には手を出すな。」

「また部下を盾に耐えろと!?!」

「承服できませぬ！総隊長殿は我らを信用しておらぬのか！」

「敵の手の内を見ずにはやる若造を信用しろと申すか？隊の再編を急げ、よいな。」

.....

.....

..

「はっ。」

「再度申し伝える！二番隊は三番隊に指揮の一部をあずけ四楓院隊長、朱司波隊長、京楽隊長、浮竹隊長、卯ノ花隊長、山本総隊長と宮能藤丸、まつ梨両名再編した隊を連れてアルトウ口討伐へ向かうとのこと！」

俺らが主力？……ふざけるなよ。俺はともかくまつ梨は十六席だぞ。

「それは、山本総隊長殿の命か？」

「はい。間違いなく。」

「…藤丸、心配しないで。私も戦えるから。」

無理だ、あいつ相手に守り通す自信なんてない。

「藤丸、わしらがついておる。案ずるな。」

「ええ、なんとしても守って見せますよ。」

「…すいません。不甲斐ないところをお見せしました。」

ああ、俺たちは本当に守られてる。申し訳ないなあ。

……

……

…

「悪あがきもここまでだ！ みじめな敗北を受け入れるがいい、山本元柳齋重國！」

アルトウ口は山本元柳齋重國に宣戦布告をするがそれは意外なところから破られる。

「貴様の相手は私だ！ 打ち据えろ、紫電！」

「朱司波隊長！」

「朱司波め、あせりよって。」

先走った朱司波は先手を取り身の丈ほどある鋸状の刃を持つ『紫電』を解放し斬りかかるがアルトウ口は難なくそれを弾く超高速での立ち合い、しかし実力が拮抗しているとはいいいがたく、速度は征源がついていくのがやつとであり膂力は比べるべくもない。

「どうした死神、何を驚いている？ 私 velocity にはついてこられるようだが、それがお前の限界だ。足りんよ！ 力が！ 絶望的にな！」

はっ！ 言つてろ、お前は今から堪忍袋を細切れにされるんだぜ。閃け『竜条丸』、さあ！ 命を懸けた煽りの始まりだ！

征源様が弾かれた直後アルトウ口の背後から藤丸が瞬間・閃光蒼幻を纏い接近する。だが霊圧も消さずに接近する藤丸をアルトウ口が見逃すはずもなく

「屑が来たか！ 貴様は切り刻んでやろうと思つていたぞ！ 不滅王の餌食となれ！」





連絡を受けた征源は一時戦線を離れ、それと入れ替わるように山本元柳齋重國がアルトウロの前に立ちちはだかる。

「ええい！どけ山本！貴様に用はない！あのふざけた屑を殺さねばならんのだ！」

「生憎じゃが、葬式の予定はないの、万象一切灰燼と為せ『流刃若火』」

「山本総隊長に抑えてもらってる間、俺の斬魄刀をざっくり説明します。俺の斬魄刀は情報を知る能力です。なので、今から熾水鏡が来るまでやつをおちよくる計画を教えません。頭に叩き込んでください。」

アルトウロと山本が斬りあっている最中に遠くから声が聞こえる。

「おーい、頭の足りないアルトウロ君やーい！今度は本物だぞー！ほら、さつさと殺してみなよー！」

瓦礫の山から叫ぶ藤丸はまるで五歳児程度かのような煽りを繰り返す。先ほどのや

というほど煽られたアルトウロは藤丸はこちらを煽り冷静さを失わせる要員だと考えた。

「あ、そつかく！この距離だとご自慢の不滅王は当たらないかく！ざくんねくん！」

ゆえに奴自身にこちらにダメージを負わせる手段はなく、相手がこちらの攻撃手段を見誤っている今こそ好機と判断した。確実に殺すためには虚閃では足りない、躲せないほど圧倒的質量で消し飛ばす。

「グラン・レイ・ゼロ  
王虚の閃光」

自身の血を混ぜたそれは空間が軋みを上げ歪むほどの威力を持つて藤丸に向かう。

「波悉く我が盾となれ 雷悉く我が刃となれ 『双魚の理』」

けれども王虚の閃光は藤丸に届くことなく双魚の理に吸い込まれ、

「花風紊れて花神啼き 天風紊れて天魔嗤う 『花天狂骨』 だるまさんがころん

「京楽隊長、花天狂骨の遊びは順に、だるまさんがころんだ、艶鬼、だるまさんがころんだ、です。」

「あちやー、だるまさんがころんだが二つも来ちゃったか、ちょっと厳しいかな？」

だるまさんがころんだは相手の放った霊圧の軌道上を最短距離で移動する遊びであり複数回きてもあまり有効には使えないと思っていた。

「いえ、どちやくそ運がいいです。相手がこちらに虚閃を撃つように仕向けるのでそれを迎つていつてください。浮竹隊長、俺のお守は任せました。」

自信満々にももりを頼む藤丸の姿に思わず笑いが漏れ緊張がゆるむ。

「帰りは俺が『白雷』を撃つんでそれで帰つてきてください。それで肝心の艶鬼なんです  
が…

だつ。」

突如出現した京楽に驚くアルトウ口だが、背後にふざけた顔をして現れた京楽が藤丸と重なり血管がちぎれるんじゃないかと思うほどの勢いで頭に血が上る。

「艶鬼、黒。」

「ぶちぎれてるんで兜割してきます。死覇装と笠だけで特攻してきてください。」

あのアルトウ口に笠と死覇装だけで黒を選択して突つ込めなんて自殺と変わらないじゃない、なんて思った京楽だったが先ほどアルトウ口を手玉に取った手腕を見込み半ばかけのような形で孔に突きを入れる。

成果はアルトウ口に今までに一番大きな傷を負わせるという大金星に終わり不滅王は笠に弾かれこちらは無傷、そして目の前すれすれに飛んできた『白雷』に肝を冷やしなからだるまさんがころんだで離脱する。

「ちよつと、あの位置は躲せなかつたら危ないんじゃないの？」

「だるまさんがころんだは見ちゃだめだから仕方ないじゃないですか、まあ当たらないようにはしたんで無問題です。」

浮竹がタイミングをずらし王虚の閃光を打ち返しアルトウ口はそれを素手で止めるが無傷とはいかないらしく火傷していた。そこへまつ梨は走っていき上段から斬りかかる。今までのことがあるため念には念を入れ確実に刃を弾き、そのあとに斬りつけようとするが、

「隙だらけだぞアルトウ口！紫電雷吼！」

紫色に光る稲妻がアルトウ口を襲い一時的にアルトウ口の動きを奪う、その視界の端に二色の光が煌めいた。

「瞬間・雷神戦形」

「瞬間・轟天龍號」

夜一様との戦闘では認識が追い付かなかつたが今は竜条丸が教えてくれる！

藤丸はアルトウ口の顔面に蹴りを叩き込む。その背中に生えた霊圧の翼は皮肉にもアルトウ口に酷似しておりその翼をブースターとして繰り出される直線距離の踏み込みは夜一の速度を超えた一撃となり、何かしようとしても初動をすべて夜一に潰され反撃すら許されずただ連撃に見舞われる。そんな中、突如藤丸の霊圧が跳ね上がり翼が消える。

「竜哮衝！」

藤丸の霊圧の8割を集中、圧縮した掌底は竜の咆哮のごとき威力を持ちアルトウ口を吹き飛ばす。そしてその先に待ち受けていたのは、

「まさか私が斬りあいをする事になるとは思いませんでした。」

四番隊隊長卯ノ花烈もとい、初代剣八卯ノ花八千流。霊圧はアルトウ口に及ばず、しかしその剣術は圧倒的でアルトウ口に次々と傷をつけていく。

「こんな、こんなことが、あつて堪るかあああああ!!!」

霊圧の高まりに危険を察知した卯ノ花は即座に離れ、アルトウ口は霊圧のまき散らしたただ暴れる。

「すいません。仕留めきれませんでした。」

「いえ、俺も卯ノ花隊長に無茶言つてすみませんでした。案を飲んでくださつてありがとうございました。」

「ねえ、僕の時となんか違くない？」

「うちの藤丸がすみません。」

しかしここまですても奴を殺すことはできず途方に暮れる。全員の頭によぎる『詰み』。

「はあ、はあ、悪あがきもここまでだ！ 貴様ら全員不滅王の鎧にしてやる！」

戦闘当初に放たれた言葉、戦闘当初よりさらに強烈な殺意に思わず身をすくませたその時戦場の一角に浦原と伊花が現れる。

「間に合ったようですね。」

「姉上!? なぜ姉上がここに!」

「伊花様!」

「困が必要ってそういうことか! 俺とまつ梨だったら肉盾になってでも止めるだろう。非死神を戦場に出すなんてどこまでも腐ってやがるぜ中央四十六室!」

「何だ、それは…、まさか!」

「お察しの通り。あなたの霊力、ただかせてもらいます。」

「大丈夫のですか、姉上!」

「ええ、征源が守ってくれると信じていますから。」

漠然と、嫌な予感がした。

「(竜条丸、伊花様のことをすべて教えろ!)」

……

……

……

伊花様だけに絞って知る様々な可能性の未来。それはどれも五分もしないうちに伊花様が目に見えて衰弱していた。

……

……

……



「征源様、時間がない！あれは伊花様の方も靈力を吸収してる！」

「なに!?!早くとどめを刺さねば！」

「総員に告ぐ！全力を持ってアルトウロを攻撃せい！」

藤丸たちにとって真の戦いが今、始まる。

## アルトウ口戦、後編

熾水鏡に力を吸われたくないアルトウ口と伊花の命を心配する護廷十三隊、彼らの結論はどちらも速攻であつた。征源は完全に勝負を決めにかかる。

「卍解 『しでん・からいふどくきおう死電・火雷腐毒鬼王』」

征源の持つ身の丈ほどあつた紫電は持ち手のみとなり、征源の周りに小太刀ほどの大きさとなつた八本の紫電の刃部分が漂い始める。

「貴様ごときの矮小な卍解にかまつている暇はない、殺すぞ。」

「矮小かどうかはくらつてみてから判断すると良い。」

その言葉を合図に八本の刃は一斉にアルトウ口に向かうが、アルトウ口は次々とその刃を打ち落とす。

「軽すぎる、ふざけているのか?」

征源を斬ろうとアルトウ口は走り出すが、山本元柳齋重國が立ちふさがる。振りかざされる不滅王は確かに脅威ではあるものの先ほどより威力はなく立ち合いはややアルトウ口がやや優勢、だが飛来する紫電や京楽、浮竹、卯ノ花等の猛攻により徐々に押されていく。





：

斬魄刀は己を映す鏡である。だが、斬魄刀とは自分ではないのだ。それに気づかぬまま全知全能に最も近い愚者は自分を投げ捨てることを決めた。

作戦を伝えられた征源はすでに息子同然の子が姉のために命を懸けることを知り罪悪感に押し潰されそうになりながらそれでも最後になるかもしれない頼みを聞き入れ動き出す。

アルトウロは当初の電撃戦という作戦を耐久戦に切り替えた。ここまでくれば力押しは困難。ならば熾水鏡使用者が死ぬまで粘りそこから反撃を開始する。突如防衛寄りの戦術になったため双方がダメージを与えられなくなるが、当然追い詰められたのは護廷十三隊側であり山本、京楽の二人は卍解を使用するかどうか迫られる。

飛来する六本の紫電、それを軽々引き飛ばしたアルトウロは残り二本のありかを思案する。可能性としてはさらに飛来してくるか、古参の女死神、屑1（男の方）、屑2（女の方）の三人、さらに少し離れた場所で伊花を守る白髪の隊長の計四人、さらにその中

でもっともありそうなのは屑1だとあたりをつける。前方から走ってくる屑2を見てこれに自分を傷つけるのは不可能と判断し切り捨てる。なればこそ屑2を陽動としているのなら得てして屑1が殺しに来るはずである。後方から先ほどより翼も小さいが超速で迫ってくるのを確認したアルトウロは振り向きざまにその手にある紫電を弾き飛ばす。世界がゆっくりと感じる中勝利を確信したアルトウロは返す刀で藤丸を斬りつけようとし、自分が抱擁されているのに気づいた。

「征源様！」

まつ梨は作戦を聞いたとき激しく取り乱し反発した。

「伊花様が無事でも藤丸が死んじやうんだったら意味ないよ！きつと、ほかにいい選択肢が「まつ梨」っ！」

「もう、探す時間はない。俺はどうなるかはわからないけど伊花様は確実に死ぬ。これしかないんだ。」

それでも食い下がるまつ梨に藤丸は意を決して言った。

「行かせてくれ、お願いだ。」

まつ梨はお願いを拒否することができない。過去に自分のために殺しまで行った兄の意向を無視することはできないことを藤丸は知っていた。

征源に借りた二本の紫電を一本は素手に、そしてもう一本を背中にさしてもらう。二本の角があり、のこぎり状の刃はその見た目に反してまったく痛くなく恐ろしくすんなりとする。藤丸はまつ梨がアルトウロの視界に入ったのを確認してから瞬間を使い走り出す。手に持った紫電をアルトウロに突き刺そうとするが失敗する。当然それを知っていた藤丸はアルトウロに正面から抱き着き征源に合図を送る。

「打ち据えろ、死電！」

征源の持つ柄から紫色の電撃が伸びる。振り払うのは困難と考えたアルトウロは毒々しい色をした雷を避けようとするが雷はアルトウロを追尾しており、とっさに藤丸を盾にしたがその雷は藤丸ごとアルトウロを焼き、その衝撃で気絶したのか藤丸は地面に落ちた。

「ふ、ははははは……これは傑作だ！自分の身を犠牲にして当てた攻撃がまさか多少痺れる程度だったとは！」

そう言って笑うアルトウロに対して藤丸から抜けた紫電が飛んでいきアルトウロに

刺さった。

「(躲せなかった!?体がうまく動かん!それに、これは!-)」

「火雷腐毒鬼王の電撃はそれだけで内臓を腐らせる猛毒となる。そんな状態の貴様に躲せるほど私の卍解は遅くない。」

四方八方から襲う紫電と雷を躲すことができずに次々と喰らい続け、ついに最後の一本がアルトウロをとらえる。

「終わりだ、『厄災火槌』!」

.....

.....

.....

.....



…

「層の分際でもくも私を殺してくれたな餓鬼。」

「ははっ、俺が？お前を殺したのは征源様だろ。そもそもお前が侵略してこなければ死ぬこともなかったしな。逆恨みからの筋違い乙。夢にまで現れるなんて胸糞悪いが伊花様の死ぬ可能性を生み出したお前が盛大に悔しがる様を見るのは滑稽だよ。文字通り死ぬほど後悔の念に苛まれてくれよな。」

「許さん、許さんぞ餓鬼。呪ってやる、貴様はむごたらしく死ぬ。」

知らない天井だ。いやまて、知っている部屋ではあるな。ここは確か、  
「おはようございませす。」

四番隊の救護室か。のそりと起き上がり気を抜けた挨拶をするとそこにいた隊士が驚いたように立ち上がりかけて行く。体は異様に重くだるいのでしばらく待っていると卯ノ花隊長が部屋に入ってきて、俺を見るなり少しほっとしたような表情をした。

「おはようございませす。体の調子はどうですか？」

「ちよいだるいくらいで問題ないです。伊花様、征源様、まつ梨は無事ですか？」

「ええ、あの戦いで皆大なり小なり傷を負いましたが、命に係わるほどの大けがを負った人は藤丸君を除いていませんでした。でも藤丸君、あなたは左腕骨折、全身火傷、肝臓と肺は腐食しさらに霊圧枯渇。死んでないのが不思議なくらいです。」

「…ほんとよく生きてますね。あ、せつかくですから俺が何日寝てたか聞いてみてくださいか？」

「やっば定番のセリフだよな。ここは誰？俺はどこ？もやっておけば「7年です。」7？」

なな？

「…卯ノ花隊長冗談とかいう人でしたっけ。」

「いいえ、藤丸君、あなたがいない間に様々なことがありました。あなたに傷を負わせたことを理由に朱司波隊長は辞任、今は統学院で先生をやっています。伊花は笑うことが少なくなりましたし、まつ梨さんはよく修行で無茶をするようになりました。」

これ本当に正解か？



たはずだ。なのになぜトラウマ製造機として機能してしまっているんだ。竜条丸、どういうことだお前、：無視するな、答えろ。卍解修得の時に具現化してぼこぼこにしてやるからな。覚えてろよ。

………

………

…

前回の戦いでお世話になった隊長にお礼を言おうと思えます十三番隊舎に来たのだが、視線を感じる。どこからかとかじゃなく普通にいろんな人に見られる。長い時間寝てたし救護室を利用したことのある人は知ってるのかな。

「おーい、浮竹、いい酒が手に入ったんだ。一緒に飲もう。」

「京楽隊長、こんなところで何してるんですか。」

「藤丸君！退院おめでとう。あの時は君にばかり背負わせちゃって悪かったね。」

そうそう、こんぐらい軽くていいんだよ。

「おいおい騒がしいな、いったい誰だ？」

「お騒がせしてすみません、浮竹隊長。」

「藤丸！元気になってよかった。積もる話もあるし中へ入ってくれ、京楽もな。」

「あの時はお前を守ってやれなくて悪かった。」

「いいですよ。みんな京楽隊長くらい軽いほうが俺も楽でいいです。何なら俺のほうがまつ梨や征源様、伊花様を深く傷つけましたし。」

「そうだね。朱司波はすごい思い詰めてたよ。姉を助けるためとはいえもはや家族同然の君に対して卍解を向けるなんて、とかね。」

「俺が立案した作戦なんで気にしなくていいと思うんですけどね。まああの時は俺の確証もない話に乗っていただきありがとうございます。」

「それは構わないさ。あの時アルトウ口に決定打を与えたのは元柳斎先生と卯ノ花隊長の二人だけだったからな。俺たちがアルトウ口相手に戦えたのは間違いなく藤丸のおかげだ。」

実は京楽隊長が斬られるパターンは頭と体二つあったけど何とかかなると思ってたの言わないほうがいいかな。

「重ね重ね本当にありがとうございます。それで本題なんですけど、俺の霊圧すごいでかくなってますよね。あのあと何かあったんですか？ 征源様たちにはトラウマ刺激するみたいで聞けないですよ。」

現在の俺の霊圧は隊長格に匹敵する。アルトウ口戦では副隊長格ほどしかなかったはずだ。

「君が倒れた後、征源の卍解でアルトウ口は瀕死になったがそれでも生きてたんだよ。そこでとどめを刺そうとしたんだけど、浦原隊長がもうすでに死にかけていた君を助ける仮説を立てたんだ。霊圧が枯渴した君にアルトウ口の斬魄刀を持たせアルトウ口を殺すことで霊圧を回復させる。もともと死神の斬魄刀を別の死神がほぼ使えないのは始解ができないからなんだ。しかし奴の斬魄刀は奴が気を失っても浅打の姿にならないくてね。あとでわかったことなんだがあの斬魄刀に浅打の姿はないらしい、浦原が言ったことだがね。だからその効果も機能するんじゃないか、ってことで君が奴にとどめを刺したんだよ。だから熾水鏡に吸われなかった分の奴の霊圧が君に宿ったってわけ。」

「はいはい！ 質問です。なんで奴の斬魄刀に浅打の姿がないってわかったんですか？」

「うーん。これは話していいものか？ 実は秘匿された情報なんだが奴の斬魄刀はまだ残っているんだ。これも浦原の見立てだが奴がまだ生きているのではないか、と言って

「いてだな。」

ちよつとこれまじいんじゃないか？

「…俺、寝ている時にあいつと話したんですけど夢じゃなかったりします？」

そういうと二人の顔色が一気に変わる。やはり厄ネタか。

「君の中で奴が生きているとは考えずらいがこればかりは僕はさっぱりだからね。でもその可能性に浦原が気付かないとは思えないんだよね。」

「俺も京楽と同じ意見だが、ほかに寝てるときに何かあったりしなかったか？」

「奴と話したこと以外は夢すら見なかったです。」

「一応、浦原にみてもらおうか。」

………

………

………

「おや、藤丸サン、今君がちよつとした噂になっているみたいですよ？ 四番隊救護室の名



物復活！席官でありながら隊長格に匹敵する実力か？つて。」

七年ぶりに会って早々マシンガントークなんて、なんて嘘くさい人なんだ。

「それ、浦原隊長が言いふらしてませんか？」

「ところがどっこい、今回は私じゃないんですよ。」

「ダウトっ！」

「いや本当に違うんですよ。そんなに信じられないですかね？」

なんで信じられると思ってるんだろう。

「救護室の名物って何ですか？」

「知らないんですか？寝たきり仏、隊長が複数人集まって戦うような相手に席官ながら健闘し、生きて帰ってきた勇者って話。よく大怪我した後に生き残った隊員が手を合わせてましたよ。」

「生きてるやつのこと仏っていうのだいぶ不謹慎だろ。誰ですかそれ広めたの。」

「あく、それはくそのく……夜一様にあることないこと吹き込みますよ。」うちの副隊長が広めたやつです。はい。」

十二番隊副隊長は猿柿ひよ里だったっけか、なんで恨まれてんだ。

「自分が参加できなかつた戦いに席官の藤丸サンが行けたからじゃないですかね。感謝半分恨み半分ってところでしょう。」

顔面蹴られそうで怖、近寄らんとこ。

「まあいいや。浦原さん。俺が寝てるときにアルトウロと話したんですけど」「それね、わかりません。」え、

「調べようと思ったんすけどね、不滅王は中央四十六室に取られちゃいましたし、破面もアルトウロ一人しか見たことないのでアルトウロが特別なのか破面全体がそうなのかの区別もつきません。つまりお手上げつてことです。」

両手を上げておどけたしぐさを見せると浦原さんは踵を返して歩き始める。

「藤松サンならきつと大丈夫ですよ。これからも夜一さんのところで頑張ってください。」

あの浦原喜助が希望的観測をするとか嫌な予感しかしらないんだが!?!戻ってきて浦原さん!説明プリーイイイズ!

## それに貴賤はない

光陰矢の如し、時間が過ぎるのつて矢が飛んでく位速いよな、の意。三年寝太郎もびつくりの七年寝た切り太郎と化した俺にとつて光陰矢どころかレルガンの如しだったのだがそれを知つてなおその事柄は青天の霹靂に他ならなかつた。

「やーね、お兄さん。そんなに胸ばっかり見て失礼しちゃうわ。」

七年、たつた七年である。現世ではそこそこに長い時間だが尸魂界では七年などあつた二つのマンガがある。確かに俺は最終的なメロンというかスイカというかみたいなあれを知っているがだからと言つて寝て起きたら果実が実つていたなんてすさまじい衝撃である。

「だつて！七年前はつるーんべたーんすとーんだつたじやぐえがぎやぼげえ」

乱菊ちゃんのアップパーブロウを華麗に躲したと思つたら後頭部にまつ梨のエルポ―が直撃しルキアちゃんから飛び蹴りを食らい乱菊ちゃん渾身の正拳突きがみぞおちに刺さる。

「ごめん乱菊ちゃん。昔からちよつとスケベだつただけどあの戦いの後遺症でデリカ

シーがかけちゃったみたい。」

「せやなあ、あんだだけかつこよかつたお兄さんがこんなになってしまふなんてきつと恐ろしい戦いやつたんやろなあ。」

まず俺の心配をしてほしいんだギン君、俺起きてから二日しかたつてないんだ。

「大丈夫ですか藤丸さん！これ、ちり紙です。」

桃ちゃんは変わらさず優しいな。ちなみに冬獅郎君からは冷めた目で見られている。君たちも少しは心配してよお！

七年たった今では乱菊ちゃんは現在真央霊術院の五年目であり成績も非常に良いらしく今年には死神に成れそうとのこと、ちなみにギン君はもうすでに死神である、二人とも化け物かな？

「ギン君そろそろ席官だっけ？二人とも才能の塊すぎて俺心折れそうなんだけど。」

「何いつてるのよ。私たちはまつ梨ちゃんに修行も見てもらつてるから才能だけじゃないわよ。それに二人ともたった二年で真央霊術院卒業したんでしょ、しかもお兄さんは大虚の群れに襲われて生き残つてるし人のこと言えないんじゃない？」

俺は十年ほど隊長に修行をつけてもらつて2年なんだけど、二人とも席官から1年教わつただけで現役合格とかおかしいよ。

「世の中はおかしいことだらけだ。」

「何変なこと言ってるの、藤丸なんて一年未満で三席でしょ。私まだ五席なんだけど。」  
七年強で五席もたいがいだと思う。

「ま、まあ兄ちゃんの回復祝いなんだしこれくらいにしとこうぜ、みんな湯呑を持ったか？それじゃあ藤丸の兄ちゃんの回復を祝してっ！」

「「「「「「かんぱーい!!」」」」」」

伊花様が用意してくれた極上の弁当と、米の深いコクを楽しめる純米酒と

「酒を飲みながら見る美女の舞はサイコーだなあー!!」

「藤丸さん、盃がからですよ。ささ、もう一杯。」

霞も美しく育った。胸は控えめだがわずかなふくらみがその存在を主張し儂げな雰囲気を持つ霞の魅力をより一層際立たせて…

「エロくなつたなあ。霞、俺の女にならないか？」

「またまた、ご冗談を。いつだって藤丸さんはまつ梨ちゃんに夢中でしよう？一夜だけ私に夢を見せてくれるというのならやぶさかではありませんが。」

かあー！！！そうだったあー！！俺には世界一エッチで可愛い妹がいるんだつたあー

!

「誰？藤丸があんなになるまで飲ませたの。」

「霞がぐいぐい飲ませてるだろ。まつ梨ちゃん、親友があんなになってるからって目をそらしちゃだめだぜ。」

風久利でやってた宴会は途中から自警団も加わり小規模なお祭り騒ぎとなっていた。まつ梨、乱菊は調子に乗ってる藤丸にドン引きし、桃、恋次、冬獅郎、ギン、ルキアは風久利の治安に驚いていた。

「にしても76地区とは思えねえほど治安がいいな。これ全部藤丸がやったのか？」

「藤丸さんだけじゃねえけど、間違いなく俺らの大将は藤丸さんだぜ。」

「藤丸さんって小さいころどんな人だったんですか？」

「頭脳明晰、冷酷な面も見せながら俺たち家族に対しては底抜けに明るい人だったよ。」

藤丸がまつ梨と乱菊にセクハラをかまそうとしてビンタされてるのを見ながら自警団の面々は藤丸の復活を祝い、祭りは夜更けまで続いた。

.....

.....

頭いつてえ、吐き気がないのが幾分かましだが、がつつり二日酔いだな。今日は普通に出勤なのに碎蜂ちゃんに怒られそう。さてと、そろそろ起きて出かける準備を（むにゆ）…

左をみれば小ぶりの乳房を露出させた美女…霞、右を見れば大ぶりの乳房を露出させた妹…まつ梨、そして毛布をめくれば全裸の

俺……………  
卒業した？

……………

……………

…

「おはようございませす。」

「藤丸、久しぶりじゃな！元気に…どうした？」

七年ぶりに復歸する部下を見て喜色を示した夜一であったが藤丸は死にそんな顔をしており頬にきれいな紅葉跡ができてゐる。大前田、碎蜂などの席官達も何事かと集まり藤丸に質問する。

「…しました。」

「何て言つたんだ？」

ぼそぼそとしゃべり聞き取れないため碎蜂が聞き返す。

「妹とその親友を酒の勢いで犯しました。」

唐突な罪の自白に皆絶句する。ついこの前まで目覚めるかどうかもわからないと言われていた同僚がいきなりとんでもないことを言い出したのだ。快気祝いなどを用意していた面々もはやどうすればいいのかわからない。終わりである。

「そ、そうか。ふ、藤丸には今まで通り三席として働いてもらう。よろしく頼むぞ。」

(汗)

夜一は思った。無理だ、今まで通り接することができないわけがない。頬についた紅葉跡を見るに強姦だったのだろう。罪悪感でつぶれかけているあやつをこれからどんな目で見ればいいのかわからない。



碎蜂は思った。最低だ。あんな奴死ねばいい。まつ梨とその親友に話を聞きに行こう。そして殺そう。

大前田は思った。変わらず接してやろう。あいつにもいろいろあつて今回の間違ひも間違ひだと理解しているつばいなら、その反省を次に生かせばいい。

実は霞が煽つたせいでまつ梨がその気になり、藤丸は二人を食つたのではなく食われたのだが、残念ながらその事実を知るものはここにはいなかった。

オレ、オマエノイツテルコト、ワカラナイ!

ヘンタイの汚名を雪げないまま約一年が過ぎた。ていうか雪ごうとしてない。いまだにまつ梨と肉体のつながりはあるし、霞もセから始まってドで終わる奴である。

「碎蜂ちゃん、夜一様は？」

「近寄るなヘンタイ! 夜一様は今は会議のため一番隊隊舎に居られる。何か用があるなら聞き届けるが。」

「この辺でためてた休暇を一気に消化しようと思つて、ちよつと長期休暇の申請をね。」  
「三席の長期休暇はなかなか大変なのだが、分かった。夜一様からある程度の裁量はもらっている。私が受理しておこう。」

「あんがとー」

さーで、本格的に卍解習得頑張ってみますか。

いつもの修練場で俺は瞑想をすることで斬魄刀との対話を  
ドプンツ

急に内臓が引つ張り出されるような感覚に思わず目を開ける。そこは何もなくただ森が広がっているだけだったが先ほどまで俺がいた修練場は荒野である。

「やーっと来たか。」

背後から声があったので振り向くとそこには小さい俺がいた。

「竜条丸、なんだその姿。」

「なんだって、みりゃわかるだろ。お前だよお前、お前と話すならこの姿が一番いいんだ。この場所もお前が妹のために果物や野草を取ってた場所だよ、憶えてる？」

「いわれるまで忘れてた。でも対話ってこんななのか？」

「さあ、ほかの斬魄刀のことは知らないね。でもなんだっていいでしょ？俺はただお前と話そうと思っただけなんだから。結論から言うよ。今の藤丸に卍解は使えない。だから俺が名前を教えることもない。」

「まてまて、名前を教えないってのも気になるが話したいことはまだあるんだ。」

「あ、そーお？ならもう少しだけ話してあげようかな。」

あぶねえ、こいつ本当に会話終わらせる気だっただろ。

「お前はなんで昔と喋り方が違うんだ？アルトウ口戦の時にはもう違う口調だったよな。」

「俺はもう藤丸の魂を映してるから。次。」

「まてまてまて、もつとしつかり教えてくれよ。」

「といつても、これが全部だよ。ハイ次!」

意味が分からん、えーと、次は、

「何でまつ梨と俺に同時に同じ声が聞こえたんだ?」

「俺と虎洵丸は元は同じだから。次。」

「俺が知れることと知れないことには何の違いがあるんだ?」

竜条丸のひらめきは過去、今、未来を見れるものではあるが見えるものと見えないものがあり、過去は一年分の過去を知れるものから五分程度前しか見れないものもあった。その理由が知りたいのだ。

「俺のひらめきは零から何かしてるわけじゃない。因果を辿りそれを閃くんだから知らないことを知れないのは当たり前だ。次。」

「正解が使えないってのは習得できないって意味か?」

「ううん。文字通り修得しても使えないって意味、正確には使ったら数秒で死に至る。次。」

「もう無いな。でも本当の名前は教えてもらおうぞ。」

「そつか、じゃあ俺を喜ばせることができたなら具象化してあげるよ。」

言質はとつたぞ。ぜってえ知るからな。

「じゃあまた明日。」「また明日。」  
とぷん

水面から引き上げられる感覚とともに意識が浮上していく。あたりはすっかり暗くなり遠くに茜色の空が見える。帰るか。

そうして

「俺の一夜漬けの必殺技を見よ！ヤー！パワー！」

「…え、それだけ？」

一週間が過ぎ

「ここまではただの串カツ、ここからがマグマなんです。」

「マグマ？どのへんが？」「ヤー—————！」「タレついてないけど。」

一か月が過ぎ

「ハイッ、安心してください。履いてませんよ。」

「うん。見ればわかるよ。」

休暇が終わり

『紅の夜に愛を込めて』パンパンスパンパンスパンパンスパンパンスパンパンスパンおバカなリズムとおバカなダンスで、紅の夜にバカテンポ。』

「は？」

一年が過ぎた

「ゴツホより〜普通〜に〜ラッセ」「待つて待つて待つて。」なに？」

まだネタの途中なんだけど。

「いや、いつか気づくかなと思つてずっと待つてたんだけどさ、まさか一年間ずっとネタをやり続けるとは思わなくてさ、斬魄刀との対話つてこうじゃないじゃん？ほかのどんなか知らないけど多分これは違うと思うんだよ。な？」

「でも今日こそ笑わせることができると思うんだ。今日のやつは時そば以来の渾身の出来で思わず霞も噴き出すほど」「もとめて！無いんだよ！ヒントも出してだんだん幼くなつてるのに！なんで！気づかないの！」

確かに幼くなつてるのには気づいてたけどそれは、

「体内回帰できるくらい幼くなつたら本当の名前教えてくれるのかなつて」「も、お、お



「ということでも私に話を聞きに来たと。(こんなバカな子に育ってしまったって、どこかで教育を間違えたんだろうか。) 竜条丸はお前の姿をしていたんだな。」

「はい、子供の頃の姿ですけど。それで喜ばせたら具象化してやるって。」

「お前の斬魄刀はお前にとても協力的だ。ならその幼い自分がヒントという言葉も嘘ではないのだろう。幼いころ、お前が喜ぶようなことをしてやったらどうだ。」

俺が幼いころに喜ぶような…

俺の目の前には竜条丸がいる。

「お、い、い。」

ヒイイイ!カンカンだあ! (戦慄) どうして!?

「俺は喜ばせろって言ったはずだよなあ!?

子供の頃の俺怖い! 大人を殺せるすこみがあるよお。

「いったい何をしてるんだあ!?



「ま、まつ梨のコスプレ」「帰れええええええ  
!!!!!!」

ゴボバゴボゴボゴボバゴボボ!!!

働けっ!働けっ!

来る日も来る日もまつ梨のコスプレをしては飛ばされ俺は実はまつ梨だったのではないかという錯覚に陥ているがいまだに竜条丸の求めるまつ梨がわからないままさらに一年が経過しようとしていた。

「宮能三席、この書類の書き方がよくわからないのですが。」

「ああ、これについては俺がやったほうが早そうだ。書いておこう。」

「三席!夜一様四楓院 夜一:冀上司、逃げるな!働け!が仕事を残したまま逃げ出し、大前田副隊長大前田 希ノ進:神上司、いつも夜一様のせいで仕事が増える。が捕まえに行きました。」

「仕方ない。副隊長の分も合わせて俺がやっておこう、この机に置いといて。」

「師匠!また修行を見てもらいたく「夜一様捕まえるの手伝ったら考えてやらんこともない。」了解しました!行ってまいります!」

「宮能三席。十一番隊の予算案なのですが、妙に多くて。」

「刀に使う資金と隊舎の修理費を半分に抑えとけ、どうせ豚の餌だ。文句を言って来たら俺か夜一様が対処する。」

「藤丸、少し働き過ぎじゃないか？俺にできる書類があれば受け取るが、」

「そうだと藤丸。もうしばらく休暇も取つてないじゃないか。私にも少しよこせ。」

「狭間八席はざま狭間はざま源十郎げんじゆうろう・男、二番隊八席、刑軍所属、碎蜂ちゃんよりちよい強い。、ありがとう。この書類ならできるから任せる。碎蜂碎蜂：ぺちやぱい、お前いつになつたら夜一様を護衛できるようにするんだ。ちゃんは書類仕事よりまず夜一様に逃げられないように心がけてください。」

「師匠！そつちに夜一様が行きます！」

「縛道の八十一『断空（だんくう）』、だあああああ逃げられた！志童志童、志童…あれ、フルネーム何だっけ？：檻理隊所属、気付いたら白打と歩法主体の戦闘方法になつてた。うん、全部堂田先生とチャッピーのせいだね。だから俺は悪くない。、追えー！」

「宮能三席、今日もお疲れ様です。」

ブラックにもほどがあるよこの部署。

「灯花ちゃんかたつむり蝸牛とうか灯花・女に見せかけた男、警邏隊所属、最近入ってきたから俺の変態騒動を知らない。そのままの君でいて。ありがと。灯花ちゃんも情報収集お疲れ様。

やっぱり十一番隊あれだった?」

「はい、真つ黒でした。早く次の剣八が現れるといいんですけど。」

「どんな奴が成つても結局戦闘狂であることに変わりはないけどね。」

「宮能三席が成ればよくないですか? 隊長格にも匹敵するって聞いたことありますけど。」

「俺が? ないない、よくて副隊長だよ。まだ疑似詠唱も4重までしか使えないし。しかも十一番隊つて斬りあい前提だから俺の強みも生かせないしね。」

鬼道も撃たず瞬間も使わず俺の剣でつばぜり合いとかマジ無理。まあ縛りプレイだからつて豚にすら勝てないのは弱すぎだけど。あの豚さえ卍解を習得しているというのに俺は、

「宮能三席は何時も霊圧消してるし、仕事はできるし、強いしで、隙が全くありませんよね。どんな幼少期を送ってきたらそうなるんですか?」

「俺が住んでたところは治安が悪くてな、妹もいたから養いつつ安全確保のために動いてたら猿山のボスになってた。」

「へえ…全然わかりませんでした。でもそんなに大変だったら大人に甘えたかったりしたんじゃないですか?」

甘え?

「妹さんの親代わりで、必死に頑張つて、真央霊術院もすぐに卒業して、そしたら人に甘えたりとかしなかつたんじやないですか？」

「そんなことないよ。親代わりの人もいたし、その人たちにいっぱい甘えて……」

俺は甘えた。でも幼いころの俺は？必死に働いて大人すら掌の上で踊らしてた頃の俺は？竜条丸が、幼い俺が求めていたのは！

「おいで。」

五歳児程度の俺の見た目をした竜条丸に俺は優しく微笑みかける。幼少期、両親を残して死んだ申し訳なき。何処かもわからない土地、著しく低い生活水準に怯え、たった一人の肉親が唯一の心のよりどころだった。妹を溺愛したのは心が壊れないための防衛本能の一種だったのかもしれない。

今泣きながら自分の腕の中にうずくまっているのは竜条丸なのか、幼い藤丸なのか、転生したばかりの十四歳のガキかも判断がつかないがそれを優しく抱き留める、愛していることが伝わるように。

☒お前は自分を大切にすることを忘れてしまった。☒

小さい体からではなく空間全体から竜条丸の声が聞こえる。

☒もともと持っていたはずの普通の感性すら壊れそれでも自我を失わぬよう恐怖だけを捨てた。☒

☒十二体の最下級大虚、ギリアン 中級大虚との戦いでお前は妹との別れという恐怖に向き合った。☒

久しく感じてなかった恐怖という感情を感じて、

☒私たちはそれすらもお前に捨てさせお前は完全に壊れ果てた。すでに恐怖は周りが傷つくことのみとなりお前自身は完全に勘定に入っていない。☒

☒それでも☒「それでも」

「藤丸は行くんだな? たとえその先に辛く苦しい未来しかなくとも進むんだな?」

ああ、いくよ。俺が死ぬまで、歩みを止めることはない。

「まつ梨?」

「いや、私は斬魄刀だよ。お前が真に力を求めるのなら、倒す相手はこれ以上いないだろう。」

俺の目の前に一本の浅打が現れ、それを握る。

「それで私を斬れたら、藤丸の勝ちだよ。私たちの力は死神ひとりも持てる力ではない。浅打状態でも難なく倒してみろ。」

重い、まともに打ち合えばそのまま戦闘不能に持ち込まれるだろう。

浅打で受け流した後まつ梨を蹴り飛ばす。

「破道の七十八『斬華輪（ざんげりん）』」

「『虎洵円舞』！」

放射状に飛んでいく斬撃がまつ梨に降りかかるが、虎洵丸を振り回した範囲から青い光の柱が出現し、それを受け止める。光の柱から飛び出してきた虎洵丸の突きを間一髪躲し、柱を避けるように肉薄する。藤丸は浅打で斬らなければならぬため何度も接近を試みるが大刀である虎洵丸のリーチは長くやや距離がある状態から刀、槍、長刀の運用でなかなか近づくこともできず、虎洵丸の斬撃をかいくぐった時は『虎洵円舞』で地面から光の柱が襲い掛かってくるため、懐に潜るのは困難を極めた。

振るわれる刀を跳躍で避け、地面から襲い掛かる柱より速く疾走する。虎洵丸を地面に叩きつけ割れた大地が散弾として藤丸に降りかかる9割を躲し、7分を刀で払い、3

分を体に受けながら大上段に斬りかかった藤丸にまつ梨は後手でも追いつくと言わんばかりの速度で大刀を振り上げハバキの斧部分で浅打をからめとる。直後藤丸はここで詰め切らねば勝利はないと、自身の苦手とするつばぜり合いに持ち込む。

「うおおおおおおお!!!」

霊圧は人より多くつばぜり合いは苦手だが決して負け筋につながるわけではない。足りない膂力は根性でカバーし、少しでも自信を鼓舞するために、また相手を威圧するために雄たけびを上げる。『虎洵円舞』は刀を払わなければ使えないため正真正銘の斬術勝負に持ち込まれた。

全身の筋肉を脈動させ少しでも押し込むために体重と魂を刀にかける。浅打は徐々に強い光に包まれ刀身から霊圧が噴き出しその光自身が刀となる。

「みづとー」

その光は虎洵丸を斬り裂き、まつ梨を貫く寸前で元の浅打に戻った。

「これで、俺の勝ち?」

まつ梨の姿を取っていた斬魄刀も元の浅打の姿となる。

☒ ああ、教えよう、我が名は虎叫竜条丸だ。 ☒



「浦原さーん！ 卍解修得したんですけど死神一人に使える力じゃないって言われたんでどっか安全なところありませんか？」

「そうっすねえ、涅さーん！ なんかこの前、被造死神のデータ測る実験場作ったじゃないですか！ 貸してください！」

「またかね！ まったく、くだらないデータだったら承知しないヨ。」

！  
涅さんも俺の卍解見るんだ。じゃあ早速俺の卍解お披露目と行きますか！ ワクワク

「卍解、虎叫竜条丸！」

ゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾオツ

……息が……できない……

涅さんは卍解のデータを持ってウキウキで帰って行った、俺が死にかけている間に。

「藤丸さん、あなたの卍解はもしかしたら過去に確認できた卍解のどれよりも強い可能性があります。発動直後に隊長格の7倍の霊圧に到達しそれは徐々に上がっていることが確認できました。あまりの霊圧に周りの霊子が徐々に消滅する、つまりどんな霊力を使った攻撃もあなたに近づけば近づくほど威力は減少します。圧倒的です。あなたが卍解をしているだけで尸魂界自体に何か問題が起きるかもしれないほどに、ですが、貴方の魂魄がそれに耐えられない。今回は十秒ほどでしたがそれでもあなたの魂魄はつぶれかかっていた。動ける時間としては2秒がいいところでしょう。結論から言います。藤丸さん、あなたは卍解を使つてはいけません。」

せつかくの二年がすべて崩れていく音とともに俺は絶望に打ちひしがれた。

## 哀れ碎蜂

藤丸は荒れに荒れた。仕事をひたすらにこなし、後輩の仕事まで奪ってこなし七十連勤という頭のおかしい所業を行い、蛆虫の巢で暴れたものは気絶寸前の白打を10分間浴びせ続け、夜一脱走の際には瞬間まで使って追いかけて大前田と一緒に即座に捕まえ、夜一が仕事をさぼるたびに人目も憚らず碎蜂にセクハラを行った。

最近脱走するたびに半泣きの碎蜂からもうやめてくれと懇願されることもあって、夜一は藤丸を除いた席官以上のものと被害者である碎蜂を入れて会議を開くことにした。「皆の者、よく集まってくれた。早速で悪いが本題に入らせてもらおう。宮能三席をどう止めればいいのか考えてほしい。」

「そもそも止める必要がないと思いますが。」

大前田が出ばなを挫く。

大前田は仕事をする奴が好きだ。しかも今まで自分一人しかできなかつた夜一確保という仕事をカバーしてくれるというのものはものすごくありがたい。碎蜂へのセクハラも夜一の脱走を防げない刑軍統括軍団長直属護衛軍への罰と考えればまあ許容できなくもない。今の藤丸の問題点など瞬間をいつでも使えるように上半身全裸なせいで襟

巻上裸というイケメンの変態チックな見た目から女性隊員への刺激が強いことくらいである。

「確かに碎蜂へのセクハラはそりやあもう酷いもんです。でも俺がやめろと言えば聞き入れますし、何より隊長の捕獲速度も上がって刑軍統括軍団長直属護衛軍も碎蜂を除き感謝しています。七十連勤も本人が望んでやってることだし、あいつ要領良いから必ず定時に帰るじゃないですか。碎蜂がセクハラされること以外いいことづくめですよ。」

「ま、待て、碎蜂は嫁入り前の乙女だぞ？それをああも官能的な手つきで触るのは碎蜂の教育に悪いと思うんじゃないか？」

「もう散々触られてるし今更だと思えますけど。それに夜一様が逃げなければ碎蜂が藤丸に触られることはありませんよ？」

頼みの綱である大前田に見捨てられた碎蜂は静かに涙を流していた。実際困っているのは皆の前で痴態を晒したり、どこがとは言わないが少し育ってきている碎蜂とその罪悪感とサボれないことでストレスがたまる夜一だけなのだ。組織として歓迎されていることでありどうすることもできない。さらに言うなら夜一が脱走しなければ碎蜂という被害者もいなくなり困るのは夜一一人に収まる。

「あの一、発言よろしいでしょうか？」

「良い。狭間八席、言うてみる。」

ここで、藤丸の元先輩であり二番隊の中で特に仲の良い狭間から爆弾が放られる。

「あまり言いたくはないのですが、碎蜂女史が、その…襲われる可能性はあると思います。」

碎蜂は悲喜交交していた。自分が助かる可能性が出てきたとはいえ、より絶望的な未来がまっているかもしれない。碎蜂がどれだけ全力で足掻いても藤丸は鎧袖一触できる強さを持つ。襲われたらまず碎蜂が助かる可能性はないだろう。

「…いや、いやいやいや、さすがに、流石に無い、よな？な？」

「…ああ、藤丸はいい奴だしあの件はちゃんと悔いていた、はずだ！たぶん、きつと、そうだよな？」

皆が確信に至れずお互いに質問しあつてる姿を見て碎蜂は絶望した。心を殺すことができないことを今日ほど悔いたことはなかった。

「…まあ、結論はまだ急がなくてもいいじやろ。」

碎蜂は最後の頼みの綱である夜一をうるんだ瞳で強く見つめた。そこに打算などなく夜一ならまだそうにかできると思つたからだだが、

今日は解散じゃ。すまんな碎蜂。」

近くににいる自分にしか聞こえない声で謝罪されたという事実から自分が解放されることはないのだと悟ってしまった。そこに死神どつちの死神かほご想像にお任せする。

の足音が迫る。

「よ〜る〜い〜ち〜さ〜ま〜」

突如夜一の背後から声がかかる。夜一と碎蜂以外の関係ない面々まで身の毛がよだつ。

「ど、どうしたんじや藤丸。何かあったかの？」

「どうしたもこうしたありませんが、夜一様の机を整理していたらこんなものが見つかったんですが。」

そういつて取り出したのは藤丸が作成した十一番隊の予算削減案であり期限は今日まで、夜一の確認が取れないと受理されない書類であった。

「そ、それか、これから受理しようと思つてたのじや。五分もあればこの程度の確認くらい、「定時まであと一分です。」

現在17:59分藤丸の定時は夜勤でもない限り6時でありいつもならあと一分で帰宅である。

「俺これ受理されるまで帰れないんですよ。つてこ・と・で、

ソ〜イフオ〜ンちや〜ん!」

「ヤメロオオオオオ!!! (泣)」

夜一以外の全員は誰も切れた藤丸にかかわりたくなかつたため最後の情けに痴態を

見ないようさつさと帰った。大前田だけはほどほどにするんだぞと声をかけて帰って行った。

……

…

「ああ♡ああつあ♡ああつゝ、♡やああつあ！♡めて、♡」

哀れ碎蜂。

……

……

…

「藤丸君最近元気そうね。何かお仕事でいいことでもあったの？」

「はい！最近すごく仕事が楽しくてですね！」

「うむ、お前が無茶をしなくなるのはとても良いことだ。確かに修業は大事だがお前は  
ずつと程々という言葉を知らなかったからな。全力なのはいいことだが、あんまり自分

を追い詰めるようなことはしないようにな。」

今までさんざん生傷を作り常に修行で精神をすり減らしていた藤丸がやけにツヤツヤしているのを見て伊花も征源もとつても喜んでいた。まつ梨はなぜ兄がこんなにつやつやしているのか知っていた、というか本人から何とかしてくれというSOSまで受け取っていた。

「(碎蜂さんの尊厳が破壊されるだけでみんなが幸せならいつか。)」  
所詮、まつ梨は藤丸の妹だった。

……

……

…

「冬獅郎君死神に成らない?」

「何ふざけたこと言ってるやがる。」

藤丸は、冬獅郎、桃、まつ梨、そして冬獅郎の祖母がいる中でいきなりそんなことを



言い出した。

「冬獅郎君、凄い靈圧が大きくてこのままだと近くに人無差別に凍り付かせちゃいそうなんだよね。」

これは本当である。このまま何もしないとおばあさんは死んでしまうだろう。桃と冬獅郎の祖母は俺たちの会話を心配そうに見つめている。

「じゃあどうすればいいっていうんだ。」

「これを何とかする方法はただ一つ！死神に成って靈圧の制御方法を学べばいい。」

これは半分嘘である。藤丸の襟巻をあげればそんなことしなくても何とかなる。

「冬獅郎君が心配していることはわかるよ。おばあちゃんが心配なんだよね？でも一考の余地はあるんじゃないかな。給金もいっぱい出るから贅沢もさせてあげられるし帰ってこれないわけじゃないよ。僕たちみたいにさ。」

お前強いから本編にいないと詰む可能性あるじゃん？冬獅郎君には悪いけど、日番谷冬獅郎はどうしても必要なんだよね。

「時間はいっぱいあるしゆっくり考えてよ。俺は冬獅郎君の意見を尊重するから。」

そうそう、ほんととはこんな早くに入らないしあと十年位は全然時間あるから。

## 覗きと黒幕と白い仮面

……

……

…

無いよおー！剣あるけど時間無いよおー！

いやあのこんな焦ってんのは訳があつてですね。仮面ヴァイザードの軍勢の事件しかと決め込もうとしてたらなんか知らんけど夜一様からばれない様に探つて来いつて命令飛んだんで急行中です。藍染関係はいやだー！

大男が小さい少女を襲っている。少女の方は死神のようでなかなか素早いが大男はそれを凌駕しており拳を振るう。

あーあ、六車隊長虚化しちゃつてんじゃん。ひよ里ちゃんぼっこぼこだ。いけ！もつ

とやれ！俺に仏とかふざけたあだ名付けるからそうなんだよバーカ！おおっとここで平子隊長が乱入！史実より隊長歴は浅いがどのくらいの強さかな？…一太刀であの拳弾いてるところ見ると全然原作に劣ってなさそうだな。まあどうせそこで剣が鈍るんですけど。他隊長も合流してるけどこれにばれないようにするのなかなか骨が折れる仕事だ。碎蜂ちゃんに八つ当たりだな。

「手足の健、斬るよ。右半分、あんたがやりい。」

「オールライツ！」

おうおう結構善戦してるじゃん。もうこのシーン読んだの100年前くらいだから覚えてないけどこんな風に勝てそうだったっけ？六車隊長一人じゃ負けちゃいそうだが、ん、上になんかいるな。あれ久南副隊長か？鳳橋隊長死んだ臭いが。

「ローズ！」

「白か！」

久南副隊長の猛襲えげつないけどあれ片手で捌く平子隊長もやるな。

『『五柱鉄貫（ごちゆうてつかん）』、皆さん、走るの速いですね。』

ハッチさんお久。アルトウ口戦以来ですね。

「縛道の六十三『鎖条鎖縛（さじょうさばく）』…真子さん、これは一体どうなっているんですか？拳西さんたちはどうして、」

腕力だけで『鎖条鎖縛』を引きちぎりながら拳西が立つ。

きつと今京楽隊長が七緒少女に感動的なこと言ってるんだろう、残念ながら叶わないけど。地面に叩きつけられた矢銅丸副隊長へ追撃に入ろうとした拳西隊長を鳳橋隊長が鬼道で逸らす。

「そんな傷だらけで何言ってるんだ、俺だけでいい。お前ら、後ろを頼む。」

愛川隊長もボロボロなんだけど、ここ俺出て行かなかつたら怒られる感じ？

「縛道の九十九『禁（きん）』！」

黒い紐が拳西隊長に絡まり地面に縫い付けられるよう杭が刺さる。今度こそ決まった。ぼいな。

「しん・しん、じ：は、な、せ。」

まだ終わらないんかーい！いいよもう！藍染出て来いよ！居るんだろう、どうせさあ！

「リサー！ローズー！ハッチー！、ぐはっ！」

急に愛川隊長が周りをきよろきよろ見回して仲間たちの名前を呼びながら東仙五席に刺された。閻魔蟋蟀つてはたから見たらこんな滑稽なの？クッククww、ここで笑ったら即バレるぞ！堪えるんだ藤丸！

「東仙、お前自分とこの隊長を裏切ったんか。」

コツツ、コツツ、コツツ、

「裏切つてなどいけませんよ。彼は忠実だ。ただ、忠実に僕の命令に従つただけにすぎない。どうか彼を許してやつてはくれませんか？平子隊長。」

ギン君そつちについちやつたか。乱菊ちゃんの前でお尻むき出しペンペンの刑にしてやる。

「藍、染、やつぱしお前やつたんか。」

「気づかれましたか。流石ですね。いつから？」

「あたりまえやろ。お前が、母ちゃんの子宮ん中おるときからや。俺はずつとお前を危険やと、信用できひん男やと思つとつた。せやから俺は、お前を副隊長に選んだ。お前を監視するためや。」

「感謝しますよ。平子隊長、あなたが僕を深く疑つてくれたおかげで、あなたは気づかなかつた。」

「気づいとおつた言う取るやろがい「いいえ、気づかなかつたでしょう？…このひと月、あなたの後ろを歩いていたのが僕ではなかつたということに。敵に、この世界のあらゆる事象を僕の意のままに誤認させる。それが僕の斬魄刀、鏡花水月の真の能力です。その力を指して、完全催眠と言ふ。あなたは鋭い人だ、平子隊長。あなたが普段、ほかの隊長が副官に対するそれと同じように僕と接していたなら、あるいは見抜くことができた

かもしれない。だが、あなたはそうしなかった。あなたは僕を信用していなかったがゆえに、いつも僕と一定以上の距離を保ち、心を開かず、情報を与えず、決して立ち入ろうとしなかった。だからあなたは気づかなかったんです。僕が全くの別人にすり替わっても。僕の身代わりをさせた男は、僕の普段の行動とあなたや他の隊士、隊長に対する受け答えのパターンをすべて完璧に覚えさせました。もし、あなたが僕のことを完璧に理解していたなら、わずかな癖や動きの違いに違和感を覚えたでしょう。あなたが今そこに倒れているのは、あなたが僕のことを何も知らないおかげなんですよ。

「お判りいただけましたか、平子隊長？」

「藍染……」

「それからもう一つ、あなたは先ほど僕に、監視するために副隊長に選んだ、と言いましたが、それは全くの間違いです。隊長の副隊長の任命権と同様に、副隊長側には着任拒否権というものがあつたのを覚えていますか？ まあ、実際にそれが行使されることは稀ですが、それでも僕には副隊長にならないという選択肢もあつた。なぜそうしなかったか。理想的だったからです。あなたのその、僕に対する過大な疑念と警戒心が、僕の計画にとつてまさに理想的だったからです。わかりますか？ あなたが僕を選んだんじやあ無い。僕があなたを選んだんです、平子隊長。あなたは仲間たちに謝罪すべきかもしれません。あなたが僕に選ばれたがために、あなたもその仲間も、そこに横たわる

羽目になったんですから。」

「藍染！」

平子は怒りのあまりに刀を抜き藍染に斬りかかろうとするが突如左目と口から白いなにかを吹き出し狼狽する。

「安い挑発に乗っていただいて、ありがとうございます。」

「くそっ！俺もか。」

その白いなにかが平子の顔に張り付き仮面を形作るとともに、ほかの死神たちからもそれが一斉にあふれ出す。

「藍染！なんやねんこれは!？」

ズキッ

ぐあああああ！

仮面から走る痛み思わず声が出る。

「やはり興奮状態のほうが、死神の虚化は速いようだ。」

「虚化？なんや、それ…」

「真、子、」

「知る必要は、無い。要」

「はい。」「やめえ！」

東仙は愛染の命令と同時に刀を抜きひよ里に斬りかかるが、  
ガキーン！

それは一人の死神によって防がれることとなった。

「ここでひよ里が殺される展開あったかどうかもう忘れちゃったから出ちやったよ。どっちだったっけなく？何はともあれまずいことに変わりはない。

「む、貴様は！」

「やつと出てきたか。ずいぶん遅い登場じゃないか、寝たきり仏。」

「その二つ名止めてもらっていいですか！？自分気に入ってないですけど！ギン君、今ならお尻ペンペンの刑で勘弁してあげるけど、どうする！？」

「…おにいさん。」

「お前は、隠密鬼道の…」

今までずっと見てましたって言ったなら怒るかな、怒るよな。



「ずっと潜んでたんは見逃してやるわ。ちよつくら手伝つてや。」

「あざーす！この藤丸、誠心誠意お手伝いさせていただきます！」

「ほう、虚化しててもそんなに動けるとは。」

一二対三、そのうち二人は傍観だから実質二対一！かつたながはは。

「どうしますか？」

「そのまま続けて構わないよ。サンプルが一つ減るだけだ。」

何勝った気でいるんですか？

「東仙五席が負けるんですよ？減るのはサンプルじゃなくて手下ですけど？耄碌するにはまだちよつと早いんじゃないですか？閃け、竜条丸。」

「サンプルかい、おもしろいこと言うてくれるやんけ。」

二人係で東仙に斬りかかる。未来の隊長と言えども今は実力を隠しているとはいえず、所詮五席、俺や平子隊長の斬撃をすべていなすことはできず一つ、また一つと傷が増えていく。

「なんや、押されとるやないか。」

「ああ、そうだね。」

平子隊長に軽く弾き飛ばされた東仙五席が平子隊長に斬りかかろうと迫るがそのわきをすり抜けて俺が背後から斬りかかる。

「忘れてもらっちゃ困るなあ。」

お互いの剣が弾かれてもう追撃がないと思っっている東仙の死覇装を片手でつかみ、自分の体を地面に倒しながら回転させ東仙の頭を両足でつかむ、喰らえ！俺式必殺、フランクエンシュタイナー竹蜻蛉！東仙の額が地面にぶつかりゴリツつと嫌な音が鳴る。死んだ？

「申し訳ございません、直ちに、とどめを。」

無理だっってお前ひとりじゃ。はよ潰れてもろて。

「心配いらないよ、要。こうなることも想定済みだ。それに、虚化のスピードにも個人差があるということにもね。」

平子隊長の仮面がさらに体を侵食する。ちよいヤバめだな。早めに蹴りをつけるか。  
『瞬間・閃光蒼幻』

「なかなか面白いものを見せてもらいましたよ。ですが平子隊長はここまでのようですね。最後に、憶えておくといい。目に見える裏切りなど知れている。本当に恐ろしいのは、目に見えぬ裏切りですよ、平子隊長。」

ちよつとびつくりするぐらい喋っている藍染に対して俺は無言で東仙を殴り斬りつけ蹴り飛ばす。オラツ！いい加減に沈めっ！かはっ！ん？なんか口から出た？

「さようなら、あなたたちは素晴らしい材料だった。」

「くそおおおおおおおおおおお！」

そのとき、闇夜に紛れて黒ずくめの男、というか浦原さんが藍染に斬りかかる。遅いですよ浦原さん！

「藍染副隊長。ここにを？」

「現在、二番隊隊士と交戦中です。御覧の通り、偶然にも負傷した、始末特務部隊の方々と、虚のような霊圧を持った二番隊隊士と遭遇し、交戦していました。」

「お前、よくもぬけぬけと。」

嘘つきすぎだろ。でもなんか俺の顔にもついてるんだよな。仮面つてわけじゃなくて顔の右側に変な突起がついてるような。

「なぜ、嘘をつくんですか？」

「嘘？副隊長が隊長を助けようとするごとに、何か問題が「違う、引つかかっているのはそこじゃない。これが負傷？これは虚化だ。魂魄消失案件、次々と隊士たちがかき消えるようにいなくなり、さらにこの事態に至った。おそらくそれは、虚化の、実験っす。何者かのね、ま、この状況で今更何者か、なんてぼかす必要ないかもしれないっすけど。」  
「なるほど、やはり君は、思った通りの男だ。今夜ここへ来てくれてよかった。ギン、要、引くよ。」

「待て、藍染！話はまだ、「避けてください！浦原殿！破道の八十八『飛竜撃賊震天雷炮

（ひりゆうげきぞくしんてんらいほう）』！」

やっぱ!? あれ本当に一人から放たれた鬼道か!? 青い稲妻の極太レーザーが藍染に向かつていく、あれであいつ死なないとか、マ?

「縛道の八十一『断空（だんくう）』」

ねえ、歩きながら詠唱破棄で後ろも見ずに使っている鬼道じゃないんよそれは。俺これ抑えなきゃいけないの嫌なんだけど。

直撃した場所から物凄い熱量を持つ火柱が周囲を巻き込みながら上がっていく。その淵を俺は最短距離で回り藍染に攻撃を仕掛ける。

「馬鹿な、副隊長が詠唱破棄で、私の鬼道を止めた?」

「馬鹿な、なぜ虚化しているのにもかかわらず平然と動ける? いや、それ以前にその仮面は一体?」

仮面じゃないです。これは顔から生えた愉快的オブジェクト。つまり虚化が全然進行していないということです。動けるのは当たり前だよなあ!

「藤丸さん、その仮面は、アルトウロの、一体なぜ?」

浦原さん。この緊急時にどでかい情報でぶっ叩くのはやめてください死んでしまいます。え!? 俺あいつの仮面の名残みたいな生えてるの?」

「はっはあー! いくら貴様とはいえ死にかけの屑屑とギン君庇って戦えるかな?」

戦えるんだろうな。はあやだやだ。バイブス上げてかないとやってらんないわ。

「最初からクライマックスだぜえー！」

破面篇ここで終了させてギン君&乱菊ちゃんとシロちゃん&桃ちゃんのいちやらぶ  
見るだけの期間にしてやらあー!!

まさか俺が仮面の軍勢!?! 篇

俺 t u e e e ! . . . なんか違くない？

藍染という天才だったとしても未来を見通せるわけではなく、ほんの少しの誤差などはおこる。藍染の恐ろしいところは、その誤差を即座に修正、もしくは誤差を計算に入れて作戦を練り直すところだ。だからこそ細かい実験の進行速度のズレや、アルトウロという脅威が出たとしても問題なく計画を遂行できていたはずだった。しかしアルトウロという存在は誤差でしかなかった藤丸を脅威へと引き上げていた。

藤丸の存在を知らなかったわけではない。その少年は朱司波、浦原、そして自分の三人で見回りをしていた時に発見されたのだから。浦原に修行を頼んでいたのも知っていたが倫理観を考慮した修行しかやらず命の危険がある修行は課さないだろうと読んでいた。大虚を一人で複数体相手した話も聞いていたがそれだけ才能があったとしても強さの上限は副隊長格が限界だろうと考えた。アルトウロという存在が出てきたとき、はじめて自分より霊圧の高い存在に出会ったがために計画に大幅なズレが出たが順調に平子が隊長になり自分が副隊長に慣れたことで計画の遂行が早まったとさえ思い、アルトウロとの戦闘に生き残った藤丸の存在など、朱司波、浦原の両名が必死に守った

結果それでも瀕死になった弱者という印象しかなかった。

「(だが、これは:~)」

手数と霊圧頼みの軽い斬撃。瞬神夜一どころか、浦原にも及ばぬ歩法。鬼道の技術と、瞬間という技は目を見張るものがあるが、前者は自分には遠く及ばず、後者もいくら速くなったところで私に聞くわけもない。その程度の強さだからこそ、いまだに自分と渡り合っているなどありえない。

「これは、思わぬサンプルだな。」

「喜んでんじゃねえぞ変態眼鏡!」

Fuuuuuu!!俺強くない!?俺強いつて!俺Tueeeee!!転生してから始めて俺つええしてる!護廷十三隊全員相手取って戦えるバケモン相手に浦原さん、鉄裁さんが手伝ってくれてるとはいえもう5分も戦ってる!俺Tue:いやこれ俺Tueeじゃないわ。あれもつといきり散らかせるもん。

「これは、思わぬサンプルだな。」

「喜んでんじゃねえぞ変態眼鏡!」

仕事終わりで眠くて疲れてる俺のことぼこぼこにしながらすげえいい空気吸いや

がって、やろうぶつ殺してやる！

『竜天蒼瞬』！』

竜条丸の力を借りて因果を弄り時間を飛ばす。なので結果だけが残る。キングクリムゾン！飛ぶのは俺だけなので厳密にはちよつと違うのだが、具体的には俺が振りかぶった剣が次の瞬間には別の場所でありその軌跡が斬れている、みたいな。ちなみに飛ばせるのは0.0013秒ほどなので剣を振りかぶっても次の瞬間には刃先が三センチほど動いてるだけなのだが。

「ほんのちよつと俺の体がぶれるだけでもやりづらいよなあ！」

未来を知ることができる俺が使うとすごい強くなる（小並感）。ふはは、先の先の先だぞお！

0.02秒の先の自分のうち九割八分はすでに死んでおり、そのうち一分二里は致命傷を負い、残りの八里を常に変更し続けなければいけない藤丸は自分が一步でも間違えば死ぬというストレスに精神をむしばまれていた。

鉄斎と浦原に仮面の軍勢の面々を任せ、一人で戦い続けながらまだ一分しか経過していないが八里あった未来も今や二里まで狭まっている。それでも藤丸は起死回生の一手を探っていた。



「ふむ、罅が明かないな。砕けろ、『鏡花水月』」

来た！来た！相手に小休止が挟まれたタイミングで藤丸は首元に手を持っていき襟巻（二代目）を引きちぎる。再三言うが藤丸の能力は全知全能（ジ・オールマイティ）に似ているがまったくの別物であり、因果を辿っているため五感情報として知るだけで、竜条丸からの閃きに間違いは起きない。つまりこの瞬間、藍染の始解は完全なる隙となり、藤丸に自信の枷を外すための時間を作った。

「滲み出す混濁の紋章 不遜なる狂気の器 湧きあがり・否定し 痺れ・瞬き 眠りを妨げる 爬行する鉄の王女 絶えず自壊する泥の人形 結合せよ 反発せよ 地に満ち己の無力を知れ」

現在藤丸が使える最も威力のある鬼道であり、重力に干渉するそれは『断空』でも止められることはない切り札。

「破道の九十『黒棺（くろひつぎ）』」

藍染を囲むように黒い箱が出現し、その中にあるすべてを押し潰す。だが未来を知る藤丸は『竜天蒼瞬』まで使つてその場から飛びのく。瞬間藤丸がいた場所におなじように黒棺が出現し草木の一切を地に押しつけた。

「此れすら躲すか。謝罪しよう、宮藤藤丸。私は君の一切を見誤っていた。どうだい？君もこちらに來ないかい？新しい世界を見せてあげおう。」

「ほ…… ほんとに……？ 俺の「命」……は…… 助けてくれるのか？」

なんてひどい提案だ。俺がほぼ断れないのを知っててこの提案をしているじゃないか。

「ああ、本当だとも。君がこの手を取れば君は僕たちの仲間だ。」

ギン君もそつちにいるし何なら行ってもいいのでは？

なぐんて

「だが断る。この宮能藤丸が最も好きな事のひとつは自分で強いと思ってるやつに「N O」と断ってやる事だ……」

「そうか、残念だよ。」

そうして藍染隊長の姿は消え俺の背後に回り込み後ろから斬りかかる。なので俺は後ろに掌を向けて

「虚閃」

霊圧の塊を閃光として射出した。

「驚いてくれましたか？ 渾身の一発芸だったんですけど。」

「ふ、ふはははははは！ そのふざけた言動も黒棺が破られるのもすべて仕込みだったと？ 面白い死神だ、思わず殺すのが惜しくなるほどに。」

虚閃ぶっぱなしたことに驚いてほしかったんだけどなんか違うところでツボってるな。虚化しても勝てないのはシヨックだったが、まあここが潮時か。

「あーもうやめやめ、俺はここから逃げますよ。」

「それを私が許すだけでも?」

「許すでしょ。こんな面白いサンプルが残るって言うんなら、浦原さんのところに言つてデータでも取ってもらいますかね。あなたの策略で浦原さん捕まったりするんですよ?俺のデータ簡単に取れるんじゃないかなあ。」

「いいでしょう。乗ってあげますよ。」

うん、知ってた。

「んじゃ、愛染副隊長、またどこかでお会いしましょう。さようならー!」

逃げる逃げる!これからやることはたくさんあるぞ!時間外労働の始まりだー!

仮面の消し方わからないのまずくね?

.....

…

…

まつ梨と征源様と伊花様にお別れを告げたけど、なんかすごいすんなり許してくれたな。俺離れ離れになるから泣いちゃったのにまつ梨なんかニコニコしながら抱き着いてきてびつくりした。次は碎蜂ちゃんの所がなく、手紙だけだけど、

碎蜂ちゃんの枕元に手紙を置き、寝間着を湯文字（ゆもじ）昔の下着、現代では腰巻と呼ばれる。を丁寧に折りたたみ全裸の碎蜂ちゃんの枕元に置いておく。…弁明させてください。興味本位だったんです。気配消してるとはいえ隠密鬼道がここまで気づかないのはどうかと思ってお仕置きしてやろうと思っただけなんです。思いのほか起きなかつたからどこまでできるか試していたら身ぐるみはいでしまっただけなんです。…ほら！怒りの矛先が夜一様から俺に変わってルキアちゃん救出作戦楽になるかもしれないじゃん？作戦だよ作戦、だから俺は悪くない。

ここにいたらどこまでも罪を犯しそうだ。夜一様のところ行く。

……

……

…

二番隊隊舎に戻り夜一様に報告をしに行くところには顔を隠しこれからどこかへ侵入しますと言わんばかりの夜一様の姿があった。

「夜一様！ただいま戻りました。」

「すまんな藤丸、報告を聞いている暇はない。これからちといろいろ準備しなければ…その顔のものは何だ？」

「そんなの後でいいんですよ。手はず整えて浦原隊長の救出に行くんでしょ？俺も行きますよ。どのみちこっちいたら処刑されるし。」

だから逃がしたんだらうなあ。あの変態眼鏡ぜってえ何時かぼこぼこにしてやる。

「なに!？」

はい着替えて、顔隠して、浦原、握菱兩名救出作戦レッツゴー！

竜条丸が強すぎる。侵入経路に誰もいないことを見なくても知れる。何ならどうやって行けばいいかとか簡単になら分かるのがずるだ。まさか俺が先導することになるとは思わなかった。

バタンツ

「何者だ！審議中の議事堂入出の許可など、誰が与えた!?」  
皆さんお待ちかねの俺 T u e e e の時間です。

「散在する獣の骨

尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪

散在する獣の骨

動けば風 止まれば空

槍打つ音色が虚城に満ちる

動けば風 止まれば空

尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪」

「縛道の七十五『五柱鉄貫（ごちゆうてつかん）』」

これを詠唱と呼んでいいのかは甚だ疑問だが二十柱鉄貫がささる。俺が裏廷隊を抑えている間（2秒）に夜一様は二人の拘束具を破壊し逃げる手はずを整える。表から隊士たちがぞろぞろ来るがこれぐらいなら俺一人で十分であり、鬼道で蹴散らしながら進む。

………

………

…

「ありがとうつす。夜一サン。藤丸サン。」

「礼なんぞいらん。昨夜なぜ儂にも一声かけんかったと蹴り飛ばしてやりたいが、藤丸に免じて許してやる。」

これを表現する語彙なんて俺にはないわ。

「八人は全員ここへ運んでおいた。おぬしが研究しておった、新しい義骸の試作品もの

う。さっさとやってしまえ。今回の事件の話を平子に聞いた瞬間から、おぬしが考えておった顛末と、それに対する最善の策を。」

「何もかもお見通しつすね。やれやれ、やらしい人だ。鉄裁さん、平子さんたちに、時間停止をかけてください。そして、そのままこの場所に、二、三層の結界を。今から二十時間で、僕たち三人と平子さんたち八人の計十二体の霊圧遮断型義骸を作ります。現世に身を潜め、時間をかけて解き明かします。必ず、この虚化を解除する方法を。」

「夜一殿。」

「案ずるな、儂だけなら、どうとでも逃げおおせる。藤丸、そろそろその顔に付いているものについて話せ。さつき瀧霊廷内で何を回収していた？」

「これは虚の仮面ですよ。あと回収したのは不滅王です。」

「「は（なんと）?」「」」

瀧霊廷内セキュリティがっぱがばだったし不滅王の管理すげえ雑だったわ。

「なんでそんなものの回収したんすか?」

「仮面がうるさいんですよ。不滅王が欲しいって騒ぐんです。」

騒ぐ、というのは正しい表現ではないかもしれない。仮面を中心に強い欲望があふれるような感覚、そんな感じがする。自分の中にある気持ちをより具体的に言語化しようとしている中後ろから肩を叩かれる。



「藤丸！」

「まつ梨！なんでここに!？」

「今度藤丸が無茶しそうだったら付いて行かせて欲しいって浦原隊長に頼んだら作ってくれたの、発信機。」

え、ナニコレ、体にくっついて離れないんだけど。

「すいません。まさかこんなことになるとは思わず、すいませんが藤丸さんも夜一さんと一緒に行つてくれないっすか？」

いや、無理ですって。夜一様と一緒にしないでくださいよ。∴はあく言つても無駄か。

「わかりました、努力します。まつ梨、二人とお別れしてきたの?」

「うん。大丈夫。後悔はないよ。」

そっか、ならもうあとは腹くくるだけか。

「じゃ、またあとで。」

夜一様に付いて行くのキツいなー。

その日、尸魂界から六人の隊長と三人の副隊長、大鬼道長、副鬼道長、そして二番隊

三席と五番隊七席が現世へ逃走した。

## 雛鳥体験会

現世に来てからかれこれ二十年がたった。

浦原さんの研究を手伝ったり、ひたすら鍛えたり、ちよつと働いて不労所得獲得したり、仮面の出し入れができるようになったり、仮面の軍勢の虚化の修行を手伝ったりした。だから、今日こそは！

「俺の虚化の修行を手伝ってください。」

「修行も何も藤丸は最初から仮面付けることできるやん。」

「違います！俺も中途半端な虚化じゃなくて完全な虚化になってみたいんです！」

俺の仮面の付いた姿は霊圧は上がるが質は死神そのものであり虚の霊圧になっていない。だからこそ、俺にはまだ先がある。

「そんなこと言ったって、拳西の虚化を無傷で止めれる藤丸を僕たちがどうやって止めるのさ。」

「複数人口ーテで。だからこそ皆さんの時間が空いた今日にわざわざ呼んだんじゃないですか。浦原さんの協力も取り付けてますしあとは戦力だけなんですよ。」

「藤丸の頼みならしやあないわ。毎日おススメ教えてもらってるしな。」

「うちは御免やーなんでこんな奴のために働かないかんねん！」

手伝ってくれるのは真子さん、拳西さん、八玄さん、リサさん、白さんの五人か、浦原隊長と夜一さんもいるし十分だな。

浦原さんから緊急時の対処を聞き俺が暴れても対処できるよう常に夜一さんに見張ってもらいながら俺は座禅を組み、不滅王を抜く。あいつ出てきたら勝ち目ないけど、どうなんのかな。

「かえれ孵れ フエニイチエ不滅王」

その言葉とともに仮面顔を一切隠さないそれを仮面と呼ぶかは不明だがが右側から覆うように広がり意識が暗転していった。

「これが藤丸の虚化か。」

背には赤黒い霊圧の羽根が噴き出し、肌が白くなり顔に付いていた羽のような突起は左頬にも形成され顔の下半分に端から端まで伸びた口を模した仮面が出来上がり、瞳が

黄色く光る。

「喜助！アルトウロほどの危険性はないと言っておつたが本当じやろうな!」

「はい！皆さんがいれば十分抑え込めるはずっす！」

仮面の軍勢の面々（四人）は仮面をかぶり白以外は斬魄刀を解放する。

「倒れる『逆撫』さかなで」

「潰せ『鉄漿蜻蛉』はぐろとんぼ」

「吹っ飛ばせ『断風』たちかぜ」

吹きすさぶ風が容赦なく藤丸を襲うが藤丸の肌はアランカルのそれになっており手加減状態の断風は鋼皮イエロに傷一つつけられない。藤丸も敵とすら思っていないのか攻撃すらせずいきよろきよろと周りを見渡していた。

「やろう、なめやがって！」

「まちいや、なんか様子おかしくないか？」

虚化しているのにもかかわらず一向に攻撃してこない藤丸に一同が不思議がついてると目的のものを見つけたのか藤丸は顔の上部だけでもわかるほど笑った。その視線の先にいたのは…

「へ？私？」

まつ梨である。この男、寝ても覚めても、まつ梨まつ梨。春夏秋冬、まつ梨まつ梨ま

つ梨まつ梨。正気であろうと狂気であろうと死神であろうと虚であろうとまつ梨まつ梨まつ梨まつ梨である。おそらく自分とまつ梨を隔てる壁を破る為であろうか、不滅王で手を斬った藤丸は八玄の展開している断空に向けて王虚の閃光を放った。

ピシッ

万が一にもこの化け物を外に出してはいけない。最速で事態を把握した夜一の蹴りと藤丸の裏拳が交差しその隙に鉄漿蜻蛉が藤丸の後頭部を襲う。固いものと固いものをぶつけるような音が響き弾かれたのはなんと鉄漿蜻蛉であり藤丸はびくともしない。

ピシピシッ

拳西は今なお王虚の閃光を放ち続けている手に対し断風を振り下ろしあたる瞬間に風を炸裂させることで本来の火力を大幅に上回る一撃を繰り出し、そこでやっと王虚の閃光が途切れ、また初めて藤丸に明確なダメージが入る。優先事項の変更、とでも表せばいいのか自分の脅威となるであろう拳西に狙いを定め虚弾バラを連射し、躲しきれなかった拳西とそれを防ごうとした白の二人を三頭不能に追い込んだ。

「拳西・白！（あかん、下手に逆撫を使おうもんなら攻撃全部断空に当たってあいつが外に飛び出す可能性がある。かといってこのままだとじり貧や。最悪正解使用してあいつを全員の味方にした状態でやりあったほうがまだ可能性あるんちゃうか？）縛道の六十二『百歩欄刊（ひやつぽらんかん）』」

迫りくる虚閃を躲しながら縛道での拘束を試みるが、飛んで来る光の棒が体に刺さることを一切気にせず動き回り瞬間状態の夜一と白打で互角に渡り合っていた。

「縛道の七十九『九曜縛（くようしばり）』！皆さん、遅れてすみません。やたらこちらにも攻撃飛ばしてくるもんですから対応に遅れまして。」

飄々とした雰囲気をついてくる九曜縛の外套を着た浦原が姿を現す。九曜縛すら破ろうとした藤丸にさらなる縛道が襲い掛かる。

「縛道の九十九『禁（きん）』』」「縛道の九十九『禁（きん）』』」

体が黒い布に絡めとられ地に付した状態で楔に縫い付けられる。

「ギリギリじゃったの。それでこやつは帰ってくるのか？」

「ええ、おそらくもう少しで」

と浦原が言いかけたところで藤丸の肌の色が戻っていき瞳もいつもの碧眼に変わる。

仮面は砂になるように崩れ落ちそこから呆けた顔の藤丸の表情がうかがえた。

「お帰り藤丸。どうだった？」

「何か卵の殻を内側から割っていく感覚だった。…なんで『禁』二つ使ってまで捉えられているの？」

「藤丸サン暴れて大変だったんすよ。ほら、そこで倒れてるお二人の手当て藤丸サンがしてください。回道は得意でしょ？」

藤丸はこつちも体痛いのにと愚痴を言いながら二人に回道をかけていくのだった。



## 即落ち2コマ

「白ちゃんに手も出せないチキンがっ！」

「ふざけんな！お前みたいに性欲に正直なヤリチンじゃねえんだよ俺は！」

「失礼だな、純愛だよ！俺は霞もまつ梨も愛してるんだ！」

「うるせえっ！このシスコンド変態が！」

「シックスナインって体に掘ってるやろうにいわれたくないですうー！」

シスコンの変態とシックスナインの変態？が一触即発の雰囲気醸し出している。

「喜助、ちよつとあの二人止めてこいや。あんなんなるまで酒飲ましたのお前やろ？」

「やっぱ僕が行かなきゃダメっすか？」

この二人、決して仲が悪いわけではないのだ。

藤丸は拳西のことは好きなタイプであつたし、拳西も藤丸という人物が犯してきた罪の数々は許されざるものだと思うが現在の藤丸は妹と肉体関係を持つていること以外は受け入れるものだった。

ただ酒の席で浦原に酒を飲まされた時についてぼろっと霞の話を出してしまったのだ。夜一以外は初めて聞く妹と幼馴染を同時に襲ったなんて言う話に一同はドン引きもう一人の当事者は隅で冷や汗を流していた。しかしまつ梨というものがあがりながら自分を慕っている女まで犯し、さらにその女に何も伝えずを尸魂界に置いてきたという話を聞き拳西は憤った。それがこの喧嘩の発端である。最初は藤丸ものらりくらりと交わっていたのだが、

「お前は下半身に正直なだけでまつ梨も霞も大して愛してないだろ。」

という言葉で藤丸も切れた。そこからはまつ梨、霞の良いところと拳西の悪いところをねちねちと言い羞恥心と罪悪感でまつ梨のこころは死んだ。お互い売り言葉に買い言葉と熱くなつていき止められないところまで来てしまった。

「お前の腐った性根を叩きなおしてやる！」

「はあん!?」二番隊の俺相手に素手とか頭のねじ全部飛んでったんじゃないの!」

そうして寒空の下、世界一しようもない殴り合いが開始した。ボクシングスタイルの拳西は藤丸に距離を詰めて殴りかかり、藤丸はその拳西に容赦ない回し蹴りを食らわせる。回し蹴りを食らった拳西はそのまま足を掴み藤丸を引き寄せアツパーカットを放ち、頭が弾かれた反動で大きくのけぞった藤丸はその勢いを殺さずもう一方の足を跳ね上げ拳西の顎にぶつけた。お互い距離を取り次の応酬に入るかと思われたが直後どち

らも膝から崩れ落ち勝負は引き分けに終わった。

……

……

…

ガバツ

「やばー！今日の料理当番俺じゃねえか！」

拳西は急いで義骸に入りキツチンに向かうとそこには藤丸がいた。

「拳西さん、おはようございます！起こしに行つたけどいなかつたんで料理、作つておきました。」

「お、おお、なんか、悪いな昨日あんな喧嘩したのに。」

酒が入っていたとはいへ心無い言葉を投げつけた。そう考えた拳西は藤丸に謝罪し、  
「昨日？なんかありましたっけ？」

藤丸は何も覚えていなかつた。

「俺酒癖悪いんで途中からなにも記憶ないんですよ。なんか言ったなら全然気にしないでいいですよ。」

自分は申し訳ないことをしたと考え謝ったにもかかわらずこいつ人に変態だのチキンドの言ってきた、顎を蹴り飛ばしたことさえ覚えていないと来た。

「やっぱ、俺お前嫌いだよ。」

「ええっ！なんで!？」

.....

.....「つと、そーいやお前に聞きたいことがあるんだ。しつくすないんってなんだ？」

「??しつくすないんってのは六が英語でシックス、九が英語でナインといまして、ごによごによごによ...」

拳西は今後外出するときには腹を隠すものを着ようと思った。

.....

……

…

「かえれ解れ フエニチエ不滅王」

自身の能力を知るためにここ最近頻りに虚化を使うことにしている。

相手の霊力の強さや所在を測る、『ベスキス探查回路』

霊圧を集中させた閃光、『セロ虚閃』

霊圧を固めて放つ、『バラ虚弾』

霊圧感知に触れることなく移動することができ『ソニード響転』

翼から大量の虚弾をまき散らす、『イナゴタリイ・バラ翼虚弾』

強固な霊圧硬度を持つ、『イエロ鋼皮』

白い炎を纏い回復する、『サントフエゴ聖なる炎』

血を媒介にして発動する『グランレイ・セロ王虚の閃光』

高威力の黒い虚閃、『セロ・オスキュラス黒虚閃』

上記五つは虚化状態でも問題なく使えてとくに便利なのは探查回路と響転だ。常に探查回路を使いっぱなしにして響転で移動、何の探知にも引っかけからず最速で虚を殺す

ことができる。虚閃、虚弾も使えなくはないんだが不滅王が霊圧を吸収できることを考えると、不滅王、竜条丸の二本で足りる。翼虚弾とかたとえ大虚だとしても過剰火力だわ。

レスレクシオン  
帰

刃はなあ、実際藍染とかにしが使わんだろ。破面だつてG J J J 程度なら虚

化で多分勝てる。なんでこんな一護並みに形態が増えたかつてやっぱ、卍解使えないのは痛すぎる。虚化したら魂魄強くなってるらしいけど不滅王の影響で霊圧も上がってるから6秒程度つて浦原さんに言われちゃったからな。藍染に確実に勝つためには刀剣開放第二階層そう呼んでるだけで実際は別物しかないだろうけど、竜条丸で見たらあれも虎叫竜条丸なみに使い勝手悪そうなんだよ。

あいつまじ強いな。なんであんな化け物に一護は勝てたの？ていうかあれまだ強くなるの？やっぱどう考えてもこっち陣営詰みなんだけど。

「マジないわ。仕事行く。」

柄の悪い奴らが大量にいる中を俺は堂々と歩いている。

「親父！おはようございますー！」「！！」「おはようございますー！」「！！」



「殺せえええ!!」

馬鹿が！鍛え上げた肉体は拳銃だろうとパリイできる！お前らの腹をぶち抜くのはお前らの銃弾なのだ！

……

……

……

「さて、陣鉄の、ここからは大人の時間だ。」

「……何が望みだ、宮能組。報復か、」

「傘下に、甘い汁を吸わせてやるよ。断るなら、わかるだろう？」

「実質一択ということか。入らせてもらおう。」

大体全部こんな感じででかくなってる。陣鉄組の若いの先導したの俺なんだけどね。あくどい方法で金稼ぐのは楽しいなあ！



「藤丸？」

「すいませんでした。」

まつ梨にこっつてり絞られた。夜一様から聞いたらしい。あんのクソ猫があ！

## 藤丸対藤丸

雨の中、俺の前に一人の女性が血を流しながら倒れている。その傍らにはオレンジ色の髪をした一人の男の子がおり、俺に怯えながら必死に母親の名を呼んでいた。それを見て、俺は……

…

…

…

…

1982年、長かった。ぎっくり81年考えた結論はとりあえずホワイト騒動は見逃す！真咲さんを助けるかどうかは保留。ここ数年はひたすら正解の修練と食事、風呂、

睡眠以外には何もやってない。

「正解、『虎叫竜条丸』」

0秒

刀身は蒼き霊圧の塊と化し、肩の部分には虎の形をした銀色の肩当てが出現し空間に蒼い亀裂が走る。

自分の因果を手繰り寄せ別の可能性の自分呼び出し刀を構える。

0.6秒

「『虎糾絶衝』」

刀身が大きくなり空間を引き裂きながらお互いの剣を弾きあう。

1.1秒

音よりも速い剣戟により余波のソニックブームで結界に亀裂が入り始め、鉄裁は慌てて結界の修復に入る。

2.2秒

大きく展開されたお互いの翼から『翼虚弾』イナゴタリイ・バラを連射し虎叫竜条丸だけでなく不死王まで抜いて手数を二倍に増やし双方の連撃はさらに加速する。

2.8秒

お互いに一太刀すら入れていないが大幅な肉体の強化に肉は裂け、血が噴き出す。

「『王虚の閃光』」  
グラン・レイ・ゼロ

藤丸の背中に浮遊している円盤が上昇し更なる結界を展開する。その中では町一つを簡単に消し飛ばすような威力の王虚の閃光がぶつかりあい、撃ち手にさえ害を及ぼす。

5. 2秒

一秒ほど照射し続けた王虚の閃光で藤丸の張った結界は完全に破壊され、近接戦が始まる。何の技も使わず白打、斬術で戦闘をこなしだんだんと不死王から嫌な音が響くようになってくる。

5. 8秒

戦闘を辞めた藤丸は正解を解除しもう一人の藤丸も消える。片膝をつき方で息をしながらか藤丸は最上位の回道『至空華（しくうか）』で己を癒し、それを終えるや否やその場で倒れ伏し動かなくなった。

ホワイト騒動は無事終わったらしい。話を聞いた限り原作通りに進み、犠牲者も出ず、志波一心は死神の力を失った。志波先輩はどうなっただろうか。俺が何かすれば志

波都が死ぬこともなく、志波先輩がメタスタシアに単身で挑むこともなかったんだろうか。俺が転生したことで海燕先輩が強くなっていたり、浮竹隊長が海燕先輩の意思を尊重せずメタスタシアを殺してくれば…無理か、しいて言うならルキアちゃんが強くなっていることだが、浮竹隊長に止められてしまえばルキアちゃんはきつと戦いに参戦できないだろう。

過去も未来も竜条丸に聞けば知れる答えを、あえて聞かないことで俺は逃げた。

……

……

…

探査回路で虚を探し、不死王で殺す。数年前にもやっていた作業なのに、今日はやけに手に力が入る。転生者なんてきれいな物語を汚す存在でしかない。それでも俺がもう少し頑張れば助けられた人がいるんじゃないのか。小さい頃も他にやりようがあったんじゃないだろうか。昔なら気にしなかったような知らない人々の命さえ気になっ

て仕方がない。黒崎真咲を助けることは簡単だろう。しかしそれで黒崎一護に何か変化が起こって藍染を倒せなかったらより大勢の人間が死ぬ。頭がぐるぐるする。

「ちっ、今日はやけに数が多いな。久しぶりだからか？『螺旋』瞬間用の鬼道開発中にできたオリジナル鬼道、毒となる霊力を自身を中心に渦を巻くように巻き上げる。欠点、燃費ゴミ」

虚を狩りながら移動していると一人の死神が複数の虚に襲われていた。

「初の舞 『月白』」

どうして今日に限ってこういうことが起きるんだ。不死王を解放し炎を纏い変身し……やっぱい誰に変身しよう？考えてる間にどんどんルキアちゃんはピンチになって、ああ、もう変身！

「助太刀するでござるよ。」

赤みがかった茶色の髪の毛に赤い着物、薄汚れた袴、頬の十字傷……どつかの抜刀齋です。すね。

「な、死神ではない？いや、斬魄刀を持っているから死神なのか？」

「そんなことはどうでもよいでござろう？まずは虚を倒すことに集中するでござる。」

不死王と三十番台以下の鬼道で虚を倒していく。ルキアちゃん、綺麗に育って恋次君とはうまくやれて、無いんだろうな。もし俺が仮面の軍勢じゃなかったら、ルキアちゃ

んと恋次君の仲も取り持って、ギン君のことも知らん顔して仲良く遊んで、桃ちゃんもきつとまつ梨が助けるから藍染に依存することも無くても

「おい！聞いているのか!?!」

「聞いているでござる（聞いてない）。しかし某はこの後にも用事が迫っているのでここで失礼するでござるよ。」

響転ッ！

………

………

…

もしも、なんてらしくないにもほどがあるな。

「ルキアちゃんが空座町の担当死神なんだ。」

「だからばれないように気を付けてね。」

俺はちよつと危なかつたけど、早々に別姿の義骸も作らないといけないな。…なんで

あの姿に変身してしまったんだ。姿はあれでもしやべり方ぐらい変えればもつと苦勞しなかったのに。…まあ萎えてても仕方ないし新しい玩具でも作って気を紛らわせるか。

「何作ってるんすか？藤丸サン。」

「新しい義骸の息抜きにおもちゃを作ってるんですけど、結構長くなるし耐久性能も上げたいからどうしたもんかなと。」

「それなら縮小機能じゃなくて圧縮機能を使ったらどうですか？大きくしたらもう戻せませんけど。」

「なるほどお！使い捨てにすればいいのか！やつば先人の知恵つて大事だな！」

「やめてくださいよ、まるで僕が爺臭いじゃないみたいですか。」

………

??? 「寒気がする。」



## 原作をブレイクするのは転生者の流儀

そろそろ浦原さん達と尸魂界を去ってから大体九十五年が経とうとしている。  
アウスヴェーレン  
聖 別で力を奪われた後にグランドフィツシャーに殺される黒崎真咲を俺はどうしても助けない。でももしたら一護がどうなるかわからないから助けるか助けないかで思考がずつとぐるぐるしてる。

「どうしたの？ 悩み事？」

「うん。頭すつきりさせるために少し歩いて来るわ。」

.....

.....

.....

今週の天気予報は雨が連続で続いていてそれが俺に時間がないことを告げていた。

いやもしかしたら今週死ぬほど雨が降った後に五週間くらいカンカン照りが続いてそのあとまた雨が降るかもしれないから実は全然時間はあるのかもしれない現実逃避をしながら着々とフラグを立てていく。それが一級フラグ建築士。

もう探査回路でいるのわかってたんだよな。考えんの面倒くさいし適当にぶつ殺しちゃおうかな。グランドフィッシャー君、君の生殺与奪の権は他人藤丸に握られているんだよ？ 何おいしそうな魂魄探して擬態してるんだい？ お前のせいで円形脱毛症になった俺に何か謝罪の一言はないのかい？ ぶつ殺すぞ（豹変）。月島さんみたいに過去にまで干渉できる俺の正解なら何とかなったりしてくれないかな？ 実は生きてましたな、無理か。

……

……

……

探査回路で黒崎真咲の霊圧を探っていたんだが一護君の霊圧が五月蠅くて五月蠅く

て仕方ない。普段は何でもないんだけど霊と接触したときになんか気持ち悪い霊圧がグワングワン流れるもんだから一護くんしか補足できないからもう作戦変更して一護くんのほうストーキングすることに決めた。

母ちゃんと歩いている時に川辺に傘もささずに立ち尽くしているおかつぱの女の子を見つけたんだ。

「あれ、あのこは？」

その女の子は増水している川に向かって歩き出したんだ、だから止めなくちゃって思ってた、

「ちよつと待ってて！」

「一護？」

女の子はどんどん川に進んでいきそのまま川に流されそうだったから、

「ダメ！一護！」

母ちゃんが止める声も聴かずにその女の子の服の裾を掴もうとして、その手は空を切り直後意識を失った。

川辺で意識を失っていた一護が起きて最初に目に映ったのは片足がない真咲と白い

肌を持ち、マスクのような白い仮面をつけ、血が滴る刀を持った男。

「母ちゃん！母ちゃん！」

一護は真咲に駆け寄り体を揺すり、そんな真咲を男は黄色い瞳でにらみつけていた。直後男の手から噴き出した白い炎が真咲の体を覆う。

「止めろおー！」

一護が炎を払っても軽く散った炎はまた集まり真咲の体を轟轟と燃やす。一護は白い男に殴りかかるがその肌は鋼鉄のごとき固さで手を痛めるだけ、それでも殴り続けていると男はその手の平を一護の頭の上に置き一護は意識を失った。

ぎりぎりまで助けていいか躊躇ったせいで、真咲さんの足がなくなる羽目になった。

一護君を深く傷つけて……だあああああああまたミスか！お前は竜条丸とかいう最強級の斬魄刀を持っていて、虚化も卍解も帰刃も瞬間もできてなんで人ひとり助けられないんだ!?ふざけんな！ふざけんな！あああああああああああああああ  
あああああ  
!!!

……

……

…

「何や荒れとるやないか。どしたん？」

「…俺が助けるのが遅れたせいで虚に襲われていた母子の母のほうの足がなくなり、子供の方に盛大なトラウマを植え付けました。」

「何やそんなことかいな。死神なんて仕事やってればそんな事しよっちゅうや。お前はなまじ強かっただけにそういう経験が少ないんやろうな、二番隊ってことも大きいんやろうけど。それにしても、藤丸がそんなきにするタイプなんて思わへんかったわ。」

「そうですね。俺も思ってますんでした。アルトウロとの戦いで流魂街の住人がたくさん死んだときも家族や知り合いが死ななくて良かったとしか思わなかった。何ででしょうね、欲が出たんですよ。みんな助けたいって欲が。」

「ほんま、難儀なやつちやな。…お前、ほんとにそう思つとるか？」

「…急に何ですか？」

「その気持ちは本物が一度よう考えてみい。」

そういつて平子さんは去って行つた。本物も何も今俺が抱いてる気持ちだから嘘な

わけがないだろう。

「藤丸、大丈夫？」

「まつ梨、俺は大丈夫だよ。それよりも最近浦原商店手伝つてるみたいだけど、そつちに不便はないかい？」

「うん、最近ルキアちゃんもちよくちよく利用してるよ。うまくやってるみたい。」

「そつか、よかつた。」

「…あんまり無理しないでね。」

無理なんてしてない。大丈夫、俺はまだやれる。…ピシリと、心に罅が入る音がした。

# お前それマジで言ってるのか

「お兄さんおはよう！」

「はい、おはよう。」

朝から公園のベンチで日を浴びながらだらだらするのは気持ちいいな。雨がある日は傘をさしてこの辺をぶらぶら散歩するのも乙だ。

「おはようございませう。」

「はい、おはよう。」

近所の子供たちから挨拶を受け、返す。

「藤丸さん、おはよう。今日も日向ぼっこかよ。」

「一護くん、おはよう。今日も日向ぼっこだよ。」

高校一年生の黒崎一護君とはここ三年とすこしの付き合いであり、お悩み相談を受けるほどには仲が良かった。

「なあ、そろそろ働き始めたらどうだ？」

「一護君、人生は労働がすべてじゃないんだよ？」

俺は平日も休日も日がな一日公園にいる名物ニートお兄さんと化していた。

「一護君はどこに出かけに？」

「いや、藤丸さんに勉強教えてもらおうと思ってな。時間、空いてるんだろ？ここでもいい家に来てもいいからちよつと数学教えてくれよ。」

「ここにしようか。教科書と分からないところはどこだい？」

300、流魂街にいた時間がわからないから400歳の可能性もあるがそれだけ時間があつて勉強に興味を示した俺は短期休暇では修行と勉強が中心だった俺は中、高学生の勉強はすべて頭に叩き込んでいた。大学とか専門学校のは結構わからん。(浦原さんのところで使う)工学以外は浅く広くしかやってない。

「微分積分なんてまだまだ先じゃない？高校二年生で履修する奴だろう。」

「予習しとくに越したことはないって藤丸さんに教わったからな。そういえば今度はいつ稽古つけてくれんだよ。」

「物騒だねえ。そんなに強くなりたいのかい？」

「ああ、あいつをぶつ倒せるぐらい強くなって、お袋も遊子も夏梨も守ってやんなきゃいけないえ。」

母親がいないことで弱くなつてしまったんじゃないかと思つていたが一護君は空手もしつかりと習い、精神も母親がいるおかげかあいつを憎むことがあつても自分を責めることはない強い子へと変貌した。問題は一つ、一護君が言うあいつが俺だということ



だ。一護君は俺に幽霊のことをはつきりとは話さないのではかしながら聞いてみたところ、白い肌、黄色い目、骨のような口を模した下半分だけの仮面、俺である。何をどう考えても俺である。一護君の目には俺が母親の足をぶった切ったと思っっているらしく信じられないくらいの高ハイトを買っている（恐怖）。どうしようか。

「で、ここを積分するとどちらでも10gになるから…」

「ここで引き算すれば答えが出るってわけか。」

「10gだから割り算になるとこ気を付けてね。」

原作より闇深くないんだからこのまま幸せに生きてほしいと思っちゃうが俺は愛染を倒すのは原作で披露されていない藍染の正解を考えると賭けに近いだから勝てる確率を増やすために一護君が必要。だからこれは、そんな事情でこれから一護君が巻き込まれるのを知ってて傍観する俺の罪滅ぼし、つまりエゴだ。

「よくわかったよ。なあ、今日どころか年中暇なんだろ？稽古つけてくれよ。」

「しようがないなあ。それじゃあうち行こうか。」

.....

.....

∴

最初は体運びを教えた。次は足さばきを教え、その次は徒手空拳を教えた。そして一護君の次のステップは、

「何だこれ、杖?」

「そう、お母さんの足斬る様な奴と戦うんだったら、その辺のもの武器として拾って戦うでしょ?杖は突けば槍、払えば薙刀、持たば太刀と言われるほどいろんな武器の代用として扱えるからね。」

「それなら素手の練習した意味なかったんじゃないやねえか?」

「それは俺の動きを見てから言ってもらおうか。適当にかかっつきなさい。」

上段からの振り下ろしを杖を使って受け流し、一護君のおなかに肘打ちを寸止めする。

「重心は変わるけど、武器と素手の動きは両方同時にできるよ。こんなふうだね。」

実際に再現(素人の棒術を受け流すのは足を切断するような技術を持った男の剣を受け流すのとはわけが違うのだが)してみると一護君の杖への視線は変わったよう多少やる気になっているようだ。

一護の呑み込みは早く半日たらずで攻撃を杖で受け止めたりできるようになっていた。

「明日に疲れが残っても困るし今日はここまで。次は杖で攻撃できるようにする練習だね。」

「今まで拳で攻撃することが多かったからついつい頼っちゃう。さつさと物にしてえな。」

身長があり、手足が長く、数年間武術を学んだ一護君は同年代には敵無しだろう。さらに霊圧的なすべての要素（ドン・観音寺を除く）をもつ一護君は控えめに言って激つよだ。俺が一護君レベルになるまでに何回浦原さんに斬られ、チャッピーにうどんの如く踏まれたかわからない。だからって、まだ二十歳すら超えてない子供をこんな問題に巻き込まなきゃいけないなんて、

「まったく、いやな大人になったな。」

「ん、なんか言ったか？」

「いや、なんでも！これ、食べたくなつて北海道の方まで力二とってきたからお裾分け。クーラーボックス預かっててもらっていいから。」

「珍しく公園にいなかったのそういうことかよ！面接に行つたつと思つてたのに、なんで北海道行つてんだよ！」

「だから言ったじゃないか。」

カニが食いたくなかったのさ。

……

……

……

「みなさーん！昼食出来ましたよ！」

カニ鍋を食いたくなかった。だから俺は北の海まではるばる行き響転まで使ってカニを持って帰ってきたのだ。あの時のフットワークは殺せんせーとタメをはったといっても過言ではない。

「へえ、カニ鍋なんて豪華じゃないか。」

「ねえ、まつ梨んがこの前のカニ特集見て食べたいって言ってたから買ってきたの？」

そう、まつ梨がカニを食べたいといったから、今日はカニ鍋記念日。

「北海道まで取りに行つてまだ一日しかたつてないから味も抜けてないはずだよ。食べ

よっか。」

あれ、おかしいな。兄妹愛に涙してもおかしくないのに、みんなちよつと引いてるよ  
うな…

「藤丸、それはちよつと、愛が重いかな…」

重いかな…重いかな…重いかな…重いかな…重いかな…

そっか、お兄ちゃん重いか。最近あんまり構ってあげられなかったからたまにはと  
思っただけだ。

「これ藤丸。せつかくの鍋が冷めてしまっじやろ。はようもつてこい。」

夜一さん（猫）と浦原さん（と鉄斎さん、ジン太君、雨ウルルちゃん）もいたんだ。気づか  
なかつたな（消えかけの魂）。

きょうはみんなでかになべをたべました！おれのさらだけしおがつよかつたです！

## とうとう原作突入篇

一護君?!ルキアちゃん!?君達強くねえ~!?

「何とか言わんかいこらべっ!?!」

帽子をかぶったガラの悪い男（青年かもしれないが老け顔が過ぎる）がオレンジ色の髪をした青年に顔をけられ踏みつけられる。

「ギャーギャーうるせええ!てめえら全員、あれを見ろ!」

そういつて青年が指をさした先には花が添えられた花瓶が倒れていた。

「問一、あれはいつたい何でしょうか。真ん中のお前。」

「え!?!あ、あのーこの間、ここで死んだガキへのお供え物「大正解!」」

答えた直後オレンジ髪の青年は顎を蹴りぬいた。

「じゃあ、どうしてあの花瓶は倒れてるんでしょうか?」

「そらー、俺らがスケボーして倒しちゃったから」

言いかけている間に二人の男の顔に数発の蹴りが入る。

「二度とやってみやがれ!てめえらにも花を添えなきやなんねえようにしてやるぜえ~!?!」

「ひゃー!!、ごめんなさーい」

「ふう、こんだけ脅しときや、もうここには近寄らんだろう。新しい花、明日にでも持つてきてやるよ。」

青年は電柱の方を向いて話しかけるがそこには誰もいなかった。

「どういたしまして、早めに成仏しろよ。」

……

……

…

一護君の霊圧が漏れ出てておいしそう！不滅王が血を、血を欲している。死神を殺せえ！

「う、うるさい！お前は黙ってろ！」

おいおいおい！いいのかよ、あんな芳醇な霊圧を逃してよお！寝かせるのはいいが

飲めなくなったら意味ないぜ？

「一護君は殺さない、そういつたはずだ。」

虚も、死神も、滅却師の霊力もある。それでいてその全てが強大ときたもんだ。欲しくないか？ん？

罇が広がっていき、俺が混ざろうとする。

「藤丸？」

「……まつ梨？」

チツ、また飲み込まれかけてたか。もっかい行つてくるわ。それまでそつちもがんばれよ。

俺が暗闇に向かって歩き出したのを見送ってから、まつ梨の腕の中で深い眠りに付いて行つた。

……



…

…

「うおおおおおおおお!!」とうとう不滅王を屈服して人格の統合も終わったぞお！俺の・完・全・復活だあー！あーっはっはっはっはっはっはっはっは!!!」

不滅王に人格飲み込まれそうになったから二つに分けてたけど、俺気持ち悪っ！感傷に浸るとか論外だろ！アハー（→）久しぶりのシャバは空気がうめえ！

「なんや、朝から逆撫が五月蠅いと思ったらとうとう戻ってきたんか。」

「真子さんおっひさく？まあそっちからしたら久しぶりじゃないし、こっちも正確な意味では久しぶりではないけどまあそういう気分なんですよ！」

「あーうるさ、静かで善人な藤丸はどこ行ったん？昨日までおったはずなのにもう恋しいわ。」

「何いってるんですか。昨日の俺も今日の俺ですよ！ただ分けた人格の割合が1対9くらいだっただけですって。」

人格が大きく変わったみたいになっちゃったけど他の人と話すとき大丈夫か？一護

くんとかばれそー!

「おはよーございます!」

「おはよう。」

「おはようございます。」

「はい、おはよう。」

興味本位でコカインやった時より気持ちいいわ。

「藤丸さん、気分よさそうだな。」

「あ、わかっちゃう?ここ最近在った陰鬱とした気分が晴れてさ。一護君はまたお父さんとプロレスしたみたいだね。」

「なんでわかんだよ。藤丸さんからあんなだけ習つていて一撃もらうつてのは申し訳ねえな。」

あんな人でも元隊長だからね。そんな元隊長が本気じゃないとはいえ一撃しかもらわない一護君がおかしいと思うけど。

「カニ迷惑じゃなかった?結構量あったと思うけど。」

「お袋も遊子も喜んでたし、夏梨も文句言いながらうまそうに食ってたよ。」

一護君から真咲さんの話がでると安心するな。罪悪感がないわけじゃないけど、

「その花、この前あつちの道路で引かれちゃった子に？」

「ああ、今日は供えつけてから学校に行くんだ。」

そういうと一護君は挨拶をして行ってしまった。：行ってしまったなあ。止めるならここが最後だったのに。

……

……

……

魚面のそこそこに大きな虚が黒崎家を襲うのを俺は見つめていた。あつ、あつ！夏梨ちゃんのだわりに真咲さんが人質に取られてる。やばばばばばば！え、どうする!?!どうする!?!もしかして一護くんじゃなくて真咲さんの方食べようとしたりする!?!ルキアちゃん！ハーリーアーアップ！

「やめろ！無理をすれば、貴様の魂が」

「うるせえ!~んんんんんんああああああ!!!」

やば、ほんとに鬼道引きちぎってるじゃん。こわ、俺あれに狙われてんの?

「一護!逃げて!」

片腕にパイプ椅子を持って一護君は駆け出すが虚の拳が振るわれ:あれ?躲した?

「お袋を放せええええ!!」

全然効いてないけどすごい攻撃してる、あ、すつつつすごい攻撃してる!虚の攻撃全部躲してるじゃん。ある r r r r r r r r r r うれえ!?!ルキアちゃんが虚の腕を斬って真咲さんを助け、え?切り落とした!?!ん~~~~こおれまじいねえ!?

「お袋!おい」「うろたえるな。貴様の妹たちも母君もまだ魂を食われてはいない。あいつはより靈的濃度が高い魂を求めている。:そうか、昼間の虚もあの少女を狙っていたわけではなかったのか。」

「どういう…」

「理由はわからぬが、先ほどまで貴様の魄動の放出は極限まで抑え込まれていた。だから、私は貴様に何も感じることはなかったし、貴様が虚に襲われることもなかったのだ。推測だが、貴様の体から流れ出ることのできない魄動が、貴様の触れ合った少女の霊を介して流れ出したのだろう。つまり、先ほどのあの二匹はさっきの少女から貴様の魂の濃さを嗅ぎ取った。すべての狙いは貴様だ!」

いいぞ！もつとやれ！このままで何のピンチもなくルキアちゃんが普通に倒してしまふ。一護君から冷静さを失わせろ！体の動きを鈍らせてしまえ！

「俺を…狙って…」

「来たぞ！貴様は「うるせえ！俺のために、あの子は襲われたってことか？俺のせいだ！夏梨や遊子やお袋が死にそうになってるって言うのかよ！あああああああ！」

「そうだ一護君！君はそこでルキアちゃんに負担を負わせる義務がある！」

「よう、お前、俺の魂が欲しいんだろ？だったら俺とさしで勝負しろ！」

「そう！そう！いけ！そこだ！やれ！やっちまえ！」

一護君がぼーっと突っ立っているところに虚の顔が伸びそれを庇うようにルキアちゃんが前に出る。そして虚の牙がルキアちゃんの肩に！

ズバツ！

虚の顔が大きく斬り裂かれ、後ろに大きく内けぞった。

…なああああああんでだああああああ?!?!?!おかしいだろおおおおお!!!!ルキアちゃん強すぎだろ！あれで鬼道も得意とか三席全然あるし副隊長でもおかしくないだろうがああああ！兄さまが圧かけてるとはいえ何で現世で平死神なんてやつとるんですわ?!浮竹え！ちゃんと仕事割り振れよおおお!!!!

もういい、あの虚放っておいたら死ぬし俺がやるしかない。マッチポンプがお家芸に

なりそうだ。『虚閃』

とどめを刺そうとしたルキアちゃんの胸が貫かれ、ルキアちゃんは瀕死の重傷に、そしてダメージを食らいながらも立った虚によって戦況は逆転する。

「死神!」

「たわけが、貴様の力でかなわんことは先刻承知のはず。それとも、自分の魂さえくれれば、それで済むとでも思っているのか、このままでは全員奴とその仲間の餌になるのを待っただけだ。…家族を…助けたいか。」

ルキアちゃんは自分の体をいたわるように電柱に寄りかかりながら、一護君に問いかける。そう!そうだよ、その場面が見たかったア……!物語が始まるそ・の・場面がある!ヒヤハハハハハハ!!ヴエアハハハハハハハハハハアア!! (歓喜)

「あるのか、方法が!」

「一つだけ、ある。…貴様が、死神に、なれ!貴様がこの斬魄刀を体の中心に突き立て、そこに私が力を注ぎ来む。できるかどうかはわからん、だが、ほかに方法はない!」

虚が雄たけびを上げ、一護君たちにのっそのっそと近づいていく。いい演出だあ!

「刀をよこせ、死神。」

「死神ではない、朽木ルキアだ。」

虚が徐々にスピードを上げそのまま拳を上げる、

「俺は、黒崎一護だ。」

刀を両の手でつかんだ一護君は全力で自身の胸に突き刺し、周囲に霊圧が放たああああああ！目が！目が！目がああああああ！！！！

視界が潰れたので霊覚で代わりに見ていると大きな浅打を持った一護君が一瞬で右足を斬り落とし体勢が崩れたところに上段振り下ろしで首を跳ね飛ばした。やっぱ一護君の悪いところは藍染の言った通り斬術以外を大して伸ばさなかったことだよ。少し鍛えるだけで、あのくそでか斬魄刀をぶんぶん振り回しながら高速で戦えるようになるんだから。

「うちの連中にてえあげた罪を思い知れ。」

斬り殺した後に言うなんて、これはオサレポイント爆上がりですわ。

黒崎 一護／15歳

髪の色／オレンジ

瞳の色／ブラウン

職業／高校生 兼

死神

## もう助けてあげたーい! (罪悪感)

俺は魚面の虚を殺したあと、すぐさまルキアの方へ駆け寄る。

「おいルキア、大丈夫か?! しっかりしろ!」

「うるさいぞ馬鹿者、耳元で騒ぐな。それよりもう一体の虚を「もう殺しておいたよ。」突如、俺の背後から聞き覚えのある声をかけられ、振り返るとそこにいたのはルキアと同じ黒い着物を着た藤丸さんだった。

「藤丸さん!」

え、なんでこいつが藤丸さんのこと知ってるんだ?

「おい、一護お前藤丸さんと知り合いだったのか?」

「あ、ああ、俺に勉強や武術を教えてくれる近所の知り合いで、お前こそ何で知ってるんだよ。」

「藤丸さんは私の恩人であり、死神の中でも屈指の実力者であり、そして…尸魂界から特別な斬魄刀を盗んだ歴史に名を連ねる大犯罪者だ。」

「はあ!?!」

嘘だろ!?! 公園で何時も日向ぼっこしてる様な藤丸さんが!?! 小さい子供と遊んだり近



所のごみ拾い手伝ったり交通安全のボランティア手伝ったりしてる藤丸さんが?!?!?  
「久しぶりルキアちゃん。色々話したいことはあると思うけど、まず回道かけさせてね。

『至空華』

ルキアの傷口に白い花が開き、しばらくするとその花びらが散り始め、傷は無くなっていた。

「騒ぎもあるし、二人とも聞きたいことだってあるだろう。とりあえずうちに来なさい。」

そういうと藤丸さんは夏梨を持ち上げ、アイコンタクトで俺らにも運ぶよう促してから、藤丸さん家まで歩き始めた。

.....

.....

..

「さて、まず何から聞きたい?」

「藤丸さんは本当に死神なのか?あと大犯罪者ってどういうことだよ!」

あの藤丸さんが死神だったことも知らなかったし、さらに罪人なんて話を聞いて衝撃を受けた。けどどうしても信じられなくて俺は藤丸さんに聞いた。そうして帰ってきたのはやけにあっさりとした肯定だった。

「うん、そうだよ。ざっくり百年位前かな?死神だったのは。で、ちよつといろいろあったから、お宝盗んで妹を含めた知り合いと一緒にこつちに逃げてきちゃった。」

「何故ですか!?!なぜあなたほどの死神が、そんなことを!」

「ごめんね、ルキアちゃん。それはまだ話せないんだ。いつか話すからその時まで待ってて。」

なんか、ルキアの話だと藤丸さんがすごくそんな感じがするんだが…

「なあルキア、藤丸さんってそんなすごい人だったのか?」

「たわけ!いいか、死神は全員護廷十三隊という組織に属している。護廷十三隊はその名の通り十三個の隊で構成されており、一つの隊には約二百強の死神がいる。そして藤丸さんは、二番隊という隊の第三席を務めていた人で、藤丸さんより上の立場は各隊の隊長、副隊長以外いない。」

「てことはなにか?藤丸さんの下には200人近く部下がいて、上司は二千六百人以上のうちたった二十六人しかいないってことか?」



「さて、話もそろそろ終わりにしようか。一護君明日も学校だしね。ルキアちゃん、よかつたらうちに泊まる？」

「いえ、一護の家に泊まろうと思います。」

…今なんつったこいつ？

「おいルキア！うちには人を止めるスペースなんてないぞ！」

「つて言ってるけど？」

「…実は、砕蜂隊長から藤丸と男がいないところで会うなど忠告を受けていました。」

「砕蜂ちゃんが言うなら仕方ない。ごめん一護君、泊めてあげてもらってもいいかな？」

はあー、藤丸さんに言われちゃあな。

「じゃあねえな、…でも肝心の部屋がねえぞ。」

「それは私にいい考えがある。」

………

………

…

翌日俺は信じられねえものを見た。家族が昨日の事件を記憶置換で消したこと？違う。こいつの説得方法？惜しいが違う。正解は、あの穴だらけの設定で五人中三人がこいつを受け入れてことだ。

「どうだ一護！完璧だっただろう！」

「うちの中でまともなのは夏梨だけかよ……」

まあうちはかかあ天下なので母さんが賛成した時点で夏梨も明確な反抗はしなかったが。

「それに今日からうちの学校に来るってどうしてだよ。」

「私は昨日貴様にすべての死神の力を奪われてしまったから、尸魂界に帰るすべがないのだ。だから義骸に入り、力の回復を待たなければならぬ。とはいえ、その間で続ける虚の被害を放っておくわけにもいかん。そこで一護、貴様には私の死神の力が戻るまでの間、死神としての仕事を手伝ってもらおう。」

「何故そんな顔をしているのだ？当たり前だろう。今死神の力を持っているのは貴様なのだから。貴様には断る権利は、「断る！」なに!？」

「あんな化け物と戦うのは二度とごめん。」

「馬鹿な！昨日は見事にやって見せたではないか。」

「それは身内が襲われてたからだ。赤の他人のためにはとてもじゃねえが戦えねえ。期待を裏切るようで悪いけどな。」

いくらある程度鍛えてるとはいつても化け物と戦うのが怖くないわけじゃない。俺はただの高校生なんだから。

「そうか、ならば仕方あるまい。」

ルキアはデフォルメされたドクロが描いてある手袋をおもむろにはめ、おいちよつと待て何する気だ!?ぐえ、

顎を思いつきり殴りつけられ、その拍子に俺は後ろに倒れた。

「おい！てめえ急に何を…」

そう言いかけたとき視界にあるものが映った。地面に倒れている俺の体を俺が見下ろしていた。

「お、俺の体~~~~~!!!」

最初こんな感じだったっけ。昔は一護君も家族以外はいいやってスタンスだったんだな。結局虚倒して男の子救ってるけど。あんだだけ渋ってたくせに早いよ、死神代行やります宣言。でも君にはもつと強くなつてもらわなきゃ困るんだ。

……

……

…

井上の兄さんの事件やチャドの事件を解決し、夜な夜な虚退治をした後、俺はルキアとともに藤丸さんに呼び出されていた。

「何だよこんな時間に、死神関係の話か？」

「そうだよ。一護君、ルキアちゃんもだけど、君はまだまだ弱い。だからもつと死神的な技術を鍛えてあげようと思つて。」

そういうと藤丸さんは、わざわざ義骸に入り木刀を持った。

「一護君、今の君の限界と、武の神髄を教えてあげよう。」

「おいおい、藤丸さん怪我しちまうぜ。無理だと思つたら遠慮なく止めてくれていいからな！」

そういつて俺は藤丸さんに斬りかかつて行つた。

地面には一護が膝をつき、それを藤丸さんが無傷で見下ろしていた。

「まだまだよ一護君。夜はまだ始まってばかりだ。」

藤丸さんが入っているのは、いたって普通の義骸だ。現に藤丸さんは人間と大して変わらない速度で走り、人とほとんど変わらない霊力の全くこもらない拳を一護に振りぬいている。

「霊圧を上げて、僕から目を離さないで、足を常に動かすのを意識して、そう、いい調子だ。」

一護も做つてもいないのに瞬歩を使い始め、刀だけでなく拳や蹴りも多用している。「狙いが甘い、技と技の繋ぎも甘い、一護君は常に動き続けられるはずだ。その大きな刀が邪魔なら霊圧を圧縮しろ。刀は君自身から流れる力で大きさを変える。力の流れを止めるんじゃなく、より小さく、固く押し固めるように流せ。」

一護の口から洩れるのは乱れた呼吸音だけであるが、剣は徐々に小さくなっていき私でもギリギリ持てるほどの大きさに変化した。

「斬月のこともあるし、今はこれが限界か。さあ当てれば勝ちだぞ一護君！君の霊圧が凝縮されたその斬魄刀の威力は格段に上がってるだろう！当ててみる！」

木刀はどんどん小さくなっていくが、藤丸さんに焦りは見えずむしろ一護の方が息を



切らしている。一護の振るう刀はさらに速く、鋭くなっていくが速度で劣るはずの藤丸さんはそれを当然のごとく側面から蹴り飛ばす。一護は蹴り飛ばされた刀をもう一度向け、今までで最も鋭い切り上げを行う。

「(入った!)」

一護の表情は勝利への確信を抱いており、その斬撃に堪らず藤丸は義骸から飛び出し浅打で止めた。

「お見事。」

……

……

…

「どうだい? ルキアちゃんから見て、一護君は。」

帰り道、一護を背負った藤丸さんはそんなことを私に投げかける。

「おそらく、席官クラス、下手をすれば副隊長格にも匹敵するかと。」

「くくく、良いね良いね! ルキアちゃんの目から見てもそう映るのなら俺は間違ってたな。」

普段は見せないいたずらをした子供のような笑いに、藤丸さんが一護を誰ほど気に入ってるのかが伝わってくる。」

「ルキアちゃんは今何席?」

「恥ずかしながら、私はいまだに席官にすらなれず…」

「そうか、今回の罪もどうなるかわからないし、なかなか厳しい立場にいるね…君がもし望むのであれば、僕が君に靈力を渡すこともできる、君は何を望む?」

私が犯した罪を肩代わりできると藤丸さんは言っているのだろう。この人は昔から不思議な人だ。いい人なのか、まったく情が無い人なのか、頭が良いのか悪いのか、飄々としていつも自分を掴ませない。でも、なんだかんだ言って私たちを助けてくれる。今回も、

「いえ、私が犯した罪は、私が背負っていきます。あなたに迷惑はかけません。」

私たちを助けてくれたあなたを、まつ梨さんを、尸魂界にばらすわけにはいかない。

そう、なんて短い言葉をかえした藤丸さんの表情は、なぜか苦しそうに見えた。



ブコメはなく2年で卒業)

廃病院に住む地縛霊の鳴き声が聞こえる。人が自分の住処に入り反応したのだろうか。そしてそれを感じ取った一護君、ルキアちゃん、竜貴ちゃん、織姫ちゃん、茶渡君、夏梨ちゃん、真咲さんの表情も真剣なものに変わり…多すぎです、この街やつぱりどうかしてる。

「この病院は俺のもんだ!誰にも渡さねえぞ、てめえら!入ってくんじゃねえ!俺はこの病院で大金持ちになつて…」

なんて俗っぽい霊なんだ。昨今には珍しいほどの地縛霊だな。しかしまだ孔は空き切つていないせいかわ、ルキアちゃんも様子見をしているようだ。今日は問題おこらなそうだし、さくつとその辺の虚殺してかーえろ!

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、!!」

うるさつ、急にどうした!?

叫び声が上がったほうを振り替えればドン観おじさん(蔑称)が半虚デミホロウの胸を強制的に開けようとしていた。このままでは半虚が虚となり、下手をすればここで暴れまわるだろう。

一護君は浦原さんのおかげで死神となるが、結局止めるのが間に合わずに半虚は叫び声をあげながら消えていく。浦原商店が絡んでいるなら俺はもう帰ってもよさそうなんもんだがもう少し見ていくかあ。

虚となつて再構築されたさっきの霊が屋上から俺たちを見下ろしている。

「カモンバッドスピリッツ！新世紀のカリスマ霊媒師ドン観音寺様が相手だー！」

おっさんは人の話も聞かず俺を後ろに下げるとそう挑発し始めた。

「なにやってんだよー！」

襲い掛かる虚に斬魄刀で斬りかかり、虚が刃を歯で止めたところを白打で吹き飛ばす。

「何故逃げないんだボーイ！」

「てめえこそさっさと逃げろ！」

虚の突進を躲したいところだがこのおっさんうけ止めようとしてやがる。仕方ねえから飛んできた虚の片手を掴み自身の体をひねるようにして、自身もろとも左方向に転がった。だがこのおっさんの暴走は止まらねえ。壁に刺さった虚のけつを見てゴールデンチャーンス！とか抜かしやがった。そんなおっさんの襟首をつかみ俺は廃病院の中へと入って行った。こんな時だつてのにおっさんはあいも変わらず戦おうとするか

ら、俺はそんなおっさんを壁に投げつけた。

「なんで俺だけ逃げておっさんが逃げないんだよ!」

「それは私が、ヒーローだからだ。」

ふざけた返事に顔をしかめる俺だったが、そんなおっさんの話は至極まじめなものだった。子供たちに自分の勇姿を見せ、勇気の何たるかを知らしめる。だから子供たちのみている前で逃げるわけにはいかないと、おっさんは語った。

おっさんがやったことは救われるはずだった魂を無理やり虚にするという最低な行為で、それを知っている俺はそのおっさんの語っていることがどれほど滑稽か知っている。だが、その魂は紛れもなくヒーローだった。

「だったらなおさらここで戦うべきだ。あいつは俺たちみたいな霊的濃度の高い魂を襲う。戻れば観客にも犠牲者が出るぞ。」

「ボーイ、君はそんなことまで考えて。」

「話はあとだ、来るぞ!」

カエルみたいな虚が地面を破って飛び出してくる。わかっちゃいたがここだと斬魄刀がでかすぎて戦いずれえ、やっぱり白打主体で、

「刀は君自身から流れる力で大きさを変える。力の流れを止めるんじゃなく、より小さく、固く押し固めるように流せ!」

「そうだ。確かこうやって」

自身に流れる力を調節し、大きな斬魄刀を野太刀程度に変え、虚の攻撃を弾こうとするが、虚が撃ってきたのは緑色の粘液だった。その粘液は強力な接着作用のあるもののように情けなくも俺は壁に貼り付けられてしまう。虚の攻撃が迫りつい顔をそむけてしまうが、その攻撃はいつまでたつてもこちらに降りかかることはない、大きく開かれた虚の口におっさんのステッキが入り、それを食い止めていた。

「おっさん！あんたじゃそいつには「ボーイ」

「私とて能力者の端くれ、敵と自分の力の差くらいわかっているつもりだ。私はユーに感銘を受けたのだ。常に人々のことを第一に考える。グレイト！戦友と書いて、友と呼ばせてくれ。（キラーン）」

∴

「いえ、結構です。」

おっさんは俺の返答を聞いたのか聞かなかったのか、空いたほうの手を力づよく握りしめ何かを叫び始めた。

「うおおおおお、観音寺流最終奥義！観音<sup>キャン</sup>ボール！」

そうして掌を俺に向けて、ほのかに光る白い球を俺に向けて放つ。しかしその速度は死にかけの虫程度しかなく大きさもピンポン玉ほどしかない。一体何がしたいんだ？

その球は俺を縛る粘液に触れると強く発光し爆発したっ!?

「ハギヤアー?!?!」

おそらく俺の半生の中で一番情けない叫び声をあげただろう。そんなことをしている間にステツキは折れ、観音寺は虚の大ぶりの攻撃によって吹き飛ばされてしまう。

「ぐはあー!」「観音寺ー!」

「たとえこの身が砕かれようとも、未来あるキッズたちの盾となっていけるのなら、わが生涯に一片の悔いなし。戦友よ」

地面に落ちた観音寺に追撃を仕掛けようとした虚に膝蹴りをかまし、刀を構えたまま突進する。

「わるいな、お仕舞だよ!」

踏み出しは廊下を砕き、構えた刀は虚の面をたたき割った。

「やったー!グレイト!素晴らしいー!→素晴らしいー!→すーばーrrrrらしい  
「観音寺」ん?」

「あんまりはしやぐなよ。」

「どうしてだ、モンスターを倒したんだぞ。ユーこそもつと喜んだらどうだ、ん、なんだあ?」

斬られた虚はその姿を変え、中から先ほど観音寺が孔を広げた壺が出てきた。





「ありがとう、ユーは今日から私の、一番弟子だ！」  
「はあ!？」

「格下げだあー!!」

……

……

…

あの後自分には尊敬する師匠がおり弟子になることはできないというと、何とか戦友ともにしてもらった。そして、

「なあ、我が一番弟子君？」

「は、はい。」

鬼神がいる!?!俺何かした!?!

「見ていたよ。あの程度の虚の攻撃をあるうことか油断で食らい、でしゃばる一般人一人すら完璧に守り切れない体たらくをさあ。」

「アツ！スウー！ー！ツ、あのーですね、廃墟では大きな刀は扱いづらく、仕方なかったといえますk「そうかそうか、僕から学んだ技術じゃあそこは戦いにくいか。」そうですねですよ！だからですね、今回は仕方なかったと「鍛錬を増やす。」へ？」

「君が誰にも負けないように。副隊長クラスには負けないようにしごいてやる。命を懸ける黒崎一護、俺が師匠から、上司から、同僚から、敵から学んだことを。俺の百年間を君に一週間で教える。」

「一週間!?む、無理無理無理無理！できないですって！」

「安心しろ、君は才能がある。国語に長け、努力を怠らず、理不尽にも屈せず、なにより尊敬する師匠がいるらしいからなあ？」

「うおおあああああ!!!」

そこから、俺の地獄は始まった。

## 死神はクソということですよ

「二位から相変わらずやるねえ、あんた。」

「えへへへへ。」

井上が竜貴に頭を撫でられてうれしそうにしている。なんて百合百合しいこうけ：あぶねえっ！藤丸さんの英才教育で危険な思考に陥りそうになっていたのに理性が全力でストップをかける。

「すごい！織姫ってそんなに頭良かったの？」

「とてもそうは見えないけどねー。」

「女子はともかく、男子の中に五十位以内に入る不屈き者はいなかったようだな。」

圭吾は一体何を見てその発言をしてるんだ。

「つ！！圭吾、よく見てよ！」

そういつて水色が差した十一位のところには茶渡泰虎という名前があった。

「チャド！お前は裏切り者だったのか！俺は信じてたのに！もうお前なんか友達じゃねえ！」

「えー！」

「ひどいよ！ねえ一護、一護は僕たち友達だもんね？」

「あ?よく見ろ。」

そういつて俺が指をさした二位のところには黒崎一護の名前が載ってあった。

「ひいひいひいひい!!!」

「お前らなんか友達じゃねえ! 悪魔だ悪魔! 二度と遊んでやるもんかああああ!!」 「えんえんえん。」

あほ二人は走ってどっかに飛んでった。

「あーあ、泣かした。」

「俺らが悪魔なら、一位のやつは何になるんだ。」

俺と三点差をつけて一位になったやつの名前は…

「石田、あめたつ? 知らねえ名だな。」

「雨竜うりゅうだよ。石田雨竜君。」

「よく知ってんな、井上。知り合いか?」

「知り合いも何も、同じクラスだよ。」

「ダメよ織姫。こいつ人の顔と名前、全然覚えられないんだから、行くよ。」

んんんん、そんなやついたか?

ダメだ思い出せん。

「だからさ、行こうぜカラオケ。」

長考しているうちによつてきた圭吾と水色に声をかけられ我に返る。つかもう遊ばねえんじやなかつたのかよ。

「まあ、いいけど」「つきあつて！黒崎君！」「うお！」

急にルキアに引つ張られて走り出す。まあ要件はわかっちゃいるが、

「虚だ。行くぞ！」

走っている時に廊下ですれ違った眼鏡をかけた生徒と肩をぶつけてしまう。

「わりい！すまねえ。」

そいつに一声かけて、俺は走って行った。

……

……

……

「いねえじゃねえか！」

昼から虚の出現報告が六回あり、その全てが空振りだった。

「私が悪いというのか!? 私は伝霊申機にはいる情報のままを貴様に伝えておるだけだ。」

「だから、そいつを速く直せつての。」

「私だつてそうしたいところだが、「仲間割れかい?」

眼鏡をかけた、男はそう一言声をかけ俺たちに近づいてくる。

「こんばんは、黒崎君、朽木さん。」

「誰だお前、なんで俺らの名前を「黒崎君。君は、霊が見えるんだよね。」

何で知ってやがる、こいつ。

「な、なにをいって、「新しい虚が出たようだ。」

そいつがその言葉を発した直後伝霊申機が音を鳴らし始めた。

「どつちだ。」

俺がルキアに聞くと、男は指をさし、俺たちに方向を教える。

「あつちだ。その程度のことわからないなんて、君はそれでも死神か?」

男の腕にかけてある十字架から霊力が噴き出し、弓と矢を形成する。それは遠くにいた虚を一撃で貫くほどの威力だった。

「…反応が消えた。」

「何なんだ、お前。」

「僕は石田雨竜、滅却師で死神の敵だ。わからないかい？黒崎一護、君を憎むと。」

……

……

…

翌日、俺はあいつがどんな名前か思い出せずにいた。

「石田…ウイリー？いや、それじゃ売れない芸人だ。」

「黒崎君？また石田雨竜君のこと考えてるの？」

「あ、いやそう！それだ井上！詳しいな！」

足を前に突き出し、指で上を指すような奇々怪々な動きをする。（混乱していただけ）それを真似しながら、井上はさらに答える。

「詳しくはないけど、同じ手芸部だからね。」

「手芸部!?!」



「手芸部、なんだよな？」

「そうだよ、あ、見て！ちようどいいところに満ちちゃんが壊れた人形持つてきたよ！」

「…都合良い展開だな。」

「見てて。」

そいつは半ばひったくるようにしてぬいぐるみを受け取るとなぜかそれを放り投げ、その間に裁縫箱から針と糸を取り出し、一呼吸する間に目にもとまらぬ早業（一護自身は見えている）で四十針程度縫い歯で糸を斬るとたま結びをして女の子に返した。

「な、直った〜！ありがとう石田君！」

「いいよ、別に。大したことじゃない。」

「え、あ、うん、ごめんなさい。」

「ああいういい方しなければいい子なんだけど。」

「へえ、変わったやつだな。」

「ねえ、黒崎君。石田君と何かあったの？」

「いや、ちよつとな、大したことじゃない。」

そういつて俺は廊下を戻った。

……

……

……

コツコツと靴が階段を上る音だけが聞こえる。

「うちまでついて来る気かい？ 黒崎一護。」

「気付かれないよう注意しながら尾行をしていたがどうやらバレってしまったようだ。」

「いつから気付いてた？」

「教室のドアから井上さんと盗み見ていた時から、気づいていたさ。」

「ほお、すげえすげえ、大したもんだ。」

「君の霊力は馬鹿みたいにも垂れ流しだからね。猿でもわかるよ。君はどうやら、霊力の高い存在を察知する術をかけているみたいだね。その証拠に今日まで僕が存在に気付かなかった。」

「悪かったな。俺は人の顔とかおぼえんの苦手なんだよ。」

「そうじゃない。僕はこの学校に入学した時から、君の霊力の異常な高さに気づいてきたよ。その君が五月の半ばに死神の力を身に付けたことも、そして、朽木キアの正体も。」

石田の周りに白い帯が大量に出現する。

「これは、霊絡!？」

「そう、霊絡だ。大気中の霊子を圧縮して視覚化したもの。そして、」

石田はこちらに詰め寄ると俺の周りがある一本の霊絡を掴んだ。

「君の霊絡さ。しらないのか? 死神の霊絡は色が違うってこと。∴勝負しないか? 黒崎一護、君と僕とどちらが優れているかわからせてやる。」

「勝負だと? 俺とお前が?」

「そうだ。」

「へっ! ばつかばかり! なんでもそんなことしなきゃいけないんだよ。てめえが死神に何の恨みがあるか知らないが、俺にやあ関係ないね。」

「意外だね。逃げるのかい?」

「挑発には乗んねえよ。俺とお前じゃ、勝負に成んねえって話さ。」

「ああ、そうかい、思い出したよ。君は朽木さんに力を与えてもらった仮の死神だった

ね。彼女の許可がなければ、指一本動かすことができないってわけか。」  
「なんだと、いいぜ。コン、変われ。」

カバンから取り出したコンの口から義魂丸を掴み口に入れる。

「さあ、勝負だ！」

# 労働はクソということです

「とつとと説明しろよ、勝負のルールを。」

石田はポケットから何かを取り出しこれで勝負しようと言ってきた。

「これは虚用の撒き餌だ。砕いてまけば、虚が集まってくる。集まってきた虚を、二十四時間以内に多く倒した方の勝ち。どうだい？わかりやすいルールだろ？」

ふざけんな！

「俺たちの勝負のために、町中の人間を危険にさらす気かよ!? 何様だよてめえ。」

「うるさいんだよ。御託がさあ。他の人間の心配なんて知らない、集まってきた虚は一匹残らず僕が殺すんだ。君も虚から人々を守り切れる自信があるなら、この勝負受けられるはずだろう？」

守り切る自信はある。でも、でももし失敗したら…

俺が返答を返す前に撒き餌を破壊しやがった！やらなきや、殺されるやられる！

「うおおおおお！やってやらあー！」

空に空いた穴から出てこようとした虚を石田は弓で射貫く。

「まずは一匹。」

お袋、遊子、夏梨、早く探しに行かねえとあぶねえ！  
そうして俺は瞬歩で駆け出した。

「黒崎一護、君は己の実力の低さを思い知るんだ。このルビコンの対岸で。僕は、死神を憎む。」

……

……

……

空から向かってきた虚を顔から一刀両断する。

「六匹目、この時間だと、もうどこかに遊びに行っちゃまってんな。どこだ、クソ。」

……

……

…

「邪魔くせえ！どきやがれ！」

胴を断ち、仮面を割り、首をはねる。どこにいるんだ遊子！夏梨！

一護くん済まない。俺は今回手助けできない。…なんてことだ。そんな、そんな！

茶渡君と夏梨ちゃんのやり取りにラブコメの波動を感じてしまうなんて!!!

これは末期だ、俺は自分にも他人にも愛を強要する悲しきLOVEモンスターだ。茶渡君、俺は君のそのハンドサインをカッコ悪いなんて思わないよ。それはいわゆるギャツプ萌えって奴だ。いつかあの子にもわかつてもらえる日が来るよ。

くそ、くそっ！くそくそくそ！石田あー——!!!

倒しても倒しても終わらねえ、どんだけ倒しても出てきやがる。ふざけんなよ。

あれそのまま放置していいのか？竜貴ちゃんはまだ死にかけだし、織姫ちゃんもほぼ終わりだろ…お？ここで覚醒か。盾舜六花は妖精のデザインが好きじゃないんだよね。でも私は拒絶するはかつこいいよな。あ、倒れた。この全員俺が治すんか、めんどろくさ…『明癒』。

「藤丸サン、助かりました。」

「浦原さん、出てくるならもつと早くてもいいと思っただけですけど。」

「こつちも少々都合がありましてね。まあ、あとは楽な仕事ですよ。」

「どうだかなあ…」

斬って、斬って、斬って、見つけた！

「いーしだー！ー！ー！」

ルキアの近くにいる虚を斬り、俺は石田と対峙する。

「これは、俺とお前の勝負だ！虚だなんだ言っただけで、戦って決着つけようぜ！何とか言えよ石田！」

「一護、空を！」

何いつてんだルキアのやつ、空がどうしたって…何だ、あれ。



「虚が、集まっている。」

あいつ一人で行って何になるんだ！

「石田！」「何だ黒崎、怖いのか？僕は行くぞ！」

そんなこと今聞いてねえのに、つくづく話の通じないやつだ。

「こつちだ！虚ども、最後の滅却師、石田雨竜が相手をする！」

最後の…滅却師？

「二百年前に滅んだ。正確には、死神たちの手によって滅ぼされたのだ。尸魂界では、死神を俗にバランサー、調整者と呼ぶことがある。尸魂界と現世にある魂魄を足した総量は常に変わらない。そして、二つの世界では、魂の行き来がある。それを管理するのが我々死神の仕事だ。しかし、ある時滅却師が現れた。滅却師は虚を完全に消滅させてしまう。それはつまり、現世に言った魂が尸魂界に帰ってこないということ。放置してあげば世界のバランスは崩れ、世界自体が崩壊する。滅却師と死神の会合は何度か行われたが、滅却師は頑として譲らなかつた。貴様は、これを死神の傲慢だと断ずるか？」

虚多すぎだろ！でもな、昨日の藤丸さんに比べたらぬるすぎるぜ！

「石田……！」

回転斬りで周囲の虚を払い、刃に霊圧を込め面で叩き潰す。

「だっしや……！聞いたぜ、てめえの戦う理由。死神が正しいとか、滅却師が正

しいとか、そんなことは俺にはわかんねえし、言うつもりもねえ。ただし、一個だけわかることがある。てめえのやり方は「昔話だよ。二百年前の滅亡なんて先生の話でしか聞いたことないよ。むしろその滅亡話だって、死神側のほうが正しいと感じてたくらいさ。目の前で、先生が死ぬまでは。：人を憎んだり嫌ったりしない、優しい人だった。先生は最後の滅却師として、死神たちから厳しい監視を受けていた。それでも先生は死神に訴え続けた。力を合わせて戦おうと。だけど返答はいつも同じ、我々の仕事に手を出すな。そして、あの日現れたのは巨大な虚五体、死神の援護なしに戦えないことは明白だった。死神たちが現れたのは、先生が戦い始めてから二時間後。彼らが先生の力を認めていたら、もつと早く助けに来ていただろう。先生は死なずに済んだだろう！わかるかい黒崎一護、僕は死神たちの前で滅却師の力を証明しなければならぬんだ。：考えが正反対であることはわかってる。僕の考えが間違っていると思うなら、そこで見物しているといい。僕は自分の力を「話がなげえー！」

後頭部に飛び蹴りを入れる、流石に待てん。

「な、何をするー！」

「納得いかねえんだよ！要するに先生の望みは、死神に力を認めさせることじゃなくて、死神と力を合わせて戦うことじゃなかったのかよ！だったら！」

石田の胸元を掴み上げ、引き寄せる。ちゃんと俺の言葉が届くように。

「今やんねえで何時やんだよ！ 正反对結構！ 大人数との喧嘩なんてのは、背中合わせでうまくやれるつてもんだぜ！」

俺は目の前の敵に斬りかかり、その俺を後ろから虚が襲い掛かるが、それを石田が打ち抜く。

「そうだよ。それでいいんじゃないか。」

「勘違いするな。撃たなければ僕がやられていた。」

「やらなきゃやられる。だからしようがねえ。そんなもんで、良いんじゃないのか？ 力合わせる理由なんてのはよ。」

そう、やらなきゃ、殺されるやられるのだ。俺の場合は怖い師匠に。

「ただ、俺は虚を倒したいんだ。」

「…なぜ？」

「多分、俺のお袋の足を奪ったのは虚だ。それが理由で虚を倒したいのかと言われればもちろんそうだが、なんていうか、俺の同類を作りたくねえんだ。お袋の足がなくなつて、親父も妹たちも、何よりお袋自身がきつい目にあつた。そんなのはもういらねえつて思うんだ。そんなのはもう見たくねえ。そう思うんだよ！ 世界中の人を守るなんて出けえ子とは言えねえ。けど、両手で抱えられるだけの人を守ればそれでいいなんて言えるほど控えめな人間でもねえ。俺は、山ほどの人を守りてえんだ！ てめえが持ち掛

けたこの勝負は、その山ほどの人を巻き込むやり方だ。ふぎけんじゃねえ！けど、今はそんなこと言ってるときじゃねえ。手を組むしかねえだろ！……てめえはどうだ？」

手に持った弓を弾きながら石田は答える。

「やれやれ、君もたいがい、話が長いね。でもよくわかったよ。お互いここで生き残らなけりや。殴る相手がいなくなるってことだ。」

最後まで素直じゃねえ奴だ。

「上等！」

矢と斬撃が無数に飛びかい、虚は続々と倒れていく。

「黒崎！、空が、あれは、なんだ！？あの撒き餌に、こんな効果があるはずが……」

とりあえず、この雑魚を片っ端からかたづけなきゃあいつのところには、

ズドドドドドドドド！

虚の包围網の外から大量の光線が撃ち込まれ、虚が吹き飛ばされる。

「こ、ここにちは。」

「ジン太ホームラン！」

虚がバットに撃たれて吹っ飛んでいく。

「ふん！」

ただの掌底で仮面どころか頭まで吹き飛ばされる。

「黒崎さーん。助けに来てあげましたよー。」

「下駄帽子！」

「雑魚はあたしらが引き受けますよ。黒崎さん。あなたが、あいつとの戦いに専念できるようにね。」

「あんがとよ！さて、いくかあ！」

「さて、一護！そいつは大メノス・ツランデ虚と言つて一死神が相手できるようなものではない！」

おいおいルキア、面白いこと言うな。

「何いってんだ！あんなのに比べたら、藤丸さんのほうが百倍強くて怖いだろ！」

はあああああああ！

蹴りだしてきた相手の足に思いつきり剣を振り下ろす。昨日までなら負けてただろう。だが今日の俺はなあ！

「一味違うんだよ!!」

霊圧を極限まで引つ張り出し、斬撃に乗せる形で放つ。俺の質量からは考えられないような威力で大虚の足を引き裂いた。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

体勢を崩した大虚はふらついているが倒れる気配はない。

「くそ、これじゃあだめか。せめて顔まで届けば。」



ルキア、なんて言っただ聞こえねえぞ。

「黒崎！く、どうすれば!?!」

「一護君、俺がいけないときに無理に霊圧を解放しないって約束だったよね?」

突如現れた人影が俺に話しかける。なんて言っただ聞こえないし、顔も見えないが、それでも俺は安心した。

グサツ

「いつてええええええええええええええええええええええ!!!!」

「我慢なさい。一護君が暴走した結果でしよ?不滅王、吸い尽くせ。」

肩に刺された刀からものすごい勢いで霊力が持つてかれるのがわかる。ああ、安心……「ちよつと待つてくれ、もう十分じゃないか?あとは自分でコントロールできるから!」  
「は?今日はこれから霊圧がほぼ枯渇した状態で俺にぼこぼこにされてもらうから。罪には罰が必要だよね!?!」

罪!?!そんな重いの!?!?!

「石田雨竜だったつ!?!」

「人に名前を尋ねるときはまず自分から「お前も今日の戦闘訓練に参加してもらう。」なんだ急に!」

「お前のせいで虚に襲われた医療の民間人に被害が出た。それを治したのは俺だ。お前

の尻拭いをしてやったんだから対価は必要だろ？」

そういわれると石田は黙った。理解できるところがあつたんだろう。

『啓活』すぐにうちの訓練場で始めよう。」

恐ろしい速さ（こちらは視認すらできない。）で俺と石田を担ぎ上げると一秒もしないうちに藤丸さんの家についていた。

「さあ、悪夢を見せてやる。」

あとから来た浦原商店一同とルキアが見たものはボロボロで藤丸に斬りかかる一護と内股で倒れ伏す石田の姿だった。



## ばいばい

今日は圭吾が馬鹿なことに感謝したり、石田が遅れて登校して来たり、石田と飯食ったりしたが、虚も出てねえし落ち着いた一日だった。

「一護。」

「どうしたルキア？虚か。」

「いや、そうではない。」

こいつもそういえば朝から調子悪そうだな。目を伏せたルキアの次の言葉を待つていると意外な言葉が飛び出してきた。

「おまえ、体は大丈夫か？」

「ん、おう。別に何ともねえけど。また、昨日みたいなやつが出るのか？」

「大虚など、早々出てたまるか。」

元気がないように見えてやりにくいな。

「おまえ、今日は少し変だぞ。なんかあったか。」

「…その「うおおおおおおお」

ルキアが何か言おうとしたところで叫び声が聞こえてきた。なんだ？

「一護~~~~~!!」

何でこんなところにコンが? 家出してたらしく、せっかく遊子に直してもらったばかりかだつて言うのに額に落書きが付きボロボロの土汚れまみれになりながらルキアに抱き着いた。俺じゃねえのかよ。

「戻る、か。」

「どうしたんだよ、急に。」

「いやなに、こいつも随分とお前になついたもんだと思つてな。」

「迷惑な話だぜ。」

そう聞くとルキアはやつと今日初めて笑つた。こいつもたまには役に立つもんだ。「しっかしズタボロだな。綿出てんじゃない。しょうがねえ、あいつに見てもらうか。」

.....

.....

.....

手芸部、確かここだったか。

「どうして僕が。」

「いいだろ？お前こういうの得意なんだから。」

「断る。」

「なんで？」

「答えるまでもない。」

めんどくせえ奴。

「あ、そっか！その手じゃ無理か！無理だよな！うんうん！そんなてじやほりに糸も通せねえよなあ！」

「失敬な！これくらいは怪我。貸したまえ！その目で見るがいい！神業の数々！」

手はそうでも鞆丸の痛みは相当なもんだと思うけど。何ともちよろい奴だ。コンをひったくり机に置いた直後立ち上がった石田は両手でものすごい速度で縫っていく。

「完成だ。」

約5秒程度でできたコンは何故か金髪ロールに赤いドレスを着ていた。

「誰だお前。つか趣味悪。」「パワーアップしたぞ。」

「何じゃこりやあああああ!!!」

「ふっ、いつ何時のオーダーもこたえられるよう。高級な布地を用意してあるのだ。あ

あ、ちなみにこの素材は「せい！」ぐは！」

……

……

…

「おい、ルキアー飯だぞー。あいつ、またどっか行つてやがんな。」

机に置いておこうと思ひ見ると一枚の手紙が置いてある。そこにはあいつのへたくそな兎の絵とともにこう書いてあった。

（世話になったな 朽木ルキア

楽しく解読せよ

たわけあたつて私はでたていたく。さたがたすなた、そたしたてしたんたばたいたすたるなた。こたたのたてがみたはたよたんだらたもやたせた。そたれたからできたれたたばこのたまたましたばたらくたどこたかにみたをたかくたしているた。）

その横にはヒントはこれと書かれた気持ち悪いキャラクターが書いてあった。

「ええい！まったく狸には見えんが、本文にこれだけが多いんだから多分狸だ！ええと

わけあつて私はでていく。さがすな、そしてしんぱいするな。このてがみはよんだらもやせ。それからできればこのまましばらくくみをかくしている。

なんだこれ？結局何で出てったかよくわかんねえままじやねえか。追うにしても死神にもなれねえしどうすれば「まいど」あ？」

さつきまでしまつていたはずの窓が開いていてそこには下駄帽子が座っていた。

「どうやらお困りのみたいっすね？何かわたしにお手伝いできることは？」

はてさて、面白くなつてきたな。（心は痛いけど）久しぶりに恋次君の顔も見れたし、白哉兄さまもあんな感じか。弱いな。俺がこの距離から見てることすらわからないなんて拍子抜けもいとこだ。あんなんでどうして夜一さんをこせると思うのか不思議でならない。

「人間への死神能力の譲渡は重罪だぜ。その処刑を刑軍どもじゃなく、俺たちに任せただけの上なりの優しさだろうよ。さあ、居場所を吐けよルキア。俺たちはてめえをとらえ、てめえから力を奪ったやつを、殺す。庇い立てするなよ、さつきのも今のもてめえが躲したんじゃない、こつちが躲させてやったんだ。次は斬るぜ。」

じりじりと詰め寄る恋次君に任せっきりの白哉兄さまは今何を思ってたんだろうな。ルキアちゃんほつぺ斬られてるけど大丈夫？

横の大ぶりを跳躍で躲したルキアちゃんの着地を恋次君は狙うが、青い矢が恋次君に飛んで行き横にずれた恋次君の刀はぎりぎりでもルキアちゃんに当たらなかつた。

「丸腰の女の子に武器を持った男が二人がかり、見ていてあまり気持ちのいいものじゃないね。」

矢が飛んできた方向から人影がゆつくりとルキアちゃんたちに近づいてくる。…やや内股で。

もしかしてまたガバですか？俺のせいで石田君が瞬殺されてルキアちゃん死んだとか笑えないが。

「僕はあまり好きじゃないな。そういうの。」

「俺たちが見えるとは、てめえ何もんだ？」

「ただのクラスメイトだよ、死神嫌いのね。」

本当は、本当はもっとカッコよかつたはずなんだ。こんなギャグマンガみたいな感じじゃなかつたはずなんだ！ごめん石田君。ちゃんと回道で治してやるべきだった。隼丸の青たんぐらい何とかなるでしょとか思わなきゃよかった。

「石田…？貴様、どうしてここに？」

「ただの偶然さ、君の気にすることじゃない。しいて言えば、この二十四時間営業の洋裁店チエーン、ひまわりソーイングに突然行きたくなり、こんな深夜にこのあたりを歩いていただけのこと。別に死神の靈気を感じたから気になって飛び出してきた口実、つくりのために、わざわざこの袋を家から持ってきたわけじゃない。ま、驚くのも無理はないか。」

あれ？ やっぱりこいつギャグキャラだったっけ？ 俺のせいじゃなかったかもしれないわ。

恋次君がひまわりソーイングの袋を斬り話しかける。

「質問してんのはこっちだぜ。てめえは何もんだってな。ま、答える気がないならそれでもいいや。俺はてめえを先に殺すだけだ。」

「恋次！こやつは関係な「何を言ってるんだ。ちゃんと答えたろ。ただの朽木ルキアのクラスメートだ。死神嫌いのね。」

「そういうのは、答えてねえって言ってるんだよ！」

「…石田雨竜だ、よろしく。」

「何だ急に？」

「いや、以下に死神とはいえ、自分を倒したものの名くらいは知っておきたいだろうと思ってるね。」

プルプル震えだした。沸点低いなー。

「決定だ、てめえは殺す！」

∴

遠距離主体の弓つかいが副隊長格に近接で1.8秒、よく持った方か。

「よく覚えとけ。阿散井恋次、てめえを殺した男の名だ。よろしく！」

「まで！」

噴き出した霊圧で地面が割れ恋次君は思わずその場から飛びのく。奇襲で当てられない、マイナス5点。

「なんだ！てめえは!?!」

「黒崎一護、てめえを倒す男だ。よろしく。」

「死覇装だと?どこの所属だ、てめえ…な、なんなんだその馬鹿けえ斬魄刀は!?!」

「あんだあ?やっぱりでけえのか、これ。ルキアや藤丸さんと比べて随分でけえ名とは思ってたんだよ。」

あ!俺の名前出されるのちよつとまづいねえ!?

「なに!?!藤丸だ?!」「藤丸…」



「たわけ！その名前を出すな！」

「…あ、ばれなきや何とかなる。聞かなかったことにしてくれ。」

恋次君は確実に気付いたし、白哉はびみよいが雰囲気変わったよな。どうしよ。

「気になることはいくつかあるが、てめえがルキアから力を奪った人間だな？」

恋次君は相手の返答を聞かず斬りかかった。いいぞ！うやむやにしちまえ！俺はなぜこうも一護君たちの敵を応援する側になるんだ。

「おらおらおら！その馬鹿出けえ刀は飾りかよ！」

そう挑発されて一護君は雑に振り下ろすが恋次君は飛び上がり、上空から攻撃を試みた。あーら、相手を騙すなんていったい誰に似たのかしら（すつとぼけ）

一護君の刀は地面に食い込み、本来なら上空への対処は間に合わない。しかし、一護君は刀を小さく（と言っても普通の刀より少し長い）することでその身をひるがえし恋次君へ振るった。

「く、そ…」

「相手の裏の裏を読め、あんなちゃんけな挑発に本当に乗っちゃうならあの人からなにか飛んで来るかわかんねえからな。」

…実戦で昨日教えたこと完璧にしろなんて言うほど厳しくした覚えはないですが、相手をうまく騙すことができるプラス10点

「気を抜き過ぎだ、恋次。その黒崎一護とやら、見た顔だと思っていたが、先日隠密鬼道から連絡が入っていた。大虚に断ち傷を負わせその滅却師とともに倒してしまったとな。」

「最近の隠密鬼道の質も落ちたもんだな。こいつが大虚に断ち傷?…おい、てめえの斬魄刀の名前は何て言うんだ。」

「斬魄刀の名前? いちいちそんなのつけてんのかよ。」

「自分の斬魄刀の名前すら聞けねえ奴が、この俺と対等に戦おうなんて2000年早えよ! 吼えろ『蛇尾丸』!」

蛇腹刀とか使いづらそうだけどどうなんだろう。あれで本当に戦えんのかな。

「前を見る。目の前にあるのは、てめえの餌だ!」

そういつてとびかかるがうちの「一護君を甘く見てもらっちゃ困るな。」

蛇尾丸で切ろうとした瞬間に一護君の姿はかき消え、動揺した恋次君の背を大きく斬った。

「いい気分だ。別に戦いが好きってわけじゃねえが、こいつは少し楽しくなってきた。」

ただでさえ大きかった一護君の霊圧がさらに上がる。ここまでの大きさは修行では調整に失敗したところだ。やはり天才の部類だな、実戦ってだけでこんなに簡単に伸びるんだから。

劍を振るつたときの風圧だけで体勢が崩される。拳打の一撃一撃が異様に重く、靈圧をあてられるだけで劍の勢いが弱まり、あまりの靈力の高さに靈覺に残像が映る。

「ちよこまかと逃げるのがうめえなあ！だが、それもここまでだ！」

とどめを刺そうとする一護君だったが白哉兄さまが動いて一護君の劍を側面から斬ろうと：したが一護君もそれに気づきとつきに劍を傾けることで武器の消失を回避した。でも二撃目は無理だ。一護君も気づいただろうが速すぎて体が追いついていない。

「卿の反射神経は驚嘆に値するが、肝心の体が追いついていない。鈍いな、倒れる事さえ。」

そうだね、速さはあとからいくらでも手に入るから、一護君に足りない判断力、反射神経、思考力、そして手札を増やすことに専念した。だからこの結果は妥当と言えるだろう。

「どうした、恋次。」

「いえ、この程度のやつ、隊長が手を下さなくても。俺一人でやれました。」

「そういうな。私とていつも見物してばかりでは、腕が錆びる。」

部下に花を持たせるのは立派か。そこまで下の者のこと考えられるならルキアちゃん救ってやればいいのに今回ルキアちゃんが処刑される原因を作ったのは藤丸である。

「一護！」

「おい馬鹿！よせ！」

そういつてルキアちゃんの首を掴んだ恋次君は標識に押し付けるようにしてとらえる。

「はなせ恋次！一護が「何いつてんだてめえ！よく見ろ！あのガキは死んだ！わかつてんのか？今あのガキに触れるだけで、てめえの罪は20年分重くなるんだぞ！死人のために、罪重くする必要がどこにあるよ！」

「一護は、私が巻き込んだ。私のせいで死んだのだ！私が駆け寄って何が悪い！」

「たとえ己の罪が重くならうとも、駆け寄らずにはいられない、というわけか。この子供のもとへ。」

「にいさま……」

「わかるぞルキア。なるほど、この子供は奴によく似ている。」

…おい。

俺が切れかけたその時、一護君は白哉の裾を掴んだ。

「もう死んでるだの、誰それに似てるだの、俺のいねえ間に勝手に話進めてんじやねえよ。」

「…放せ。」

「聞こえねえな。こつち向いて喋れ。」

「そうか、その腕よほどいらぬと見える。」

気配を察したのか、ルキアちゃんは一護の腕を思い切り蹴り、無理やり裾を放した。

「人間の分際で、兄さまの裾を掴むとは何事か。身の程を知れ小僧！」

今にも泣きそうな顔で、そう告げるルキアちゃんを一護君は絶望した表情で見上げる。ことしかできなかつた。

「まいりましょう兄さま。今のこやつの行動でこの朽木ルキア、目が覚めました。どうぞ、私を尸魂界へおつれください。慎んで我が罪を償いましょう。」

「さて、こら、何いってんだよ。ルキアてめえ！うっ！」

「往生際の悪い野郎だな。じたばたしてねえで、てめえはここでおとなしく死ねよ。」

「この者にはわざわざ止めを刺すこともありませんまい。捨て置いても、いずれこのまま息絶えましょう。まいりましょう、兄さま。」

「待てよルキア！何のジョークだよ！こつちを見ろよ！おい！おい！」

「うごくな！そこを一步でも動いてみる、私を追つてきてでも見る。私は、私は貴様を絶対に許さぬ。」

目に涙を浮かべて、言葉を続ける。

「いずれ死ぬ命、そこに伏して一瞬でも承らえるがよい。」

「…よかろう、とどめは刺すまい。先ほどの二撃で魂魄の急所、鎖結と魄睡を完全に砕い

た。そのものは半時もせず死ぬだろう。仮に生き永らえたとしても力のすべては失われる。死神の力さえ愚か、霊力のかけらさえ残るまい。恋次。」

「開錠！」

そういつて恋次君は断界をひらき帰っていく。今完全に門は絞められた。

雨の中、下駄の音が響き、倒れた一護に浦原は傘を持って立ち止まった。



「ふすまを開けて部屋に入ってきた下駄帽子は俺にあれから起こったことを説明してくれた。俺を助けてくれたことや、石田のメッセージも。」

朽木サンを救えるのは黒崎サンだけだつてね。」

「俺だけか。ルキアは尸魂界に帰っちまったんだぞ！どうやって追つかけるって言うんだ！どうやって助けたらいいんだよ！できやしねえよ。…そうだ、藤丸さん！きつと藤丸さんなら「そうやって、いつまでも藤丸さんに助けを求めんすか？」でもだつたらどうしろつてんだ！」

「本当に無いと思います？尸魂界に行く方法。」

「あるのか…？どうやったらいける!?教えてくれ！」

「もちろん教えますよ。ただし条件が一つ。これから十日間あたしと一緒に戦いの勉強をしましょう。」

「修行でもしろつてのかわ。そんな暇ねえだろ。ルキアはあつちで何時殺されるかわかんねえんだぞ！そんなことをする前に少しでも早く尸魂界に行つてルキアを「わかんない人だなあ。」

そういうと下駄帽子は持つてる杖で俺の頭を小突いた。いつもならそれで出るはずの俺の死神の体は出ないまま俺は後ろに倒れる。

「いつてるんですよ。今のままじゃ君は死ぬと。勝てるんすか？今の君が彼らと戦つ



て。私は今回、あえて君を彼らと戦わせました。それは、そうしたほうが口で言うよりわかりやすいと思つたからなんすよ。今の君の実力じゃ、尸魂界では何の役にも立たないという事実をね。君は弱い。弱者が敵地に乗り込む事、それは自殺つて言うんすよ。朽木さんを救うため？甘つたれちやいけない。死に行く理由に他人を使うなよ。尸魂界は通例、死刑執行に一月の猶予期間を持ちます。それは朽木さんの場合も同じはず。人間が死ぬのとは形が違いますけどね。これから君をいじめるのに十日間。尸魂界の門を開くのに七日間。そして、尸魂界に到着してから十三日間。十分間に合う。」

本当に助けられるのか？

「十日間で俺は強くなれるのか？」

俺はあいつを助けられるほど強くなるのか？

「もちろん！あなたが朽木さんを助けたいと心から願うならね。思う力は鉄より強い。半端な覚悟ならどぶに捨てましょう。十日間、私と命のやりあい出来ますか？」

そんなの、考えるまでもねえ！

「当たり前じゃねえか。」

俺の返答を聞いた下駄帽子はにやりと笑つた。

「藤丸さんには先に許可を取つてあります。ガンガン行つちやいましょう！」

雨が止んだ……気がした。

.....

.....

..

今日は珍しく、登校中に藤丸さんの姿がなかった。今日は珍しく、石田が休んだ。ルキアの姿は当然見当たらない。それでもみんなは何でもないように過ごしてて、あいっがいなくても俺らの世界は回るんだってことを知った。当たり前だ、あいつは尸魂界の人間なんだから。だったらどうする…

後ろから足音が聞こえてきて、振り返る。

「井上、なんだよ、どうかしたか？」

「朽木さん、どこいったの？どうしてみんな朽木さんのこと忘れちゃったの？黒崎君なら、知ってると思って。」

.....

……

…

「じゃあ朽木さん、元居た世界に帰っちゃったの?」

「ああ、しつかしびつくりしたな。井上に俺らのことが見えてたなんて。いつからだ?」  
「お兄ちゃんのことがあった時から。あたしね、あの時のこと本当に感謝してる。お兄ちゃんを導いてくれて、お兄ちゃんはきつと向こうで幸せにしてると思う。なんとなくわかるんだ。朽木さんも、向こうで元気にしてるかな。家族や友達もいるだろうね。」  
その言葉で、俺は俺を斬ったあいつの顔を思い出した。

「連れ戻さなきやならねえ。」

「え、でも、あつちで幸せならそれで…」

「あいつは今、何時殺されてもおかしくねえ状況なんだ。」

俺がその先を言い淀んでみると井上は突然立ち上がり急に急に変なことを言い始めた。

「そのあとはきつとこうね。なぜか俺の顔真似をおっぱじめた。激似である。向こうに家族がいようと何だろうと。生きてりやそのうちまた会えんだろ。死んじまったら全

部おしまいだぜ。…黒崎君の気持ちは決まってるんでしょ?」

井上の笑顔が、俺に勇気をくれる。

「あいつは確かに、ここにいた。居場所なら、ここにある。」

立ち上がり、前を見る。俺は結局進むしかねえ。

「ありがとう。井上。」

そうして俺は浦原さんのもとへ駆け出した。

………

………

…

店の地下に繋がっている梯子を伝っていった先には、雲一つない青空が目いっぱい広がっていた。

「どっひゃ〜何だこりゃ〜?!この店の地下にでっかい空洞があったなんて〜?!」「うるせえな。わざわざ代わりに叫ばなくても十分驚いてるって。」

「へへー、だったらいいんですがね。」

「あなたが藤丸さんの師匠だって話、まだ信じらんないぜ。本人から聞いた話だつてのによ。」

あのあと、藤丸さんに電話で話したのだが、下駄帽子、もとい浦原さんは藤丸さんの師匠らしい。

「まあいいや、さっさと始めようぜ。お勉強会とやらをな。」

「そんじやお望みどうり。」

そういつて浦原さんは俺を小突き魂魄をはじき出す。俺の体から飛び出た俺はいつもなら黒い着物を着ているところだが今は来ている服と変わらない姿で、しかも胸に鎖がついた状態で飛び出した。そして何より違うのは、息苦しくて仕方がないつてことだ。

「今のあなたは霊力の発生源である魄睡と、ブースターである鎖結を破壊されている。つまり、霊力を持たない普通の人間の魂魄なんつすよ。まずは、なくした霊力を元に戻さないとお話になりません。説明するより始めちゃった方がいいかな。おーい準備はいいかい？」

浦原さんが声をかけた先にはいつも店にいる気弱そうな女の子が立っていた。

「それじゃあ、よろしくお願ひします。」

「レッスン1、彼女と戦ってくださいな。ルールは簡単。どちらかが動けなくなった時点で、レッスン1クリア。彼女をのしちやってください。」

小さい子に殴りかかるのはすげえ嫌だ！でも、渡されたグローブとヘッドギアをつける。

「おっしやあ、いくぜ！」

俺はその子に向かって走り出した。

……

…

（「浦原さんは俺みたいに甘くない。手を抜いたら死ぬからとんだけ意味わからん命令でも一護君のちんけなプライドが許さなかったとしても全力で取り組みな。」）

なるほど、確かに手を抜いたら死ぬだろう。拳一撃一撃が地形を変えるほどの衝撃を持つている。だが、スピードはどっこいだ。ミスらなきや当たらねえ。

「ふっはっ！おらあ！」

顔も腹もだめだ。狙うならヘッドギア、あれしかねえ。

右から飛んで来る拳をスリッピングアウエーで躲す。怖すぎる！少しでもずれたら顔面ミンチだ！ここで引くかと思ったら少女はもう一方の手でさらに殴りかかってきたのでこれはスウエーで躲し、重心を戻す勢いをつけて少女の側頭部に殴り、その反動で少女は一回バウンドして地面を転がった。つてやべえ！

「おい大丈夫?!」

急に起き上がってきた少女のハイキックが眼前に迫っていた。

ドゴツ

ヘッドギアをしているとはいえ明らかに人体からなっではいけないような音が響き、俺は壁まで吹き飛ばされる。

「セーフ。」

浦原さんが少女の足を掴んで止めたらしいがばつちり当たってます。俺生きてる？「危なかったですな。」

背後から声が：俺壁に叩きつけられたよな？なんで俺と壁の間におっさんがいるんだ？

「いってえ、…もう一回、おねがいしま〜おめでとさんです!」ん?」

「レッスノークリアです。」

「え、あれでよかったのか。結局俺はその子に負けたんだぜ。」

「はい、私は雨をのしたらクリアーなんて一言も言ってませんよー？もともと、この子は対死神戦レベルの戦闘能力を持つてるんす。人間の魂魄じゃあ、どうあがいたって勝てやしません。ところで、まだ息苦しいですか？」

そういうえば、いつの間にか最初に感じていた息苦しさは無くなっていた。

「つまり、霊力回復に成功したってことです。このレッスンのポイントは一発勝負。最初の一撃を躲せるかどうか、なんすよ。霊力つてのは、魂魄の消滅の危機に最も上昇しやすいつすからねえ。うまく霊力が上がればパンチを躲せて万々歳。」

「もし、あがらなかつたら？」

「死にますね。」

あつぶな。手加減とかしなくてよかった。

「どうです？合格祝いだ。このまま、」

俺の因果の鎖が手斧で断ち切られる。

「レッスン2とまいますしよや。」

俺の試練はまだまだ続く。





「ギャーーーーー……あああああああああああああああ  
!!!」

いてえ、この縦穴どんだけ深いんだよ。おまけになぜか腕も縛られている。

「縛道の九十九『禁』、勝手ながらこのレッスンが終わるまで、あなたの腕を封じさせていただきました。」

「さあ、この状態で上がってきてください。それがレッスン2です。」

「バツ…馬鹿言え！できるかよそんなこと!!」

「できる出来ないを論じてる暇はないでしょう？ほうら。浸食はすでに始まっていますよ。」

俺の因果の鎖の先にはいくつものおぞましい口が出来上がりそれがまだ無事な因果の鎖を食い始めていた。

「うわあああああああ!?!」

「断ち切られた因果の鎖はそれ自身が自らを食らい始めるんす。」

どうにか食われないように鎖の先を破壊しようと胸と岸壁で押し潰そうとするがそれを察知したのか因果の鎖は俺の腹を噛み千切り、その痛みで倒れてしまう。

「通常、鎖の切断からその状態に移行するまでには数か月から数年かかりますがこの絶望の縦穴の底には自己浸食を活性化させる期待が充満させてあります。絶望の縦穴の底において自己浸食が完了するまでの時間はおよそ72時間<sup>日</sup>です。それまでに死神に成つてそこから這い出さず生きてくださいね？ 出ないと虚になった貴方をアタシらが始末しなきゃならなくなる。」

「…てめえ、俺を殺す気か。」

「貴方が諦めるならそういうことになる。」

………

………

…

もう、どれだけ時間がたった？ わかんねえ…どうしたらこんなところ登っていけるんだよ。

「大丈夫？ おなかすいてない？」

「寝ころんだ体勢から声の主を見上げるように睨む。右手に果物の入った大皿を持った見知らぬ女は俺の視線に嫌な顔一つせず心配したような表情で俺をのぞき込んできた。」

「何いつてんだよ、魂魄なんだから腹なんて減るわけねえし、因果の鎖だつてまだ結構のことつてんだぜ。つーかあんた誰だよ。」

「そつか、初対面だもんね？あたしは宮藤まつ梨。浦原商店でバイトやってます。よろしく。えーと、一護君が絶望の縦穴に入ってから、すでに70時間経過したんだ。最後の浸食の規模は今までの日じゃないぐらい鎖を食べられちゃうから、それだけしか鎖がないなら次で最後かもね。」

「そういうと女は皿を置いて宙を蹴るように上へ登つて行つた。そして、最後の浸食が始まった。」

「俺の胸にある鎖のすべてに口が付き因果の鎖の生えている鉄（のようなもの）を食い破り俺の孔が露出した。」

「……あ、……………」

「目から出た白い液体が俺の顔を覆うように固まっていく。」

「あ、ア……が……アアアッ」

「あふれ出る死への恐怖も、もう会うことのない家族への寂しさも、

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」  
 全て仮面<sup>本能</sup>が塗りつぶした。

「…『救済措置』に入ります「待った」

雨の肩を掴み『救済措置』を止める。

「キスケさん…」

「よくごらん、彼を。普通<sup>プラス</sup>整が虚に堕ちるとき最初に礼体が爆散して組み変わるもんす。ところが彼は順序が滅茶苦茶だ。体は整<sup>プラス</sup>のまま最初に仮面が生まれ<sup>プラス</sup>てきている。これは彼の抵抗の証です。彼が死神に戻る可能性はまだ残っている。もう少しだけ様子を見ましょ。彼が本当に、虚になってしまいうまで。」

俺は絶望の縦穴ではない場所に座っていた。どうなつてんだ？

「こつちだ」

黒いぼろきれを羽織つたようなおっさんに話しかけられる。誰だ？

「誰だ？だと、何を言っている。私だ■ ■ ■だ。」

名前の部分だけ不自然なほど聞こえない。

「そうか、まだお前には私の声は届かないのか…悲しいことだ。一体幾度声を囁かせば

私の声はお前に届く？お前以上に私を知るものなど、この世にはどこにも存在しないというのに。」

「？何いってんだ？わりーけどあんたみてーな陰気な知り合いはいねえん：

そこまで言いかけたとき棒の上に立っていたおっさんがこちらに足を向け棒の横に水平に立った。どうなつてんだそれ!？」

「驚いたな。なぜそんなところに座っていられる？」

そう言われて周りを確認すればおっさんが壁に立っているのではなく俺がビルの壁面に座っていたことに気づく。それを認識したとたん真正面から重力が降り注ぎ俺の体は落下を始めた。

「安心しろ。死神はしをつかさどるもの。多くの霊なるものを支配する。」

なぜかおっさんも俺の横にまで落ちてきて冷静に話しかけてくるが俺は今それどころじゃない！

「俺は今死神じゃねえ！」

「そう！大気中に飛び交うこの霊子さえも足元に固めれば踏み台とすることができるのだ。」

こいつ全然話聞いてねえ！

「思い出せ！死神であった時にお前は空中を蹴っていたことがある筈だ！そして知れ！

朽木白哉に消された死神の力は朽木ルキアから譲り受けた死神の力だけだったということ！奴はそれだけに狙いを定めていた。奴は油断した！他の死神の力を奴は見落としていたのだ!!」

ビルは崩れ始め、その破片が四角いブロックとなつて落ちてくる。

「他の死神の力：？」

「さあ、捜せ。隠れ去つた死神の力を探し出せるときがあるとすれば、それはこの世界が崩壊を始めた今において他に無い！今降つてきている無数の匣、この中に二つだけ死神の力が隠れている。それを見つけ出せ！」

「む、無茶苦茶言うなよ！どうやって!？」

「言い訳は聞かない。時間はない。この世界が完全に崩れ去る前に見つけなければ…お前は虚となるのだ。」

落下し続けた体は地面を突き抜け、水に沈む。どうすりやいい？こん中からたつた二個死神の力の入った匣を捜す？どうすりやいいんだ。大体俺はもともと霊力だなんだを察知するのは霊絡を見ねえと苦手なんだ。…霊絡？そうだ確か死神の霊絡は！

一斉に伸びた白い霊絡の帯の中に二反だけ赤い帯が見つかる。それを掴み引つ張りよせることで片方の匣が開き、中から斬魄刀の柄が出てきた。

「よく、見つけてくれた。次こそは…私の名がお前の耳に届くといいな…。」

「あんた…もしかして「何をしている！崩れるぞ！さっさと私を引き抜け!!」

急かされて俺は匣から斬魄刀を抜こうと力を入れる…が

「ぬ、抜けねえ…っ!!」

このままじゃっ！虚になっちまう！ここまで来て、やっど希望が見えたのにつ！

そのとき、斬魄刀の柄を握る手を後ろからそつと握られ、いるはずのない藤丸さんに声をかけられる。

「ほら、いつまでも燻ってんじやないよ。まだスタートラインにすら立ててないんだ。

一気に引き抜くよ！」

「な…なんで!？」

藤丸さんが力を入れたとたん驚くほどすなりと斬魄刀は抜け、俺はこの世界から消えた。

「まったく、お前には苦勞を掛けるな。」

「いいさ。俺が好きでしていることだ。俺が負けたときには一護君に頑張ってもらわなきゃいけないって考えたら、俺の方がそつちに迷惑かけてる気がするけどな？」

……



::

「おい！お前か!? 餓鬼!! 返事しろオレンジ色!! おめーなのかよ!? 生きてんなら返事しろって！」

うるせえな。仮面が邪魔でうまくしゃべれねえんだよ。

背中に背負った斬魄刀を抜き柄で仮面を割っていく。結構いてえな。砕けたところからそのまま手で強引に引きはがした。

「ふう。」

体に不調はなし。死神の力も戻り、斬魄刀も折れてるが手に入った。

「オメデトさーん♪ キツチリ死神に戻れたじゃないスカ！ お見事！ レッスン2クリアっス!!」

…浦原さんに思いっきり柄で殴りつけた。

「俺は誓ったんだ。生きてこの穴から出たら必ず!! てめーを!! ぶつ殺す!!!」

「へえ、そんじゃあ丁度いい。その気合使つてこのままレッスン3に入っちゃいますか！ レッスン3はなんと！ 時間無制限!! 斬魄刀を使って私の帽子を落とせたら」

悠長にしゃべってる浦原さんの懐に潜り込み、折れた斬魄刀で帽子をぎりぎり傷つけ

るよう振り上げる。

「…やりますねえ。折れた斬魄刀でここまですは。」

「当たり前だ。五分くらいでカタつけようぜ。」

「そつすね。それじゃあ五分でカタつけてみましょうか。」

……

…

（そうですね。黒崎さんになんやかんや言いながら最初は舐めてたんすよ。黒崎さんのこと。）

浅打で二合、三合と重ねていくうちに、徐々にこちらが押され始める。

「結構やるじゃないっすか、『紅姫』」

始解した紅姫の攻撃も刀をより細く密度を高めることでしつかりと返される。しかし、それでも刃こぼれはしていき、こちら側が有利になつてゆく。

「まだ、その玩具でアタシと戦う気なら、アタシはキミを殺します。」

このままじゃじり貧だ！何か手は…？

「何故逃げる、一護。」

お前はまだ、私を呼んでいない。

前を向け一護、今もお前になら聞こえるはずだ。

お前の耳をふさいでいるのはとるにならぬ恐怖心、

敵は一人、お前も一人、何を畏れることがある？

恐怖を捨てろ。前を見ろ。

進め。決して立ち止まるな。

引けば老いるぞ！

臆せば死ぬぞ！

叫べ！！我が名は」

「『斬月』」

現れた斬魄刀は巨大な出刃包丁のような形で、柄…すらない持ち手には深い青の布が巻かれており、それは右腕にまで巻き付いていた。

「そいじゃ斬魄刀も出てきたところで、本格的にレッスン3始めちゃいませうか！」

「わりい浦原さん。うまく避けてくれよ。多分、手加減できねえ。」

「!! 啼け『紅姫』!」

現れた血霞の盾は上半分が斜めに消し飛び、浦原の帽子が宙を舞う。  
「:: レッスン3、クリアっス。」

## 久しぶりに家族に会いに行きます

「おーかえりイーー!!待ちわびたぜー護!!一人で遊ぶのは寂しかったぞオ!!」

アホみたいに飛びついてきた圭吾の顔面に蹴りを入れる。「手厳しい!!」たまにこいつの能天気さがうらやましくなるぜ。とりあえず一目で南国に行ってきたことがわかるようなやけかたをした水色にちよっかいを出してるアホに疑問を投げかける。

「なー圭吾、今日のメインって夜の花火大会だろ。こんな昼間っから集合かける必要あったのかよ?」

現在時刻は三時十分こんな時間に徴収した犯人に事情を問い詰めればすぐえわくわくしたからとりあえず集めたというアホな回答が返ってきた。つまり何にも考えてないってことか。

「十日でRPGを五本もクリアしてしまいました「ジャマー!」ぐふあ!!」

圭吾の悲しい十日間の話を聞いていると圭吾の背中に蹴りが入る。そこには竜貴、井上、チャドの三人がいた。

「竜貴お前その腕どうしたんだ!?!」

話を聞くところによるとインターハイで二位だったらしい。怪我のせいで勝てな

かったとか言ってるが腕折ってるのに試合に出はしたのかよ。

……

……

……

喋りながら時間をつぶし、花火大会の時間もいよいよ近づいてきた。

「打ち上げは川向こうの私立グラウンド!」

「だからもつと向こうじゃないと綺麗に見えないよ?」

「えー——なんかもうこの辺でいいんじゃない? あんま近いと出店とかで人多いし」  
圭吾がなんか熱く語りだした。巻き込まれたくないししばらく見物すつか。

カラカラカラカラ

ガラガラガラガラ

これ何の音だ?

ガラランガラランガララン

「おにーちやーん!!」

「一護オー!!」

「一兄いー!!」

「一護!」

遊子、親父、夏梨、お袋が突っ込んでくる!?ぐえっ!あ、よかった。遊子と夏梨は腹にタツクルかましてきたが、親父はお袋の車いすを持ったまま突っ込むのはまずいくらいの分別はついたようだ。

「安心:したな?ダイナミックエントリー!!!別に入り口ではない」

こいつわざわざお袋の車いす止めてタツクルかましてきやがっ!

「ぎゃー—————」

結局河原に転がることになるんか。

「ほらほら、お兄ちゃんもチョコバナナ食べなよー!おいしいよ!はいあーん!!」

「あーん!!」

「い:いらねえよ!てかなんでお前ら隣の市の花火大会に来てんだよ!」

「なにようあたしのバナナが食べられないってゆうの!」

うるせえ、普段落ち着いている夏梨でさえハイテンションだ。

「何だオマエ酔ってんのかよ!」

「おう、よってるぞ。」「なんでだよ?!?!?!」

「ケンおじいさんが出してたフルーツジュースの屋台で少しボケちゃってるのかジュースを薄めようとして水と間違えてお酒をいれちゃったみたいなの。」

いや、それは…

「あの、予想でしゃべって申し訳ないっすけど、それ多分ボケとかじゃないっすよ。」

「…まあそんなことはどうでもいいじゃない（か）。」

だれかこの二人を止める方法を教えてくれ。

「向こうで朝7時から出向いて確保しといた特等席があるんだが、そこにみんなでいどうしないか!」

ああ! 健吾と水色の心をばっちりと捕まえやがって!!!

「それじゃ行くぜ野郎共!! レッツラドン!!」

「はー……仕方ねえー俺も行くか…わりーな竜貴、毎度毎度。いやなら来なくても大丈夫だからな。」

「わかってるわかってる。心配しなくても後からちゃんと行くって。早く行ってあげな。」



.....

.....

..

ダイイングメッセージのような連絡を受けて俺はルキア奪還に向かおうとした。しかし、そうして扉を開けると親父とお袋が待ち構えていた。

「親父!?!お袋も!?!こんな時間に何やって「もう、行くんでしょ?」!」

「どうせお前のことだから何も言わずに行くんじゃないかと思つてな。母さんとうして家の前で待つてたわけよ。」

「二護、月並みなお守りだけどこれを持ってきなさい。」

そうしてお袋からもらったお守りはなんてことないような普通のお守りで、それでも俺には何より心強く思えた。

「無事に帰つて来いよ。」「安心していつてらっしゃい。」

「おう!行つてきます!」

……

…

井上、チャド、石田、藤丸さんと合流して俺たちは尸魂界に突入を、

「つてなんでいるんだよあんたは!?!」

「久しぶりに家族に会いに行こうと思って。」

ルキアを助けるのを手伝ってくれんじゃねえのかよ。

「言いたいことはわかるよ。でも僕の弟子はたった一人の死神すら助けられないほどや  
わじゃないだろ?」

「言ってくれるじゃねえか。わかったよ。ルキアを救ってくるぐらい朝飯前だつてん  
だ。」

そうして俺たちは穿界門に飛び込んだ。

# ルキアちゃん奪還篇 身勝手な似た者同士

早くも石田が脱落しそうになったり井上が無茶してヨルイチさんに怒られたりしたがなんとか無事に尸魂界にたどり着いた。ヨルイチさんの話によるとここは流魂街と呼ばれる場所らしくあばら家のような建物がいくつも立っている。あたりを見回すと一方にこことは違い道が舗装されしつかりとした家が建っている街並みが見えた。

「わかった！あっちが死神たちの住んでるなんとかって街だな？ いっちなばーんのーりー！」

「ば…っ馬鹿者!! 迂闊にそちらへ近づくな!! 死ぬぞ!!」

「え？」

その言葉で足を止めると俺の数センチ横にとてつもなく大きな門が落ちてくる。あつぶね!!

「…久すぶりだあ…通廷証もなすにごの瀨霊門を潜ろうどすたやつは…」

その門を守るように現れた男は門に負けず劣らず大きく軽く見積もつても4メートルはある。着物の色が黒いことからおそらくはこの大男も死神なのだろう。

「久々のオラの客だ。もてなすど小僧！」

威嚇のために俺にぎりぎり当てないように手斧（と言ってもその大男が持っているため俺の背丈以上ある）を振り下ろしてくる。別にこれになんかする必要はねえが、

「わりいけど時間が惜しいんだ。さっさと通らせてもらうぜ。」

別にわざわざ隙を見逃してやるほど甘くねえんだ。斧の側面をただ斬月を斬る。それだけで十分だ。

手斧の上部は勢いよく吹き飛んで行きその折れた手斧を見てあたふたしてる。俺の勝ちだ。

「なあ、俺が勝ったんだから通してく、「オラの…斧があ…!!」

じわじわと目に涙をため泣き叫ぶ姿を見てどんどん罪悪感が溜まっていく。

「壊れちまっただ！壊れちまっただ！オラの斧がくくく壊れちまったあゝあゝ!!!」

「あくあ！一護君、丹坊君のこと泣かしたくく!!いけいけないんだく！いけいけないんだく!!」

「お、俺が悪いのか!?え…え…え…と…なんつーか…わ、悪かったな。斧壊しちまって。」

「うおお…うう、お前え…つ!!いいやづだなあ…!!」

斧を壊した恨み言を聞くはめになると思ったら予想外の方向から好感度が上がっていった。

「お前めえとおらは敵同士、だのにお前めえはまげだおらの心配しんべえまですてぐれる…でけえ!!  
 なんて器の出けえ出来た男なんだ前めえは!!それにひぎがえ何だオラは…斧が折れたぐ  
 れえでベソベソすで、男とすでなさげねえだ!!」

変な方向から以上に持ち上げられてる。なんで？

「完敗だつ！オラは戦せん士とすでも男とすでもお前めえに完敗だ!!」

涙をぬぐいながらもその大男は話を続ける。

「この白道門の門番になつて三百年…オラは一度も負けだこどがながつた…お前めえはオ  
 ラを負かすだ初めでの男だ…通れ！白道門の通行を丹坊が許可する!!」

……

…

「氣いつげろや一護、お前めえが何のためにこの門を潜るのがしんねえが、ごん中はずええ連  
 中ばつかだどー」

「わかつてるさ。」

「そうか…イヤ、わがってんならいいだ。」

俺の返答を聞いた☒丹坊は満足したのか、白道門の下に指を入れる。

「腰ぬがすなよ〜〜〜一気にいぐど〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜…」

「ぬゝん!!!」

☒丹坊が思いつきり力を入れると俺たちの背の何倍もある白道門がすさまじい音を立てて上がっていく

「いゝおおおおおおおおおおおお!!!」

「!!!うおおおお!!!」

その様子はすさまじくキャラではない石田やチャドですら声を上げ驚いている。

…☒丹坊様子がおかしい。急に止まり、全身から大粒の汗を垂れ流し一点を見つめている。

「…あ…ああ…あああああああ…」

そこには線の細い白髪糸目の男がこちらを見つめていた。

「さ、三番隊長…市丸ギン…」

「ああ、こらあかん。」

俺がぎりぎり視認できるかどうかの速度で抜かれた刀は一瞬で伸び門を持ち上げている☒丹坊の片腕を切断した。

「…あかんなあ、門番は門を開けるためにいてんのとちやうやろ。」

片腕になった箱丹坊はそれでも全身を使っていまだに俺たちのために門を開け続けてくれている。

「おー——片腕でも門を支えられんねや？サスガ尸魂界一の豪傑。

けどやつぱり、門番としたら失格や。」

「ふうーふうー、…オラは負けたんだ…：負けた門番が門を開けるのは、当たり前のことだべ!!」

「——何を言うてんねや？わかかってへんな。負けた門番は門なんか開けへんよ。門番が負けるゆうのは…：死ぬゆう意味やぞ。」

おそらくはもう一方の腕も切り飛ばそうとしたのだろう。だが振り切る前に距離を詰め、俺は斬月でその刀を受け止める。

「何てことしやがんだこの野郎!!箱丹坊と俺たちの間でもう勝負はついたんだよ！それを後から出てきてちよっかい出しやがってこのキツネ野郎！」

井上に箱丹坊の腕の治療を頼み、刀を握りなおす。

「来いよ、そんなにやりたきや俺が相手をしてやる。武器も持ってねえ奴に平気で斬りかかるようなくそ野郎は、俺が斬る。」

「はっ、面白い子やな。僕が怖ないんか？」

「ぜんぜ」「コラー……もうよせ一護……ここはひとまず退くのじゃ!!」

「なんでだよ!? こっからじゃねーか!」

ヨルイチさんめ、しまらねえことしやがって。

「君が黒崎一護か。」

「知ってんのか俺のこと?」

なんでこいつが?

「なんや、やつぱりそうかあ。」

そういうとそいつは踵を返し瀨霊廷内に戻っていく。

「あっ?! おい! 帰んのかよ!」

「まさか、君にここを通すわけにはいかんしなあ。」

ある程度距離が離れたところでギンは斬魄刀の刃先をこちらに向ける。まずっ!?

「射殺せ『神鎗』」

先ほどのように伸びた刃はこちらへ恐ろしい速度で迫りとつきに斬月で防ぐがその勢いのまま俺は後ろに吹き飛ばされ、背中を受け止められた。

「おっと危ない危ない。」

「藤丸さん!」

だらしなくて、時々アホで、中学生にいろんな性癖を教えるような教育に悪い人で、そ



れでも頼りになる師匠がギンの刀を弾く。

「っ！お兄さん久しぶりやな？元氣しとった？」

「しとったしとった！ところでギン君、一護君受け止めといてなんだけど、ここは退かせてもらえる？」

「な!?!なんでここで退くんだよ!?!」

藤丸さんに頼るのはあんまりよくねえかもしれねえがこいつを倒せばルキアの奪還がぐつと近づくつてのになんて。

「俺とギン君が本気で戦えば余波で織姫ちゃんと茶渡君は死んじやうだろうね。石田君は半々つてところかな？」

井上は目を伏せチャドも落ち込んだような気がする。目の前で足手まといだと言われたんだ。悔しいに決まつてる。

「ええよ。みんなにもびんびんしとったつて伝えとくわ。」

「うん、ちよつと待つて。」

そう言つて藤丸さんは袋から何かを取り出すとギンにむかつて放り投げた。

「干し柿作つたんだよね人数分入つてるからみんなで食べてよ。」

「おおきに。配つときますわ。」

藤丸さんは俺を連れて瀨霊廷を出ると☒丹坊に声をかけ門を下げる。

「  
ハ  
イ  
バ  
ー  
イ  
」  
「  
♡  
」

# 海燕先輩の弟君だからな、我慢だ我慢（ブチ切れ寸前）！

俺は、俺は今日死ぬのかもしれない。俺だけじゃねえ。井上も、石田も、チャドも、ヨルイチさんも、みんな死ぬんだ。

「よお、何とか言えよ。なーんでこんなところに、」

藤丸さんの頬を、煽るように叩きながら男は話を続ける。

「クソ死神サマがいるんだって、」ペチペチ

「訊いてんだよお〜〜〜!!」ムギユ

ぎゃあああああああ!!顎の部分を思いつきりつかみ始めた!?!おしまいだあああ  
ああ!!!

藤丸さんは確実にいら立っている。しかしいまだに手を出さないことが俺には恐ろしくて仕方なかった。そんな藤丸さんにあるうことか岩鷲「西流魂街の真紅の弾丸」にして「西流魂街の兄貴と呼びたい人」14年連続NO.1、さらに「西流魂街一の死神嫌い」だが、全て自称であるはタツクルを見舞うがそれを躲して藤丸さんは外に出た。

「とつとと出ていきやがれ!!俺様の目の黒いうちはこの西流魂街に死神なんか一歩たりとも入れやしねえぞ!!」

「ごめん。でも俺はこの西流魂街にも用があつてね。わるいけど。」

その言葉が気に食わなかったのか岩鷲は自身の剣に手をかけた。南無阿弥陀仏。

「素直に出てかねえなら仕方ねえ・・・死神さんよ。どうやらテメーと俺様は、戦う運命にあるらしいな。」

「や、止めるんじや岩鷲!!その人たちは悪い死神じゃないんじや!」うるせえ!!わかつてんだろ長老。死神は死神、良いも悪いもねえんだよ!行くぜ死神い!!!」

藤丸さんはどちらの斬魄刀も抜かず岩鷲の横なぎが迫ってくるのを見ているだけ。ただどれだけ動くのが遅れたつて藤丸さんに攻撃は当たらない。躲したり受け流したりいくらでも選択肢がある。それが藤丸さんの強みだと俺は勝手に思っていたんだ。

ガツ

「な!?!」

俺たちは誰もが何が起こったか理解することができなかった。岩鷲が振るった刃は藤丸さんの腕に当たった。然しその刃は骨を断つどころか皮一枚も切ることができずその場で止まった。

岩鷲はそれでもあきらめないのか足の動きで円を描くと地面は流砂のように崩れ藤丸さんの足場は不安定になる。

「いくら死覇装の中に何かを着こもうと顔はガードできねえだろっ!」

岩鷲の膝蹴りは鼻をとらえる。藤丸さんはそれも防ぎもせず馬鹿正直に喰らい固いものと固いものがぶつかるような鈍い音が聞こえた。

「~~~~~つてええええええええええ?!?!」

藤丸さんは砂に足を取られ片膝をついているが悲鳴を上げたのは岩鷲の方だ。

「海燕先輩の弟だからもう少しやるかと思えば、杞憂だったか。」

ジリリリリリリリ

「大変だアニキ!! 9時だー!!」

岩鷲の手下? のような男が背負った時計から目覚ましののような音が鳴っている。それを聞くと岩鷲は突然慌てたような声を上げた。

「まずい! カモオン! ボニーちゃん!!」

指笛を合図に猪が岩鷲に突撃するように向かっていった。

ガンッ

訂正、突撃した。

「いつも通りやるなボニーちゃん・：だが今日は時間がねえ、急いで俺を乗せてくれ!」  
猪に乗った岩鷲はそのまま去っていき藤丸さんはその後姿を憤るでも、笑うでもなく何か思うところがあるような顔をしていた。

.....

.....

.....

志波なんとかさんの家に向かうため村長の家を出発してから約30分。歩き続けて村からはずいぶん離れたが空鶴つて人の家にはまだつかない。

「奴は人気のない閑散とした土地を好むのじゃよ。すむ場所もコロコロ変えるが家だけはいつても同じものを作る。儂が見れば一目でそれとわかるやつだ。ほら、見えてきたぞ。」

大きな手が横断幕を握りしめておりそこには堂々と志波空鶴と書いてあった。・：夜  
一さんじゃなくても一目でわかるわ。

「待てい！」

「何者だ貴様ら。」

「奇つ怪ないでたちをしておるな。しかも二人は死神と見える！」

「怪しい奴らめ。この金彦こがねと銀彦しろがねが貴様らを通しはせぬ！」

「去れ！さもなければここで死ぬこととなるだろう！」

門番ゲンバン、門番キン、また門番キン彦かよ。俺が剣に手をかけると金彦（の方だと思う）が何かに気づ

いたのか眉毛を上げた。

「よ……夜一殿!？」

「久しいの金彦、息災であったか？」

「はっ！いやはや、失礼いたした。夜一度とそのお供とはつゆ知らず。ご無礼をお許しください。」

「よい、先んじて連絡を入れなかった儂にも非はある。」

入口から直通の階段を下つていき、金彦が障子を開ける。奥に鎮座する女は刀を背負っているが片腕がなく、しかしまったく言っていないほど弱さは見られなかった。

空鶴ソラトって女あ!!?

「よう、久しぶりじゃあねえか。夜一。何だその餓鬼どもは？」

「実は空鶴、今日はおぬしに頼みがあつてきたのじゃ。」

「だろ。お前が家来るときは大概そうじゃねえか。」

面倒マンダウごとか？

「恐らくは。」

「……ハッ、久しぶりだな。このやり取りも……いいぜ話せよ。面倒マンダウごとは好きだ

ぜ。」

・  
・  
・

「なるほど、話は大体わかった。いいだろう、引き受けてやる。浦原もかんでるんじゃないやあ断るに断れねえしな。ただし・・・俺はあんたのことは信用してるが、その餓鬼どもまで信用してるわけじゃねえ。見張りの意味も込めて俺の手下を一人つけさせてもらう。異存はねえな？」

「無論だ。」

「おい！用意できたか！「ちよつ・・・まつ！」開けるぜ！行儀良くしろよ！」お・・・  
おう！オツケー姉ちゃん!!」

「は・・・初めまして！志波岩鷲と申します！以後お見知りおきを！」

沈黙が支配どころか君臨した。



「あああゝゝゝゝゝゝゝつ!!!!」  
「何だ？お前の知り合いか？」

## 石の上にも三年。墓の前にも数日。

太くて長くて黒くて空鶴さんの命令で先つちよが出てくるもの、なくんだ？

「びびったか餓鬼ども!!これが志波空鶴専用巨大花火台、花鶴大砲だ!!これでお前たちを打ち上げて瀨霊廷に突っ込ませてやる!」

なるほど、きたねえ花火になる未来しか見えねえんだけど。

「こんな時に何の冗談を言ってるんです!?!花火師だか何だか知らないがそんなもので僕たちを打ち上げる!?!どうかしてる!そんなことしたら絶対に死つ」

口答えする石田の顔面に謎の球体が投げつけられ、俺の手に収まる。空鶴さんがルールだつて明言されてんのに。

「こいつは『霊朱核』つうもんだ。そいつを掌に押し当てて霊力を込めてみる。」

「…霊力を込めるってどうすんだ?」

「ああ!?!何いってんだそんなもんこうやって鬼道撃つ時みたいに手先に力込めりやいいだけじゃねえか!死神なら鬼道ぐらい使えんだろ?」

…つかえないけど。

「ほら、一護君かしてみな。」

それを藤丸さんに渡すと藤丸さんの周囲に青みがかった膜が構成され藤丸さんを包み込んだ。

「これが、砲弾だ。いかよく聞け。テメーらは瀧靈廷をガードしてるのは周囲に張り巡らされた精霊壁だけだと思ってるかもしれないねえが、精霊壁には尸魂界でも希少な『殺氣石』つつう霊力を完全に遮断できる鉱石でできる。だから壁に穴を開けて中に入ることはできねえ。そのうえこの『殺氣石』は厄介なことに切断面からも霊力を分解する波動を出してやがるんだ。つまり、瀧靈廷はその波動で空の上から土の中まで球体上に障壁が張られてるってことだ。当然そんなところにただ飛んで行っても、霊子でできて俺たちはチリになっておしまいだ。そこでこいつの出番ってわけだ。こいつは俺の開発した特殊硬化霊子隔壁発生装置、お前ら全員で個の球体に霊力を込めれば、一時的に瀧靈廷の障壁を突き破るぐらいの砲弾が作れる！そいつをこの花鶴大砲で打ち上げて、一気に内部へ突入するって寸法だ！何か質問のある奴！」

え!? えくと:

「ねえなら解散！地下練武上で霊力集中の練習に入れ！金彦！銀彦！連れて行け!! しっかり練習しろよ！一人でも集中乱したらその場でドカンだからな！「何イ!?!」

金彦に担がれて俺はその場を後にした。まじで無茶苦茶な作戦だな。

「おい、お前も戻っていいぞ。」

「いや、俺は突入はしないので。それより、一つ聞きたいことが。」

「なんで来たんだよ。まあいい、なんだ言ってみろ。」

「…海燕先輩のお墓はどこですか？」

一触即発、岩鷲は昨日自身が武器を用いても手も足も出なかつた死神が何か返答を間違えれば即座に姉の敵になるであろうことを理解した。

「てめえ、兄貴のことを知ってて言ってるんだらうな。」

岩鷲の知る中で最も長い一呼吸をおいて、死神は答えた。

「全部知ってます。ですがそれでも海燕先輩のお墓参りをさせてもらいたいです。」

「…いいだろう。すぐそこだ、ついてこい。」

……

……

:

死神は持ってきた百数年前の流魂街の酒と、干し肉のつまみを出し墓の前に備えてしばらく手を合わせるとそれに口をつけ始めた。

「それで、兄貴とはどういう関係だったんだ。」

「隊は別だったけど妹が海燕先輩と同じ隊で、他隊と合同の見回りだと、妹と一緒によくお世話になっていたんだ。」

他の隊、妹、夜一とともに来た死神、出てきた情報から空鶴はこの死神が兄の危機を救った死神であり、尸魂界で最も極悪非道な死神だということに気が付く。

「おまえ、宮能藤丸か。」

「ふ、藤丸!? 姉ちゃん、それって：「黙ってる、どんな奴であろうと兄貴の恩人でもあるんだ。下手な侮蔑は俺が許さねえぜ。」」

確かにやべえ奴だ。だが実際こいつの犯した罪によつて悪事は暴かれ、あれは没落した。夜一も「悪い奴じゃないと思うんじゃないよ。ただ、まあなんとというか自分の欲望に忠実というか、犯罪のラインが緩いというか、まあでも悪人じゃないんじゃないよ。」とか言ってたしおそろく悪人ではないのだろう。

「俺たちはもう行くが、お前はどうすんだ？」

「俺はしばらくここにいるよ。飯も自分で何とかするから作らなくていいって伝えたい。」

「こいつちよいちよい凶々しいな。」

「いくぞ、岩鷲。」

「うん。」

一番隊隊舎の扉が開く。そこには浮竹十四郎を除くすべての隊長がそろっていた。

「来たか、さあ！今回の行動についての弁明をもらおうか。三番隊長、市丸ギン!!!」

「なんですの？いきなり呼び出されたか思うたら、こない大袈裟な…尸魂界を取り仕切る隊長さん方が僕なんかのために揃いも揃ってまあ…でもないか。十三番隊長さんがいらつしやいませんか。どないされはったんですか。」

「彼は病欠だよ。」

「またですか。そらお大事に。」

まるで自分が何もしてないかのようにへらへらと喋るギンを東仙は意に介さないように答えた。

「ふざけてんなよ。そんな話しにここに呼ばれたと思ってるのか？てめえ、一人で勝手に」

に旅禍と遊んできたそうじゃねえか。しかも殺し損ねたつてのはどういうわけだ？てめえほどのやつが旅禍の4・5人殺せねえわけねえだろう。」

「せやな。ただの旅禍なら簡単に始末できますわ。ただ、旅禍の一人に宮能藤丸が混ざってたんや。」

「何!？」

「いやあ、強そうなやつがいらないなんて高くくつてたら何もなしところからすつと表れて僕の攻撃受けてめてきたんは肝が冷えたわあ。」

その名前が出たときの反応は様々だった。

懐かしい名前だと昔を思い返すもの（というか日番谷冬獅郎）。

その名前にテンションをぶち上げるもの（というか更木剣八）。

名前を聞きめんどくさい奴が来たと苦虫を噛み潰したような顔をするもの（というか涅マユリ）。

過去の悪逆無道残酷非道十悪五逆な行為を思い出し、すでに半泣きになりながら震えが止まらないもの（というか碎蜂）。

その姿を見て何があつたのかと心配するもの。

碎蜂を慰めるもの。

「だまらっしゃい！やめんかいみつともない！でもアイコンタクトで卯ノ花に碎蜂は下

がらせた。…じゃがまあ、今のでおぬしがここへ呼ばれた理由は概ね伝わったかの。今回のおぬしの命令なしの単独行動、そして標的を取り逃がすという隊長としてあるまじき失態！それについておぬしから説明をしてもらおうと思つたのじゃが、話を聞く限りそれがすべてのようじゃの。もともと三席でありながら卍解さえ使いこなすことができれば隊長になつてもおかしくないやつじゃつた。不滅王のこともあり霊圧は推定隊長格の2倍、卍解さえ使えてもおかしくない。相手をする場合体長3名以上で確実に仕留めよ！」

「藤丸さん。」

「何？もうルキアちゃん助けるために行くんでしょ？」

「ずっとそこで墓参りしてたのか？」

「唯一の親友、とか大切な家族、とかでもないけどそれでも100年もあれば話すことなんて山のようにあるんだよ。一護君は後悔しないようにするんだよ。すう——決して独りよがりにならず、仲間を頼り、力合わせ前を見ろ！斬月の声を聴き、決して歩みを止めるな、そうすれば君は無敵だ！はい！先輩からのアドバイス終わり！それじゃ、行つてらっしゃい。」

「うすーいつてきますー！」



「ええっ?!黒崎君と宮能さんってまさかそういう関係?!そんな宮能さんのなんて受け入れちゃったら黒崎君もチヨモランマの登頂に成功しちゃうよ!」

「井上さん?」

## (死神に) なるう系主人公

背負っている刀を引き抜き空鶴さんは詠唱を始める。

「彼方！赤銅色の強欲が36度の支配を欲している！！72対の幻、13対の角笛、猿の右手が星を掴む！」

花鶴大砲の台座に刺さし、頭に巻いている帯を掴むとそれが自然に左手に巻き付き炎を纏い、その拳で台座に刺した刀を打ち込むように殴りつけると刀は台座に沈みそのひび割れから炎が導火線のように迸った。

「25輪の太陽に抱かれて砂の揺籃は血を流す。花鶴射法二番！！

『拘咲』

はえくく、こりやなんとも見事に打ちあがるもんだな。

「気を付けて行つて来いよ。岩鷲…」

え？岩鷲君も行ったの？なんで？

「さて、それでお前だよ藤丸。あいつらが返ってくるまでここにいんのか？」

「いや、俺も途中で漣靈廷にはいきまます。しばらく時間はあるんでこっちに残してきた嫁の様子でも見てこようかなと。」

「そうか…（こいつ嫁いんの!?!）」

「いよっほお!! ツイてるう!! 配置につくのが面倒だったから隅っこの方でサボってた  
ら、目の前にお手柄が落ちてきやがった! ツイてるツイてる、今日の俺はツイてるぜっ  
♪そしてテメーらは、ツイてねえ」

妙に自身の運がいいことを強調する坊主死神とおかつぱ頭の死神がよってくる。

「なんで俺たちがツイてねえって言うんだよ。」

「それは僕たちが、護廷十三隊でも最強の十一番隊の三席と五席、つまり三番目と五番目  
に強いからだよ。」

「…そうかよ。チャド、石田、そっちのおかつぱを頼む。」

「ム。」「わかった。」

「おい! 何いってんだ! こいつらの靈力、そこらの雑魚死神のもんじゃねえぞ!」

岩鷲が慌てているが相手が強いとか弱いとか関係ないんだよ。

「あの人が無敵って言ったんだぜ。俺たちが負けるわけねえよ。」

「へえ、言うじゃねえかつ!」

一角は刀を振るうが一護は半歩足を下げ半身になることで躲し、それと同時に石田が  
矢を射ちもう一方の戦いも始まった。

人間が死神の力を受けた死神もどき、振る舞いは素人で命のやり取りなんて大して経験してなさそうな子供。そんな子供に今、班目一角は圧倒されていた。

「打込みは激烈、体捌きは俺よりやや上、極めつけは神懸かった反応！すべて見切られ、おまけにこつちは痣だらけだ。」

紺色の布が刀を包むように巻き付いて刃の一切を覆ってしまい、鈍器のように振るわれる。

「見誤んなよ!!」

「誰が!!」

そう言いながらも突きも払いも当たる可能性はみじんもない。そんな一角が一護に敵わないのに槍で戦い続けた理由は、たった一瞬、相手が絶対に対応できないようなタイミングで必殺の一撃とするため。半端なチャンスでは使わなかった斬魄刀の特性を利用した真正面で戦いながら奇襲。

「裂ける『鬼灯丸』!!!」

一護が刀で防いだときに三節棍と成り、逆方向から一護を襲う。それへ本来ならば一

護の手を刀が握れないほど傷つけるものだったのだろう。一角が意識を手放す直前に見たのは刀を手放し、己の顎に容赦ない裏拳を叩き込む一護の姿だった。

ちっ、ついてねえや。

……

…

「目え覚めたか。」

「一護…てめえ、なんでまだそんなところに…」

一角が困惑するのも無理はない。もともと一護たちは何が目的で瀨霊廷に侵入してきたかわからないが、それが死神をただ打ちのめすだけなんてことは（更木剣八でもなにかぎり）ないはずだ。

「負けたのに生きながらえるところとはとんだ恥さらしだぜ…！縛られてなきやてめえをたたつ殺してやるところだ。」

一角は手首足首を縛られた後、正座をするように足を固定されていた。

「そんなことどうでもいいんだ。こつちが質問してえだけだから。」

「…そんなこったろうと思つたぜ。ツイてねえや。…何が知りたい? 誕生日でも教えてやろうか?」

「朽木ルキアの居場所。」

「朽木?…例の☒囚か? お前ら、あんなもんに何の用だ?」

瀨靈廷の宝を奪うでもなく、貴族を殺しに来たわけでもない。そんな意外な答えに一角は興味を示し、さらに質問を返す。しかしその答えはさらに酔狂なものだった。

「助けに来た!」

「ああ!」

「助けについて…お前から何人 came?!」5人と1匹だ。「なんだ1匹って!?! てかその人数で助ける気か!?!」「そうだ。」

人数だけで見れば笑える話だろうが一角の戦つた一護は下手をすれば隊長格ともやりあえるような強さを持っていた。それが5人全員同じような強さを持っているとすれば確かに可能性はある。

「…ここから南にまっすぐ行くと、護廷十三隊各隊の詰め所がある。その各隊詰所の西の端に真っ白い等が建つてる。そいつはそこにいるはずだ。」

「ホントか?」

「そつちから聞いといてなに疑つてんだよ! テメーがそいつをどうしようと興味はねえ

よ！助けに行くつてんなら好きにすりやいい！」

「黒崎、そつちはどうだった？」

「一角のほうは律義に教えてくれたぜ。それじゃ「そうだ！弓親はどうした!?!」

弓親は一護のほかの仲間と交戦していたはずだが、今の言葉を聞くに負けてしまったのであろう。

「あのおかつぱなら…」

そう言つて一護が視線を送つた先にはアフロになつた自分を鏡で見つて半ば発狂している弓親の姿があつた。一角はあとで弄ることに決めた。

「それじゃ、恩に着るぜ一角。」

井上はとても快適な旅を進んでいた。

「ごめんね、黒崎君、茶渡君。私がもつと強ければ。」

「気にすんなよ井上。こういうのは適材適所つて奴だ。」

正面からくる敵は一護、茶渡がすべてピンボールのように弾き飛ばし、後方の敵は石

田が弓で足止めしていることで迂闊には追ってこられない。邪魔な障害物は岩鷲が石波を使い壁をくりぬいて進んでいく。

「黒崎！そろそろ後ろの人数が多くて足止めできなくなってきた！ここらで蹴散らしておいた方がいいんじゃないのか!？」

そうだな。この辺りで一度…ん？

「ほどけた草履結びなおしてる間に置いてかれちゃった…どうしよう…現場どこだろ…あ！あの人たちに聞いてみよ！あの、すいません…僕四番隊の山田花太郎と言います。現場はどこか知りm!？」

ラッキー！いいひろいもんした！

「おらあ!!てめーら道開けろお!!」

「テメーらの仲間ぶつ殺されたくなかったらなあ!!」

「ギャーーーーー……ッ!!!」

「その行動は人としてどうなんだ黒崎?」

石田がなんか言ってるが関係ねえ！ここを切り抜けられりやあとはどうにでもなるってもんだ！

あれ、追ってきていた死神がみんな困惑してる。は？

「何、やってんだてめえら?」



「何って…人質？」

「俺らとそいつが仲間に見えるか？」

「どう違うんだ？死覇装着てるし同じ死神だろ。」

「俺ら十一番隊は護廷十三隊最強の戦闘部隊。引き換えそいつの四番隊は弱すぎて救護しかできねえ十三番隊最弱のお荷物部隊…故に俺ら十一番隊は四番隊が大つ嫌いであつす……！」

「殺したきや殺せや!!ぶつちやけ一石二鳥だコラア」「ギャハハハハハハハハハハ!!!」

「いやー——!!!」

「ちよちよちよちよつと待てえ!嫌いだから死んでもいいなんてひどすぎるんじゃないか君達い!!」

岩鷲がまともな反論を言っているがこいつ藤丸さんに会うなり嫌いだからつつつ腹搔つ捌こうとしてなかったか？

「…一護、俺がここに残ってこいつらを全員倒そう。」

「チャド、でも「仲間を頼れと藤丸さんに言われただろう?」…そうだな。頼む。」

仲間を頼るって、一緒に戦うってだけじゃないよな。

そうして俺たちはチャドに任せてその場を後にした。

「悪いな。期待にはこたえられない。∴2分で終わる。」

なんで、あんたが・・・

花太郎の発案により地下水道を通りルキアが捕まっているせんざいきゆう懺罪宮へとたどり着いた。

「久しぶりだな。俺の顔を憶えてるか？」

「・・・阿散井恋次！」

「意外だな。名前まで憶えていたか・・・上出来だ。正直驚いたぜ。テメーは朽木隊長の攻撃で死んだと思ってたからな。どうやって生き延びたのか知らねえが、大したもんだ。・・・だがここまでだ。言っただけだ。ルキアの力を奪ったやつは殺す。テメーが生きてちや、ルキアに力が戻らねえんだよ。」

「殺す気で連れ帰ったやつが何いつてやがる！」

意地でも通してもらおう、そのために刀を構えたが、

「黒崎、ここは僕にやらせてもらおうか。あれには情けなくも瞬殺されてね。汚名返上のいい機会だ。」

「わかった。」

恋次の横を走り抜ける。当然俺たちに刀は振るわれるが、石田の矢が弾きその刃が俺たちに届くことはなかった。

「おい、俺は一護と」黒崎黒崎と、僕たちはおまけかい？それならそのまま殺されるとい  
い。僕は黒崎のように甘くはないから。」

.....

.....

.....

人生で初めて終わったと思ったのは、藤丸さんが食べちゃダメだって言ったプリンを  
食べたときだ。両親から俺をあずかる許可を勝手に承諾され、夏休みの一週間で血反吐  
を吐くほどの訓練に使われ、もう一週間はそこで負った傷が隠れるように激痛が走る  
薬を塗りこまれ、砂やヘド口を野草で煮込んだような薬膳を食わされた。死ぬかと思っ  
た。

その時から俺は異様に危機回避がうまくなった。ヤバいもの、人、状況が迫った時、五  
感全てが激しく警鐘を鳴らす。だけど藤丸さんの逆鱗は五感よりもまず先に勘が働く  
んだ。

「黒崎一護だな？」

やばい、切れた藤丸さんと同じだ。命にかかわる、そんなヤバイやつ。藤丸さんは痛めつけた後に必ず俺を治療するがここじゃそんなことは起きない。

「十一番隊隊長、更木剣八だ。てめえと殺し合いに来た。」

「岩鷲！這つてでもいい！花太郎と織姫背負つて逃げろお!!」

ぜつてえ通さねえ。たとえ命に代えたとしても。

「意外だな・・・2人そろつて追っかけるそぶりも無しか。」

「言つただろ。俺は『てめえと殺し合いに来た』つてな。」

「・・・上等だ！『開放』！」

斬月を覆っていた布は解け右腕に戻ってくる。

「奇妙な奴だ。構えは上等で隙も無い。霊圧も出けえ。それなのに、何だその霊圧のブレは？てめえも何かを守つてんのか？」

「・・・仲間を助けに行くんだよ。」

「そうか、そりゃあ楽しみだ！」

.....

俺の全力の振り下ろしは片手の振り上げで止められ、硬直した刃を手が傷つくこともいとわず素手でつかみ捻り上げられる。宙に浮いたところを突かれるが斬月の巻き付いた右手で弾k、重すぎだろ！逸らす程度にとどまり、斬月を握っている手首と手の甲を蹴ることで抜け出す。上に移動したのは見えてんだよオラァ！鈴の音が鳴る。

「なんだよ！すげえじゃねえか！鈴よりも早く気付いて俺が攻撃をしてるはずなのになぜかこつちがダメージを負ってやがる！楽しいなあ一護お！」

「ああああああああ!!!」

これで決める！ここで

斬月を構え突進する。速度も重量も載せた全力の一撃は

「ああ、最高だったぜ。」

剣八の放った突きによって斬月ごと貫かれた。

くそッ！

くそッ！

くそッ！

くそッ！

死にたくねえ！

死にたくねえ！

死にたくねえッ！

こんなところで

死んでられつかよ・・・！！

まだ死ぬわけにや いかねえんだっ！！

動け！動けよ体・・・！！

止まれよ血ッ！！

俺を もう一度たたかわせてくれ・・・！！

俺は

俺はルキアを 助けなきやいけねえんだ!!!

「戦いたいか？」「戦いたい？」

去つていく剣八の背をにらみつけていた俺の目に斬月のおっさんが映った。

「勝ちたいか？それとも行きたいか？どれだ。」

「・・・勝ちたい・・・」

「・・・きこえんな。」

「戦うだけじゃ意味がねえ・・・生き残るだけじゃ意味がねえんだ・・・！勝ちたい！

勝ちたい!!!」

「ならば連れて行ってやる！」

おっさんの黒い服は俺を包み、俺は世界から消えた。

気が付くと俺はビルの側面にいいいいいいいい!? やばい！落ちる!?

「何をしている?」

現在は地面となつているビルの側面に寝転がっている俺を見下ろしながら訪ねてきた。

「だつてこうしねえとまた落ちるだろ!？」

「その心配はない。あの時はお前の虚化によつて内なる世界の安定が失われていたからそうなつていただけのこと。だが今は違う。見ろ。あれだけ戦いの中にあつてもお前の内なる世界は微動だにしていな。」「まてまて、じゃあ何か？俺の心ん中つてのはこの縦穴でたらめなのがフツの状態つてことか?」どうやらお前は少しばかり強くなつ



たようだ・・・」

ガン無視じゃねえか。

「立て、一護。」

斬月のおっさんは抜き身の刀をぶん投げ、俺に渡してきた。

『『浅打』護廷十三隊に入れぬ下級死神の名もなき斬魄刀だ。』

「いや、俺の斬魄刀は斬月『『斬月』』というの……お前が敵に折られたこのことか。――」

——これはお前には渡せない。」

そういうとおっさんは巻布の色が違う斬月をぶん投げてしまう。

「何すんだよ!!」

「<sup>退</sup>のけ。」

おれの後ろから追い抜いた白い死覇装を着た男が……いや、俺が斬月を手にする。

「何を驚いてんだよ。相棒。」

「これからお前が私を持つに足るものかどうか試す。もう一度私を手にしたくば、自分

の手で奪い取って見せろ。敵は、お前自身だ!!」

「一護君がんばれー!!」

「……ちよつと待ってくれ。」

無理だ。今更だがちよつとスルー出来ねえ。

「なんで藤丸さんがいるんだ？俺ももう一人いるしそんなもんなのか？」

白い死覇装を纏った藤丸さんが俺の心の中にいるっておかしくないか？

「あはは！いやいや一護君！そんなこと気にしてる場合じゃないよ。君は今すぐ斬月を手にしなきゃいけないんだ。」

「いや、それはわかってるけどさ・・・」

「ふむ、わかったわかった。そんなんじやすぐ白一護君に倒されちゃうからね。今すぐ本気にさせてあげるよ。」

藤丸さんは瞳の色が黄色く染まり、徐々に肌の色をもう一人の俺のように白くして

いき

「憶えてるかな？俺のこと。」

俺はその存在に近づき斬魄刀で斬りかかった。けれどもその刃はそいつの肌を斬り裂くことはなく簡単につかまれてしまう。

「俺を斬るのにその刀じゃ力不足だ。ははっ！今どんな気持ち？母親の足を奪ったやつを目の前に、絶対に殺すことのできない気分はさあ！？」

俺は殺そうとした。そいつに斬りかかった。だけど、

「なあ、なんでなんだよ。」

俺の師匠だったのは・・・

「あんたは・・・藤丸さんなのか？」

勉強を覚えてくれたのは・・・

「そうだよ。仇の前で倒すために強くなりたいとか、滑稽だよなあ！」  
俺の悩みを聞いてくれたのは・・・嘘だったってのかよ。

「おい、白い俺。」

「なんだ？相棒。」

「お前の持つてる斬月。もらうぞ。」

## 俺たちが斬月です

斬月と対峙してわかった。斬月はやべえ。霊圧で大気が灼き切れそう。それに対して俺の持つてる浅打はどうだ。はっ！棒切れだよ。

「それがどうした！」

どうだっていいんだそんなこと！まず斬月を奪う！そんでルキアを助ける！

白い俺は巻布を持ちながら斬魄刀を遠心力でぶん投げてくる。刀で受け止めれば間違ひなく折れるから必然的に俺が取れる対処は回避一択になる。

「情けねえなあお前！こんなすげえ刀持つて、なんであんなに血塗れにされてるんだ？理解できねえよ！お前は会ったばかりのやつの名前聞いただけでそいつの親友になれるのか？」

「…何だと？」

「お前がやってんのはそういうことだつて話さ！斬月を呼び出しただけでもう使いこなした気でいやがる！自分のことばっかで斬月の力を引き出そうとも理解しようともしちゃいねえ！斬月の力はこんなもんじゃねえ！こつちが心開いて力貸せば、まだまだいくらでも強くなる！！だがそいつはお前にや無理だ！斬魄刀のことなんか気にも掛けず、

自分さえ鍛えれば強くなると信じ込んでるお前にはな!!」  
知りてえ。

「そんなんじやそのそいつには一生敵わねえよ!」

——教えてくれないか。斬月のおっさん。少しずつでいい。あんたのことを、俺に。知りたいんだ。俺に力を貸してくれるあんたのこと。だから教えてくれ。そしてもう一度…

あんたと一緒に、戦わせてくれ…

——おっさん…!!

もう一人の俺の手の中にはいつの間にか浅打が握られていて、逆に俺の手には斬月があつた。

もう一度、俺にチャンスをくれるのか…

ありがとう、おっさん!!

「いえーい! さすがチャン! 斬月の扱いについて右に出る者はいないね!」  
「自分の体の動かし方一番わかってますねって言われてるようなもんなんだが。そつちも王をあざ笑うときのりのりだったな。」

正面に立つそいつは胸の傷はもうすでに閉じ初め、あのぶれぶれの霊圧は常に最高出力で研ぎ澄まされてやがる。踏み出した一步は今までのどの踏み込みよりも強く速く、俺の体を軽々と斬り裂く。その勢いのままの斬り上げを受け止めるがそのつばぜり合いに押し負け、もう一太刀喰らっちゃった。

「悪いけど時間はかけてられねえ。…一氣にカタをつけさせてもらうぜ。」

ククツ、クハハハハハハ！

「一氣にカタをつけるだど…？そいつあ困るな…」

せつかくここままで、楽しくなってきたのによ!!できるだけ長引かせていこうぜオイ!!」

久しぶりだ。ここままで楽しい戦いは。こんなにつええ奴は。

「いつ以来だ…こんな高揚感は…！お前になら…！…」

俺は眼帯と襟巻に手をかける。

全力で戦ってもよさそうだ!!」

「きつたねーな。ここまで来て隠し玉かよ。その右眼に何が仕込んであるんだ？」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「仕込む？右眼に？そんな下らねえ小細工誰がするかよ。この眼帯と襟巻は霊力を無限

に喰らい続ける化物だ。今までこいつに喰わせてたぶんの霊圧を全て、てめえを殺すためにつぎ込む。それだけのことだ。」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

☒聞こえるか一護、奴の剣の悲鳴が。あれが奴には聞こえない。信じあわぬ者同士、共に戦えば、互いの力を損なうのみ。己の力しか信じぬ奴には、それがわからない。一護、お前は、私を信じられるか。☒

「…当然だろ。俺の力全部、あんたにあずける。隙に使ってくれ。そして…俺に力を貸してくれ。」

☒ああ！☒

重い。全身が押しさえつけられてるようだ。

「ほう！ここにきてまだ霊圧が上がるのか！おもしれえ!!」

「上がるさ。俺は斬月の力を借りて、斬月と二人で戦ってた。自分一人でしか戦おうとしねえあんたには、絶対に負けねえ。」

でも、斬月が力を貸してくれるってのがそれ以上に心強い。

「斬月？その斬魄刀の名か…？斬魄刀の力を借りて、斬魄刀とともに戦う？戯言だ。斬魄刀は戦いの道具だ。斬魄刀とともに戦うなんてのは、自分の腕で戦えねえよ割り切った負け犬の科白せりふだぜ。俺やてめえの科白じゃ…ねえんだよ一護!!!」

☒くるぞ！私がお前の傷口を止めておくのも限界に近い！一撃で決めるぞ！！☒  
お互いの霊圧は死の形となり、それ等は激突した。

「俺の勝ちだ。剣八。」



## 傍聴者（オブザーバー） または覗き魔（ヴァイアー）

はあ、はあ、腹に追った傷が深い。早めに処置しねえと。

死覇装を緩め、腹の傷の部分を見ると何か入っていた。

「一護、はぐれてすまんの。ちよいと寄り道をおった。なんじゃそれは？」

「ヨルイチサン！はぐれたときは心配してたけど、無事でよかった！んでこれか？俺が虚になった時の仮面だ。」

「まだそれを持ち歩いておったのか。命拾いしたの。」

「それがさ、浦原商店の地下で剥いだ後拾わなかったんだ。何でこれが懐に…？」

「…待て、それは儂が預かろう。」

「なんでだよ。せつかく戻ってきたのに。」

「よこせ、口答えは許さん。」

ヨルイチサンは俺に有無を言わさぬよう語気を強め威圧してきた。

「まあ、ともかくここではうかうか治療もできん。場所を移そう。」

立とうとすると激痛が走り、下半身にもうまく力が入らない。

「無茶をするな馬鹿者！まったく、その様子から臓物のいくつかは潰れておるじやろう。」

儂が運んでやる。」

「わりい、でもそんな小せー体で俺のこと運べんのかよ。」

「何、そのぐらい元の姿に戻れば造作もないことじゃ。」

「あーなるほどなー。元の…」

は？元の？

「元の…姿？」

「そういえばおぬしらにはまだ一度も見せたことはなかったの。いいじやろう。隠すこともあるまい。見せてやろう。儂の…真の姿を。」

夜一さんの体は急速に人間代になり東部からは紫の毛が伸び、体毛は消え…て

!?!?!?

「な…あ…ああ…!?!」

「呆けておる時間はないぞ。ほれ、さっさと背負われんか。」

え!? ちよ、待つ!

「…血が足りぬというのに、助平め。」

わア…ア…（泣） 死にたい。

………

……

…

「それにしても先ほどは相当驚いておった様じゃな。無理もない。大方言葉遣いだけで儂を男と思ひ込んでおつたくちじやろう。青い青い！しかしこの正体を現す瞬間というのは何度味わつても良いもんじやの。どいつもこいつも阿呆のように驚くばかりじゃ！さて、先ほどお主をここへ運んだこの道具「服を着ろーー!!!」

…

「いや、すまんすまん。服など久しく来ておらんかったものじやからついの。しかしおぬし、見かけによらず意外と初心じやの。女子の肌を直に触れたのは初めてか？ん？」  
「うるせえな…」

「いいのか？こんなピチピチの女子の肌、今見ておかんともう一生みれんかもしれんぞ。  
「うるせえつつつてんだろ!!」ホレ。「あ。っ／＼／」

擦揄われるたびに腹部から血液が勢いよく飛び出し痛みに見舞われる。覚悟を決め

たときの痛みはいくらでも耐えられるとはいえこんなことで傷が開くのはたまったものではなかった。

「おちよくるのはこんなところにしておいて、ホレ、腹を見せんか。藤丸から薬をあずかっておる。」

藤丸さんが作った薬…

「…なあ、夜一さん。藤丸さんは本当に信じてもいいのか？悪人で実は俺たちを騙してるとか。」

「あやつが善人か、と聞かれたら答えは否じゃろうな。もつとも純粋な悪人とでも言ううか。あやつは自身を構成している世界がすべてなんじゃよ。無論、人が死にそうになつてたらとりあえず助けてやる程度の感性は持つておるじゃろうが、それがおぬしとの修行の最中などならば知つても向かわんじやろう。なんじゃ、あやつを疑つておるのか？」

「そんなことはねえ。けど、俺が思つてたような人じゃなかつたのかなつてのは少し考えてる。」

わざわざお袋の足を斬つて、俺を強くする理由つてなんだ？俺の何があの人の琴線に触れた？

「…（面倒くさいのう）それじゃ、たらずぞ。」

「垂らすってなんだ!」

顔だけ上げて夜一さんの手元を見ると小瓶から白いもやのようなものが俺の腹に落ちて勢いよく燃え始めた!?

「熱つづううううあああああああ?!?!?!」

思い出した!お袋を焼いた炎だこれ!?

「これ大丈夫なんじやろうか?回復薬として渡されたが苦しんでいるようにしか見えんのじゃが。」

ふっざけんな!効果知らねえで使ったのかよ!まあ落ち着け。これがお袋を焼いた炎なんだったらお袋にやけどが残ってないところを見るに足を切断した後の治療行為だったはずだ。だからこれもそういうもののはず…

「うぐううううがああああああああ!!!」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!肉焼けてねえか!?!いつまで続くんだ!?

……

…

白い炎は一護の腹を焼き終え消えていった。効果を伝えられていた儂も思わず拷問の道具なのかと思うほど叫んでいた一護は息も絶え絶えではあるが失禁も脱糞もせず最後まで耐えきっていた。

「どうじゃ一護、腹の具合は？」

「ふひゅー、は、腹は、すこぶる、快調、だ、ふひゅー、腹は、な。」

少量の炎は肉を燃やした灰で新しい組織を形成する。そのため肉を失う怪我にはめっぽう弱いが斬撃、刺突、打撃には恐ろしいほど強いと言っていた奴の言葉通り、腹を触ってみても一護は呻きもせずただ息を吐くのみだ。

「まあ、いいや、ふひゅー、それじゃ、俺は、行くわ。」

「待て待て！今行ったところで複数の隊長に取り押さえられるのが落ちじゃ！更木との戦闘でどれだけ派手にやりあったと…！」

ゾツ…

「この霊圧は…!!あいつだ！」

「待て一護！何をする気じゃ！」織罪宮には井上たちが向かってる！俺が行かねえで、誰

が助けるんだよ!!」

そうして俺は夜一さんが使っていた道具で飛び懺罪宮へと向かった。

四深牢に繋がる橋の上で岩鷲君は兄さまと向かい合う。本来なら今すぐにでも逃げ出したかったがここで退けば一護君に対しあまりにも不義理だと、花太郎君に諭されてしまったがゆえに。

「私の剣は貴様の如き羽虫を使いつぶすために無い。」

刀を振るうふりをしながら血涙玉を投げつけようとした岩鷲君であったが、振りかぶった次の瞬間にはすでに腕を斬りつけられてしまう。

「まっ、待ちやがれ!」

「…どうやら耳が聞こえぬようだ。私は失せろと言ったはずだが…」

「ごちやごちやうるせえぞお坊ちゃん!! あんたらはどうだか知らねえが、この程度でビビって逃げるような男はいねえんだよ! 志波家の中にはな!」

「…そうか、貴様志波家のものか。ならば手を抜いてすまなかつた。」

兄さまの霊圧は大きくなっていき、その雰囲気は先ほどよりも殺気立っている。

「同じ四大貴族として、私が殺してやるのがせめてもの手向けであろう。」

《big》「だめです! 兄さま!!」 「散れ

## 『千本桜』

刀身は消え、次の瞬間には岩鷲君は切り刻まれる。何が起こったか一切わからない花太郎君は体を恐怖に支配され、織姫ちゃんはあまりに衝撃的なその光景に吐き気を催していた。

「もうおやめください!! 兄さま!!」

ルキアちゃん言葉に聞く耳すら持たず次の一撃を入れようとする兄さまの腕をつかみとめたのは、なんと浮竹隊長だった。

「やれやれ、物騒だな。それくらいにしといたらどうだい、朽木隊長。おーす朽木! 少しやせたな。大丈夫か?」

完璧でイケメンで部下に気遣いもできるやさしい雪のような浮竹隊長はやはり神。部下のことを考えつつも常に冷静で頭の切れる京楽隊長もやはり神。兄さま? 人柄は劣化征源様だと思ふし夜一様にかかわれるところしか見たことないけど。やはりガキ。

「何だこの霊圧は!?! 明らかに隊長クラスだぞ!! だが知らない霊圧だ!?! 誰だ!?! 一体どこから!?!」

やつべ見逃した。今どんな会話してたっけ、竜条丸君に聞かなければ。

「心配すんな。死にやしねえよ! これでも俺、ちよつとは強くなったつもりなんだぜ。」



その姿はまるで志波海燕を思わせる様で、浮竹隊長も懐かしい姿を思い浮かべ……海燕せんぱーい！また一緒に流魂街回りたかったですー（泣）

「……白哉、あれは誰だ。」

「無関係だ。少なくとも今、兄けいの頭をよぎった男とはな。私が消す。それで終わりだ。この些細な争いの、すべてが終わる。」

止めて！いくら一護君だろうと浮竹隊長と兄さまの二人係でボコされたら一護君の精神はほっくり折れちゃう！お願い！折れないで一護君！君が今ここで倒れたらルキアちゃんや織姫ちゃんたちはどうなっちゃうの！？潜在能力はまだ残ってる、力を全て引き出せば、隊長格二人を相手取ることも不可能じゃないんだから！

次回、

一護君死す。デュエルスタンバイ！

## 一度下がった好感度を上げるのは面倒くさい

First round fight!

兄さまの瞬歩に対して完璧に対応した一護君は斬月で兄さまの千本桜をしつかりと絡めとった後に返す斬月で掠る程度だが一太刀浴びせていくうー!

winner いー——ちぎー——!

「散れ、『千本桜』」

負けず嫌いの兄さまが始解をしたことでSecond round fight!

無数の刃が一齐に一護君を襲うが一護君はどう対応するのか!? なななんとおー! (疑似) 月牙天衝を周囲に纏わせることで一太刀ですべて叩き落したあー! これにはルキアちゃんもびっくり! 夜一さんも驚きのあまり呆けているー! …ふぎけてないで考察に入るか。斬魄刀は竜条丸でも何ができるかわからないからな。俺の魂が少し入ったとしても基本性能はほぼ虚のはずなんだけどあの防御技何? 虚弾みたいに周囲の霊子を固めてるとか? 一護君の斬撃のうちいくつかは飛んでいかずにその場に残ってるができることは紅姫に近いのかもな。それにあの巻布が巻かれた左腕、千本桜で切れないうっほいし防御にステータス振ってたりするのか?

斬月の特性を考えていると探査回路にこちらに結構な速度で近づくと結構な速度で近づく霊圧反応があった。あわよくばここでルキアちゃんもさくつと回収して卍解の習得は現世でゆっくりさせたかったが仕方がない。俺も働くか。

見える！ 斬れる！ 戦える！ 防御主体とはいえ常に主導権は俺が握ってるし、あいつが俺に決定打を与えられる方法はねえ！

「言つたはずだぜ、見えてるってな。」

「……だっ！」

「清虫二式『紅飛行』」

朽木白哉に攻撃するために詰め寄つたが、上空から無数の針が飛んできた。

「まずっ?! 斬月！」

「兄の助けなど求めていないはずだが? 東仙。」

「そう言わないでくれ、朽木隊長。哀れな旅禍を終わらせてやろうとしただけだ。」

土煙の晴れた先には左半身に大量に針の刺さつた一護は半死半生といった用だった。

「下らぬ幕引きではあつたが、これで……」

そうやって剣を振るおうとした白哉であつたが、それは思わぬ人物に止められる。

「あれは……」「貴様は……」

「夜一！」

「先代隠密機動総司令官及び、同第一分隊『刑軍』総括軍団長、四楓院夜一、久しく見ぬ顔だ。行方をくらませて百余年、死んだものとはかり思っていたが……いくら貴様でもこの状況からその旅禍を逃がすことはできんぞ。」

流石の夜一もたつた一人で手負いの一護を庇いながら隊長格三人から逃げることはできない。ゆえにここで一護君を捕獲できると浮竹、朽木、東仙は思っている。違いますか？

そんなとき、先ほど東仙がいた上空よりもさらに高くから飛来する一つの霊圧があつた。

「ハアイ！そんなワケありませんねえ!!」

ドゴオン

「その上空から飛来してきた半透明な玉は夜一さんと兄さまを分け隔てる位置に落ちて中からは玉のような藤丸が出てきたのでした……と。」

圧倒的変質者であり涅、更木兩名と比べてもまだ癖の強い狂人が出現したことにより隊長たちの警戒を最大限まで引き上げる。

「浮竹隊長、ご無沙汰しております。宮能藤丸です。お元気でしたか?」

「っ!? おおっ! 久しぶりだな! どこ行ってたんだ?」

人懐っこい笑みを浮かべる藤丸に浮竹は何でもないうように返事を返す。だがその心中は決して穏やかではなかった。浮竹は藤丸にはアルトウ口戦で庇いきれなかった負い目、あのアルトウ口をほとんど完封する作戦を立てた恩がある。さらに朱司波家の子供のよなな立場もあり当時の心情では親戚のおじさん程度には二人をかわいがっていた。しかし、悪人であったとはいえ友を斬られているのもまた事実。実際その友が犯した罪により綱彌代家の立場は弱まり、いくつかの悪事は明るみに出て銀城への疑いも早々に晴れ、綱彌代家はその責任を負わされ貴族の称号を剥奪。映像長の役割は朽木家が背負うことになった。

「(どうすればいい? 敵か? 味方か? 藤丸は尸魂界に徒為す存在なのか?)」

「浮竹隊長。その二人にルキアちゃんと四番隊の子、岩鷲君、織姫ちゃんの四人を四番隊に運んでもらってもいいですか? 霊圧で潰しちやいそう。」

「ああ、わかった。仙太郎！清音！！この子達を四番隊へ。」

「ちょ！ちよつと待ってくれ！藤丸さんがいるならまだ！「今の一護君が死なないよう  
に戦うのはいくら僕たちでも無理。ちよつと眠っててよ。」

白伏で意識を混濁した一護はそのまま気絶してしまった。

「逃がすと思うか。第一、貴様で隊長格三人を相手にするというのが無理な話だ。」

朽木白哉は甘い男ではない。平然と敵に背中を向けて鬼道を放っている藤丸に回転  
をかけた瞬歩で近づき、

「待て！朽木！」

視界が暗転した。

## 手加減のご利用は計画的に

俺に降りかかる剣戟を斬月のオッサンが受け止めその隙に白い俺がそいつに攻撃を加える。

「立て一護！ 転がったままではすぐに死ぬぞ！」

俺の中にいたそいつは俺たち三人と戦いながら余裕の表情で笑っていた。

「あははははは！ そんな屑を庇ってどうするんだ？ 地虫に与える慈悲などないというのに！！」

宮能藤丸…否、推定アルなんとかと交戦していた

斬月！ 斬月はどこだ!? 俺の斬月は…

「それも外れだ。」

振るわれた刀が俺の刀を破壊し肉を断つ直前、壺子でできた矢が藤丸さんの斬月を弾く。その隙に白い俺が斬月を飛ばし追撃を仕掛けるがそれを蹴り上げた藤丸さんは高

速で移動し斬月のオツサンに拳を振るい、直撃したオツサンは岩肌に叩きつけられる。

「オツサン！」

「人の心配をしている暇がどこにある？」

腹部に蹴りを入れられ胃液をぶちまけながらもその辺で拾った刀を振るう。しかしその刀も藤丸さんの肌を傷つけることはできず割れてしまった。

「少し早いがこれ以上やっても明日に疲れが残るだろう。しまいだ、四楓院夜一。」

「…訪ねたいことはいくつかあるがいいじやろう。一日目終了じや。」

消えていくオツサンたちを見ながら俺は自分の無力を噛み締めながらただ呆然と立ち尽くした。

かわいい後輩たちが喧嘩しているところを見ながら食べるお菓子はまずかった。

「いやひつでえな。」

藍染に言われてこの立ち回りしてるのかもしれないけどシロちゃんに何にも信用されてないし、桃ちゃんはシロちゃんのこと斬りかかってるし原作と何にも変わってない。

「馬鹿やろう雛森っ！よく考えろ!!自分が死んだから代わりにお前が戦えだど!?藍染のやつがそんなことを言うと思うか!俺の知ってる藍染はな、勝ち目のねえ戦いに一人で



出向くような馬鹿でも、そのしりぬぐいを部下に勝てるような腰抜けでもなかったぜ  
!!」

「すばらしい! その通りだよ冬獅郎君! 桃ちゃんも刀を冬獅郎君に向けるのはやめなさい。」

んふっ、んふふふっ! やっぱ人が驚いてる顔を見るのは面白いな。夜一さんが猫になつてるのもようわかるわ。あれ絶対楽しいだろ。

「ふ、藤丸さん。だって! 藍染隊長の字で書かれてたもの! 日番谷君を討ってほしいって!」

どうしよう。説得する方法全然見つからないし何ならちよつとめんどくさくなつてきたまである。…そうだ!

「桃ちゃん。落ち着いてよく聞くんだ。藍染隊長の遺書にはそう書いてあつたかもしれないが、実はそれは一人の隊長による策略だつたんだ。」

「え?」「は?」

「その隊長の名は東仙要。かつて自身の上司であつた六車拳西を虚化させ浦原喜助に冤罪をかぶせた極悪人だ。」

「その話は本当なの?」

「ああ、(過去の話の方は概ね) 本当だよ。奴の狙いは自身の幼馴染を殺した貴族を殺す

ためにまずは障害となりえる護廷十三隊を疑心暗鬼に陥らせることだったんだ。」

「でもそれなら市丸の今までの言動はどう説明するんだ。確実に何か企んでやがるぞこいつは。」

「ひどいなあ。僕は何にも企んでへんよ。」

ふむ、一理ある。然しそれにもすでに答えは出しているさ。

「ギン君の言動はね…実は大して意味がないんだよ。」

「「「は？」」」

四人の疑問の声が重なった。つていうか金髪、おまえだれや。

「ギン君がちよつと不穏なことを言うのも、藍染隊長と意味わからん口論をしたのも、冬獅郎君に怪しんでもらうためだったんだよ。」

「どういうことだ…そんなことをして何の意味がある。」

「乱菊ちゃんにかまってももらえる。たったそれだけのためにこれほど紛らわしい行動を起こした中二病かまってちゃんなんだよ。」

ギン君の好感度が低かったのは正直想定外だしせつかくの干し柿もみんなが口にしてないっばいし、でもここで干し柿喰ったって聞くのも不自然な気が…

「な！何を納得しようとしてるんですか!?!雛森さんも日番谷隊長も！こいつは尸魂界に反逆した犯罪者で五大貴族を殺した男ですよ!?!藍染隊長を殺したのもそいつに決まっ

てる！」

「つち！糞陰キヤが正論かましやがって、確かに俺は尸魂界に反逆したことになるし五大貴族も殺したことになるが：五大貴族？」

「五大貴族を殺したって何？俺殺してないんだけど。」

え、誰？俺の罪が軽いから藍染が更に増やしたってこと？ちよつと待つてよ。俺の作戦を破壊して来たり俺の思考を乱して来たりだるいんだけど、こいつ何なん？

「面を上げよ『侘助』！」

藤斬魄刀の解号を聞きその斬魄刀の能力がなんか地球を斬ったら破滅に追い込めるみたいなそんな感じだったと中途半端に思い出した藤丸は当然回避を選択する。然し、それは藤丸にしては珍しく悪手であった。吉良イヅルという男の雰囲気と正論で目を覚ました隊長二人と狂気に陥っている副隊長一人が藤丸に対して敵意を持っていることに気づくのが遅れてしまったのだ。

「霜天に坐せ!!『氷輪丸』!!!」「弾け!『飛梅』!」

「え、ちよつ、なんで?!?!!破道の三十三『蒼火墜』!」

今まで重要な局面は全て竜条丸というカン秘密のングモペ帳ーモに頼ってきた藤丸は自身を客観視できていなかったこともあり選択肢を誤った事態に対して非常に弱くなっていた。

氷輪丸の攻撃を蒼火墜で相殺するという規格外の鬼道を見せながら飛梅から飛んできた火球（牢屋の壁に一撃で穴をあける）を腕で受けた藤丸はへらへらとした表情を崩さない。が

「（あつちやちや熱々痛つてええええええええええええええええ!!!!）」

内心では結構苦しんでいた。

「降り注げ『神殺鎗』」

更に高速で伸びては縮む神殺鎗による連続の突きを躲すため瞬歩を連続で多用して回避運動を取る都合上強制的に地面に縫い付けられた藤丸を桃、イツル、冬獅郎が囲むように陣をはる。そのまま詰められ接近戦になるのを予想していた藤丸は次の瞬間度肝を抜かれることになる。

「破道の四十八『蒼鋭撃（そうえいげき）』」

四十番台破道×二と氷輪丸の攻撃、複数の氷雪系攻撃で拘束を狙っているのだからが四十番台など藤丸にとってとはとるに足りない攻撃だった。

「破道の五十四『廃炎』」

先ほどと同じように氷輪丸の攻撃のみを迎撃し残りの破道は力技で破ってやろうと意気込んでいた藤丸だったがなぜか『蒼鋭撃』が襲ってこない。不発を疑いつつイツルの脇を通り抜けることでギンの攻撃の隙をついた藤丸は自身の斬魄刀を引き抜こうと

してそれに気づいた。抜けない。竜条丸が抜けないのだ。思わず見ると鍔と鞘が凍り付いて固定されてしまっていた。ご丁寧に不滅王も凍つてた。

「あ！そつち!?うそ！待つて待つてタンマ!!!」

藤丸が慌てふためいている隙を突きイツルと冬獅郎は距離を詰める。

「何かあるなら牢屋で聞くよ。」

「とりあえず捕まつてもらおうぞ！藤丸！」

日番谷は考える。宮能藤丸は本当に信頼に値するのかと。子供の頃にあったそいつはちやらんぼらんだが強く頼りになる（という話を聞かされていたのだが）という印象だったが、ほか死神を襲い五大貴族を殺し虚化実験をしていた浦原、握菱、当時二番隊長であった四楓院夜一とともに尸魂界を去った。当時藤丸と交戦したのは確か藍染と東仙だったはずだ。そして隊長格を単騎でやれる強さも持ち合わせている。つまりこいつが藍染を殺したのではないか？そんな疑問が頭をよぎった。

「（考えすぎだったかもな。）」

藤丸は確かに強いがよく考えれば朽木白哉しかたおせず浮竹たちから逃走しているしいくら強いとはいえ結局自分たちに防戦一方でしかなかった。斬魄刀も火力が出るものではないと聞いていたし自分が卍解をすればもつと簡単に倒せていただろう。五

大貴族の件も冤罪だと言っていた。調べてみれば藍染を殺した奴の情報が何か出てくるんじゃないか。

「(ま、その前にこいつは捕まえておかないとな。)」

氷輪丸で動きを鈍らせてから佐助で動けなくなるまで切りつければいい。そう思い冬獅郎は藤丸に斬りかかった。

「瞬間・轟天龍號」

今だ藤丸は全力を出していなかったというのに。

一日ぐらい放置しよう！

吉良と日番谷は大きく吹き飛ばされ先ほどまで三人がいた場所には竜の翼が生えた藤丸だけが取り残されていた。

「隊長！これは!？」

「松本！どうしてここに…いや、そんなことより吉良と雛森と一緒にここから離れろ！宮能藤丸だ！野郎、やられるふりして俺たちを油断させてきやがった！」

「乱菊ちやあん久しぶりい！懐かしい顔がそろつてきたなあ。ここにルキアちゃんと恋次君もいれば昔の顔ぶれがそろうのに。でもみんな強くなつて嬉しいよ！あは！あはは！あははははははははははは!!！」

先ほどまで主導権を握っていたとは思えないほど圧倒的な強さで、未知の技術を使いながら高笑いを上げるその男は酷く不気味で自身が知ってるその人とは大きくかけ離れた姿に日番谷たちは恐怖を抱いた。

………

………

………

「と、僕は隊長格たちに圧倒的な強さを見せつけてごねにごねて斬魄刀を持ったままここに入る許可をもらえたってことさ。」

「…で、なんでそんな圧倒的な強さをしてたのになんで藤丸さんは僕たちと一緒にこんなところに入れられてるんですか。」

一緒に牢屋に入れられた石田君が疑問を投げかけてくる。

「そんな感じで昔馴染みをもんでたら征源様ババとママとママ伊花様とママ卯ノ花様の友達とダンディ京な酒飲楽みと浮竹隊白髪イケメンがやってきてこれ以上やるなら自分たちが戦うってババが死にそうな顔をして言ってきたから自首した。」

「はあ。」「馬鹿じゃねえの?」

「はあああああん!?(激おこ) 家族に刃向けるのくっそ辛いんやけど!?!わかってくれるのは茶渡君だけかよおおおおお!」

「けっ! 所詮片親しかいないガキと姉貴しかいないガキにはわからん感情か(笑)」

「はあああああああああ!? てめえ言っつていいことと悪いことの区別もつかねえのか死神! 大体うちにはもともと兄ちゃんも…」「はあ、これだから死神はデリカシーもない奴らしいないんだ。大体僕にだって師匠や母さんはいたし…」

あーあーきこえないー! 早くまつ梨に会いたいなー! !

「宮能藤丸。二番隊隊長が呼びだ。」



牢の外から死神に声をかけられ俺はそのまま連れていかれることとなった。しっかし碎蜂ちゃん俺に用とは珍しいこともあるもんだな。

おっさんと白い俺の歩法を使い逃げる。おっさんと白い俺は俺を逃がすために徹底的に足止めをしているがそれすらもぶち抜いてアルトウロは追ってくる。それでも俺は逃げることにできない。光の濁流が掠り吹き飛ばされ、地に伏せた俺の体の下に、アルトウロの足元に吹き飛ばされたおっさんの近くに、膝をついている白い俺の近くに、斬月だったものの破片が落ちていいる。破片が落ちていいる。落ちていいる。落ちていいる。いいる。いいる。いいる。

「破道の九十『黒棺』おい、逃げるなよ。」

右に、前に、下に、左前に、上に、まるで羽根を掴まれた虫のように振り回された俺はそのまま落下していき俺は…

全身にびりびりという音が駆け巡り少しの痛みと衝撃が礫にされた俺を襲う。

「なあ、藤丸。私はずつと怖かったよ。私よりも後から入ってきたお前が私を抜いて夜様のお気に入りになり、いつでも破壊できる強さを手に入れたことが。」

歓迎パーティーのサプライズのためと言われ喜んで目隠しをつけた俺を待ち受けて

いたのは、霊圧を抑える手錠を装着されるといふ非道な行為だった。

「なあ、お前が夜一様を選ばなければ、私は夜一様と共にあることができたのか？ お前さえいなければ、夜一様があの日いなくなることもなかったのか？」

俺の肩にはドリルであけられた穴があり、強酸の類であろうものがそこから流し込まれ、シユーという肉が解ける音と強い痛みが俺の怒りを掻き立てる。だが、俺は信じている。しっかりと事情を説明した手紙を書いておいたから碎蜂ちゃんもきつとわかってくれているはずだ。ちよつと性癖がハードSMよりになつて久々にあつた俺に感極まつて自身の欲望を解放してしまつただけなのだろう。

「ひつー…い、痛みが怯まなずに睨みつけてくるその胆力は、流石だな。だが、お前は、わ、私に捕まつているのだ。立場をわきまえろ。」

この糞尼拗らせやがつて。頭が逝つてやがる。久しぶりに誰がご主人様かわからせてやるよ。

俺は磔台を膂力のみで破壊し竜条丸を抜刀する。

「閃け『竜条丸』」

磔台を破壊された碎蜂ちゃんはその膂力に一瞬だけ怯んだようだが震えながらも臨戦態勢に入る。

「くつ、ふ、ふざけたお前のことだ。きつとただでは済まないと思つていた。だが、霊圧

放出が不可能なお前が今の私に勝つことは不可能だ。」

その言葉には俺をビビり散らかしている碎蜂ちゃんとは思えない自信があり、すぐさまそれが過信ではないことが証明された。俺と碎蜂ちゃんはにらみ合っているだけなのにもかかわらず空気が動いた。その背と腕には圧縮された鬼道が渦巻いていた。

「瞬間・風神戦形」  
ふうしんせんけい

原作開始時ではいまだ不完全であつたそれをすでに会得している、そして肝心の俺は閃光蒼幻すら使えず斬魄刀のみ。なるほど、たとえ未来予測ができたとしても勝ち目はないだろう。

「確かに今現在でも貴様の方が優れているかもしれない。だが貴様にもわかるだろう？ 今この瞬間どちらが強いかなど！」

「ずいぶん饒舌にしゃべるね。俺に会えたのがそんなに嬉しかった？ そつかそつか。俺も碎蜂ちゃんに会うことをずっとずっと楽しみにしてたんだ！」

「くくくくよほど死にたいと見え「竜天蒼瞬」……え？」

藍染隊長や浦原さん達にしか見せたことのない技なんて碎蜂ちゃんを知る由もない。飛ばされた二秒間に玩具袋から超硬度拘束縄を取り出し圧縮機能を解除、髪紐ほどから麻縄ほどに大きくなったそれで碎蜂ちゃんを縛り上げる。さながら上は亀、下は蛙のように呆けた顔をしていた碎蜂ちゃんだったがやっとなにが起こったのか理解したのだ

ろう。一切表情金が動かないままその瞳からは大粒の涙がぼろぼろと流れ始めた。：ふつくしいっ!! (糞でか感情) 動けない砕蜂ちゃんを仰向けに起こしその扇情的な姿を見ると俺の心に嗜虐心がこみあげてくる。

「…あれほど鍛錬をしても。圧倒的優位な状況になっても私はお前に勝てなかった。もう殺してくれ。」

「砕蜂ちゃん。俺は君が好きだよ。」

白状しよう。俺は砕蜂ちゃんが好きだ。別にまつ梨たち以外の女性が好きじゃないとか、そういうわけじゃない。夜一さんとかエッチで好きだし、卯ノ花隊長とか一度は赤ちゃんプレイをしてみたいと思う。でもそうじゃない。ちがうんだ。

「なんで、こんなときに。」

「さあ、わからないな。砕蜂ちゃんを見ているうちにそう感じたんだ。僕を超えるために一生懸命頑張ったんだろう? 夜一様に認めてもらうために死ぬ気で努力したんだろう? わかるよ。すごくよくわかる。教えてもらえる人がいなくなつてからも瞬間を頑張つて修得して、四楓院家ですらないのに刑軍軍団長まで上り詰めたんだろう!？」

涙は流したまま、今度は齒を食いしぼるように嗚咽を漏らし砕蜂ちゃんは泣いていた。

「う、うう、辛かった。苦しかった。何で私を連れて行つてくれなかったのか聞きたく

て。でも夜一様のお声を聞く方法さえなくて。」

「苦痛も尊敬も全部俺への憎悪にしてここまで来たんだ。」

それはどれほど大変だったのだろうか。きつと心も体も沢山傷ついてきたのだろう。

「もう傷つかないでほしい。碎蜂が傷つくなんて俺は許せない。」

「藤丸……」

「碎蜂を傷つけていいのは俺だけなのに。」

何を言っているのかわからなかった。私はきつと藤丸と手を取り合っていていける。一瞬で作り上げた幻想をこの男は自らの手でいともたやすく崩していく。

「もう誰にも傷つけられないで。碎蜂が誰を見ようとどうでもいいけど碎蜂を苦しむさまを見ていいのは俺だけなんだよ。」

私の体をまさぐり取り出したかぎで手錠を外し刑軍装束の隙間から私の禪の紐を斬つてゆつくりと抜く。ゆつくりと、ゆつくりと、私にこれから起こることを想像させるように。

奴は懐の袋から吸盤に球状のものがくっついたものを二つ、棒に謎の突起が付いたものの、球体をいくつも紐に通したようなもの、液体浦原共同開発エロ漫画媚薬ローションの入った容器をそれぞれ取り出すと懇切丁寧に説明を始めた。これは私で遊ぶために

現世で購入した玩具でこれから一つずつ使用していくという。液体をかけられて滑りのよくなった三つ目の玩具を肛門からゆっくりと入れられ私の腹を圧迫する。二つ目の玩具は膣に入れられ突起は陰核をぴったりと包み込むように装着される。二つの吸盤は乳輪に沿うように吸い付き乳首を無数の突起が刺激した。

「凍てつく雛 雨・霧は全て刃となりて 切り裂き 削り 残るは白銀と紅 破道の六  
十『痕氷牙（こんひょうが）』」

壁に無数の四角錐が出現する。それが何の役割をするのか私にはよくわからなかった。

壊れないでね。不穏な言葉を吐いた藤丸は玩具たちを次々に動かしたあと部屋から出ていき、扉にも氷の角錐が生成された。残された私は真つ暗な部屋で私の悲鳴にも似た嬌声を出すことしかできなかった。

## 俺露出プレイに興味ないから

俺がルキア救出のために修練場から出ていくとき、一護はボロボロになりながらも二人の男と協力して一人の男に立ち向かっていた。だが圧倒的な戦力差があるのか三人がかりでもその男は止まらず一護の持っている刀を砕いていく。

「夜一さんよオ、あんなんで卍解までたどり着けんのかよ。」

「…さあ…」

「うおー——い!?!」

はあ!?!そんなんじや困るぜ!もたもたしてるとルキアが殺されちまうんだぞ!?

「儂にも判断がつかんのだ。二人目の常時開放型、加えてあやつ斬魄刀からは何故か三人出てきおった。さらにその中に藤丸が扮したアルトウ口がいるなど意味が分からんし、あやつが何者かも分からん。」

歪な大太刀での振り下ろしは同じ大太刀の腹を使って滑らせようとした一護を力任せに吹き飛ばした。

………

…

ひたすらに刃を振り続けついに修練場から刃の気配が消えた。

「ねえじゃねえか！」

いやねえじゃん!? ずつとないものを探してたとか馬鹿みてえじゃねえか!!

「あるある! もう偽物は全部なくなっただからあと本物見つけるだけだつて。」

蹴り上げからの蹴り下ろし。掠った頬が少し切れる。怖い。ていうかこれに対して徒手空拳で対応することが不可能だろ。おっさんと白い俺が攻撃してなおこの余裕と…か……

「あああああああああつ?!?!」

あつた! あつた! いや待て待て、そんななぞなぞみたいなのがあるわけねえじゃん!? でも少し試すだけ、それだけならいいよな!?

俺はアルトウ口の顔に向かって剣の残骸を投げつける。それ自体は簡単に防がれるが相手が防御の一手を取ったためおっさんと白い俺に一瞬の余裕ができた。その瞬間、今まで学んだことのすべてを使い全速力で二人のそばに駆け寄り両手を掴んで名前を呼ぶ。

「斬月!」

二人が消えあとにはアルトウ口と黒いコートに黒い日本刀を持った俺だけが残った。



「あつた…」

あつた、あつた！俺の斬月！これで俺も正解をぐえ!!

そう喜んでる俺のみぞおちに正拳が突き刺さる。

「喜んでるところ悪いけど俺を倒すところまでが修行だから。」

嘘だろお…

朽木ルキアの処刑には各隊の隊長、副隊長が集まるはずであつた。しかし集まったの一、二、四、八、そして副隊長不在の六番隊のみである。訪れた白哉を見てルキアは小さく呟くも白哉の視線はすぐに外された。

「朽木ルキア、何か…言い遺しておくことはあるかの？」

総隊長、山本元柳斎重國に尋ねられたルキアは暫しの間思案したあとぼつりと零した。

「はい、一つだけ。一護たちを無事に現世へ帰らせてほしいのです。」

「良からう。おぬしの願い通り…処刑の終わつたあかつきには旅禍どもを無傷で帰らせてやろう。」

「…あ…ありがとうございます。」

その言葉を信じたのか、はたまた嘘だと見抜けてしまったのかは本人以外定かではな

いが、ルキアは全てを受け入れるかのようにゆっくりと瞼を閉じた。  
「双極を、解放せよ。」

碎蜂ちゃんに擬態していた俺は表情に一切出さずに内心焦り散らかしていた。

(一護君何時まで修行やってんの!?)

いまだに戦ってるんだけど。おかしいじゃん。まずいじゃん。ねえ間に合わないつて。え、これ俺のせいなん？俺が原作介入したせいなん？いや、無理じゃん。だって一護くんお母さん死んでずっとトラウマ抱えてるの可哀想やん。俺自分のせいで伊花様ができぬとか耐えられないけど。石田ママも助けるつて？いや無理やん。確かに卍解でできなくもなさそうだけどそれした場合俺が聖別にかけられるもん。死ぬもん。

「…ひどい…どうせ生かして返す気なんてないくせに…。」

「非道くなどありませんよ、勇音。慈悲です。何れさらぬ終焉ならば、せめて僕かでも迷いなく、せめて僕かでも安らかに。」

まあ絶対助けるんですけどね。まあそのあとどうやって藍染ほこぼこにしてギン君回収するかは竜条丸持つてる俺でもノープランですけどね。

はああああああ(溜息)マジでどうしよ。未来予測出来て変化の術使えて殺した相手の霊圧奪えて、破道、縛道、回道全部高水準で使えて白打の奥義も修得してる

ジ・オールマイティな俺がなんでこんなに焦ってんだろ。

「燬殿王、双極の矛の真の姿にして☒刑の最終執行者。彼が罪人を貫くことで☒刑は終わる。」

ねえ一護、修行止めなよ。なんであんなヤバい奴を止められたの？俺炎だけ弱点だし、俺の斬魄刀はどっちも斬月みたいな強度誇ってないから受け止めたら詰むんだよ？折れるんだよ？

「さよなら。」

俺の脳みそは爆発した。頬を伝う一筋の涙と、たった四文字の短い言葉。俺の半分も生きていないような子供が流していいものではなかった。口から出ていい言葉ではなかった。

解号なしで斬魄刀を解放する。

「竜天蒼瞬」

二秒もあれば瞬間を纏う時間もある。不滅王を解放する時間もある。二秒あれば俺は最強になれる。

双極の磔架に乗った俺は迫りくる炎の巨鳥に両手を突き出した。

「竜哮衝」

巨鳥が吹き飛ばされ体勢を崩す。たかが鳥如き、竜の叫びが吹き飛ばせぬ道理はな

い。ただし炎は普通にきく。

鋼皮を貫通して確実に火傷した両の掌。死覇装が瞬間で上半分、引火した炎で下半分消失したために晴天の下にさらされた俺の生まれのままの姿。

礫架に乗っているおかげで息子と菊門が皆にさらされるという超絶尊厳破壊は免れた。だが、ただ一人俺の愚息を見てしまった女がいる。

「…ひゃ？え、藤丸さ、あの、その、えっと／＼／＼」

指の隙間からチラチラ見てくるルキアちゃんを見ながら、兄さまか恋次君に見せてもらえよ、と思った。

原作を改変した代償は大きい。

相手の攻撃が当たらない場所から一方的に高火力遠距離攻撃ばらまいてれば敗けるわけくない？

チンダル現象  
謎の光は残念ながら起こらなかった。なぜなら今日は雲一つない晴天。お天道様も俺のちんちんは見逃さなかったようだ。俺の肉棒は凶悪だ。ルキアちゃんのトラウマにならないといいが。藤丸のトラウマには成った。

「ああー、藤丸さん。遅れて悪かったよ。」

主人公っていつも遅れてきますよね……俺<sup>モブ</sup>たちのことなんだと思ってるんですか!? 阿呆な思考をしながら一護君からもらったマントを腰に巻く。何で俺がノーパンスカートしてるんだろう。こういうのは碎蜂ちゃんややるべきだと思うんだ。

「い……一護……訊くが……これからどうする気だ……? これほど目の前ではつきりと見せつけ……いや、うまく姿を晦ませる方法など……/ /」

うん、ごめん。俺が悪かったからもう隠されてるとはいえ股間をチラ見するの止めてくれねえか。

「全員ぶっ倒す。藤丸さんもいるし俺だつて強くなつた。負ける事なんてねえよ。」

負けるよ。俺が卯ノ花隊長の相手して、総隊長はお二方に任せて一護君は兄さまと……

あれ、ワンチャンあるのか？

「ルキア!!!」

「良かった！生きておったのだな。恋次!!: : / / 本当に良かった!!」

何故顔を赤くしてるのかは知らないけどきつとルキアちゃんは問題ないな！（ヤケクソ）

瞬歩で降りて一護君は恋次君にルキアちゃんを渡す。原作でもそうしろよ。

「連れてけ。テメーの仕事だ。死んでも手放すなよ。」

もうひどい。一護君一人で副隊長三人ぼこせるの意味わかんねえよ。なんで兄さまの攻撃を完全に見切って反撃して傷おわせてんだよ。もうお前ひとりでもいいよ。

「卯ノ花隊長！怪我した副隊長の治療をお願いします。あと藍染は生きてます。見つけたら切り殺しちやつてください！」

お願いだから今ここで俺とやりあおうと思わないでくれ。頼む。

「…わかりました。治療はします。」

治療はします。でもあなたもしばきますってことかなあ。一護君はノリノリで兄さまとやりあつてるし俺もあの日の怒りを晴らしに行くとするか。

.....

.....

：

十四郎と春水は双極から離れた場所へ移動し、そこに七緒も遅れて到着する。

「七緒ちゃんビ～～リ～～♡」

「た…隊長たちが速過ぎるんです。」

息も絶え絶えに返答する七緒、だが更にその後ろから声がかかる。

「ところがどっこい。ブリツケツは俺なんだよなあ。」

「おっと、前門の虎、後門の狼とは驚いたな。」

前門の山爺、後門の俺には思わず三人ともビツクリ…後門の俺って言うの止めろ！  
イムリーな地雷だぞ！

ここで山本総隊長を戦闘不能にしてから卯ノ花隊長を追うか、でも山本総隊長を藍染がビビッてるのも事実なんだよね。う～ん。

「昔から逃げる悪餓鬼に撒かれたことはないんじやよ。来い、童共。」  
わっば

良し決めた。私怨もあるしこの爺はとりあえずぼこぼこにしよう。

「お二方。この戦いが終わったら少し話を聞いてもらってもいいですか？」

「貴様らの勝利などありえん。なぜならこの儂が「ぬかせ糞爺。あんた程度俺一人で十分だ。」…ほう？」

流刃若火とか俺特攻の武器と真正面から斬りあうつもりなんてないのでやっぱり竜天蒼瞬をつかう。

「縛道の七十五『五柱鉄貫（ごちゆうてつかん）』」

爺。お前の表情からなにを考えているかなんて手に取るようにわかるぞ。こんなもんで止まるわけがないのに何してんだこいつつてところか？

上空から降ってくる柱を何でもないように弾いた元柳斎はそれに違和感を覚えた。重い。霊圧を加味してもただの詠唱破棄にしてはずいぶんと重さの乗った縛道だ。だがそれで止まる元柳斎ではなく、抜刀をしようとしたときそれに気づいた。次の柱が降ってきている。上を見上げれば輪を描いた五本の柱が無数に落ちてきていた。

「二秒間、疑似七重詠唱だ。しっかり味わってくれよな。」

元柳斎に降り注いだ25本の柱はいくら隊長と言えども一人の死神が耐えられる重量ではない。しかし最古の死神であり最強の死神である元柳斎はそれすらも耐えた。

「足りぬぞ小童。」

「知ってるよ爺。」

だからこそ最後の一発は特別性なのだ。

元柳斎の胸部と周囲に黒い霊力が出現しそれは楔の如く元柳斎を封じ込めた。

「皆さんは中央四十六室の様子を見に行ってもらっていいですか？桃ちゃんと冬獅郎君



と乱菊ちゃんの味方をしてほしいです。」

「その三人は今回の一軒の黒幕ではないということか?」

「ええ。今回の犯人は意外な人ですよ。まあそれは行つて自分の目で確かめてくださいということ。」

俺の百の言葉よりも藍染を一回見たほうがわかりやすいしな。三人を守つてくれ。特に桃ちゃん。

伊勢副隊長は何か言いたそうにしてたが三人はそのまま向かつてくれた。言いたいことはまあおおむね理解してくれたということだろう。

「さて総隊長殿。窮屈そうで申し訳ないですがしばらくそうしててくださいね。」

返答はなし。喋る余裕もないか。…んふ、んふふふふ! 山本元柳斎も封殺してやったわあーっはっはっはっはっ

ミシッ

はあ?

いや、いやいやいやいや、そんなわけないじゃん。無理でしょいくらなんでもここから抜け出すのは。不可能に決まつてる。絶対そうだ。

ミシミシミシ

勘弁してくださいよおじいちゃん。いやだつてこんな化物と戦うの。

「驕りが過ぎた様じゃの。」

バリバリバリバリッ

俺の口は勝手に詠唱を始めた。怖いんだね、という竜条丸の声が聞こえた気がした。うるせえよ、はよ未来見せろ、数瞬だけでいいから。

話は変わるが俺が鏡花水月にかからないのも閻魔蟋蟀内を普通に動けるのもそれがこの世界における偽物だからである。一体何をもって偽物としているのかと言えば正しいプロセスを踏んでいるか否か、というところだ。もつといえれば正しい過程ののち結果が定まっているものが本物である。斬魄刀とは宝玉とよく似ているものであり、斬魄刀の能力は霊王の能力をデチューンしたものだ。ここで質問なのだが、思っただけで火が起こつたりなんか花びらみたいに剣が散り散りになったりするだろうか？ 思わない（食い気味）。結論を言おう。竜条丸は斬魄刀の起こす現象は一切見ることができない。アルトウ口との戦いで花天狂骨が何をするのか読めたのはどの未来でも京楽隊長が同じ遊びを使って同じ動きをしていたからだ。でも爺の動き見たって炎の範囲とか見えないじゃん！俺の斬魄刀の利点を全て潰された状態で俺はこの爺と戦うことになるのか？

「縛道の九十九『禁』」

俺の完全詠唱の禁はしっかりと山本総隊長をとらえようとして全焼した。

「死ぬ覚悟はできたか？小僧。」

詳細は省くが俺はこの爺さんにさんざん追い掛け回された挙句ぼろ雑巾になった。  
南無阿弥陀仏。

「しつかり見てけよ。こいつが俺の、卍解だ！

『天鎖斬月』

一護は黒いコートを纏い右手に刀を持ち、に籠手纏っただけ。ただそれだけの変化しかなかった。その刀は細く、黒く、籠手も片腕にしか無いそれは、とても卍解には見えないほど小さかった。しかし、それがどうしたというのか。霊圧は強大で、本能が警鐘を鳴らす。矮小と片付けるにはそれは恐ろしすぎた。

白哉は即座に手掌で千本桜を操り一護をとらえようとするがそこにはすでに一護はいなかった。

「どうした、臆して引いたか。」

一護は先ほどいた場所よりも離れた場所で何とも言えぬ表情をしながらしゃべる。

「あー、まあそう思われてもしやあねえよな。けど俺が馬鹿正直にそっちの土俵に上

がつてやる必要もねえんだ。わりいが諦めてくれ。」

一護は自身の刀を振り下ろすと同時に叫ぶ。

『月牙天衝』

黒い月牙天衝は始解の時に放たれた時の比ではなく、その正面からの攻撃を白哉は即座に回避を選択した。

後方から飛翔してくる斬撃が迫ることを知らずに。

……

……

……

もしもここに藤丸がいたならば「これが主人公の戦い方か？」とこぼしたに違いない。今しがた殲景を発動させた白哉はすでに満身創痍。それに比べて一護はいまだ舐めプで食らった初撃だけというありさまである。月牙天衝を安全圏から四方八方囲んで撃つ戦い方は控えめに言って糞だ。そんな糞戦法を取った一護を殲景に入れたのはひとえに白夜の経験のたわものだろう。あえて隙を見せ、一護本人が突つ込むよう仕向ける作戦は防げなければ即敗北が決まるお世辞にも立派とは言えない賭けに近いものだった。しかしその賭けに白哉は勝った。しかし次の攻撃で押し勝てなければもう自身に勝機がないことも白哉は感じていた。

「次の一撃で、幕だ。」

「…最後に…もう一回だけ訊いていいか？あんたは…どうしてルキアを助けねえんだ。」

「…兄が私を斃せたなら…その問いにもこたえよう。千本桜景厳

『終景・白帝剣』

全ての刃が集中し、刃と羽を形成する。それに対して一護は籠手を白哉に向けた。

「いくぜ、朽木白哉。」

『虎糾絶衝』

蒼き刃と白き刃が交差した。

「知りたがっていたな。…私がルキアを殺す理由を。罪あるものは裁かねばならぬ。刑が決すれば処さねばならぬ。それが、掟だからだ。」

「掟だから殺すのかよ。てめえの妹でも。」

家族を大事にする一護にとってそれは理解できぬものだった。

「…肉親の情か。…下らぬ。掟に比すればあらゆる感情に価値などない。そんな下らぬ感情など、もとより持ち合わせてはおらぬ。我が朽木家は四大貴族の一、全ての死神の規範とならねばならぬ存在。」

我等が掟を守らずして、誰が掟を守るというのだ。」

その思考は理解できずとも、白哉の覚悟を一護は知る。

「…悪い…やっぱり俺にはわかんねえや。俺が…もし俺があんたの立場だったとしても…やっぱり俺は、掟と戦ってたと思う。」

「…黒崎一護。私の刀は…貴様の奔放さに打ち砕かれた。私はもはや、ルキアを追わぬ。この勝負。兄の勝ちだ。」

そういつて白哉は瞬歩で立ち去った。

## ママ身を感じるハードSM

虎徹勇音からの伝令は一護たちや護廷十三隊全体に伝わった。

「だからこんなことしてる場合じゃないんじゃないですかおじいちゃん。」

俺はどうやらおじいちゃんたちの中ではなぜか四大貴族殺しの極悪人となっているらしい。しかし中央四十六室を皆殺しにし、なおかつ情報操作をやらかした藍染よりはましと判断されたようだ。

「どうやらすべて知っていたようじゃな。小僧。貴様もついてこい。」

そう言うのと山本総隊長は瞬歩で双極へと向かっていった。俺も付いて行かなければならないのだが、行きたくないな。右腕は肩口が斬り裂かれ今にも千切れそう。右足と腹部は甚大な火傷があり、動くだけで痛むほどだ。他にも裂傷、骨折、打ち身、打撲etc. 最初に使う縛道を卍禁とかにすればよかったと心底後悔したぜ。

「最後の一仕事、頑張るかあ。」

俺と恋次が、他の隊長が、夜一さん達が来て直、藍染を仕留めることはできなかった。「あの光は反膜ネガシオンというての。大虚が同族を助けるときに使う物じゃ。あの光に包まれた

が最後、光の内と外は鑑賞不可能な完全に隔絶された空間となる。大虚と戦うたことのあるものなら皆知つとる、あの光が降った瞬間から、藍染にはもはや、触れる事すらできんとな。」

光の壁に包まれた藍染たちは空に昇っていく。それは俺たちがあいつを取り逃がしていく事をじつくりと実感させられた。すべてあいつの思惑通りになってしまった。

「…大虚とまで手を組んだのか…何のためにだ。」

「高みを求めて。」

「地に落ちたか。藍染…！」

「…傲りが過ぎるぞ、浮竹。最初から誰も天に立ってなどいない。君も、僕も、神すらも、だがその耐え難い天の座の空白も終わる。これからは、私が天に立つ。」

絶望的だった。ルキアを助けることはできたものの、複数の犠牲者が出て、掌の上で転がされて、とてもみじめな気分だった。

「許すわけないよな、そんなこと。」

いつもの落ち着いた声は俺の耳にすつと入り俺の目の前にその人は降り立った。体中にケガがあつてボロボロでもその背中に憧れる。

「おかしいよな。虚は共食いを前提の存在なのに仲間を守るなんてよ。そもそも絶対攻



撃が通らないってことがおかしいんだ。なあ？藍染。」

「みすばらしい格好で急に現れてはべらべらと、口の減らない男だ。君の研究も終わった。もう興味はないのだが。一体何が言いたいんだ。」

「わからないのかよ。俺ならお前を傷つけられるって意味さ！

よみがえれ  
蘇れ フェニクス  
不滅王」

白い炎が藤丸さんの全身を包み込み隠す。そこから現れた姿は怪我は全て治ったものの全身に罅を作った異質な姿だった。

「しっかりとみてろよ、だっけか？一護君が次に覚えるのはこれだからな。」

顔の右半分を覆う仮面ごと大きく口を開けその口腔から雄たけびとも悲鳴ともとれる声とともに黒い閃光が放たれる

セロ・オスキュラス  
『黒虚閃』

とつきに何かを唱えた藍染だったが反膜と何かもう一枚の壁を砕きその黒い閃光は藍染の腕を吹き飛ばした。

「捨て台詞はいたっていいんだぜ？」

「私と唯一同じ目線を持てる君がその程度の品位しかなくて非常に不愉快だよ。」

糞爺、ワンコ隊長、兄さま、恋次君、一護君を治した俺は乱菊ちゃんや浮竹隊長、京楽隊長と久しぶりにゆっくり話しながら非常にワクワクした心持で卯ノ花隊長を待った。悪役を演じてまで尸魂界を守ったヒーロー！こんな伊花様たちにもよしよししてもらって卯ノ花隊長からも褒められてまつ梨と一緒に瀟靈廷に戻ってこられるかもしれない。そうだ。朱司波家の近くに家を買って霞も呼ぼう。英雄になっちゃったかな、多少のわがままぐらい聞いてもらえるだろう。

「あつ！卯ノ花たいちようーう！」

いくら俺でもそんなことを想像すればニコニコが止まらないってもんよ。肉震☒に乗って飛んできた卯ノ花隊長はすぐさま俺のもとに駆け寄ってきて俺の右手を跳ね飛ばした。……え？

「いったー!？」

これには四番隊どころかここにそろった全員が驚き何なら俺が一番驚いてる。鏡花水月にかかっているとかそういう話!？」

「藤丸さん。碎蜂隊長をどうしましたか?」

…やつつつば。

「ごめんさい。」

土下座だった。土下座しかなかった。やべえ、優しくなでもらうどころか全身撫で斬りされる。生粋の優がそんなことするか?」

グサツ

したわ。これは生粋の暴。俺下手売ったら死ぬのでは?」

「女性に対しての扱いというものがありません。私が言いたいことがわかりますか?」

片足が跳ね飛ばされる。はい。おっしゃる通りでございます。誠に申し訳ございませんでした。ペット扱いなどもつてのほかですよね。

「…ペット?」

右腕が肩口から跳ね飛ばされる。失言だったかもしれない。ごめん兄さま。さつきがいい話を全て飛ばすインパクトの絵面をしてるのは悪いと思ってる。でも許してほしい。俺の命がかかっているんだ。

「縛道の七十七『天挺空羅』(ルキアちゃん!乱菊ちゃん!助けてー! (泣) 浮竹隊

長でも京楽隊長でもいい！一護君！お願い！助けて！もう霊力すつからかんなの。死んじやう。俺これ以上死んじやうから！」

「ああーえつと関係はわからねえけど。今日はいいんじやねえか？藤丸さんも大変だったしよ。」

君は素晴らしいマイ一番弟子だ。志童？知らんな誰だそいつ。

「…まあいいでしょう。吹き飛んだ手足を持つてこつちへ来なさい。優しく治してあげますから。」

吹き飛ばしたの間違いじゃ…イエナンデモナイデス。

なおよしよししながら俺のことを治してくれた卯ノ花隊長は生粋の優だった。胸を触ろうとしたら左腕が飛んだ。

………

………

………

藍染の反乱から一週間が経過し四番隊隊舎からは馬鹿の叫び声が聞こえていた。

「アア!?!うるせーよテメー!!」

「いや…そういわれましてもまだ…「もう治ったつってんだろが!!」」

「あんまりうるさいとオメーの骨も折っちゃうよ!?!」

皆が陰から見守っている中堂々と出ていく男が一人。

「じゃあ俺が治そう。『サントフエグ聖なる炎』」

藤丸である。聖なる炎は肉を焦がした灰が肉体を組成する術である。ゆえに、

「ぎゃああああああああああ!!」

うるさいからこれでも突っ込んで。お大事に〜。」

そういつて藤丸は洗ってあつた彼らの替えの禪を口に詰めて外に放り投げた。

「ああいうのいっつもいるな。斬つちまってもいいんじゃないの?」

「だ、ダメですよ。卯ノ花隊長に叱られてしまいます。(ありがとうございます!)」

「そっか。じゃあ仕方ないな。」

碎蜂の一件で狂人、変態、などの汚名が広まっていたが一生懸命働く姿は不信感をだ

んだんと溶かしていった。

「宮能さん。この書類なのですが。」

「卯ノ花隊長。虎徹副隊長。お疲れ様です。その書類は十三番隊に回してください。」

「藤丸さん。精が出ますね。」

「ええ、久しぶり家に帰れたので何もかも元通りですから。」

「…あなたから見れば、そうかもしれませんね。そういえば、臨時の四番隊業務も今日で終わりですよ。あなたの判決が下りました。」

え？

## やっぱ護廷十三隊ってブラツク企業篇

今日からよろしくお願いします（満面の笑み）

「本日から二番隊に復帰します。宮能藤丸です。よろしくお願いしまーす。」

あの日はあまりに絶望的な状況過ぎて顔面強化外骨格がなければ泣き出してしまいそうだった。しかし、いまはそんなものもう必要ない。俺は今満面の笑みでここに配属されることができる！

「お久しぶりです師匠！お元気でしたか？」「藤丸。久しぶりだな。少し背が伸びたんじゃないか？ますます俺も負けてられないな。」「宮能三席！お久しぶりです！私も始解できるようになつたんです！」

懐かしい顔ぶれだな。まあ二人は久しぶり、元気してた？でいいよ。だが志童、てめーはだめだ。

「なあ志童？風のうわさでお前がまだ始解すら出来てないとk」「なんでこいつが六席なんですか碎蜂隊長!？」うるさ。何？

「九席の阿画玉だ。なぜ犯罪者如きが刑軍に六席なんだ！ふざけるな。」

どこの世界にも結局同じような奴はいるのか。こんな三下みたいなやつに二回も絡

まれるとか勘弁したいぜ。

「どっかで見たとある風景だな。なあ志童？」

「さあ？俺には何のことかさっぱりわかりませんが。」

いけしゃあしゃあとしやがって。一人目はお前なんだぞ。

「なあお前、どこ所属だ？」

「…？第一分隊所属だがそれがどうかしたのか？」

「碎蜂隊長。俺確か刑軍所属だから俺直属の上司は碎蜂隊長だけで残りは大体俺の部下ってことだよな？」

「…まあ、そうだ。」

刑軍で上官に逆らう？冗談じゃねえよ。そんなふざけたことぬかしてんのかこいつは。

「文句があるなら今ここで俺を斃せばいい。わかるな？」

「上等！」

俺の言葉にすぐさま反応して俺に抜く暇を与えず抜刀術で俺の首をはねようとする戦闘センスは悪くない。ただそのほかが全てだめだ。もし今俺が難なく首を跳ね飛ばされて死んだとしてそしたらこいつはそれこそ処刑対象になるか蛆虫の巣行きだ。短絡的思考と言わざるを得ない。



阿画玉の斬魄刀を本人より早く抜き放ちその辺に捨て、もう一方の手で阿画玉の頭を掴む。

「降参するか？」

「はっ？誰がするか。」

「なら今この状況からどうするんだ？」

「こうすんだよっ！」

阿画玉のハイキックが俺に当たるより早く奴の頭を強引に下げ片膝を上げたため阿画玉の顔面に俺の膝が入って足は空を蹴った。

「もう一度聞くがこの後どうするんだ？」

「っーこのっー！」

奴の拳が俺の顔に刺さるより早く俺の膝がクリーンヒットする。

「ああ、さっきの質問な。何で犯罪者の俺が六席か聞いてたけど事前情報とか集めてねえのか。犯罪者だから六席なんだ。お前はなんで俺がたかが六席にいるかを聞くべきだった。なあ、俺がこの尸魂界から去る前に俺はこの隊の三席をやったんだ。わかるか？隊長格を抜いた素手戦鬪で俺にかなうやつはいなかったことだ。隊長格の打診もあつたしな。だが一犯罪者に隊の全権を持たせるとまずいってのは藍染離反後の今ならより一層わかるだろ。だから六席なんだよ。」

どんな攻撃をしようとその前に潰されるつてのに懲りずによくやるよ。今俺が話している間に8回も挑戦するか戦意高いっすね。十一番隊にでも行け。

動かなくなつた阿画玉を志童にぶん投げると藤丸はほか隊士の方に向き直り言葉を続ける。

「二番隊で上の命令を聞けないやつはいらない。中途半端な奴もいらぬ。上司に使い捨てにされたつていい奴だけがこの隊にいることができたよ。」

俺みたいにワンチャンにかけられる奴が百人ぐらいいれば全員に俺と同じ教育プログラム施して最強の隊を作るのに。今それに一番近いのが志童とか、もう、ほんとマジで。

「碎蜂隊長も後進の教育してください。ある程度強くても馬鹿だけじゃ使い物になりませんよ。志童、手足を拘束して四番隊に連れてけ。後猿轡も。」

暴れられたら困るからな。

……

……

……

今日は顔見世だけだったので午後は暇、確かに家族の待つ家に帰ってよいのだが、俺にはいつかやらなければいけないかつた地獄のイベントがある。

「失礼します。」

言ひ方的には礼儀正しいだろう。しかしここは十一番隊舎、失礼しますと言って入ればそいつは今から自分たちに失礼する失礼な奴と同義、つまり

「なんだ？道場破りか？」

「ええ、更木隊長と立ち合いに来ました。」

俺の言葉に更木隊長（とやちる副隊長）はにやりと笑って立ち、刀を抜き放った。

「話を聞きや、どうやら一護を鍛えたのもお前だって言うじゃねえか。百年以上も待たせやがって。どんだけ俺をワクワクさせれば気が済むんだ？藤丸う！」

「当代最強の死神に名前を覚えてもらってるなんて光栄の極みですね。だからさっさと眼帯外せよ俺があげた襟巻は何処へ行ったのかな！」

お互い最初から全力の霊圧で戦い始める。更木隊長の剣はポロポロだがそれは欠片も折れそうにない。

「おいおい腰に下げてるもう一本の刀は飾りか!?全力を出せよ！」

「うるせえ！まずはあの日の雪辱戦なんだよ。後で一気にギア上げるから覚悟しろや！」

俺の両手による全力の斬り下ろしも片手による切り上げで弾かれそのまま斬り下ろし……かと思いきや横薙ぎ。剣の側頭部を裏拳で弾こうとしたのを変更ししやがみで回

避する。再度攻撃に回ろうとすれば目の前には今度こそ上段から剣先が襲い掛かってきた。斬り下ろしを浅打状態の竜条丸で防ぐ準備をしながらもう片方の手で不滅王を引き抜き解放、抜刀の勢いを殺さず両の剣で更木隊長の剣を受け止める。やや膠着状態のうち口から吐き出した虚閃はやや掠った程度で横に躲されたが……ここだ！

俺には剣の才能は無かった。しかし竜条丸という斬魄刀はどこまでもいかれた斬魄刀だ。本来ならこの技はタイミングを見極めるセンスと鍛え抜かれた体が必要だ。しかし、このタイミングを竜条丸に教えてもらうことによつて俺は剣使用時に足りなかった火力を習得した。見よ！試行錯誤の上たどり着いたと思つたら完全似た作品の技になつた最強の奥義！

「月島流！富岳鉄槌割りイイ!!!」

解放した竜条丸を霊圧を乗せながら不滅王を手放した左手で刃を押し付けるように叩つ切り、直接斬つてはいない道場の床を破壊しながら更木隊長の背骨を折る。

「くっはははははは！また負けちまつたぜ！つええじゃねえか！またやるときが楽しんで仕方ねえぜ！」

ひえっ、下半身不随になつてる状態で何で次の戦いに思いをはせることができるんだよ。怖いよお。

「……体治しておきますね。」

聖なる炎で体を焼かれてるときも悲鳴一つ上げない胆力はやべえと思った。

劍八のやろーに追いかけられたときに忘れてきた斬月を取りに戻った俺は今、口を閉じることができなかった。十一番隊の道場の床はでかいハンマーでも振り下ろされたかのように円形にへこんでおり大工が修繕作業をしているのだ。

「二護。やっと斬魄刀取りに来たか。ほらよつ。」

たまたま会った一角に話を聞けば藤丸さんと劍八が戦ってあの破壊痕ができたらしい。

「とんでもねえ鬼道だな。室内で撃つといい技じゃないだろ。」

「いや、あれは剣でやってたぜ。確か月島流、富岳なんとかって言うてたし鬼道系の斬魄刀なんだろ。」

ああ、俺の月牙みてえなもんか。後で聞いてみよう。

藤丸さんの斬魄刀ってどんな技撃てるんだ？え、鬼道系の斬魄刀じゃない？じゃああの道場ってどうやってあんな壊れ方したんだよ。月島流富岳鉄槌割り？

メシイ

え？（困惑）ええ？（ドン引き）

# カサカサゴキブリみてえな動きしやがつて

家に帰ればあつたかい食事と家族がまつているというのは素晴らしい。それは何よりも勝る幸福だ。

「ただいま。」

「お帰りなさい父様。ともしさま夕餉の支度はできています。」

家の奥から出てきた160センチほどの激カワな子は宮能柳やなぎ。その艶のある長い黒髪は霞を思わせ顔のパーツもほとんど霞だ。俺の要素は青い瞳のみだが間違いなく俺の息子だ。色気のあるくびれ、貪りたくなるよううなじ、ほんについてるのか疑いたくなるほどの美男子だな。

「ただいま。それじゃあいただこうかな。」

正直この子との距離感は少し測りかねる。百年認知してなかった子とどう接しろと。「あなた。ただ愛してあげればいいんですよ。この子はあなたのために育てたんですから。」

料理を持ってきた霞とまつ梨も含めた四人で食事をしている時唐突に吐かれたその言葉で味噌汁をむせ返す。

「あなたの考えはわかりますけど後ろめたいならいっぱい甘やかしてあげればいいんです。」

「そうか……。柳、何か欲しいものはないか？何でも買つてやるぞ。」

金ならそこそこあるしないうら作ればいい。さあ、何が欲しいんだい？

「そつ！それじゃあ父様に稽古をつけてもらう時間がほしいです！」

「よ、よし！しつかりつけてやろう！俺は最強だからな。任せておけ！」

できるだけ頼りになりそうな父親像を演出しながら俺は二人にこれで大丈夫かとちらちらアイコンタクトを送るが、まつ梨からは苦笑いが、霞からは温かい視線が返ってきた。なぜ!?

そうこうしてる間に寝る時間になったのだが、せつかく三人そろつたので夫婦の営みをしようと思ひ二人を誘つたのだが、

「霞？なんで柳もいるの？」

と言つてしまつたがよく考えれば初めて会つた正確には流魂街でも一度会つているので二度目父親と一緒に寝たいのかもしれない。夜に一人省かれるのも可哀想だし今日はそう言つたことはやめて一緒に寝ようか。

「夜の手伝いもできるようにしつかりと仕込んだのでこの子も参加させようと思ひ連れてきました。」



「は？」

男一人に女二人では（できるだけそうならないように努力はしているが）片方に空く時間ができてしまうからもう一人竿役に抜擢したのかとまつ梨と二人で考えた俺たちの耳にさらにとんでもない情報が叩き込まれた。我が息子はどうやら入れられる側らしい。は？

………

………

………

「は？」

鳥のさえずりとともに体を起こす。右に全裸の嫁、左に全裸の嫁、体の上には全裸の息子が規則正しい寝息を立てて寝ていた。きつと娘を犯したエロ漫画の世界の父親諸君は俺と同じような気持ちだっただろう。罪悪感と背徳感がごちゃ混ぜになったまま自分を激しく抱く父親はこの子のひとみにどう映っただろうか。臀部を見れば何がとは言わないが少し漏れていた。ていうか実の息子に対して興奮して勃った父親って、うわあ、やばあ。：骨格は完全に男だが肉の付き方が女っぽいな。なで肩なのがなんか無性にエロく見える。

「ん、んう。」

息子よ、落ち着け。…ブラックジョークが過ぎるか。

昨日の様子を見るに後ろは初めてではなくすでにそこが性感帯として機能していた。ずつといなかった父親の慰みができるように実の母親に後ろを開発されたのか。業が深すぎる。……………仕事、行くか。

軽く湯浴みをした後冷えても食べられるような朝食を三人分と先に出る旨の書置きを用意し俺は家を出た。

……………

……………

……………

今日の仕事は全て午後に戻している。なぜかと言えば今日は現世組の見送りがあるからだ。

「藤丸さん。今日はあんたを超えたことを証明するぜ。」

まだ現世に帰る時間よりやや早い時間に一護君に呼び出され俺と数名の死神がいる中、一護君は俺に向かって挑戦状を叩きつけた。どおりで卯ノ花隊長と勇音副隊長がそろっているわけだ。

ふくん。俺を超えたとか抜かしちゃうんだ。たかだか隊長格を一人斃したぐらいで。

「ふむ、まあ調子に乗っている弟子を叩きのめすのも師匠の役目か。受けて立とう。」

正解を使い姿を変えた一護君はそのまま僕に話しかける。

「藤丸さんもあの斬魄刀使わねえのかよ。藍染の腕を吹き飛ばしたやつ。」

「くつくつく、一護君程度竜条丸で十分さ。閃け、竜条丸。」

「後悔する時間はねえからな! 『月牙天衝』」

飛んで来る月牙天衝×7断空をいくらか発動することですべて防ぐ。このままでは  
らちが明かないと思つた一護は突つ込んでくるが一護君が来る方向に向けて竜条丸の  
刃を置くように構える。

「うおっ! あぶね!」

一護は自ら刃に突つ込むという真似はせず身をひるがえし躲すが、藤丸の実力を見  
誤っていたと考えていたすべての作戦を破棄し、最大最強の火力を持つ虎糾絶衝を叩き  
込む事のみへと集中する。先ほどと同じく接近を試みた一護はこれまた先ほど同じ  
対処をした藤丸の刃を斬月で弾き左手をまつすぐ突き出した。

『 虎糾

突き出した左手は紫の鬼道を纏ったハイキックを喰らい空に霊圧でできた巨大な刃  
が放たれる。

「(くそっ! まだ!)」

振り下ろせば当たる。そう思考したときにはすでに眼前に拳が置かれていた。

「竜デコピン！」

その光景を見ていたすべての死神は思った。「うわ、痛そう」と。

「黒崎君大丈夫?!」

試合が終わった時に丁度来た織姫は一護の額を見て悲鳴を上げた。想い人の額の肉が抉れていたのだから当然と言えば当然なのだが。

「黒崎。いないと思っただらもう来ていたのか。」

「ム、何故寝ているんだ？」

「脳震盪、だな。まだくらくらする。」

恐ろしいダメージを与えられた脳はいまだ回道をかけている最中でありその重大なダメージは平衡感覚を麻痺させていた。なお加害者兼師匠は

「あ、ごめん一護君。最後まで見送りがかったけど、仕事があるからもう帰るね。これ次の師匠に会ったら渡して。」

帰った。

## 猫の手も借りたいほどのデスマーチ

二番隊での業務は昔とさほど変わりなく、なんなら立場や部下との距離感から仕事量は減った。大前田日光太郎右衛門美菖蒲介希千代副隊長は仕事をよくこなす俺はお気に入りになったらしく、ちよくちよく家に呼ばれるような間柄になり、やっと二番隊にもなじんできたと思っていたが、二番隊の重大な問題を見つけたのはそんなある日のことだった。

「失礼します副隊長。どうやら副隊長あての書類が何件かこちらに混ざってきていたらしくお持ちしました。」

副隊長の職務室に入るとそこには書類仕事をこなす大前田副隊長のすがたがあつた。そこで俺は不審に思った。現在の時刻は十五時、普段の大前で副隊長なら油煎餅をたべ昼休憩をしている時間にもかかわらずいまだ書類仕事をしており、しかもいまだに大量の書類を抱えている。

「藤丸か、そこに置いておいてくれ。」

指をさされたところに詰まれている書類を見ればそれは副隊長が処理せねばならぬ書類でありその高さはまるで一切手を付けていないようにも見える。

「副隊長、その書類は？」

「ん？ああ、これはいつものことだ。隊長が用事があるときは俺様がこつそりやってんだよ。隊長のサボリ癖にもまいっちまうぜ。なあ？」

大前田隊長の手に目をやればそれらはすべて隊長あての書類だった。権限が隊長にあるだけでやろうと思えば副隊長でも処理できる内容ではあるがだからと言って副隊長に書類を丸投げしていいわけではないのは碎蜂ちゃんもわかっているだろう。藤丸は激怒した。必ず、かの邪智暴虐の碎蜂をお仕置きせねばならぬと決意した。藤丸には大前田の気持ちはわからぬ。藤丸は、席官である。人を殺し家族とほのぼの暮らしてきた。けれども上司に対しては、人一倍に敏感であった。

………

………

………

「おお……夜一様の弟君か……お……大きくなって……こ、こづかいをやろう……！」

「ありがとう……ございます！」

核爆発並みの威力を持つ不発弾をなぜか部下に付けられ、大前田の言動にクナイ刺そうとすればパワハラか？という視線が飛んでくる。そんな碎蜂は日々の癒しを求め四楓院夕四郎咲宗に会いに来ていた。夕四郎との会話、夕四郎との修行、夕四郎の姿のす

べてが碎蜂のすきんだ心を癒す。「が、それは長く続かないのであった。」夕四郎は自身と碎蜂に一切気づかれず、また四楓院家の屋敷内に簡単に忍び込んだ不審者に警戒し、碎蜂は耳元で囁いた声のぬしに瞬間を使った拳を叩き込んだ。次の瞬間にはもう亀甲縛りであつたが。

「碎蜂さんをどうするつもりだ!」

「サボつてた仕事を消化させるつもりだが。」

不審者はさも当然化のように碎蜂を奪い去つて行つた。

……

……

……

「今日から二番隊に所属することになりました! 四楓院夕四郎咲宗です! よろしくお願  
いします!」

なぜだ?

碎蜂ちゃんを……お話をした結果、夕四郎君は俺を見張るために二番隊に入った

そうである。もしかして俺のことをヤバい奴か何かと勘違いしてらっしやる？

「大前田!!大前田っ!!そこにいるんだろう大前田!この縄を斬れ!!早くしろ!!私を殺したいのか!!」

藤丸はそつと戸を閉め鍵をかけた。

「殺される直前の叫び声上げてたけど隊長は大丈夫なのか?」

「前一回試したけど大丈夫だったし多分。そういえば今日副隊長の家に行っていていいですか?前回は会えなかった希の進さんに挨拶をしたんですけど…」

翌日解放した。

………

………

…

突如として日番谷隊長、乱菊副隊長とともに現世への派遣依頼が下りてきた。なぜ俺に。

「なんで日番谷隊長と乱菊副隊長が揃ってわざわざ現世へ?」

「うわっ!気持ち悪っ!ちよつとお兄さん。私たちに敬語なんて使わなくていいわよ。鳥肌立っちゃったじゃない。」



「おい、俺にはちやんと使えよ。本日零時五十分、瀨靈廷上空に現世の街が浮かび上がり、同時刻現世への霊波流入を補足。またその一分後に双方の通信が不能になった。」

「現世と尸魂界が融合を始めてるってこと？叫谷を介して？」

「そうだ。残る手段は現世に流入した霊波を調べるしかねえが、竜条丸があれば突発的な事態に危惧が無くても対処できる。と浦原から聞かされている。確かにお前は二番隊だが、中央四十六室での扱いとしては突発的な問題に対応するため、指揮系統は全隊長が持っているということを知っておけ。」

この前の叫谷への調査依頼はこれだったのか。まあ入れなかったらしいけど。

地獄長の導きにより安全に浦原商店につきこの前感動の別れをしたはずの一護君と会ったのだが、それは更なる問題の始まりでしかなかった。

「浦原さん。このかたは？」

「詩葉しよって言います。えっと、私もさつき連れてこられたばかりなんですけど……」

「詩葉しよさんは魂葬ソウゾウできない整ツボです。さつき黒崎さんが連れてきてくれたんですけど、直接尸魂界に連れて行ってもらおうと思ひまして。」

うんちよつと情報量が多いかな!?

## 劇場版で無能になる味方筆頭宮能藤丸

いくつかの情報が出そろったが今回の叫谷の件はおそらく甲冑をつけた奴らコンからの情報が行っているのではないかという結論になった。詩葉さんのことは本当に分からない。詩葉、という名前しか覚えてない状態は魂葬された整と同じ状態だが魂葬された魂魄は断界でなにかアクシデントが起こってブランクとなる以外はすべて流魂街へ送られる。しかし詩葉さんの過去を竜条丸で探ると一護君と出会う少し前より以前は一切見れないのだ。何か斬魄刀の特殊な能力に巻き込まれたと推測するしかないだろう。

三手に分かれたのち俺は仮面の軍勢と接触、協力を取り付けた。しかし捜査は難航した。すでに日は暮れ、もうそろそろ切り上げようかと思っていると、墓地に一人の少女とそれを襲う甲冑をきた色黒の大男を発見した。

「一緒に来てもらおう。われらが王、がんにゅう 厳龍様がお呼びだ。」

「厳龍？知らないよ、そんなやつ。」

「お前が知る必要はない。なんだってお前は「ジャイ」」

少女の後ろに現れた甲冑の仲間たちが言葉を遮る。

「迂闊にしゃべるなど言つたらう。」

「勝手に飛び出しやがつて。」

「はっはっ！すぐに捕まえるさ。」

少女は正面の大男に斬りかかるが男は武器でその刃を受け止めると拳を振りかぶつた。

「くすぐつたいぜ。」

「じゃあ痛めつけてやるよ。」

少女に拳が当たる直前拳の前に飛び出した藤丸はその拳を頭突きで破壊し怯んだ相手をヤクザキックで吹き飛ばした。

「おい、茜雫<sup>せんしな</sup>、何してんだ。あれ、藤丸さんもいたのか。奇遇だな。」

「一護君ちようどいいところに。コンが言つてたのつて多分こいつ等だろ？ちやつちやと片付けちやおうぜ。」

「腕がっ！腕がああああ！ゆるさん、ゆるさんぞおお「ジャイ、止めておけ。まだ時は満ちていない。」

そういつて甲冑の連中は黒い靄とともに消えてしまった。

「あ、やべっ、取り逃がした。…まあいいか（よくない）。それで、一護君はこの子とどんな関係があるの？」

「こいつは茜雫つつつて、まあ、見ての通り死神なんだ。おい、人に奢らせといてなに逃げ「逃げてなんかないっ！」じゃあなんだよ。」

「ここに、あたしん家のお墓あるんだ。」

「てめえ、いい加減なことを。」

「本当、憶えてるんだ。あたし。ぼんやりとだけど、生きてた時のこと。だからちよつと見に来ただけ。ウチも近くだったんだ。明日はちゃーんと手伝うよ、嘘じゃない。じゃ。」

帰ろうとした茜雫の肩を掴み一護は今襲われた奴のことをそのまま帰らせることができるかと言いつ放ちうちへ連れて帰った。俺の家？アイコンタクトで訴えはされたけどあのセリフから俺の家へ連れ込むのはなしだろ。

………

……

…

どうも、お前それ思念珠やろつてことで戦犯をかました男です。いやだつて記憶があるからつてそうとは限らないじゃん！柴田つて例もいるじゃん！霊だけに！まあ確定情報と化したのは竜条丸君のおかけなんですけどね。相手が雑魚過ぎて斬魄刀を解放しなかつたからわからなかつたつて言う何とも間抜けな落ちよ。

「一護君。中央四十六室よりの一級言令により、その子を引き渡してもらおうよ。」

一護君たち前には僕たち現世派遣組の三人とルキアちゃん、恋次君、そして浮竹隊長が並ぶ。

「何?。」

「一護、護廷十三隊、および隠密機動、鬼道衆、死神統学院、全ての名簿を調べたが茜雫という名はなかったそしてその子の斬魄刀みろくまる弥勒丸は百年ほど前、断界で持ち主とともに拘流に飲み込まれたと判明した。つまり、今存在するはずはないのだ。」

現実残酷だな。ていうかこれ俺が転生しなければ発生するはずがない問題だったのでは?もしかして元凶俺か?

「ちよつと待つてよ。何いつてるの?私は死神「んじや、お前いつ現世に来たんだよ。」

「それは…二日前、あの川の土手で目が覚めて、でも!自分の名前のはつきり憶えてるし。あの川は、子供の頃からずっと!……どうして?私は!一人なのに!」

「ほおら、いろんな記憶が混ざってんだろ?」

恋次君は本当に会話がへたくそだなあ。その言い方は追い詰めるみたいになって一護君を敵に回すかもしれないからよくないっての。

「信じられないことだが、君たちが探している記憶の集合体、思念珠は、君だ。」

茜雫ちゃんは頭を抱えて取り乱し、そこに俺たちが追撃を入れる。うーんこのぐう

畜。

「叫谷が発生しておよそ二十四時間。尸魂界は首謀者巖龍の目的、世界破壊。そして、思念珠をその最重要要素と結論ずけた。：思念珠、茜雫。尸魂界はこれより、お前を拘束する！」

冬獅郎君の合図により俺たちは一斉に構えるが一護君が庇うように前に出る。

「待てよ。納得いかねえなあ。こいつが何であろうが、今ここにいることに変わりはねえ。怒ったり、喜んだり、傷つくことに変わりはねえだろ。それを無視して拘束だと！それじゃあ、奴らと同じじゃねえか。茜雫を渡すわけにはいかねえ。いくら藤丸さんだろうとな。」

「縛道の六十一『六杖光牢（りくじようこうろう）』」

即座に茜雫を捕縛し逃げられないようにしたうえ一護君を叩きのめそうとしたところで上空から甲冑の軍団が降ってきた。

「破道の三十三『蒼火墜』！」

手に向けて蒼火墜を放つが当たったのはたった一人だけだった。避けられたのではない。届かない。二重にかけられた限定霊印が俺の霊力を席官程度まで封じ込めたせいだ。戦いづらいつたらありやしない。ロボットアームみたいなものが地面と接する直前に開き地面に爆発を起こす。それを見た俺は六杖光牢を解除し一護君に声をかけ

る。

「一護君！茜雫ちゃんを奪われるな！意地でも守り切れ！」

『瞬間・閃光蒼幻』  
せんこうそうげん

周囲に轟音をまき散らしながら俺の体は淡い光を纏い死覇装の背中部分と袖が弾けとぶ。

「あたしは、死神だ！夕闇に誘え『弥勒丸』！」

おい嘘やん！あいつ明らかにラスボスっぽいのに突っ込んでいったんだけど！

白髪の男は弥勒丸の攻撃に対しカウンターを狙っていることを見抜いた藤丸は直前で茜雫の首根っこを掴み後ろに引き寄せる。拳は茜雫ではなく藤丸の腹に刺さり、意識が飛びそうになる。

「（こいつら、ブランクの力を奪って強くなってるのか。だが！）無問題！」

どれだけ強化しようと更木剣八や山本元柳斎重國と比べてしまえば雑魚でしかない。霊圧二十五分の一が何するものぞ。

「やはりその文様！戸魂界を追われた元重権貴族・龍堂寺家の物！」

「さあ、知らぬな。われは闇の一族、ダークワン。小僧、貴様に興味はない。さつさとその娘をよこせ。」

「ふっ、アハハハハッハッハ！いい歳してダークワンとか頭沸いてんじゃねえのか!?





感動も何もかもぶっ壊してでも生きていてほしい人だっているんだ。

「黒崎さんも酷いけどでしたが、藤丸さんは重傷です。今から井上さんの能力で治したとして戦いに復帰できるかどうかはわかりません。」

熱量はなく、ただ爆風の威力のみの爆発であったが、それは下半身を消し飛ばし、周囲に臓物をまき散らし、藤丸の命は風前の灯火だった。藤丸の圧倒的靈力がかろうじてギリギリ藤丸の命をつなぎとめているが、生物的には死んでもおかしくない状況だ。面の皮も消し飛んだその姿に織姫たちは吐き気を催し、ルキアでさえ発狂しかけた。

「ただ、私たちに止まっている時間はありません。茜雫さんが来た入り口を探してすぐさまにでも動かなければ、世界は滅亡します。」

どれだけ心配しようとも、一護たちにできることはその入り口を探すことだけだった。ルキアとともに境内も、墓地も、ショッピングモールも探したが見当たらない。そんな時ふと、茜雫が観覧車に乗りたいと言っていたことを思い出した。観覧車の上に乗ってみる景色は壮大で、夕日に照らされた川がキラキラと光を反射している。そんな中、川にかかっている橋の近くに明らかに太陽の反射とは違う白い部分があった。

「あそこ、川の中！」

一護とルキアが近づいてみればそこには見たこともない景色が広がっていた。

「行ける！ルキア、浦原さんに連絡してくれ。」

「待て一護！一人では「行くんだ！俺は絶対あいつを助け出す。」

自身を鼓舞するための雄たけびを上げながらその穴に向かって落下する。その世界の中心は空がまるで吸い込まれるように落ちてきていた。茜雫に集まろうとしていたブランクを断ち一護は呼び掛ける。

「茜雫ああああ!!!今行く！」

一護は卍解し、最高速度で茜雫へと向かうがそこへ巖龍が立ちふさがる。

「またやられに来たのか？」

「茜雫を返せ！」

ブランクと甲冑の者たちが一護を囲み逃げられないよう場を整えていく。

「せっかく思念珠として覚醒させようとして置いたものをお前のせいで人間的な恐怖と苦しみを味わうことになるのだ。」

「一護おー！つなに!?!やだ!?!やだよおー！」

茜雫にブランクたちが群がりまるで捕食するかのように取り込んでいく。

「てめえら!邪魔だああああああ!!!」

近くの橋から大穴を浦原達は集まって見下ろしていた。

「どうでした？」

「ダメだ。尸魂界は鬼道砲を使用して、叫谷を空間ごと消滅させるきだ。」

「そんなことしたら、黒崎君は！」

「そんなことあさせねえさ。鬼道砲が発射されるまでに、俺たちが行ってかたをつける。」

「だけど。」

「あんずるな、何とかする。」

しかし、副隊長一人と平隊士が行ったところでできることは限られる。言葉でどう言おうと心が折れかかっている中、ふと声がかかった。

「無理だな、てめえらだけじゃ。すでに人数はそろえた。決着をつけるぜ。」

「あたしも行くわよ！」

そうして日番谷冬獅郎、松本乱菊、朽木ルキア、阿散井恋次は大穴に飛び込んだ。

一護の卍解をもってしても簡単に倒すことはできず、じりじりと時間だけが過ぎてゆく。

「くそーこのままじゃ……」

茜雫を救うことなどできない。そんな八方塞と言つてもいい状況に希望が見えた。

「ハーッハッハッハッ！」

それは空から降つてきて地面を割り敵を蹴散らした。

「そこ、あぶねえぜ。」

更木剣八である。さらには碎蜂、弓親、一角、イツル、修平、鉄左衛門などそうそうたる顔触れが一護の援軍として来ていた。

「早く行け！黒崎！」

………

………

………

敵をすべて無視して駆ける。そうすれば一護に追いつけるものなどいず、一護はそのままブランクの集合体が樹木のように折り重なった場所まで来ていた。

「茜雫ああああああ!!！」

「まだ思念珠を救うことができると思つているのか？」

茜雫に聞こえるような声を張り上げるが、帰つてきたのは巖龍の声だけであった。

「当たり前だ！茜雫は俺が助け出す!!！」

「もう遅い。思念珠はすでに叫谷との融合を始めている。もう誰も止めることなどできない。」

「うるせえ！待ってろ茜雫！もうすぐここから連れ出してやる！」  
「まだわかっていないようだな。無駄だということが。」

大量のブランクが一護の正面に現れ一斉に襲い掛かってくる。

『月牙天衝』

が一護にそんなものがきくわけもなく、月牙天衝は全てのブランクを消し飛ばし、厳龍へと傷をつけた。

「ようやく出やがったなあ！お前を倒して茜雫を助け出す！」

一護は白哉と戦った時よりも速く動き、月牙天衝もその数を増している。だが、それに負けず劣らず厳龍も月牙天衝を躲しては剣先からブランクを放ち一護を拘束しようとする。ブランクの攻撃ごと吹き飛ばすために月牙を撃とうとしたその時、地面から生えたブランクが足をにまわりつき背後を厳龍に取られてしまう。正面に撃とうとした月牙をとっさに地面に放ち足場を崩すことで逃げるが追尾式のブランクを複数本時間差で放たれ、全てを迎撃できずに一本のブランクが一護を大樹に拘束した。

「千年余り、われら一族は断界の隙間に巣くい、卑しきものに身をやつし耐えてきた。われらがその辛酸をなめても今日まで生きてきたのは憎き尸魂界の崩壊を果たすため。」

その悲願が、今叶おうとしているのだ。その邪魔をさせはしない！」

複数本のナイフがなすすべもなく一護に突き刺さる。

「どうしてそんなに必死になる？ 思念珠などただの記憶の集合体。生き終えた残骸にすぎぬものを。」

「そんなことはねえ！」

拘束から一本の手をだし腹に刺さった刃を引き抜きながら一護は言葉を続ける。

「茜雫は今、ここにいます！ 不安で、怖くて助けを求めている！ 俺はそれを助けるって！ 俺の魂に誓ったんだ！」

「今しかないよ！ 今出て行かなかったら一護君のピンチなんてしばらく訪れないとしてもなくなったとしても使い方わからなくて詰んじゃうよ！」

「早く行け。弟がピンチなのだろう。」

「い、今か!? 今行くしかないのか!!? シン、！ 『そうだ一護、力を求めろ！ 顔に手を当てて俺を呼び出すんだ!』」

『一護、力を求めろ！ 顔に手を当てて俺を呼び出すんだ!』

声が聞こえる。あの修行で幾度となく聞いてきた、白い俺の声。もしかしたらこの声

に従えば後悔するかもしれない。何か悪いものかもしれない。でも、それでも今やらなければ絶対後悔する！

そうして一護は額に手を当てた。虚の仮面が顔を覆い自身の霊圧が跳ね上がるのを感じる。

「うおおおおお!!!」

黒い霊圧は一護を拘束していたブランクを破壊し茜雫と共鳴を起こす。

「一護おおおおお!!!」

断界は崩れ始め無数のブランクが一護を襲う。しかしそれらは掠ることすらせず龍と再度対面した一護は刀を振るった。

「行くぞおー!」

「来おい!」

『『月牙天衝』』

黒い月牙はブランクごと敵龍を呑み込んだ。

「ずいぶんおとなしくしてるじゃねえか。いつもの元気はどうした。」

「ふふつ、うつせえな。」

……

……

……

「黒崎やったな!」「おつかれさまです。やりましたね」「ム。」「見事。」「よかったあ。みんな無事で!」

「ありがとな。ルキア、恋次。」

一人の女の子を救ったヒーローの物語は幸せな結末で終わる。はずだった。

「茜雫、そういや、お前のリボン…」

「一護…」

いまだ尸魂界と現世の接近が止まらないことに皆も気づき始めた。

「どういうことだ?」

「とまらねえだ?!」

茜雫と一護は上空へと上がりその様子を見る。

「一護…怖いよ。」

「茜雫…?」

「でも…でもね?させないよ。こんなに楽しい世界なのに。こんなに…たくさんの人が



住んでいるのに。こんなに……一護が！生きているのに！大丈夫、ブランクたちは、まだ私の近くにいるの。そのエネルギーを一度に放出させれば、二つの世界を、きつと元に戻せる。世界がなくなったら、きつと一護も消えちゃうから、そんなの……嫌だよ。」

そういつて茜雫は笑った。まるでこれで最後かのように。

「止めろ……これからお前は私より……一護が死ぬのがやなんだよ！」

「えーと、感動のシーンのところ悪いんですけど君たちは死なないです。はい。」

二人が接近に気づかなかつたのは、藤丸が霊圧を消していたからではない。その霊圧が並の死神一人分しかなかったからだ。

白きよいしょっ！と二人を浦原のもとへ投げる。テッサイデスキヤツチで受け止められる。一護はその時、藤丸の額に脂汗がにじみ手が震えていることに気づいた。

「藤丸さん！」

「限定解除×七、蘇よみがえれれ 不滅王フエニイチエ限定解除。」

霊圧が隊長格の二倍ほどになった状態で帰刃を行いさらに限定解除するとひび割れていた鋼皮が更に音を立てて割れ初め、ぽろぽろと零れていく、そうして中から出てきたのは黒い炎が藤丸の形をしたものだった。一護が絶句していると藤丸から何か飛んで来る。とつてみればそれは藤丸の頬についていた仮面の名残だった。

「それ死んでも持つててよ！マジでなくすなよ!？」

いったいこれに何の意味があるのか、本当に大丈夫なのか聞きたかったがその前に結界が閉じ界が隔たれてしまう。藤丸はそれを見届けると、大穴に飛び込んだ。

「ふうくくくく」

全限定霊印解除

世界が爆ぜた。

もしもあなたがいなくなつたとして

大穴は消えてなくなり、現世と尸魂界の衝突は免れた。

「やった！これで本当に全部終わったんだね！「井上。」…何？黒崎君。」

皆が喜びにあふれる中、一護と冬獅郎、浮竹、鉄斎の表情は晴れない。死神たちも徐々  
にその理由に勘づき始めた。

「藤丸さんは…何処へ行ったのだ？」

いつまでたつても藤丸が戻つてこない。霊圧を探つても藤丸の霊圧の欠片すら  
見つかからない。

「藤丸さんは、黒崎さん達が間に合わなかつた場合に尸魂界と現世の両方から結界を  
はつてその中で卍解をすることで被害を極力抑えた状態で双方を引き離す策を練つて  
いました。そのために藤丸さんは叫谷に入らざるを得ませんでした、双方を引き離し  
たことにより入口は消失しました。」

「…っ！それじゃあ！藤丸さんはもう帰つてこれねえつてことかよっ!!」

「いえ、それは違います。藤丸さんの卍解は周囲の縁や因果を操作することで自身の力  
とする能力です。しかしそれによつて魂魄の強度が上がるわけではない。つまり藤丸

さんが限定解除をしたときには自身の霊圧を押し潰されて、もうすでに……」

「……たわけっ！ そのようなことがあるか。やっとな……やっとなまた会えたというのに……」

茜雫をめぐるその事件は一人の男の死亡とともに幕を閉じた。

一護の精神世界の中で三人は今回の事件を映画でも見るかのような面持ちで過ごしていた。まああまりの大雨のせいで各々の住処が浸水して三人とも合流する羽目になつたわけだが。

「で、実際死んだのか？ お前は……？」

「いやあ……、どうだろ？ 俺もこの事件知らねえし竜条丸も持つてねえから何とも言えんけど、でも今回この事件に関わつた人物全員に俺は会つてるんだよな。だとしたら竜条丸が読み間違える事なんてありえねえ。相手が斬魄刀を使つてたならともかくブランクをエネルギーとして使つてたからそこには正しい過程と結果が存在するはずだ。それで選んだ最善ルートが自滅はありえないでしょ。あつた直後の茜雫にわざわざ命かけるとは思えないし……不滅王か？ でも別に不滅なわけじゃないしな。ごめんちゃん一、わっかんねえわ。」

「お前ちゃん一って呼ぶのそろそろやめろよ。斬月って呼べ。」

「いやそれオッサンはどうすんだよ。」

「オッサンでいいじゃねえか！」

「とにもかくにも一護が悲しんでいることが問題だ。なぜなら一護が悲しんでいるからだ。」

「とうとう頭沸いたんじゃねえのか？ 一番問題なのは今回の件で一護が戦わなくなるのとだろうが！」

「いや俺が死んだことが一番問題でしょっ！ え、これ俺どうすんの?!？」

女じゃなくとも三人集まれば姦しく、しかし文殊の知恵など發揮しないまま夜は過ぎていった。

「一護…私が…」

「お前のせいじゃねえよ。藤丸さんは、俺が弱かったから死んだんだ。」

家に帰ってから一護は自責の念に襲われていた。もし自分もつと強かったら、茜雫を奪われることもなかったかもしれない。茜雫をもつと早く助け出せたかもしれない。そう思っても全ては後の祭り、一護はさらに自信を責める。そんな一護を見て茜雫は顔を歪め、遊子、夏梨、一心、真咲も一護のただならぬ雰囲気の声をかけてやることができず、唯一声をかけてくるのは仮面の軍勢の平子信二だけだった。しかし、ある日を境に自体は急変する。

……

……

…

「ぶはア〜！面付いてたところに何度か来たが相変わらずつまんねえとこだなあオイ！」

「文句を垂れるな。俺は一人でいいと言った筈だ。来たがったのはお前だぞヤミー。」  
空座町に二体の破面が出現した。

巨体の破面は周囲の魂魄をあらゆるかた吸い尽くし、その中でたった一人生き残った少女に近づく。

「な、何が…起きたんだよ、一体…？宮原、工藤さん、みんな…死んでるの？何…なんだ…あいつら!?!」

「俺の『魂吸』<sup>ゴクスイ</sup>で魂が抜けねえってことは、出てるにしろ隠れてるにしろちったあ魂魄の力があるってこった！なア!?!ウルキオラ!!こいつか!?!」

「よく見ろバカ、お前が近付いただけで魂が潰れかけているだろう。ゴミの方だ。」  
「チツ、んじやあ魂吸で生き残ったのはたまたまかよ。くだらねえ。」

その返答を聞くと巨体の破面は少女に興味をなくしたかのような視線を送り足を振りかぶった。

「じゃあな。」

適当に、しかし一切の慈悲なく叩きつけられた足は少女に届くことはなく、浅黒い肌をした青年が受け止めた。

「井上、話した通り…有沢を連れて下がっていてくれ…」

「うん、無理しないでね。」

「ウルキオラ!!こいつかー!?!」

「…ヤミー、お前もうちよつと探查回路を鍛えて自分で判断できるようになれ。一目見ればわかるだろう。そいつもゴミだ。」

「そうかい!」

その言葉に青年…茶渡泰虎は内心で謝った。泰虎の変質した右腕で受け止めたというのに衝撃が体の芯にまで染みるように伝わってくる。たとえ守りを捨てたとしても自らの全力の一撃を叩き込まなければ勝機はないと悟った泰虎は相手が喋って油断している間に靈力を噴射させすべての力を込めたありったけの正拳突きを放つ。その拳

から放たれた一撃は巨体の破面へと直撃し、余波で木々をなぎ倒していった。

織姫は竜貴を運びながらその戦闘を見ていた。並の死神では防御ごと消し飛ばされそうな拳を体で受け、掴んだ泰虎の腕を握りつぶす破面の姿、倒れ行く泰虎、その光景はまさしく絶望の象徴だった。

「ウールキーオラ~~~~あ

この女も、ゴミか？



ウルキオラつてもしかしてヤミーのこと考えてここ引いたんだとしたらもしかしてこいつ凄いエモエモのエモだったのかもしれないと転生した俺はふとそんなことを

( r y

「…何だ？こいつ…」

ヤミーの疑問は至極当然の物であった。虫でも潰すかのように突き出した人差し指は織姫という少女が形成した盾により防がれたのだ。いくら手を抜いていたとはいえそもそも霊圧の差が隔絶しているためそんなことは本来ならあり得ない。

千切れた肉片や零れ落ちた血が増えるのではなく巻き戻るように肉体の損傷を回復していく事からその能力が非常に有用なことを悟った。

「どうするよウルキオラ？こいつ珍しい術使うから手足もいで藍染さんに持って帰るか？」

「いや……そうだな、そうしよう。足はもいでも構わん。だが手は保留だ。胴体から上

はあまり傷つけるな。」

「あいよ。」

先ほどの一撃とは違う腕全体の攻撃を織姫が防ぐ術はない。しかしまたしてもその手は一本の剣に止められ織姫に触れることはなかった。

その死神は剣を握って一年もたっていない若造だった。にもかかわらず始解を会得しさらに卍解まで修得、隊長格にも真正面から打ち勝つ強さを有していた。

「何だてめえは…!？」

黒崎一護。死神代行である。

「黒崎くん」

「悪い、遅くなった。井上。茜雫、竜貴と井上とチャド連れて下がっててくれ。」

「一護、無茶はしないでよ。」

「…ごめん…ごめんね黒崎君…あたしが、あたしがもつと強かったら…」

「…謝んねーでくれ井上。心配すんな、

俺がこいつらを…倒して終わりだ!!卍解

『天鎖斬月』

「スエルテ!!!探す手間が省けたってわけだ!!」

ヤミーは肩を引き拳を振るう前動作をした。だがその拳がいつまでも振り下ろされることはない。

何か重いものが落ちる音と共にやみは自らの右腕がすでに落とされていたことを理解する。

「クソ…餓鬼があ…っ!!」

探査回路が下手なヤミーですらわかる圧倒的戦闘力の差は腰にある斬魄刀を抜くには十分な判断材料となる。

「いぐぜ、」

『虎糾絶衝』

しかしそれすらも許さない。ヤミーがどれだけ先に思考し、それを行動に移そうとしたところですでに一護は行動し終えている。

「ヤミー交代だ。」

ウルキオラは斬魄刀がおられた時点でヤミーの勝利はないことを確信し暴れないようにその腹を殴りつけた。

「なに、しやがる…」

「( )からは俺がやる。」

あのデカ物が斬魄刀に手をかけた瞬間全身が泡立ったような感覚に陥ったから即座に潰したが、小せえほうもやべえ。やばっ

「死ね。」

先ほどまでたっていた場所には奴の手刀が放たれていた。危なかった！

「虚閃」

後方に下がった俺に対してさらに虚閃で追撃。できればもう一度回避したいが俺の後ろには井上たちがいる。迎撃しかねえ！

月牙天衝で相手の虚閃を斬り裂きつつそのまま攻勢に移ろうとすれば視界にあいつがいねえ。上か、後ろか。

ヤケクソ気味にはなった虎糾絶衝が空を切る。それと同時に頭を強く殴られ意識が酩酊した。

「啼け『紅姫』」

更なる追撃に構えた俺だったが二度目の攻撃はこず、あいつはいつの間にかデカ物の前に立ち飛んで来る赤い刃を素手で切り払っていた。

「どおーもー♡遅くなっちゃってスイマセーン。黒崎サン♪」

俺、いつか卯ノ花隊長に赤ちゃんプレイしてもらおうんだ！

副隊長以下が見れば明らかに死闘であろうと感じるその戦闘も当の本人たちからすれば自分たちがどれだけ失敗しないかの耐久レースをやっているだけの予定調和でしかなかった。あたりの人間はすべてヤミーの魂吸で死んでいるとはいえ周囲の人間にこれ以上の被害を出すのは避けたいという両陣営の思惑が噛み合ったがゆえ。

ウルキオラ・シフアーは考える。この戦いに明確な勝利はない。ヤミーが半ば弱点となってしまうているこの状況で無理に黒崎一護を殺そうとするのは非常にリスク在る行為だ。周囲に被害を出せないとはいえ黒崎一護というそこそこの駒とヤミー・リヤルゴという切り札を交換するのはあまりにも愚策であろう。

浦原喜助は思案する。このまま戦闘が長引けば自らの切り札（287通りの一つ）を切らなければならなくなるだろう。問題は何を選んででも一護との関係がやや悪化しそうなものばかりであることだ。先ほどから一護は攻撃の余波で死体が傷つかないよう月牙で相殺したり躲さずに刀で受け止めている。もしもこちらの行動で損傷すれば信用を失うことはないだろうがやはり好感度が下がるのは避けられないだろう。いつそ

自らが汚れ役に回り夜一にフオローしてもらおうということも考えたが繊細な一護にあまり雑念を抱かせることはしたくない。という結論からの戦闘続行である。たつた一つ、あの子がその程度で死ぬはずがないという浦原には珍しい希望的観測を交えて。

かくして戦闘終了の鐘を持ってきたのは一人の少女だった。

「二兄!」

「…!?何で夏梨がここにっ!」

いままで片側にしかなかった明確な弱点がこのタイミングで出現する。ウルキオラシファアはその出現に間髪入れずに虚弾を放ち、防いだ一護の脳天に踵を落とそうとし、それを相殺するために放った夜一の回し蹴りと激突した。しかしヤミーへの攻撃ですでに骨に罅が入っていた夜一にはその攻撃は荷が重すぎた。夜一は何とかその蹴りをそらしたものの左足は完全に折れてしまい実質的な戦闘離脱である。

「っ月牙…」

一護はその斬撃をウルキオラに飛ばそうとするがウルキオラは振り上げた刀を素手でつかみ一護の頭を爪先が貫くかに思えた。

その爪先はまるでガラスに止められたかのように空間に罅を入れ止まる。それと同じに夏梨がから放たれる膨大な霊圧にウルキオラは警戒し後方に飛びヤミーを庇うように立った。

夏梨の腕に：否、夏梨の抱えた白い陶磁器の破片のようなものにどこからともなく灰が集まる。それは夏梨の腕の中で赤子でも形作るように繋がっていき、中が全て見えなくなつた時にそれは罅が入り始めた。

パキパキと音を立てながらもその白いからはほとんど落ちることはなく、顔に当たるであろう部分から数欠片落ちてそれは無機質な生物となつた。

「…あくおうのななちゆうなな『ちえんちえいううら』」

まだ舌足らずな言葉を紡いだ赤子は

☒アランカル、帰れ。いくら夜一さんが手負いだろうと4対1、そちらの勝ち目はない。俺たちも、まあこれ以上はやりあいたくないし：引き分け、そう引き分けにしよう。☒直接脳内に語り掛けてきた。

「貴様が宮能藤丸か、ずいぶんと珍妙な姿だがその姿で俺に勝てると思つてるのか？」

☒どうだろうな。先ほどお前が蹴つた『断空』は俺が詠唱したものだけど現にお前に

は割れなかつただろう? ☒

「…帰るぞヤミー。」

ウルキオラは空を指でつつき、その空間をこじ開け虚圏へと帰還していった。

「ねえ一兄、話してよ。さっきのやつらつて何なの? この子は何なの? 教えてよ。言ってくれなきや…わかんないよ。」

一兄、ねえ、なんか言つてよ。話してよ。家族だろ!

「…俺もわかんねえ。いって!」

頭から血を流している一兄を思わず殴りつけてしまったあたしは悪くない。

「はいはい。とりあえずお二人とも家に帰りましょうか。話はその赤ちゃんからあとで聞いてください。」



## 武勇伝武勇伝、武勇伝伝ででんでん！

生まれなおした俺はすくすくと成長を始めた。夏梨ちゃんに離乳食（浦原商店）を作ってもらい、一護君に体を洗ってもらい、夏梨ちゃんに本の読み聞かせをもらい、茜雫ちゃんに散歩に連れてってもらい、夏梨ちゃんとボール遊びをして、夏梨ちゃんにご飯を食べ、一護君の修行に付き合い、夏梨ちゃんとサッカーをして、茜雫ちゃんに一護君の話をして、夏梨ちゃんと茶渡君の話をして、夏梨ちゃんと、夏梨ちゃんと、夏梨ちゃんと……

「なんか最近私に育児押し付けてるよな？」

「いや、それはその、なんというか、忙しかったというか。」

小学3年生ほどまで成長したころに恐ろしい修羅場が勃発した。兄に対して詰め寄る妹、しかも話の内容が育児に関して、はたから見れば間違いなく事案である。

「一兄が死神代行になって忙しいことはわかってるよ？でも藤丸の面倒もしっかり見てよ。」

「夏梨ちゃん。そんなに言わなくてもいいんじゃない？本人も反省してるようだし。」

「藤丸はそれでいいの、これ育児放棄だよ。一兄最っ低！」

夏梨ちゃんの 会心の一撃! 一護君 の メンタル は 死んだ !

「えっと、一護も治安維持のために頑張つててき、許してあげてくれないかな?」

「二兄は茜雫ちゃんっていう美人な彼女作つて竜貴ちゃんにちゅーしてあの茶髪の女の子も誑し込んでるんだ。一兄のスケベ。」

夏梨ちゃん の 死体蹴り! 一護君 の HP は 既に無い !

子どもつて本当に容赦ないよね。4日間山に食料取りに行つて帰つた時にまつ梨に臭いつて言われた日は死ぬほど泣いたわ。ちよつと前まであれくらい臭くても気にしなかつたのに。一護君は何でもないように取り繕つて家を出た。夏梨ちゃんの前では泣いてなかつたけど背中から哀愁漂つてて悲しくなつたわ。

学校に行つた一護君と夏梨ちゃんを学校に見送り、茜雫ちゃんも虚退治に出向いてしまった。こうなると僕ができることなど大したことがなく竜条丸をつかいひたすら未来を見続けている。あまりにも遠い未来はあつたことのない人の影響で当たらないのだがそれでも見る価値はあるのだ。

黒崎一護は数多の女子とフラグを立てている。そんな男の数多の未来がたつた一人の女の子とくつつくだけなわけもなく、当然ほかの女の子のこともくつつく未来がある。そんな黒崎一護を主人公としたギャルゲーを楽しんでいるのだ。真咲さんが生きています。いまでも一護君は母性に飢えているため女の子のおっぱいは大きいほうが好きらしい

がわずかな未来ではルキアちゃんと少しの期間セフレになったり竜貴ちゃんと結婚するルートがないわけでもない。原作ヒロインこと織姫ちゃんルート総数は非常に多く一護君の嫁に成る可能性も上から二番目に高い。：ほんとごめん織姫ちゃん。ちよつと茜雫ちゃん強すぎだよ。

なかでも一番インパクトが強かったのはお互いのパートナーを死なせた乱菊ちゃんと一護君の慰めツクスだった。興奮とかの前に辛すぎて吐くかと思つたわ。絶対死なせねえ。まあその未来で一番最初に死ぬの俺なんですけどね。

「えっ！お兄さんの子供!？」

乱菊ちゃんオツスオツス。とりあえず天井裏に潜むのはやめような。窓も開けてあげよう。

「っ！あいつ、現世にこんな置き土産しやがって。とりあえず尸魂界に連れ帰るか。」

「本人です。」

「兄さん。なかなか帰ってこないから心配してたけど元気そうね。」

「父様っ！このような姿になられて、おいたわしや。」

君常識人みたいな顔して窓から入ってきてるけど普通は玄関から入ってくるんだよ。ファアッ!?まつ梨と柳もいるやんけ!?おうおう柳や。こっちに来て父を抱っこしておくれ。うむ、めんこいのう。

「だから言ったじゃねえか。隊長と真正面から斬りあつてぶつ倒すような化け物がそれぐらいで死ぬわけねえって。」

「僕もおおむね一角に同意かな。」

「?生きてたんすか!?!ゴキブリ並みにしぶといっすね。」

「阿散井副隊長ナチュラル失礼です、それで上位席官や隊長格がこんな勢ぞろいでなんでまたこつちに。」

「黒崎の護衛と破面の情報共有のためにしばらく俺らが現世に留まることになったんだ。」

「ふむ、ほかにもいろいろ聞きたいことはあるがとりあえず一護君が帰ってきてからにするか。……ところで君達寢床は?」

「え、ここに泊まるけど。」「適当にぶらつく。」「右に同じく。」「一角と同じ。」「浦原さんところに行つてみる。」

「乱菊ちゃんも冬獅郎君がちよつと問題あるむ、皆隠れていると言つていたがすでに出てきておるのか。?!藤丸さん?!生きておったのか?!」

そこからはルキザちゃんが耐えきれず泣いたり夏梨ちゃんか乱入したり一角に座布団にされてたコンがぶちぎれたり一護君が乱菊ちゃんのおっぱいに誘惑されたりそれを茜雫ちゃんと夏梨ちゃんが冷めた目で見たりとまともな話し合いにはならずそもそ

も一護君の部屋に12人+1匹は狭すぎるので夏梨ちゃんを除いたメンバーは俺の家に移動することになった。

久々に帰った家の庭はしっかりと芝が整えられており玄関に入れば一人の義骸が僕たちを出迎えた。

「おかえりなさいませびよん。藤丸様。」

「藤丸さんはチャツピーを買えたのか。私もチャツピーを買おうと思ったのだが生憎売り切れていてな。その時にコンを……」

その義骸に入ってる義魂丸を当てたルキアちゃんは思い出を懐かしむようにその日のことを語りだした。僕の家にいるこの子はやはりルキアちゃんも知ってるチャツピーなのだ。僕と一緒に切磋琢磨した改造魂魄のチャツピーではないことは俺も重々承知していたが、それでもこの瞬間に彼女がいなくなったことを突き付けられたような気がしてほんの少し悲しくなったのは秘密だ。

「破面の成体が予想より早く現世に送り込まれたから、それに対抗するために急遽俺たちが派遣されたんだ。」



のはたぶんそこではないので強引に話を戻す。

「日番谷隊長。まだ重要事項が残っているのでは？」

「そうだな、破面は虚の仮面を剥ぐことで生まれるが、その辺の虚の面を剥いだところで大したもんはできやしねえ。本気で尸魂界に戦争を仕掛けるつもりなら、破面化の対象は自ずと大虚以上に限られる。」

「大虚以上……？ 何だよ、まるで大虚よりまだ上がいるみてえな言い方じゃねえか。」

「ああ……いや、正確には、大虚の中にさらに三つの階級が存在するんだ。一つ目はギリアン、大虚の中の最下層で人間に例えるなら雑兵に近い。数も多くすべて同じ姿をしているのが特徴で尸魂界で一般に大虚として教本に乗せられているのはこのタイプだ。お前が尸魂界に来る少し前に追い払ったのはこのギリアンだな。こいつは巨大だが動きは緩慢で知能は獣並、隊長クラスなら倒すのに問題はない。問題は次からだ。」

二つ目はアジューカーカス、ギリアンよりもギリアンよりもやや小さく数も少ないが知能が高く戦闘力ではギリアンの数倍。数多くのギリアンをまとめる存在だ。

そして三つ目がヴァストローデ、最上級の大虚大きさとしては大虚として極めて小型で人間と同程度、数は極めて少なく虚圏全域に数体しかいないと言われているが、ハッキリ言う。

このヴァストローデ級の戦闘能力は隊長格より上だ。

そして破面化によって大虚共が手に入れる力は未知数だが、隊長格が3人抜けそれがそのまま大虚共の上についてた今、これだけは言える。

もし現時点で藍染のもとにこのヴァストローデ級が十体以上いたら、尸魂界は終わりだ。」

「…マジかよ。」

「尸魂界は過去にヴァストローデ級のアランカルが襲われたことがある。一回目は護廷十三隊は文字通り半壊の上そいつを取り逃し、アジューカスなどを率いて再度襲ってきた。そのときは一時的に4割の死神が戦闘不能、決戦兵器熾水鏡を用いて山本総隊長含めた6人の隊長と三席一人、十六席一人の少数精鋭でアルトウ口を打倒、死者は2割5分ほどだ。当時三席だった男は作戦立案や囷をこなし八面六臂の活躍を見せたが奴にとどめを刺すために自爆特攻をかまし7年間生死の境を彷徨った。なあ藤丸。」

「いえーい。当時三席でありながら八面六臂の活躍を見せた男でーす。」

実は最強系なろう主人公っていつつもこんな気持ちいい視線浴びてんのか。いいなあ。俺もいつつもこんな視線浴びながら部下に命令して超絶天才軍師として崇められながら家族とイチャイチャしたい。

「すごいです父様っ！でもなんで父様と十六席の人が戦場に？」

「当時十六席だった女はまつ梨母様だよ。俺とまつ梨は最終決戦前にアルトウ口からむ



ちやくちやにヘイト買つてたから熾水鏡の使用者に攻撃が向かないように囷として配置されたんだ。

まあ当時から俺は副隊長と比べても頭一つ抜けてたし、まつ梨は斬術だけ見れば隊長と遜色なかつたからな。」

「父様も母様もすごいです〜！」

は〜〜かわいすぎかよ。マヂ天使。

「その八面六臂の活躍をしたお兄さんから見て今回一護を襲つたやつはその破面と比べてどうだった？」

「アルトウ口と比べたらそりゃ弱いけど、まあウルキオラって呼ばれてた小さい方は最上級大虚だろうな。詠唱ありの俺の断空を蹴り一発で罅いれてたし多分やろうと思えば二発で破られてたと思う。」

「…なあ柳、その断空つてのに罅入れるのってどんだけヤバいんだ？」

「断空は八十番台の鬼道で、鬼道は九十番台が卅解に匹敵すると言われています。だからその破面は父様の卅解一步手前を二発で碎けるといふことです。」

「一護の師匠って聞いたときからだいたいぶヤバそうなのはわかつてたけど、あの人隊長格と肩並べるぐらい強いのでは。」

一護君にこの辺も知識も叩き込めればよかつたなあ。まあ時間もないし無理か。

.....

.....

.....

「んで、お前から現世にいるんだろ?どこ止まるんだよ。」

「恋次たちはどっか他行くって、私は一護の家に泊まろうと思ってるけど。」

「いやダメに決まってるだろっ!」

一護君の返事を聞いて一瞬きよとんとした乱菊ちゃんは色仕掛けを仕掛けた。ちよつと今はあれを思い出すから本当にやめてほしい。頼むから。

「ボ、ボタン一個外しても……ダメッ!スカートちよつとたくし上げてもっ駄目だっ!畜生、そんな魅了には屈しねえ!断じて屈しねえ男だぜ。俺は!!」

そんなに言うなら指の隙間からチラ見するの止めなよ。みっともないし。柳の教育にも悪いのでそろそろ本当にやめてもらおう。

「あら、お兄さんが魅了されちゃった。ってなんで震えてるの?」

「トラウマって奴だよ。」

結局破面が出たときのためにまつ梨と乱菊ちゃんには織姫ちゃんちに向かってもら

うことにした。茶渡君の家にも送ろうかと思つたが、どうやら彼は今日、浦原商店に向かうらしいので勝手に恋次君が守ってくれるだろう。

「シロちゃんも柳はうちにとまってくれ。現世は子供が深夜に出歩いてちやダメなんだよね。」

さて君達。恋バナをしようじゃあないか。

## 最悪な再会 その1

腹の内から皮膚に突き刺さるような感覚がする。焦げ臭いにおいと吐き気がこみ上げ口から何かを大量に噴出した。

周囲の景色は途中で切れたように黒く塗りつぶされているが俺を見下ろしている男と、背後で呆然としている女の子がいることがわかる。ただ、その二人も誰かわからない。顔は見えているはずなのに、なぜ…

大丈夫だから。心配しないで。笑って。

はたして、俺の口から出た言葉はどちらへ向けられたものだろうか、そんなことを考えながらも俺は無意識にゆっくりとその腕を男の方へと伸ばして…

「藤丸!」とどきま「父様!」

「んあ? おひてる。おきてるよ。」

「嘘つけ爆睡中だったじゃねえか! 来たぞ!」

本誌よりも強い副隊長、隊長+αとか過剰戦力もいいところだから俺要らないだろ。と考えていた俺をあざ笑うかのように苦難は降りかかってきた。身の毛のよだつような霊圧。万全には程遠い。絶対的強者の霊圧は見る影もない。それでも隊長格の三倍の霊圧を持つ奴のそれは俺のトラウマを刺激するには十分だ。

「こいつは…一体…」

「シロちゃん、尸魂界にも連絡。現世にアルトウロ・プラテアドが出現した。隊長格は他アランカルを討伐後即座に援軍にこい。それまでは俺が何とかする。」

「お前、なんとかできんのか。」

「さあ? なんとかできなかつたら俺ら全員殺されることしかわからない。」

シロちゃんは強いから柳が死ぬこともない。俺がやるべきことはアルトウロの足止めまたは討伐。

…ちよつとまつて? 限定霊印、あれは最悪だ。自分がどれだけ弱くなってるかも分か

らないからも戦闘を予想をしにくくなる。ついでになんかこの辺の原作で皆は許可が下りるまで限定霊印を外さなかった覚えがある。しかも結構苦戦してた。

もしも、もしもの話ではあるが、もしそれでかわいいかかわいい柳が怪我をするならば、俺は烈火のごとく怒り空座町を滅ぼす自信がある。

「孵れかえれ 不滅王フエニイチエ、邪魔だ雑魚ども。」

死んでくれ。

シャウロンと金髪を殴りつける。そいつらのいた数歩先にそいつはいた。

「ん！僕！僕じゃないかあ！会いたつかたよお僕！さあ！僕と一つになろう！」

「お前誰だよ！」

薄い青緑の髪に鋭く光る金色の瞳、根源的な恐怖を刻み付ける霊圧。それらは俺の過去にあったそいつと変わりない。だがそれ以外のすべてが違う。口調はもちろん背丈は今の俺と変わらぬほどに縮み、顔だちも背丈に比例して幼い。まるで、俺と同じく帰刃から戻ったみたいに。

「それ！それそれそれそれっ！僕のっ！僕の刀だっ！それほしい！それほしっつぶ!!」  
「うるせえ！」

顔面に竜哮衝をたたきつけられた推定アルトウ口はきりもみ回転で吹き飛んでいく。アルトウ口は斬魄刀も持つておらず弱いし鋼皮も昔より柔らかい（きがする）。戦闘ス

キルもろくに無いこいつになら余裕だと思い、シロちゃんや一護君を助太刀しに行こうと考えていた時だった。吹き飛ばしたアルトウロは俺の腹に掌底を叩きつけた。

「すこいすこい……こうだよねっ！」

いや違う、と言葉を吐く余裕はなかった。その手の平から俺の腹部に叩き込まれたのは虚閃だ。鋼皮は貫通していないが、削れた。先ほどまでの動きとは比較にならないほどの速度、打撃センス。解放していない竜条丸が警報を鳴らす。こいつは危険だ。

「お前は、誰だ。」

「……僕は僕だよ。藍染っていう人はアルトウロって呼ぶけど。」

こいつは血を流しているにもかかわらず王虚グラン・レイ・ゼロの閃光を撃たなかった。性格も変わっている。これらを踏まえるとおそらくこいつはアルトウロ・プラテアドじゃない。大虚はもつとも自我が強い魂魄がその個体の主人格となるが、あの高慢なアルトウロはすでに俺に不滅王で殺されたのだ。藍染がなにか隠してたのか？ 思考する余裕がない。これ以上は戦闘にきたす。

瞬歩を行うときにやや体を傾けるよう回転させ、相手の背後に回り込み解放した竜条丸で魄睡目掛けて突くがアルトウロ（もどき）は体をねじり俺の刀を受けた。更木隊長や卯ノ花隊長のように優れた剣の腕を持たない俺の放った刃は傾いた鋼皮を滑るよう流れ、体が開いた俺の胸部に向かって打込まれる肘打ちを掌で防ぐが鋼皮の上から受

けたはずのその一撃は掌と肋の骨にひびを入れ、痛みで呼吸が浅くなる。

アルトウ口は自らの圧倒的なスペックにものを言わせていただけで戦闘技術は下の下だった。でもこいつは違う。ハイスペックな肉体についている渴いたスポンジのような頭は俺の一挙手一同を知り、それを自らのものとしている。俺の戦闘スタイルは斬魄刀を使っている時も体捌きは体術主体の物だ。このままだとすべて盗まれる。俺の癖も、技も。

「散在する獣の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪 動けば風 止まれば空 槍打つ音色が虚城に満ちる。」

「ンン~~~~? 僕とやりあつてるときに詩?」

「破道の六十三『雷吼炮』」

振り下ろす途中で竜条丸を浅打に戻し左手で掴み、そのまま右掌をアルトウ口に向けた。雷を纏った衝撃波はアルトウ口の体を包み込み弾き飛ばす。鬼道とは死神特有の業だ。これならば盗まれることはない。

瞬歩で距離を詰め、即座に踵落としを叩き込む。霊覚で知覚していたアルトウ口は俺の足に掴み虚閃を撃つとしていた。ただ、掴んでから虚閃を撃つという行動よりも俺がたつた三音紡ぐ方が速い。

「螺旋」



瞬間開発時に制作した番外鬼道、螺旋は俺を中心として広範囲に紫に染まった靈子の突風が吹き荒れる。だがそれはアルトウロを吹き飛ばすほどの威力は持たず、数瞬遅れたもののしつかりと俺の足を掴んだアルトウロによって右足はひしゃげ、内部で起きた虚閃は鋼皮を貫通し出血をもたらした。

無傷のアルトウロは歪んだ俺の足をさらに強く握りしめ地面に叩きつけようとして自らの体の異変に気付いたらしい。

「な、んだ、これ？」

アルトウロの全身はまるで痺れたかのようにうまく動かず、握りしめた拳も弱弱しい。

螺旋は大量の靈力を消費するが、威力は御覧の通りゴミ。しかし、靈子を乱され崩れかけた体を再構築するときに何らかのエラーを発生させる。今回は麻痺だ。

「教えるかバーカ！このまましねえ！」

分かり切つてる未来だから言うが、このあと俺は完膚なきまでにぼこぼこにされることとなる。

## 最悪の再開 その2

『啓活』

全力で口を回しながら千切れかけた腕を『啓活』で治す。多くの傷を治す場合は『明癒』の方が効率がいいが、今現在俺にそんな余裕はない。肉をえぐられようと骨にひびを入れられようと、斬魄刀を振るうための腕がちぎれないようにする方が何倍も大事なのだ。

アルトウロとお互いの拳をぶつけ合う。俺の拳は4回目の粉碎によりとうとう原型がなくなってしまう。できれば治したいがそんなことより今折れた腕の骨を治す。

『竜天蒼瞬』

体がぶれる。飛ばした時間で腕を治しつつ不滅王と竜条丸で数発斬りつけ、離脱。アルトウロには俺が消え、背後から氷竜が自らを噛み千切りに来たように見えているはずだが、伸ばした腕を引っ込め氷竜を上へ蹴り上げた。

0.3秒後、攻撃のかなめである一角の首が吹き飛ぶ。ちよつと待つてください！今彼に死なれるのは不味いですよ!?

「ゆみちかああああああああああ!!!」

俺が弓親に頼んだことはただ一つ、呼ばれたら全力瞬歩で体当たりしてくれただけだ。ぶつかつた一角のあばらと弓親の腕が折れるがまあ問題ないです。先ほど上に吹き飛ばされた氷竜と灰猫がクツションとなり更に更に冬獅郎君が千年氷牢で相手の行動を一瞬阻害することでギリギリ一角の死を回避する。

### 『明癒』

二人まとめて癒しつつ時間を稼ぐ。氷の花弁はあと2枚、しかも散つたとて勝てるかどうかの確認をする余裕のない大博打。冬獅郎君に向かつて突つ込むアルトウ口に殴りかかるが、加速力も素手のリーチも足りない。いつもの体なら勝てるという事実もプラスされストレスはマッハでたまつていき集中力も擦り切れかけている。もういいんじゃないか？ここで俺が死んだら、他にも何人が死んで、でもまつり達がちゃんと情報持ち帰つて一護君が何とかしてくれるんじゃないか？

### 「父様！」

冷え切っていた心が急速に熱を帯びていくのを感じる。強い熱が俺を動かす。

辛いのも苦しいのも今だけだ。でもそれさえ耐えれねえから俺はさらに未来を見るぜ！見る未来をよさそうな5つに絞つて、見る範囲を更に伸ばす！

勝利は見えた。

「合わせろ冬獅郎おおお!!」

瞬歩で固める霊子を意図的に不安定な足場にし踏みつける。

「名付けてえ！瞬歩『愚者回』ぐしゃまわり」

「くそっ！何をするのか言えよっ！」

不自然にうねる足場で無理な瞬歩の使用により高速盾回転で射出された俺はアルトウロの腕を浅く切りつける。

冬獅郎君の出した氷輪丸で出した龍に着地し、再度愚者回を行う。ピンボールのように跳ね回る俺はアルトウロの鋼皮に数多の切り傷を刻み付けていった。

「あははは！おもしろいねそれ！でももう見切っちゃったよ！」

「わかりやすい合図をどうも！」

瞬歩で軌道を変更、アルトウロの拳を交わし奴の腹部に掌を当てる。竜哮衝を腹にぶち当てられたアルトウロは吹っ飛んでいく。全員に気を咲いているように見えてそのじつずうつと俺を殺そうとした奴の間抜け面は見ものだ。なんせダメージがほとんどねえ攻撃くらったんだもんなあ！

悪いがこの勝負を決めるのは俺じゃねえんだわ。

「く・た・ば・れ。」

いつまでも俺のことは見ていたアルトウロの体が横に真つ二つになる。龍紋鬼灯丸により両断されたアルトウロは事態が認識できないのか後ろを振り向こうとして、その



「じにだぐなああい！じにだあ

振り下ろされた刃はアルトウロの首を跳ね飛ばし、宙を舞う頭を踵落として完全に潰す。疲労と損傷で倒れそうになる体を乱菊ちゃんに支えてもらいながら何も無いある一点を見つめ、掌を構えた。

「お兄さん何を

「破道の三十三『蒼火墜』」

黒腔ガルカングから出てきた東仙に蒼い炎を浴びせ、第二ラウンドのゴングが鳴る。